

221
869

味信(量喜)

三△名和

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5

始



特 219
454



各
種
書
籍
均
有
代
理



上海圖書館藏

檀原神宮に
詣り奉りて

檀原農神乃由赤木火耶麻
宇古支無き代を奈保り加那立

頌木綿崎山

合國乃遠能鎮と神なる
迦年よひ立てる木綿崎廻山乙三

はしがき

森田さん

金光教青年會の雜誌に、わたくしの、かつて載せた教壇、その他のものを、ごりまごめて、出版したいといふ、三月十七日づけの、あなたのお手紙を、佐藤別宅から廻送してくれて、拜見したのは、わたくしが、本部の御用を辭退して、歸つてから數日の後でありました。

あなたのお手紙を拜見して、わたくしは、しばらく奇異の感を禁ずるごことが、できませんでした。それは、第一に、まごごにすまぬごごであります。わたくしは、實は、あなたをよく識りませんでした。したがつて、あなたも、わたくしを、識つてくださるはづがない、と思つてをりました。もごより、昨年のおくれに、大阪巡教を命ぜられた際、あなたの方へも、まゐらせていたといつてお目にもかゝりましたが、別に、さしたるお話をする間もなく、おわかれいたしました。その前にも、あれが森田さんいふ人だ、ごよそながらお目にかゝる機會は、一

二度あつたかも知れません。そのあなたからの、さういふお手紙であつたからであります。それに、わたくしの、これまで青年會雜誌に發表したものは、教内に對しても、教外に對しても、さるに足りないもの、みである、ご考へてをります。わたくしは、明治三十九年に、金光教青年會が、東京の地に、はじめて呱呱の聲をあげ、ついで機關雜誌を、公刊することになつて、わたくしは、あやまつて、その編輯の任に、あたることになりました。同志の教壇は、主として長谷川君ご、わたくしごで、擔任してゐました。そして、わたくしは、大抵、當時、京濱巡教に奉仕した説教の、みづから筆録したものを、掲載したのでありますが、もごより、とるにたらぬものばかりであり、その他の感想文のごときは、時に、原稿の不足をおぎなふために、その場のがれに、書きながしたのも、少くなく、『私自身の信心の上にも、布教の上にも、少なからぬおかけを頂いて居ります』ご、お手紙に仰つてゐるのは、眞に意外ごする所であり、恐縮する所でもあります。したがつて、いまさら、それをひごまごめにして、出版していただくなご、いふごは、わたくしごしては、おもひもよらぬごで、あつたからであります。そのうへ、これは餘計なごかも知れませんが、個人で費用をかけて、折角出版してください

つて、御迷惑をかけるやうなごは、ないであらうか。無謀の譏を招かれるやうなごが、あつてはすまぬ、ごいふ一抹の危虞の念が、お手紙を見た瞬間に、あたまのなかを、かすめたごも、その一の理由でありました。

しかし、お心のこもつた、あなたのお手紙を、くりかへし、くりかへし拜見して、『さういふ企てをするごいふごは、さうかごたびく、ちうちよしましたが、私自身のための、大切な仕事であるご思ひまして、さういふ結果に終るか分りませぬが、斷然ごりかよらせて、いたごかうご存じます』ごいふ、あなたのお言葉に對して、いまさら、いなみかねましたので、青年會の方の、諒解を得てくださいれば、ご御返事したやうなわけでありました。

その後、たびたび、お手紙をいたごき、ごごに原稿を、それぞれ整理して、送つていたごいたごは、感謝のほかは、ありません。ひご、ほりは、目をごほしたつもりであります。お廣前、その他の御用のひまに、することですから、筆なき加へる暇もありません。今ごなつてみるご、臆面もなく、よくも、こんなごが、いへたものだご思はれるやうな、生硬な議論や、なま半可な表現や、不熟な筆致に、みたされてゐて、はなはだ忸怩たるものがあります。もし

筆を加へるこゝになれば、それからそれゝ、際限はありません。教義に對する見解のこゝきも、その當時と今日とは、あるひは變つてゐるこゝろが、あるかも知れず、いはんや、本教の通義に、反してゐる點が、あるかも知れません。これは、いたしかたもないこゝであります。

もゝ、金光大神の教義は、彼の斷片的な、神訓や御理解なきによつて、これを窺ふよりほかはないのであります。これ等を組織し、系統をたてゝ、はじめて金光大神の教義を、全體として了得するこゝが、できるのであるが、その一々の神訓や御理解に對する見解も、これ等を系統だてるこゝも、決して定まつた標準はないのであつて、人によつて、彼此あひ異なる所が、あり得るこゝいふこゝは、まぬがれるこゝはできません。したがつて、本教教義の研究は、比較的自由であつて、彼の、いはゆる正統派的なものはないのであります。それでありますから、ある人の、ある種の見解を目して、ある人が、これを異安心よばはりするこゝがあつても、それは多くの場合、故なきこゝであつて、單に、教義の見解の相違こゝいふこゝだけでは、問題にはならぬやうであります。本教における、眞の安心か否かは、主として、金光大神の取次を、信するか、否かにかゝつてをるのであつて、それ以外のこゝは、きはめて自由であるこゝ信じます。

これは、見かたによつては、本教信仰の不統一こゝいふこゝになつて、甚だおもしろからぬこゝ、する人があるかも知れませんが、しかも、そこに、本教教義の、不斷の進歩開展の餘地が、存してゐるのであり、永遠の、わかわかさが、存してゐるこゝ思ふのであります。

わたくしは如上の見地から、これまで御教について、筆にもし口にもして來ましたが、おそらく、今後こゝいへこゝも、かはるこゝはありますまい。したがつて、この書におさめられてある所のものも、いはゞ「わたくしの金光大神」をあきらかに、させて戴きたい、こゝいふ念願の、一の表現である、こゝいふのが、最も適切でありませう。しかし、翻つてかんがへて見て、それは畢竟、生神の尊嚴を、冒瀆しまつりつゝ、あつたに、すぎぬこゝになつてゐたかも知れません。この點、ふかくおわびせねば、ならぬ所であります。

この書の標題を、『無量の信味』と命じたい、とのお申しこゝでありますが、いかやうにも適宜にして、いたゞきたいと思ひます。

昨年十二月の巡教のみぎりに、記念にこゝいふこゝで、やむを得ず書いた短冊を、巻頭に、おのせくださる、こゝこゝであります。もゝよりつまらぬ歌でもあり、短冊なきに、書くこゝいふ

ここ、そのここが、すでに僭越な沙汰なのであります。しかし、さし上げてあるものでありますから、いまさらいたし方もありません。はなはだ慚しいことではありますが、もし、おのせくださるのでありますならば、なるべく小さいものにして、おいてください。

装幀のここもわたくしには、別にかんがへもありません。これも、よろしく願ひます。

原稿を、おまごめくださるさへ、容易のことではないのに、そのうへ、校正その他、炎暑のりから、あひすまぬことであります。あらためてお禮を申しあげます。

大正十五年七月

乙 三

目次

前篇

無量の信味……………一
 信芽をやしなへ……………二
 地をたゞへ……………三
 信心のさびしみ……………三
 報恩の生活……………三
 すなほの徳……………三
 信心と生活……………三
 信心のあぢはひ……………三
 頼むころ……………三
 信心の生活……………三
 あひよ、かけよ……………三
 他も我身も皆人……………三
 生活の統一……………三

依頼と信頼.....一六

四種の氏子.....一六

心は神信心の定規.....一九

一念發起.....二〇

「頼む」の二義.....二〇

熱心と聰明と護持と.....二二

みかげの泉.....二三

我情我慾.....二四

歡喜の生活.....二五

我が祈り.....二六

神吾れにあり.....二六

人の務め.....二七

信心は生命なり.....二九

親に仕ふるさしての信心.....三〇

自分のものこそよ.....三一

求信の覺悟.....三一

和賀心.....三四

豪健の精神と信念の確立.....三五

後 篇

教祖大祭の意義.....三七

金光大神の二相.....三七

青年時代の我が教祖.....四〇

人としての教祖.....四二

生神と其の家族の人々.....四三

「教祖」といふ語は適切なりや.....四三

お廣前様を迎へ奉りて.....四四

話で助かる道.....四五

二つの道.....四六

教典の形式.....四六

生活の味妙.....四七

七月の教訓.....四八

信仰の二方面……………四八六

まげら……………四九五

二つの心配……………四九七

信仰的生活の特色……………五〇一

水と波……………五一〇

心にうつるまげ……………五一八

「人の悪い事」……………五二五

信仰の事務化、商賈化、交際化……………五三六

静と動……………五四三

電車の中にて……………五四五

神と振理と祈念……………五四九

月朧ろなる夜に……………五五九

三つの懺み……………五六二

豊かなる心……………五七〇

「手續き」論……………五七七

立教神宣につきての一二……………五八〇

前 篇

無量の信味

あぢわいの生活

御飯をいたゞいても、よく、かみしめてみなければ、そのほんごうの、あぢわいはわかるものではないませぬ。砂糖のやうな、ふかみのないあぢわいは、砂糖みづか、なにかを、ひこいきに、のんだゞけでも、あまいといふことがわかるであります。それは、たゞそれだけのもので、ふかみといふものがありませぬ。これに反して、みたごころが、つまらぬもの、やうでも、ほんごうにおいしいものは、まるのみにしたのでは、そのあぢわいはわかりませぬ。さるかはりに、かみしめれば、かみしめるほど、しだいに、おいしさをあぢわうごころができるのであります。

ものをあぢわうごころは、もの、ほんごうのねうちをしる、こいふごころであります。たゞ、たゞものだけにかぎられたごころではありません。人でも物でも、およそ、めにふれ、み、にふれるすべてのものを、あぢわうごころによつて、そのなかより、かぎりなきたうごころ、かぎりなき

ありがたさを、みいだしることができるのであります。

ある時、よる汽車につけてをりました。をりから、あめがふつてきて、はらくひ、まごにか、つて、そのしづくに、電燈のひかりがうつて、きら／＼かどやく、そのうつくしさは、いかなる寶石も、いかなる珠玉も、およばぬほごでありましたので、わたくしは、おもはず、その美感にうたれたこごがありました。一滴の、あめのしづくは、まごこにつまらぬものごして、みすこしてしまつたならば、それまでとありますが、あぢわつてみれば、一滴のあめのしづくにも、無限のうつくしさを、みいだしこごができるこごを、痛切に感じました。

わたくしきもの、すむ世のなかは、これだけのものでありまして、なんびごにこつても、かわりはありませぬ。なんびごにこつても、かわりのない、この世のなかに、おなじやうにすんでゆくのであります。一木一石といへきも、ゆるがせにせずして、よくこれを、あぢわうといふこごによつて、ゆたかな、ひろい生活をこけるこごがあるのであります。ゆたかなよわたりといふこごは、財産がたくさんなければ、できぬといふこごもなく、贅澤な衣食によらねば、できぬといふこごもありませぬ。よには、たくさんな財産をかへながら、うつくしい衣食をねながらも、まづしい、

よわたりをするひごは、いくらもあります。貧乏なくらしはしてゐても、ものごごを、よく、あぢわうといふこごによつて、ひごのうかどひ、しるこごのできぬ、ゆたかな、よわたりをこけるこごができるのであつて、ひごの、ほんごうの、しあはせといふものは、むしろ、かうした生活のなかへら、みいだされるものである、こおもひます。

信心のあぢわい

金光大神は『信心をすれば、一年一年有難うなつて来る』と御理解くだされましたが、これは、信心をあぢわうこごによつて、信心のみちが、年一年ご、いよく／＼ふかく、いよく／＼ひろく、いよく／＼ありがたく、たうごくなりゆくものであるこごを、しめされた、おこごばであつて、しかも金光大神、この世における、七十年の信心生活によつて、わたまうた、眞實の消息をもらされた、たうごいおこごばであります。金光大神は、この世における七十年の御生涯を、『一年一年ありがたうなる』信心をあそばされまして、そして明治十六年十月十日この世をさらせたまうにあたつて、『このかたのやうな、無學なものに、よく／＼、かみさまが、これだけのみちを、ひらかせてくださ

れたか。ごおもふご、ありがたくて、ありがたくて、なくまいごおもうても、ひごりでに、なみだ
 がこぼれる』と、感謝のなみだに、くれたまうたのであります。この御一言は、やがてその七十年
 の信心生活の、歸結をしめされたものであつて、まごに、千萬無量の感慨をこめさせられたおこ
 ごばであります。

身は、これ、くさふかき、ゐなかに一個の百姓として生まれ、なにほごの學問をなされた、ごい
 ふごもなく、いはんや一卷の經文をよまれたわけでもなく、一冊の古典を、ひもごかれたわけ
 もない、わが教祖のかみから、天地につらぬく大道が、うまれてきたごいふごは、まごに世界
 のためしなき、おごろくべき事實でありました。

しかも、つぶさに七十年の御生涯を、かへりみさせられては、いまさらに、信心のありがたさに
 感激せられずには、をられなかつたごでありませう。

御年十二にして、川手のいへにもらわれておいでになり、二十三にして、養父の死によつて、そ
 の家督をつがせられてよりのちの教祖は、決して、しあわせではあらせられませんでした。養父の
 死について、教祖は、義理ある弟におわかれになりました。つゞいて最愛の長男におわかれになり

ました。長女にもおわかれになりました。さらに、つゞいて次男にもおわかれになりました。『おも
 ひわけのよい』教祖のかみには、おはされましたが、しかも、いくたびか、恩愛離苦のなみだをそ
 がれたごでありませう。年をかさねて、飼牛が二ひきまでもたふれました。あはれみぶかい教
 祖は、『みるのがいぢらしい』と、ふかくなけられました。そのうへ、教祖みづからも、うまれなが
 らに、よわいおからだで、いくたびか、大患にくるしまれました。わけても四十歳のときの御病氣
 は『このたびは、熱病をわづらふごころであつたが、熱病では、たすからぬので、神が、ごげにま
 つりかへて』くだされたほごの危機一髪の大難でありました。このときのごは、教祖のみごころ
 を、もつごもつよく、なやませまつ、たご、おもはれます。一家悲痛のきわみにあつた當年のこ
 ごを、教祖は、のちにかへりみたまうて、『おのづご、かなしう、あいなり候』とおしるしあそば
 されたほごでありましたが、これらの難關も、その實意叮嚀なる信心のこくによつて、透過あそば
 されつゝ、安政六年十月二十一日、御齡四十六にして、やみがたき神さまの、おたのみごごによつ
 て、ごりつぎのみに、いでたごせたまごご、ならせられたのであります。それからのちの、
 二十五年のあひだの御苦勞も、決して無事ではあらせられませんでした。もごより『死んだごおも

ひ、よくをはなれて』のころではありましたが、たゞのひきよしては、たへがたき、悪罵や迫害や障礙を、あまんじて、おうけなさいました。これらの消息は、直信のひきびきに對して、なぐさめのおこしばをくだされてあるなかに、『胸をかきさくやうに、おもふであらうけれども』といふやうな、おこしばを、みいだすころが、できるのによつても、うかゞひまつられるではありませんか。かゝるなかにも、きりつぎのみちは、歩一歩にひらけ、おしへのもちは、日一日さだまつて、いまや、この世のをはりの、ちかづきにあたつて、いま一度、七十年の御生涯をかへりみたまつて、『ありがたくて、ありがたくて、なくまい、きこもつても、なみだがこほれる』とおほせられたころは、なにさいふたふさい、ありがたいおこしばであります。信心の歡喜、信心の勝利、人生の祝福、人生の感謝、この御一言につくされてゐるではありませんか。

靈驗のありがたさと、信心のありがたさ

神のみかけのありがたさ、信心のありがたさは、かならずしも、おなじころではないとおもひます。ひろい、いみでは、もごより、なにさきも、かみのみかけ、さいふ一語に歸するころがで

きますが、いはゆるみかけのありがたきころは、たゞ一度の病氣をすくはれた、さいふ經驗によつても、これをするころができるでありませうが、それだけでは、かならずしも、こゝにいふ信心のありがたさが、わかつたころは、いへぬおもひます。

うれしいころやかなしいころ、たのしいころやくるしいころ、得意なころや失意なこと、しあはせのおもひころや、ふしあはせのおもひころの、たへず、ゆき交うてゐるこの世のなかにあつて、いろいろのおもひをし、さまざまのころをたどりながらも、さこまでも信心のつなをはなさず、さこまでも、かみさまの、おそでにすがつて、十年二十年をへ、乃至、わが一生をへてきて、さそすぎこしかたを、かへりみて、信心させていたゞいてゐる、ありがたさに、よくも今日まで、かうして、いきてくるころができたものである、信心してゐなかつたならば、いまごろは、さうなつてゐるであらうか、よくも、よくも、かみさまはおたすけ、くだされたころであるさ、しみじみ、信心のありがたさを、あぢあわせていたゞくころは、たゞ一旦の病氣を、なほしていたゞいて、ありがたかつた、さいふころは、そのおもむきを、まつたく、こゝにしてゐるさいはねば、なりません。信心するひきであるから、信心せぬひきであるから、さまをしましても、この、こゝしけきうき

よにすまいます。こいふことにははりはありません。おなじく、このうきよにすみながらも、信心させていたゞくものは、ひこへに、かみさまにおすがりしながら、いかなる、くるしみ、かなしみにもたへ、いかなる、難儀ふしあはせにも、うちかつて、自分のゆくみちを、ひこあし、ひこあし、ふみひらかせていたゞくところに、信心のありがたさが、あるのでありまして、わたくしきもの、すむこの世のなかに、かはりはなくても、信心させていたゞくことによつて、そこに、ひこのあぢわいしることのできない、ありがたく、ゆたかな世界をみいだすことができるのであります。

このあひだも、ある信者のかたが、しみじみはなされました。わたくしは、十八年のあひだに、わがやから、十たび葬式をだしました。そのうち二度は、みよりのひこでありましたが、そのほかのものは、みな、わたくしにまつては、たいせつなものばかりでありました。そのたびに、もう今度は、いへの破滅である、と覺悟したことが、いくたびあつたかもしれませぬが、そのたびに、かみさまのおくりあはせをいたゞいて、こにもかくにも、かうして家の永續してゆくことの、できるやうにしていたゞいたのは、ひこへに、かみさまのおかけであるとおもひます。信心してゐなかつたらば、こても、わたくしの、みも、もて、はをれず、いへも、もて、はをれないと、おもひます。

こいふおはなしでありました。實際、そのかたの今日までの苦勞は、ひこほりではありませんでした。夫にわかれ、こきもにわかれ、まごにわかれ、八人の家族を、おくられた、その悲痛、苦きは、信心してをられなかつたならば、こても、たへねられるものではないとおもひます。よくも今日まで辛棒ができたことである、おもふほかはないのであります。信心するひこには、そんなことは、ないはずである、なにもかにも、さんさん拍子に、うまくゆくべきはずである、こいふやうにおもふこきも、あるかもしれませぬが、めぐりふかき、わたくしきものみには、熱心に信心させて、いたゞきながらも、いろいろのこきがあるこいふこきは、まごに、かなしむべきこき、いたしかたもないこきであります。そのなかからも、を、しい生活を、いこなませて、いたゞくこいふこきは、まごにありがたいこき、たうこいこき、ひたすら敬慕のころを、こきめるこきができないのであります。金光大神は『信心をすれば、めにみゆるおかけより、めにみえぬおかけがおほい、しつたおかけより、しらぬおかけがおほいぞ。あごでかんがへてみて、あれもおかけであつた、これもおかけであつた、こいふこきが、わかるやうになる。さうなれば、ほんごうの信者ぢや』とおほせくだされましたが、これは信心を、あぢわうこきのできる、ひこにまつてのみ、う

なづきぬられるおこしばであります。

無量無限の道

10

わたくしごもの、あゆませていたとく信心のみちは、きこまでいつでも、いつまでたつても、これ、ゆきごまりといふことはなく、かみの、みかけに、しなぎれといふことはありませぬ。ゆけごも、はてしないのが信心のみちであり、いたゞけごも、いたゞけども、かぎりないのが、かみのみかけであります。されば金光大神は『いきてをるあひだは、修行中ちや、丁度學者が、をしをこつても、めがねをかけて、本をよむやうなものであらうぞい』をしをしへられました。學者は、この世の道理を、きわめたうへにも、なほきわめつゝ、眞理をさぐり、もごめて、はてしなきみちをすゝむのが、その本領であります。信心のみちも、また、そのまほりでありまして、畢竟は、わが一生をつくし、生涯をあけて、その眞味を、あぢあわせていたゞかねばなりません。

信心の眞味を、あぢわうといふことは、やがて人生の眞味をあぢわうといふことであり、信心のありがたさを、しるごいふことは、すなわち、人間生活のありがたさをしる、ごいふことにほかならぬのであります。信心といふことは、わたくしごもの生活を、はなれた別物ではなく、生活そのものが信心であり、信心そのものが生活であるからであります。

人間の、この世における生活は、五十年乃至七十年の、はかないものであり、有爲轉變のきはまりなきものであつて、これは、なんびごにこつても、かはりはありませぬが、無量の信心を、あぢわうごによつてのみ、この人間一生のうちにあつて、かぎりなく、ゆたかに、ひろい生活をいみなむごが、できるのであつて、これは、信心させていたゞくものにおいてのみ、かみより、ゆるされたる特権であります。

わたくしは、さうか、この信心の、ほんごのあぢわいを、あぢあわせていたゞいて、そして、一年一年ありがたくなる、よわたりをさせて、いたゞきつゝ、わが一生のはりにおいて、『よくも、よくも、かみさまは、これだけのみちを、ひらかせてくださった』ごいふ信心の凱歌を奏しつゝ、この世のをはりをつけさせていたゞきたい。これがわたくしにこつての、衷心のいのりであります。

(大正十一年二月)

信芽をやしなへ

111

一

あるひとの道歌に、『なにごころも、やしなひてみよ、あきのたの、いなほも、もごはうるし、さなへぞ』とあります。これは、なにごころにも、やしなひ、そだてるごころの大切であるごころを、をしへたものであります。かの、いなほの、あきのゆたかなる、みのりは、一朝一夕にして、できたものであるか、たゞひこりてに、できたものであるか、こいへば決してさうではなく、いねのごころを、むかしのごころには、こしごころをしてあるがごころ、一年の、ながいつきひを、ついやして、はじめて、できあがつたものであります。そのあひだにおける、かの、農家のひこたちの、辛苦はされほきであつたで、ありませう。あるごころには、やけつくやうな炎天に、にえかへるやうな、みづにひたつて、いくたびも、たのくさを、こらなければ、なりません。あるごころには、あまりにながめが、ふりつゞくのを、なげきました。あるごころには、あまりに、ひでりが、うちつゞくの

を、おそれました。あるごころには、やはらかい、いなほを、だきかゝゆるやうにして、かぜをもふせぎました。また、あるごころには、かねを、うちならして、こほいあぜみちの、かなたに、むしおくりをして、むしのわざはひの、ないやうにも、いのりました。たかいおあしを、はらつて、肥料をこめるためには、自分たちの、たべるものさへ、へらすごころをも、すこしも、いごひませんでした。あらゆる苦心ごころ、あらゆる勤勉ごころ、あらゆる保護ごころ、あらゆる愛養ごころが、こりかたまつて、はじめみな、そのごほりであつて、はじめから立派なものもなく、また、はじめから、つまらぬものも、あるはづはありませぬ。『これは、ものにはなるまい』と、はじめからすてゝかゝつたり、『ごころも、だめだ』と、中途でなけてしまつては、なりませぬ。よくないたねでも、よわい芽でも、丹精して、やしなひ、そだてたならば、かならずや、それにむくいられるだけの、かひがあるべきはづであります。ごころにも『氏よりそだち』といふごころがあります。なだゝるひごころを、祖先にもち、ほまれあるいへに、ひこゝなつても、よのものわらひになるやうな、おろかな、むすこや、むすめが、すくなくありませぬ。なまなきひごころごころまれ、まづしきいへに、そだてられても、なかなか、

112

よのかゞみなるやうな、ひこたちも、おほいこゝでありますが、そのよつて、きたるこゝろは、おほくは、その、やしなひ、そだてかたの、よい、わるいによるのであります。よくないたねでも、よい芽でも、やしなひかたが、よければ、かならずや、立派なものになる、いはんや、よいたね、よい芽においては、なほさらのこゝであります。

二

信心のたね——神にむかふこゝろ、神にむかはずに、をられぬこゝろ——なつかしい日のかけを、したひなびく、かの、あいらしい、あふひのはなのやうな、こゝろは、いかなるひこの、むねにもやきされてをります。ひぢりこ、たふこまれるひこにも、悪魔にくまれるひこにも、智者にも、愚者にも、をこゝにも、をんなにも、をさなきものにも、おいたるものにも、このこゝろは、すべてめぐまれました。

この、こゝろのたねは、金光大神さまの——『わたくしは、かみ、ほこけに、まゐりたう、ござりますから、やすみびには、こゝろよう、おいこまを、くだされませ』と、十二のおこしに、御養父母に

ねがはれたごこく、おこゝろが、かみさまに、むかはずにをられなかつた——やうに、なにのさまたけもなく、すらすらと、その芽が、もえでるやうな、かたもありましたが、よの、おほくのひこには、我情我慾といふ、あつい殻のなかに、ふかくつゝまれて、なかなか、その芽をふきませんでした。しぬるまで、つひに、これを見ずして、をはるひこも、すくなくありませんでした。しぬる、いまはのきはに、にはかに、うつくしきすがたを、あらはすひこも、まれにはありました。

なかには、また、おもき身のいたつき、ふかき家のわざはひ、そのほか、いろいろの、くるしみ、かなしみが、かたい、我のからを、うちやぶる縁となつて、かみにむかふ、こゝろの芽の、やうやくに、もえいづる、ひこもありました。

いま、わたくしは、いさけなかりし、こゝろのこゝを追懐せずにはをられませぬ。そのこゝろのわたくしの家は、まごこに、ふしあはせつゝきでありました。つぎのあにの、なくなつたこゝろは、わたくしはしりませぬ。はじめのあには、大阪にをりました。くから、つまをむかへて、半こし、たつかた、ぬになくなつて、かなしき遺骨をいだいて、かへつてきた、あはれなあによめをみて、狂氣のごこくに、悲嘆のなみだにくれた、はよのすがたを、わたくしは、いまでも、おほろけに、おも

ひうかべるごことができます。つゞいて、わたくしも、おもいやまひにかゝりました。そのやまひが、ちよにうつつて、つひに三人の醫師は、こよひのうらがむつかしい、覺悟せよと、五人の、おさない兒をかゝれた、たよらない、は、に宣告いたしました。もし、そのときに、金光大神の、あたゝかき、みひかりに、ふれるごがでなかつたならば、わたくしごもの、ゆくさきは、さうなつてゐたでありませうか。ちよは、こし七十六歳のはるをむかへるまで、それ以來きはめてすこやかであり、はよも七十歳の、いのちをたもつてをります。ひのきわたごごとくであつた、當時のさまは、いま、おもふだに、なみだの、にぢむのをごごめるごができません。わたくしごもの一家には、かくして、信心のめばえはめぐみでたのであります。

わがみちの、ひみたちは、いづれも、わたくしごものに、まさつたくるしみをあぢはひ、すぐれたみかけをうけてをられぬひごは、ないごよおもひます。

三

この信心のめばえを、やしなひ、そだてたならば、されはごの、ものになるか、ごいふごを、金

光大神は、身をもつておしめされました。すべてのくるしみ、すべてのかなしみを、こえて、かみごよもに、天地ごもに、きはまりなきいのちをうけ、すべてのものをいれ、すべてのひごをいだいて、あますごころなき、たふごき、その、みすがたは、いかなるごばを、もつても、ほめた、へるごはできません。

そして、そのめばえを、丹精して、やしなひ、そだてゆく、よろこばしさを、金光大神は、『賃を取つてする仕事は、若い時には、頼んでも呉れるが、年を取つては頼んで呉れぬ。信心は、年が寄る程、位がつくのぢや。信心をすれば、一年一年有難うなつて来る』『日々さへ経てば、世間が廣うなつて行く。ひそかにして信心はせよ』とおほせられ、さらに『三年五年の信心では、まだ迷ひ易い。十年の信心が續いたら、我ながら、喜んで我心をまつれ』とて、ひにつきに、そだちゆく信心を、よろこび、たのしみ、たふごみ、おもんじ、いつくしみ、つゝしむ、ごゝろもちを、のべたまうた。まごごや、金光大神は、月の九日、十日を『金光大神念日』と、かみより、さだめさせたまうたまゝに、この日を『我ながら喜んで』おまつりなされ、信心のごもがらも、この日を『おかけ日』とごごなへて、かみさまを、おまつりまをしました。金光大神、いごけなかりし、おんごきか

ら、そのおこゝろに、きざしそめた、かみにむかふこゝろの、めばねを、家のなんぎにも、からさず、みのいたつきにも、をりすてられることなく、かの、慈愛ぶかき、はやおやが、よるもひるも、でるにも、いるにも、だきかゝりて、おほしそだてるがごこくに、おこゝろをこめて、おそだてあそばされて、主神金光大神いふ、かみさまこ、ひこつなる、たふこい、さかひにまで、おほきくなされたごこは、いかばかりの、おほねをりであつたであります。いのちにかへても、わが子を、かばひ、みにかへても、わが子を、いつくしむ、せつないこゝろは、わが子を、やしなひ、そだてたのでなくては、あぢはへませぬ。『我ながら、喜んで我心をまつれ』とおほせられた、おこゝろもちは、眞實に、くるしみつゝも、しんほうして、信心のめばねを、そだてあけたものでなくては、あぢはへませぬ。金光大神 おかくれなさるに、さきだつて、『このかたのやうな、無學なものに、かみさまは、よくも、よくも、これほごまでに、おかけをくださったか、ごおもへば、ありがたくて、ありがたくて、なくまい、ごおもうても、なみだがごほれます』とおほせられた、大歡喜、大安樂の境地は、金光大神、おんみづからにして、はじめて、あぢはひえられる、ありがたく、たふこい、おこゝろばであります。

四

我のからをやぶつて、やうやくに、めばえた信心が、あたかも、いしごろのなかに、はえたまめのめばえが、充分にそだたないやうに、一旦やぶられた我のからが、また、おほひかぶさつて、かれやすいのが、わたくしごものつねであります。

このうへもなく、くるしいときや、つらいときや、いま、いきしにのさかひに、あるときには、我のつのもをれ、怒も得もなく、たゞ、たすけてくだされ、こいのこゝろも、その、くるしみがきね、かなしみがさり、いのちをながらへられるこゝろ、たちまちにして、をのがこゝろの我が、もこのすがたを、あらはしやすいのが、わたくしごものつねであります。『くるしかつたときのこゝろを、わすれるな』こいませられ、『おかけをうけた、はじめのこゝろを、わすれるな』こいされるのは、わたくしごものこゝろに、つりのゆく、我をつねに、うちくだいて、信心の芽を、のびるがまゝにのばしてゆくうへに、なによりも大切なこゝろであります。

かく、のびゆく信心の芽も、そのやしなひが、たらぬときは、決して立派に發育するものではあ

りませぬ。『兎角、信心は地を肥せ、常平生からの信心が肝要ぢや』とある、おこぼのこぼく、つねづねに、信心のこやしを、うけいれることが肝要であります。信心のこやしは、こぼに、つねにをしへをうけ、いましめをうけることに、ほかなりませぬ。おしへを、うける、こいふことは、單に、こぼや、ふでにあらはれたものばかりではありません。わたくしきもが、もし、こぼをむなしく、また、つねに、わがみに、ふりかへつてみることを、おこたらなかつたならば、よのなかの、すべてのものすべてのひきから、いろいろのをしへや、いましめを、うけいれることができて、わが信心のこやし、こぼをうるのであります。

かくて、ひたすら、やしなひゆくあひだにも、くるしみのあらしや、かなしみのあめに、をりさられることがあられるかもしれませぬ。金光大神は、『これ程、信心するのに、さうして、かういふ事が出来るであらうか、と思へば、信心はもう止つて居る』とおほせられました。ほかよらきた、病氣や災難や、そのほかの、できごとによつて、信心がこまる、といふやうなこのあるのは、いまだ信心のねが、しつかりこおり、みきがしつかりこしてをらぬがためであります。信心のねが、しつかりこおり、信心のみきが、しつかりこすわつて、わたくしきも自身のものになつて、をりましたな

らば、つらいこも、くるしいこも、かへつて信心をやしなひ、そだてるうへの、たすけとなるのであります。そこにいたつては、もはや、くるしみも、くるしみではなく、つらいこも、もはや、つらいこではなくなつて、たゞ、ありがたしき、おもうこ、ろのほかはないこ、なるであります。信心のこのすがたを、藤守先生は、『竹のふし』にたこへて、をしへられました。竹のわかいあひだは、ふしから、をれるものであるが、成長してくれば、かへつて、ふしあるがために、かぜにも、ゆきにも、をれないやうになるのであります。

五

かくして、やしなひ、そだて、いつたならば、わたくしきも、また『我ながら喜んで我心をまつれ』とあるやうな、ありがたい、さかひに、すむこもできるであります。金光大神は、『生神は、こぼに神が生れる、と云ふ事で、此方が、おかけの受け初めである。皆も、その通りに、おかけが受けられるぞ』と、すゝめ、はげましくだされました。

すべてのくるしみ、すべてのなやみ、すべてのわざはひ、すべてのかぎられたるさかひをこぼて、

われらのごききものも、また、かみごもに、天地ごもに、ほろびざる、ながきいのちを得、すべてのものをいれ、すべてのひきをゆるして、かみごもに、天地ごもに、かぎりなき、ひろきさかひに、わがみをおくごきができるやうになりうるであります。金光大神の、たふごき、みひかりにてらされて、わがごころのなかに、きざしそめた、信芽をやしなひ、そだて、ゆきたい。これ、わたくしの、ごころからなる、いのりであります。

(大正九年四月)

地をたゝへよ

一

金光大神は、神誠第二條において、『天の恩を知りて地の恩を知らぬ事』にて、天地のみめぐみの、かぎりなく、おほいなるごきをしり、これにむくいまつるべきごきの、ひきごして大切なる、ゆへよしを、かたくいませしめ、をしへくだされました。

おもふに、『天ご地』といふごきは、金光大神の、みをしへのねごなり、もごなつてをるごころのものであります。すなはち、わたくしごも人間をはじめ、よのなかの、すべてのものゝ、かくのごくに、このよにうまれて、かくのごくに、いのちをつなぎうる、そのもごをたづねて、天地のめぐみのかぎりなく、ふかくおほいなるごきをほめたゝへまつるべきごき、またわたくしごもの、いきてこのよに、はたらいてをるあひだも、しゝたるのちの、わがみたまのゆくへも、天地のほか、一歩をいでもごきできないごきをおもつて、天地は畢竟わたくしごもの、おほいなるすみ

かであつて、天にまかせ、地にすがりゆくことによつてのみ、わたくしきものは、はじめて、まこと
 の、こころのおちつきを、うべきこと、さらに、さほきむかしより、このかた、つねに、かはりな
 きものは、天地日月のすがたであります。つねに、なほく、たゞしきものは、天地日月のみちであ
 ります。つねに、わたくしなく、へだてなきものは、天地日月のこころであります。この天地日月
 のすがたを、わがすがたになし、この天地日月のみちを、わがみちをなし、この天地日月のこころ
 を、わがこころにして、ゆくことが、わたくしきもの、このよに、處する大切なみちであるべきこ
 事。この三つの點は、すくなくとも、金光大神のみをしへの要義でありまして、さきにか、けた神
 誠は、その第一の點を、をしへたものであり、『生ても死しても、天に地は我住家におもへよ』
 『天にまかせよ、地にすがたよ』とは、その第二の點を、しめしたものであり、『天地は流行る
 ことなし、流行る事なければ、終りもなし、天地日月の心になる事、肝要なり』とは、その第三の
 點を、さしたものであります。

さて『天の恩を知りて、地の恩を知らぬ事』とは、まへのべたこと、もこより、天地の恩徳
 のほさをしへたもので、おこしには、ちがひありませんが、このおこしには、よのひこ
 が、天をあふぎたふむこは、しつてても、地のあつきめぐみを、ふしをがむものなきを、
 ふかくなけきたもうて、主として、地の恩徳をつよく、みをしへくたされたおこしであります。
 むかしから、地にたいして、天はたふきこころ、きよきこころといふ、こころもちが、つよく、
 ひこびこのこころを支配してきました。あさ、おきいでよまづ、ひがしの方をむいて、太陽をお
 がむひこの、おほくあるのは、わたくしきもの、つねにみうけるこころであります。地にふして、
 地の徳をたへるひこは、かつてみたこころがありません。わかくにのむかしのひこびこが、高天原
 をもつて、かみさまのおはしますこころにおもうたこと、儒教に天命なきことばのあること、
 佛教に十二天なき思想のあること、キリスト教に天国をもつてひこの理想のくに信じてをる
 こは、すべておのづからなるこのこころもちのあらはれに、ほかありません。天にたいして、地
 こいへば、なになく、きたなきこころ、くるしきこころ、つみにみちたこころといふこころもち
 が、おのづからひこびこのこころを支配してをります。かの高天原にたいして、根の國、底の國こ

いひ、天堂てんどうにたいして地獄ぢごくといふことばのあるがごときは、その例れいであります。

しかしながら、わたくしごものは、地ちをはなれては、存在そんざいすることのできないのであります。天地てんちのめぐみごは、まをしましても、直接ちよくせつには、地ちによらずしては、このよにうまれるごとも、くふごとも、きるごとも、すむごともできないのであります。すなはち、神誠正傳しんかいせいでんにも、『天てんの恩おんを知りて、地ちの恩おんを知らざるは、父ちちあるを知りて、母ははあるを知らざるが如し』と、ごかれてあるやうに、地ちのめぐみの、ひろく、あついごをしらねばなりません。この地ちの、めぐみにたいして、わたくしごものは、いかにこころへ、いかになしゆくべきかといふことについては、金光大神こんくわうたいしんは、いろ／＼のおごこばをもつて、みをしへくだされてあります。

三

金光大神こんくわうたいしんは、『何を喰くふにも飲のむにも難がたく心を忘わすれなよ』と神訓しんくんせられ、さらにこれを適切てきちに、御理解ごりかいくだされて、『女おんなが菜園さいえんに出でて、菜なを抜ぬく時に、地ちを拜まがんで抜ぬくといふやうな、心こころになれば、おかけがある、又また、それを煮にて食たべる時とき、神様頂かみさまいたきます、と云いふやうな心こころあらば、あたるごこ

し』とおほせられてあります。ひとつぶの米こめいへごも、ひぎきれの菜ないへごも、天地てんちのめぐみによつて、できてゐないものはありませぬ。しかるに、それを、そまつにこりあつかつたり、たべものに不足ふそくをいふたりするのは、みなこのめぐみの、かたじけなさをしらぬからであります。ひみつぶのこめをも、そまつにおもはず、なのきれはしにも、不足ふそくをおもはずして、ありがたくいたゞくごきに、たべすぎたり、むだぐひしたり、するごはありませぬ。たべすぎたり、むだぐひしたり、するごのないひごに、たべものによつて、やまひをおほわたり、からだをそこなふやうな、ごこはないはづであります。しかもこれは、たゞにたべもののごのみではありませぬ。わたくしごもの身みにまごふきものも、すまふいへも、そのほか、すべてのよわたりのうへの、しろごなり、かてごなるものは、ごごごく地ちのみめぐみによつて、なりいでました。一事じ一物ぶつも、みな、ありがたき、みめぐみによつて、あたへられたものであるご、かたじけなさの、ごころにあふれて、もちひさせていたゞくごきに、わたくしごもの、よわたりは、眞まことにありがたく、たふごいものご、なるのであります。自分じぶんのちからによつて、もごめるごごができ、自分じぶんのおかねによつて、ごしらへられるものであるかのごごくに、かんがへたがひをするごころから、みづからは、これをそまつ

にし、不足におもひ、ひごにむかつては、むさほり、ぬすむやうな、まちがつたごもできてくるのであります。そして、みづからのいのちをちよめ、ひごをもそこなふやうなごこになる。まごにおそるべきごこではありますまいか。

四

さらに、金光大神は、『御地内を、みだりに、穢すなよ』とおいしましめくだされました。およそ、わたくしごもの、ありがたいごおもふごころには、つゝしむごいふごころもちが、したがつて、おこるものでありまして、地のみめぐみを、ありがたしごおもふごころには、また、かならずや、これをみだりに、けがしてはすまぬ。ごいふごころのこともなふのが自然であります。わたくしごもは、いきてをるあひだは、大便もしなければなりません、小便もしなければなりません。からたがよければ、おゆもつかはねばなりません、よごれたものは、あらはねばなりません。これらは、いかにしても、さげおられぬごこでありますから、一定のごころをさだめて、それにすつべきであります。さもなきごころは、つねにきよらかにして、むやみにきたないものをまきちらしたり、けがれたま

ゝにしてをいてはなりません。地の徳をほめたゝへる、ごころからは、それが自然におこなはれて、いはゆる衛生のみちにも、また、おのづから、かなふごころなるのであります。春秋のおほ掃除や、はやりやまひのあるごきの、にはか掃除は、おほくは、やむをえずしてするごこであります。ありがたいごいふごころにみちて、するごこは、自然にできて、しかもそれが衛生のみちになふのであります。この神訓を奉ずるわたくしごもは、ごうが日々にはゆるおほ掃除ができてをるやうにありたきものであります。

五

金光大神は、また『神は荒地荒屋敷を、お嫌ひなさる』と御理解くだされました。荒地ごいふのは、ひらけば田にも畑にもするごこのできるごころを、ひごのおこたりから、くさをはやしたり、みづをためておいたりしてあるごころをいふのであつて、荒屋敷ごは、すまへばすまはれる宅地を、たゞいたづらに狐狸のすみかにしておいたり、家はあつても、たちぐさりにしてあるのをいふのであります。これらは、みな地の徳を、そまつにし、そのみめぐみを、おろそかにするごころからお

いふことでありまして、かくのごときことは、決して神さまのおよろこびなさることではありませぬ。いやしくも、つくれば、ものゝできることは、これをきりひらいて田畑になほし、いやしくも、すまへば、ひごのくらし、ゐられることは、これをはたらかせて、ひごのよに役立てること、すなはち地のみめぐみを、たふさぶゆゑなり、さらに、いはゆる殖産のわざをすゝめることなるのであります。いまや、わがくにのごときも、穀物の不足を感じて、各地に開墾が奨励されておるやうであります。地方を旅行しましても、雑木林が畑になつたり、みちばたの笹藪が田になつたりしてをるのを、すくなくからすみうけることではありますが、まことよろこばしいことにおもひます。さらにこのごろ、いちどるしくきこえるのは、都會の地に、いへのすくない、いふことでありまして、それがためには、貴族や富豪がみづからのおごりから、廣い庭なきをこしらへて、たふさぐ、地面をふさいてをるのが、ふつがふである、なごいふ非難もみゝにするやうであります。この非難が、はたしてあたつてをるか、さうかは、しりませぬが、とにかく、いへのすくないのは事實であります。かゝる時勢において、このおいましめは、ひごしほ適切に感ぜられるのであります。

六

さらに、金光大神は、『大地の内にて、金乃神の大徳に洩るゝ處はなき事ぞ』『今より何事にも方位は忘す我教の昔に復れよ』とおささしくいただきました。金光大神は、この大天地のみめぐみは、それがそのまゝ、わが、おやがみさまの御神徳であつて、天地のあひだ、いたらぬくまもないことである、みをしへくだされ、そのみめぐみのなかにある、わたくしごもは、いたづらに、よのひごのいふことにはまごはされて、方位方角のよしあしを、いふてはならぬ、ごおいましめくださいました。もごより、すまひするには、土地によつて便不便、利不利のあるのは、まぬがれぬことでもあります。東はよいとか、西はわるいとかいふやうな、へだてが、はじめより、おなじ神さまのみめぐみの、ゆきわたつてをる大地のうへに、あらうはづはありません、地の徳をありがたし信するひごは、またこのやうな、よのなかの、まよひごに、ころをうばはれて、不自由なおもひをし、窮屈なよわたりをするごのないやうにせねばなりません。

七

さらに、大地のみめぐみを、ありがたしとおもふものは、またしたがつて、地にしたしむころのこともなふものであります。わたくしごもは、地にしたしむころによつて、からだのうへに、ころのなかに、これほどの、しあはせをうるころであります。未開人はからだのやまひの或るものをつちによつてなほすいふころをききました。都會のひまにくらべて、地方のひまのたつしやであるころは、空気のよいころ、ころの、のびのびしてゐるころなごも、關係してゐるであります。うが、また、地にしたしむ、をりのおほいさいふころが、おほきな原因であるとおもひます。今日のまでの文明さいふころは、地をはなれるさいふころでありました。洗足になるころは、野蠻人のするころであるさいふころになりました。あるくさいふころは、未開人のするころであるさいふころになりました。二階三階乃至十階二十階三十階の家に住まはねば、人間のねうちも、たかくはおもはれぬころになりました。そして、衛生のみちはすゝみ、たべものはおいしくなり、きものはきれいになりました。そしてからだもよわくなりました。みな地をはなれた、むくいではないでせうか。それについて、田園生活さいふものが、あこがれられ、田園都市さいふものが、歐米諸國におひおひ、まうけられるやうになり、わがくにでも、その必要をこなへるひまが、おほくなり、その計

畫をたてるひまも、かれこれ、あらはれるやうになりました。これらは、みな、つちをこひしがる、ひまのころの、おのづからなる、あらはれではないでせうか。つちをはなれた文明に、あいそをつかした、やりかたではないでせうか。地のみめぐみをたへ、地にしたしむもの、ありがたさを、しみじみおもはずにはをられませぬ。

八

地にしたしむひまは、また、實意町嚙になれずにはをられませぬ。ころしの、あきのすゑにまた、むぎの實は、來年の夏でなければ、こりいれはできませんでした。いねを、こしこいふころは、もみだねを、水にひたしてから、こりいれるまでに、一年のつきひをつひやすところから、いふのであるさ、ききました。むかし宋人は、いねのおほきくなるのが、おそいのをもきかしかつて、はやくおほきくしてやりたいさ、あせりました。ある日のゆふがた、けふはたいさうくたびれた、こまをしてかへつてきましたので、家のものが、さうなされましたか、こたづねるさ、あまりに、いねがおほきくならないので、けふは、のばしてきてやつた、こいふのが、いかにあやしけなので、

田にはしつていつてみるに、いねは、みんなかれてみたにいふことでもあります。これはいねのくさを一本一本ひきぬいてあるいたのでありますが、いかに、もごかしくおもひましても、まいた、ねは、一定の時がた、ねは實はむすぶものでなく、また、一旦まいた、ねは、みのらせまいごおもうても、かならずみのるのであります。たがやす鎌のふかさが、一寸ちがつても、田のくさをさるのを、一度おこたつても、それはそのまゝ、みのりのうへに、ちがひができてくるのが、作物のならばしであります。地をあてにする、はたらきは實意町噺でなければ、ものにはなりません。地方のひこ、て、一概にいふことはできませんが、概して實直であるのは、おほくは、地の感化によること、おもひます。都會のひこのはたらきは、おほくは、あきなひのみにあります。あきなひのみに、かけひきもあり、また、うそもまぢります。きのふ儲けたかごおもへば、今日は、それを、みなきだしても、なほたりない。あすは、その損をつぐなうて、まだあまりがある、こいふやうに、消長の度がはなはだはけしくあります。したがつて、ひこのころが、實意町噺といふことからは、ごぼざかりやすいやうに、おもはれます。金光大神は、つねに實意町噺といふことを、信心の中心とあそばされましたが、お百姓であらせられた教祖として、地の徳を、ほめたたへ、地をな

つかしみたまうた教祖として、必然のみをしへごこのやうに、うかごひまつられるのであります。『天地日月の心になる事、肝要なり』このおことばについては、さきに、おはなしいたしました。『人が口錢を拾錢かけるものなら、八錢かけよ』をしへられ、『濡れ手で粟の掴み取りの氣をもつな』といひしめられ、『驕りがましい事をすな、ものは細うても、永う續かねば、繁昌でないぞ』とさされた、金光大神のみをしへは、ごごごく地の徳を、さきあされたものにほかありません。ごみこいひ、ごみち、ごみふごごばは、地の徳をたゞへるごころにあらはれる、ごころのほひであります。

今や、労働問題は、世界の問題となつて、かれこれ議論せられてをり、ごごごに、アメリカにおいて、労働會議がひらかれてをります。労働といふものは商品でない、こいふごごは、平和條約の、一箇條となつてをります。もごより商品のやうなものではありませんから、これだけ、はたらけば、これだけ、こいふやうに、値段をつけるごごは、ひこの人格をおもんするうへからは、はなはだ、にがにがしきごご、おもひますが、さればごて、おほくのひこのなかには、はたらくごごは、なるべくすくなくして、さるものは、なるべく、おほい方がよい、くれなければ、ひこさわぎしてやる、

こいふやうな、かんがへは、決して、たふさぐことはおもはれません。労働は商品でないから、このころは、すくなくとも、忠實に、まじめに、おほくはたらくことを、ひこのねうちをおもんするうへから、かんがへねばならぬことでありませう。地の徳を、ほめた、へるひには、これらの問題もおのづからとけること、おもはれます。

九

さらに、地の徳をたゞへて、むかしのひとも『含弘光大にして、物品ことごとく亨る』こまをしてをります。すなはち地はすべてのものをこまごとく、つゝみいれ、うけのせて、これを、やしなひ、これをそだて、これを成さしめて、しかも、なにごとも、天にしたがひ、天にうけて、すこしもみづから主なることがない。それゆへに、地の徳は、ますますひかりをまし、ひろさをまして、そして地上のすべてのものは、それぞれの本性を、まつたくするこまができる、こいふのであります。なにごとも、すなほに、なにもをも、よくいれてさからはず、なにもものにも、へりくだつて、たかぶらず、そして、なにもものにも満足をあたへるのは、ひこへに地のみめぐみであり、地の徳で

あります。金光大神が、その御一生を通じて、なにごとも、神さまのおほしめしに、したがはせられ、『無學の百姓』におほしめされつゝ、すべての氏子のねがひを、御一身にひきうけて、神さまにおこりつきぐだされ、おのおの、神のみかけを、よろこびたのしんで、す忍するまで、たちさかえゆくべき、みちをおひらきぐださいましたのは、すなはち地の徳を、御身のうへに、まつたうあそばされたものでありますまいか。わたくしごもが、神さまに、たいしても、大君にたいしても、つねに、この地のころをこゝろとして、氏子として、民としてのみちをつくし、また一家においても、主人も主人らしきかほをせず、夫も夫らしきかほをせず、親も親らしきかほをせず、社會の關係にあつても、上のものも上のものらしきかほをせず、高いものも高いかほをせず、ひこへに、地の徳をまもりゆくことによつて、一家も一國も一社會も、眞實の平和と幸福を、もたらしうることは、できないでありませうか。金光大神の、みごゝろとして、それぞれのつぎめにつくすことによつて、眞實の安樂地にすまふことはできないでありませうか。

金光大神は、天地のおほみめぐみをおもひ、天地にすがり、天地のころをもつて、こころこす
べきことを、そのみをしへの要義をあそばされ、まことに、地のみめぐみのかぎりなきことを、つよ
く宣傳あそばされて、わたくしごもの、このよに處すべき、大切なみちを、お口によつていき、お
身によつてしめされました。わたくしごものは、こひねがはくば、地をほめた、へつ、そのみあを、
たぎらせて、いたゞきたいこころであります。

(大正八年十一月)

信心のさびしみ

金光大神の御理解に「信心に連は要らぬ、獨信心をせよ。信心に連が要れば、死ぬるにも連れが
要らうが、皆逃けて居るぞ。日に日に生きるが信心なり」とあります。これは、わたくしごもの、信
心の覺悟のさだめごころを、おしめしくだされた、おこぼであります。もし信心といふものが、
ほかにあらはれての、はたらきのうへからいへば、「世に勢信心といふ事を云ふが、一人で持上らぬ
石でも、大勢掛聲で、一度に力を揃へれば持上る。バラバラでは持上らぬぞ。家内中勢を揃へた信
心をせよ」とも、御理解くだされてあるがごとく、おなじ神のみなをこなへ、おなじ信心のみちを
あゆむもだちが、ひよりよりもふたり、ふたりよりも三人五人、十人百人千萬人、なるべくお
ほくのひしが、手をひきつれて、金光大神のおほしめしの、一層ひろくつよく、ゆきわたるよう
にありたいものであります。この御理解にもあるがごとく、ひよりでは、あがらぬおもしろい石でも、五

人十人、ちからをそろへて、かかれれば、たやすくあけることが出来るものでありまして、ひごりのちからを、一こいふ單位であらわせば、五人のちからは五であり、十人のちからは十にすぎないのでありますが、もしその五人のひごが、ちからをあわせ、こゝろを、ひごつにしてかかるべきには、五のちからは五に過ぎまらずして、十にも二十にもあたる。つよいものがあらはれるものであります。一家のうちでも、親子、夫婦、兄弟たがひに、べつべつのこゝろをいだいて、かつてにはたらし、おもひおもひに、ふるまうてゐては、その家は、いつまでたつても、さかえるべきはありません。たがひにひごつこゝろになり、ちからをそろへて、はたらいたならば、その家は、かならずさかえてくるに、ちがひありません。信心のちからのあらはれも、またそのこぼりでありまして、信心するひごは、なるべくおほくのが、たがひに手ををり、あしなみをそろへて、神のおほしめしの、一層世にあらはれるやうに、いのらせて、もらはねばなりません。

しかしながら、いくたり、ひごがよりあつまつても、足のたゝぬものや、こしのきかぬものばかりでは、何等のちからにもなるものでないがごとく、いかに勢信心といふても、信心のこしがぬけてゐたり、信心のあしのたゝぬものが、いかほよりあつまつても、それはなにらのちからとなるも

のではありませぬ。この信心のあしもを、しつかりこふみしめ、信心のこしをたしかに、さだめる所以のものは、「信心に連は要らぬ、獨信心をせよ」とあるこぼり、しつかりこした、かくこのもごに、信心をさせてもらうことが、なにより大切であります。

金光大神は『信心に連は要らぬ』とおほせられましたが、ごもすれば、つれを、もごめやすいのが、わたくしごものつねでありまして、つれがあれば信心する。つれがなければ信心しない。ひごが、すゝめてくださるから、信心する、ひごがまたたけするがゆへにしない。ひごがほめるから信心する、そしるからしない。こいふやうなごひは、もごもご自分に、たしかな覺悟がなく、ひごへに、ほかのひごの如何によつて、さちらでもなるものであつて、けつして眞實の信心といふこごはできぬのであります。ひごにたふさぶべき點は、自分のこゝろからうちだし、自分のこゝろからうちこんで、すゝんでそのこごに、あたるこいふこごにあるのでありまして、たごへ、ひごから、すゝめられたからこごで、できるはずのものでなく、またたごひ、やめよこいはれて、やめられるべきはずのものでないのが、まごこの信心であります。この消息を、金光大神は「信心に連は要れば、死ぬるにも連が要らうが、皆逃けて居るぞ」とおほせられました。ひごの、いきしには、まつたく

ひびきにこつて、べつべつのものでありまして、たごへ親子、夫婦のなかごいへごも一つではありませぬ。親がなくなられたからこつて、子のいのちが自然にきえてしまふべきものでもなく、子のいのちがなくなつたがゆへに、親のいきが同時にこまつてしまふごいふごもありません。しなばもろごも、ごまで、ちかつて夫婦のちぎりをむすんだあひだからであるからこつて、夫がしんだから妻のいのちもたえたごいふごをきかず、妻がしんだがゆへに、夫のいのちもなくなつた、ごいふためしもありませぬ、いま、しにゆくものにむかつて、たごへ一日なりごも、一時間、一分間なりごも、ながらへて、もらひたいごたのんでも、それに應じうべきものでなく、またいましぬるから、いつしよにしないでくれごたのんでも、ほかのごならはなにごごもきくが、そればかりは、ゆるしてもらひたい、ごいふのが、ひごのつねであります、『皆逃けて』をります。生死の事實は、かくのごごく、ひびき、それぞれに絶對であります、わがみちの信心にたいする覺悟も、また、かくのごごく、たごへ親子、夫婦、兄弟のあひだたりごも、それぞれ、べつべつのものであつて、い

しかしながら、親子、夫婦、兄弟のあひだたりごも、信心はたごひに、べつのものであらごい

ごについては、わたくしごもは、ふかく注意せねばならぬごがある。それは、ほかのごでなく、わが金光大神のおほしめしは、彼の『親を子にそむかせ、嫁を姑にそむかせる』ごをこくものではなくして、『信心は家内に不和のなきが元なり』ごをしへられるみちであります。わが家族のなかに、おのが信心にそむくものがあつても、信心は、もともご神様があひてである。それにたいして、かれこれいふのは、いふものがわるい、ごいふかんがへで、それにたてづき、それにさからつて、家内に不和をおこすやうなごは、はたしてわがみちにおいて、ゆるさるべきであらうか。神さまがいてであるから、それをかれこれいふものは、いふものがわるい、ごいふのは、これは理窟であつて、實際にはあてはまらぬごであります。金光大神は、十二歳にして、川手家へ、もらはれてまゐられました、そのみぎりに『わたくしは神佛にまゐりたう、ござりますから、やすみ日には、ごようよう、おひまをくだされませ』ご養父母にねがはれました。『ごようよう』ごいふごころに、金光大神の信心のいかなるものか、信心のねがひのなであるか、信心のあらはれの、いかにあるべきかの、すべてがあらはれてるのであります、てみぢかなおごごはであるが、しかしながら、無限のたごごの、ごもつてゐるおごごはであります。わが家族のものが、信心するな、ごいへば、

それにさからつて、かたちのうへにこれをあらはさず、まるるな、いへば、かたちのうへで、まるらすごも、おがむなごいへば、かたちのうへで、おがますごも、わがごころのなかで、これらのすべてを成就せいじゆさせてもらうごもに、わが信心しんぐにたいして、かく家族かぞのもの、反對はんたいのあるごは、すなはち、わがめぐりによるごであります。まだ神かみさまが、時節じせつをあたへくたされぬのであるご。神かみさまに、かつわび、かついのつて、一日いちにちもすみやかに、家族かぞうちそろつて、おなじ信心しんぐのみちをすませせていたゞくごの、できる時節じせつをあたへってもらうごに、なるごが大切たいせつであつて、そこにこそすなはち、ふかく、おほきな、いきたる信心しんぐがあるのであります。

以上いじやうのごごとくにして、わがみちの信心しんぐは、自分自身じぶんじしんのごころから、うちだし、ごころから、うちこんで、すべての、ひごのすゝめも、ひごのさまたけも、ひごのほめるごも、ひごのそしりも、利りも害がいも、これをうちこゑて、ひたすら神かみにすがり、ひたすら神かみにいのり、わきめもふらず、みちのまごごを、ふみす、ませせていただくごころに、その眞實しんじつのすがたがあるのであります。

二

しからは、なにのゆへに、わがみちの信心しんぐは、かくのごごとくにあるべきであるか。

その一は、信心しんぐのねがひごするところが、ごごまでいつても、自分自身じぶんじしんのものであるからであります。

「我身わがみが我自由わがじゆにならぬものぞ」金光大神こんくわうたじんは、わたくしごもを、おいましめくだされたごごとく、肉體にくたいのうへからも、精神せいしんのうへからも、かぎりある。あさはかなものが、わたくしごもの、みのうへであります。わたくしごもの、よわたりのうへの、すべての、くるしみかなしみ、すべてのつみあやまちは、ごごごとくこの、わがみのかぎりあるところから、きざして居ゐるのであります。はやうして親おやにわかれ、いごしき子をさきだて、わかくして、いたづらに、やまひのごごに、まゝならぬ世よをかこち、をいてみのおきごころにくるしみ、おさない子をいだいて、夫ちうごにわかれ、妻つまにさきだゝれるなき、世よの不幸不遇ふこうふぐは、ごごごとくひごのみの、かぎりあるあさましきごごによるのであります。おもはぬあやまちに、おのれをくるしめ、ひごをくるしめ、しりつごも、おそろしきつみをかさねて、みをほろほし、いへをやぶり、よいごごもおもうて、したごごが、かへつて、ひごをそこない、世よをみだるもごになつたりするのは、ごごごとく、ひごのごころのはたらきの、かき

りあるはかなきことによるのでありまして、この無常この罪惡は、もろ、これ前々のめぐりによるのであります。このめぐりを、たちきつて、『無常の風が時を嫌ひ』『何事にも眞心』なるべき、よわたりを、いさなましめ、いのちあらしめ、ひかりあらしめやうがために、金光大神は、とりつぎのみちを、ひらかせたまうたのであります。生神金光大神の、おこりつきにすがりまらせて、無常にして罪惡ふかきわがみを、いのちあり、ひかりある世界に、みちびいていただくことが、わたくしぎものねがひであります。このねがひをほかにして、このねがひをまじこめて、いたづらに、ひこのため、よのためといふやうな、ういた信心であつてはなりません。わたくしぎものは、やゝもすれば、ひこのためといひ、くにのため、よのためといふことを、くちにいたしますが、この、ひこのためといふことは、すなはち、わがためであり、よのためくのために、といふことは、とりもなほさず、わたくしのために、ほかならぬのであります。ひこのくるしみは、わがくるしみであり、ひこのめぐりは、わがめぐりでありまして、まごまでまゐりましても、信心は自分自身を、たすけていたときたい、まいのるより、ほかのねがひはありません。わたくしぎものは、信心によつて、はじめ、いのちあり、ひかりあるよわたりを、いさなみえられるのであつて、『日に日に生きるが信

心なり』といひ、『信心なければ世界が闇なり』といふ、おごりは、すなはち、このいひに、ほかならぬのであります。かくのまごまきの信心は、けつして、つれのあるなし、評判のよしあしに、かはつたことではなく、また、かゝはつてをられるはずのものでもなく、いはゆる頭燃の問題であらねはなりません。

三

その二は、信心の修行するところ——信心のねがひを、みたすうへのわざ——が、どこまでいつても、自分自身のものであるからであります。

たごへば、わたくしのおなかの、へつてゐるものを、ひこが、これほき食物をたべてくれても、わたくしのおなかの、よくならぬがごま、わたくしがたびをするのに、ひこがされほき、あるいてくれても、わたくしのみちは、すゝまぬがごま、自分自身に信心させてもらはねば、わたくしにおかけをうけることはできません。

わたくしは、無信心者でありますが、おひろまへの先生が、日夜におねがひくだされてあるから、

親が信心してくだされてあるから、子も信心して、くれてゐるから、妻が信心してくれてゐるから、夫が信心してくだされてあるから、こいふやうなことを、かんがへて、しんじつ、しんみのころから、いのりするところが、できぬばあいが、すくなくありませんが、もこより信心の徳の、およほすうへよりは、一時は、それでもよいかもしれませぬが、金光大神も『何事も釘着ではない、信心を各自にして居らねば、永う細かぬ』とおほせられてあるごとく、なにごとくも、ひみだのみ、ひみだよりであつては、その、たよりになるひみが、ゐてくださるあひだは、それでも、みしのが、できてゐるでありませうが、ひみのよのことは、なにごとくも、くぎづけではない、なまみをもつてをるひみごうのこころであるから、自分が、いつごうなるか、たよりになつてくれてをるひみが、いつごうなるか、あらかじめさだめることは、できませぬ。そのときにおよんで、にはかにうろたへたり、かなしんだり、木からおちた猿のごごく、途方にくれたりせねばなりません。信者として先生をたよりにおもひ、親子して子を、子にして親を、夫として妻を、妻として夫を、たがひにたよりにおもふ、こいふことは、ひみごして、まごころにうるはしきこころ、また大切なこころであります。たよりにおもふこころが、わが、おこたりになつてはなりません。たよりにおもふこころが、わ

が信心のはけみになるやうでなければなりません。(このこころは、かつて「頼む」ころもちについて、おはなししたこころがあります。)

さらに、をしへていたこころも、それが自分のもの、みならねばならぬのであります。『信心は話を聞くだけが能ではない、吾心からも鍊り出すがよい』とは、このてんについての御理解であります。をしへていたおかたは、金光大神であり、おこりつぎの先生であつても、それがいつまでも金光大神のものであり、先生のものであつては、わがみのやしないにはなりません。たごへば、わたくしごもの、日常のたべものは、お米であり、おさかなであり、野菜であつても、それが、おなかのなかで、よくこなれて、自分自身のものになるがゆへに、みのやしないになるのであります。お米がお米のまゝ、おさかなが、おさかなのまゝ、野菜が野菜のまゝで、おなかにたまつてゐては、やしないになるべきものも、かへつて、からだのわざわひになるのであります。神のをしへもそのまほりであつて、やしないになるべき、ありがたいをしへも、いつまでも、自分のものにならなかつたならば、かへつて、わがみのわざわひになるこころが、すくなくありません。あるところに、夫婦の信者がありました。妻の料理のしかたが、わるいがために、夫は、まづい

こいつてたいへん、ことをいひました、するに妻は、それにたいして、『あなたも信心してをられるのでありませう、信心するものは、食物のこともを、いつてはならぬ、こつねづね、をしへられてゐるのでありませう。そんなにことをいふに、ばちがあたりますよ』とやりこめた、こいふことがあります。ことをいふ、もこよりよいことではありませぬが、そもそも、ことをいはせるのは、妻の料理のしかたがわるいからでありまして、おなじ材料をつかつて、おいしくたべられるのも、のこもこほらぬやうなものにするのも、ひこへに、てぎはの、いかんによるのでありまして、非はおのれにあることでもあります。いはんや妻をして、夫にたいして、やりこめるこいふことは、禮にかけをります。かゝる非禮をあへてするのは、なによるか、こいへば、神のをしへが、自分のものにならないで、ひこのもの、まゝで、おなかにはいつてゐたからでありまして、やしなひになるべき、をしへががへつて、わざわひになるこいふ、よい例ではありませぬか。

『信心に連は要らぬ』とこいふわけがらは、なほ、ほかにも、がんがふべき點があるでありませうが、主として、この、ふたつの點は、わたくしごもにこつて、たいせつなこごからであるこおもひます。

四

『信心に連は要らぬ』、おもひさだめるこごにおいて、いひしれぬさみしさを、感せずにはをられませぬ、はてしなき信心のみちを、わきめもふらず、ふりかへりもせず、たゞいちづにすゝみゆくこごは、このうへなき悲壯であります。『此方は參つて尋ねる所がなかつた』この金光大神のおこごばを、わたくしごもは、しみじみあぢは、して貰ふべきであります。

さみしくても、かなしくても、かくゆくべきが、ひこのまごごであり、また、神の、おんはからひであります。わたくしが、ふかきめぐりになやみ、はてしなくさまよひ、つひにほろびゆくこごは、天地の、まごのひをやぶるこごがあり、神の神ごある所以をそこなふこご、なるのでありまして、『氏子あつての神』ごある、わが親神さまの、たへさせたまはぬこごであります。そしてまた、『神ありての氏子』ごある、わたくしごもの、たへえぬこごであります。つらくても、さみしくても、かなしくても、たゞ、ひこへに信心のみちを、ふみゆくこごに、『神もたすかり、氏子もたちゆく』べき眞實道があらはれ、天地のさかえも、國のさかへも、家のさかえもありうるのであり、

神のよろこび、金光大神のよろこび、氏子のよろこびが、ありうることをおもひ、つゝしみて、信心のみちを、ほめまつるべきではありませんか。

(大正八年十月)

報恩の生活

一

めぐみをうけて、これを、ありがたしき感じ、そして、これにむくいる道をわすれないのは、人間として、もつとも大切なことでもあります。恩といふ字は、心といふ字に、因といふ字がしたがつてをりますので、ある學者は、恩を感じ、恩にむくいるのは、ひきへにその人、その人の「こころ」による一のであつて、恩の觀念は、こころによつて生ずるものである。こころをいふてをります。はたして、これが恩といふことばの、こころの解釋であるか、いなかには別として、をもしろい解釋といはねばなりません。あるひきは、いさゝかのめぐみをも、ふかくこれを心に感じて、一生をはるまで、あつくむくいてゆくのもあり、また、あるひきは、海山も、たゞならぬめぐみをうけつゝ、さらに、これをありがたしきも、おもはぬのもあります。をしへられたからして、かならずしも得られるものでなく、つたへられたからして、かならずしも、わきまへられるものでもなく、まつたく「こころ

ろによる「こころ」であります。

恩を感じ、恩にむくいる、こいふこころは、たゞ他にむかつてのこころのやうにのみおもはれ、おれいがへしをせよ、こいはれるこころ、なんだか、自分のものを他に、もつてゆくこころ、他にこられるこころのやうに、おもはれやすいのでありますが、しかしながら、それは、ただ、うはつらだけをかんがへたときの、あやまりでありまして、恩を感じ、そして、これにむくいる、こいふ、ふかい理由は、やはり自分自身にあるのであります。この自分といふものを、ふかくかかんがへ、自分こいふものを、まごころに大切に、おもふときに、かならずや、わたくしごころは、この恩こいふこころもちが、おこらずにはをられぬはづのものであります。かりに、これを、なにか自分のもつてをるものについて、かかんがへてみましても、こころに、一つの茶碗があります、この茶碗は、わたくしにこつては、きはめて大切なものであるとするこころ、これを、ていねいにこりあつかひ、たいせつに、しまつてをいてくれるひこが、あります、わたくしは、それらの人にたいして、まごころに親切なかたである、ありがたいこころであるこいふこころもちが、おのづからおこらずには、をられぬのであります。したがつて、もし、これを、そまつにあつかひ、亂暴にも、これを、損じさせたり、こはしてしまふ

人があります、わたくしは、それらの人を、まごころによくない人であるこいふこころもちが、おのづから、おこつてくるのであります。これに反して、その茶碗が、わたくしにこつて、なにならぬうちのない、こはれても、損じても、すこしも、かまわぬものであつたならば、たゞへ大切にしてくれる人がありましたも、またたゞへ亂暴にあつかふ人がありましたも、わたくしは、うれしいこころも、また、にくいこころもおもふこころはおこりませぬ。わたくしごころが、他にたいして、恩を感じ、恩にむくいるこころのおこる、わけがらは、こころに存するのであります、自分こいふものについて、なにならのかんがへをもたぬこいふ人であればこころに、いかにして自身は、この世にうまれてきたか、いかにして自分は、かくのごとき、よのなかのこころを、わきまへるやうになつたか、いかにして自分は、かく世にたち、世をおくりゆくこころができるやうになつたか。あれをおもひ、これをおもふにつけて、ふかくおもへばおもふほど、ひろくかかんがへれば、かかんがへるほど、そこに、ますますふかく、いよいよひろく恩の觀念が生じてこころにはをられぬ、はづであります。それゆへに、恩を感じる、こいふこころは、すなはち、わが身のたふこころ、大切なこころを、わきまへるわけがらであり、これをひろく、ふかく感じる、こいふこころは、すなはち、それだけ、わが身のこころ

をひろく、ふかくおもふわけがらであつて、決して、いたづらに他にむかつてのこゝがらではありませぬ。

人間が、ほかの動物や植物にまさつて、たふさいわけがらは、この、自分自身のこゝについて、かんがへるこゝができる、こゝいふてんにあるのでありまして、この一事は、いかにすぐれた高等動物といはれるもの、境界にも、ないのであります。したがつて、その人が、いかに、ひろく、ふかく恩を感じ、恩にむくいるこゝ、ろがあるか、こゝいふこゝが、その人のねうちをしるうへの、もつとも大切なさし、がねの一である、こゝまをしてもよいと信じます。

二

されば、金光大神は、報恩の道について、わたくしきもに、いろいろの、みをしへをくだされました。その、みをしへについて、大體をわけてみるに、一には父母の恩、二つには國の恩、三つには世の中の恩、四つには天地の恩をあけるこゝができます。そして、それらのものを、こゝいふこゝ、いめく、りましたものを、神の恩として、みをしへくだされました。

三

父母のみめぐみのありがたく、たふさいこゝについては、金光大神は『幼少の時を忘れて親に不孝の事』と、おいまいめくだされました。けにや、わたくしきもは、ややもすれば、かく世にたち、はたらきえられるのは、自分自身のちからであるかのごとく、おもひやすいのでありますが、われわれの、かくなりえられるまでの、父母のおこゝろづくしは、なにもものにしたまへるこゝができまするか。みづから子をうみ、そだてよこそ、はじめてその御心勞の萬分の一をうかどひまつるこゝができるのでありまして、子をもちてしる親の恩』とは、まゝこゝによくまをしたものであります。そのわが幼少の時を、わたくしきもは、おほえてをらぬがゆへに、しみじみ、おやの御恩のありがたいうこゝを、おもふこゝができないのでありまして、金光大神の、このおいましめは、まゝこゝに適切なおこゝばでありまして、たゞに、おそれるよりほかはありませぬ。金光大神の至孝至誠におはしましたこゝは、いまさらまをすまでもありません。事實の上で、いかなる御孝養を、おつくしなされたか、こゝいふこゝは、つまびらかにたはつてをらぬやうであります。金光大神の、

あの實意な、あのまごのこもつた御信心をば「神は我本體のおやぞ、信心はおやに孝行するもおなじ事」におほせられて、孝行の道におなじわけからであるごなされましたおことばによつて、わたくしごもは、その、いかに御孝心あつくあらせられたか、さいふ大體を、うかごひまつるごことが、できるやうにおもひます。かくてこそ、金光大神は生神のさかひにも御到達のそばされたのであります。

國にたいする、報恩の道を、金光大神は「神國の人に生れて、神に皇上的の大神を知らぬ事」においませめくられました。わたくしごもが、生命や名譽や財産の安全をたもたれるのは、ひごへに國家の御恩でありまして、ひごたび國家が、ばらばらに解體してしまひましては、あたかも、今日の露西亞のごごとく、いつくびをはねられるやら、いつ他から凌辱をうけるやら、さらにはかりしるごごはできないのでありまして、人間生活の基礎は、ゆくさきはしらず、たゞいまのごごころ、この國家をほかにして、ほかにもごめるごごころはありませぬ。人は、やゝもすれば世界ごいひ、人類ごいふ、一層ひろい、おほきいごごころに、まなごをそ、いで、いろいろの議論をいたしてをります。ごごに、このたびの大戦争によつて、このひろいかんがへが、これまでにみない發達を、いたした

やうでありまして、國際聯盟であるごが、國際労働問題ごが、人道ごかいふやうなごごばが、しきりにきこえるのでありますが、これごてもその基礎ごなつてをるごごころは、今日のごごころ、やはり國家ごいふものでありまして、今日の場合、世界的な觀念ご、國家的の觀念ごが、ごもに、つよきを加へてきたやうであります。そして、この二つは、決して、あひいれぬものではなくして、たごひに調和すべきものであるご信じます。それはごにかく、人間生活の基礎は、いまのごごころ、國家をほかにして、もごめるごごごはできないのでありますが、ひごくちに國家ごまをしても、國々、みなそののよろしきを、ごごにしてをります。わが日本國民ごしては、いかなる道を、ごるべきかごいふごごにたいして、金光大神は、さきにか、けた「神國の人に生れて、神に皇上的の大神を知らぬ事」ごの、みをしへをもつて、おこたへあそばされました。すなはち、神に皇上的の大神をわかまへて、その萬一にむくいまつるべきよしを、おしめしくだされたのであります。ごごにいはゆる、「神」ごは、皇祖皇宗をはじめまつり、われらの祖先にして、わがくにの今日あるにいたつた、いさほしあるかたがたを、いふのでありまして、「皇上」ごは、まをすまでもなく、わが皇室をいふのであります。わが國においては、敬神ご尊皇ご愛國ごは、つづまりおなじわけがらになるのであり

ます。これ、わが國の、世界にたぐひなき、特殊のくにがらをそなへてをるわけがらでありまして、ほかの君主國においては、かならずしも、さうでありませぬ。たゞへば一昨年三月にロシヤの國に革命のおこりましたとき、その目的は、なにであつたかといふも、當時のロマノフ家および、それをこりまいてをる貴族たちには、ドイツの國に、すくなからず、したしきをもつてゐた。したがつて、ドイツと戦争をするうへの邪魔になる。國家を愛し、最後の勝利をえるためにその政府をくつがへし、王家をたほさねばならぬ、といふこゝにあつたやうに承知してをります。勿論、今日なつては、まつたく、そのいろあひがはつてきてをりますが、こゝにかく、その當初の事情は、みぎのこほりであつたやうにおもひますが、これは尊王かならずしも愛國ならず、愛國かならずしも尊王ならざる、他のくにぶりの、もつともあきらかな適例であります。しかるに、わがくには、くにそのものが一大家族でありまして、皇室の御祖先は、そのまゝ國民の祖先であり、皇室は國民の總御本家であり、國民はそれになんして、分家であり、君は民の、おやさまであらせられ、民は君の子であります。かく、おのづからなる、みくにがらであるがゆへに、わがくにおいては、敬神すなはち尊皇、尊皇すなはち愛國といふこゝになるのでありまして、「きみもよろづよ、おみもちよ」

といふこゝ、わが國のこゝ、皇室はおなじちらずの國民をつねに愛撫したまひ、國民はまた、萬世一系の皇室をまもりまつりて、過去幾千年のあひだ、たがひに苦樂をこもにしつゝ、わがくにの今日あるをいたした、この神と皇との大恩は、いかにして、われわれのわすれうべきこゝでありません。いまや、世界の大戰亂は、わづかにおさまつて、平和のおこづれを、うけこりはいたしました。が、歐米各國のありさまは、なほ混亂に混亂をかさね、紛争に紛争をつとけてをります。大戰亂のあこじまひして、西洋文明の改造期として、それは、まこゝにやむをえぬこゝであります。そのなかになつ、わが國の今後でも、けつして樂觀のゆるさるべきではありません。わたくしきもは、よろしく神と皇との大恩のほごをわきまへて、祖先のおのこしくだされたわざを、りつばにうけついでゆくべきであります。

世の中の恩にむくいる道として、金光大神は「我身の苦難を知りながら、人の身の苦難を知らぬ事」こゝにいましめられ、「天が下に他人といふこゝはなきものぞ」こゝをしへられました。『あひ世、かけ世』金光大神もおほせられたこゝ、わたくしきもの、よわたりは、なに一つこゝとして、世のなかのめぐみによらぬものはありません。一枚のもめんぎものは、五圓なり十圓なりだせば、もこめる

ことができるとありますが、これを、まったく他の手を、わすらはさずして、つくりあげるこいふことになりましたは、わたをつくるべき土地からもとめてかゝらねばなりません。わたをつくる方法もかんがへねばなりません。いざにつむぐわざ、おるわざ、そめる工夫、すべてのことを、なにもないところから、あみだし、かんがへださねばなりません。もし、かやうなてかずをかけてをりましたならば、一故のもめんぎも、わたくしごもは、いかほごのおかねをだしても、えることはできないであります。日常の、よわたり、萬般のこごを、かやうなぐあいにかんがへて見まするご、わたくしごものよわたりも、まごごに容易なこごではなく、なにごごも、世のなかの、めぐみによつてをるのでありますが、それにもかゝわらず、着物をきるには、いくら金をだせばよい、電車にのるには、いくら賃金をはらへばよい、米をもごめるには、いくら金をだせばよいといふやうに、きはめてあさはかにしか、かんがへませぬ。これがそもく世のなかの、ひやゝかになり、われがものものになつてしまふ、わけがらであります、もごより、わがよわたりのしろは、なにもも金銭によつてもごめるのでありませうけれども、その、はらふ金銭は、世のなかの恩義にたいする千萬分の一、おれいのしるしである、金銭をはらひさへすればよいといふかんがへではな

りませぬ。金銭はすゑであり、おれいのまごごを、こゝろにこりはづさぬこごが、そのもごであります。このこゝろが、おたがひにありましたならば、かひものを、むやみにねぎるこごなく、お客づらをするこごもなく、電車一つにのつても、わづか往復十銭ばかりの、はしたがねをだしたによつて、車掌にけんつくをくわせたり、乗客に失禮なふるまひをするやうなこごもありません。そのほか、いろいろの社會問題も、たやすく、とけてしまふであらうごおもひます。さらに、わがなす日々のしごごは、それが商賣であらうが、農業であらうが、職工であらうが、車をひくこごであらうが、そのまゝ世のなかのためになるのであり、やがて世のなかへの御恩がへしのみちになるのであるから、なにのわざに、たづさはるものも、そのこごに、日夜に、まごごをこめ、實意をつくして、おこたるこごの、ないやうにすること、わたくしごもの、せめてもの世のなかのめぐみにたいする、むくいになるご信じます。また、他の難儀を見て、これをたすけるのも、世のなかにたいする、わたくしごもの、たがひの責任であり、おれいでもあります。これまでは、他の難儀をたすけるこごを、慈善であるの、慈惠であるのこいふこごばをもちひましたが、これは、昔の階級をもごにした、かんがへかたでありまして、わたくしごもには、はなはだこゝろぐるしき感じが

いたします。この點を、金光大神は「人を助ける事が出来るのは、ありがたい事ではないか』とおほせられました。まことに、かぎりなく、ありがたきこととして、これに奉仕すべきではありませんまいか。

天地の恩にむくいるべき道として、金光大神は『天の恩を知りて、地の恩を知らぬ事』とおいましめられました。われわれ人類をはじめ、一切萬物は、ことごとく天地のあひだに、なりいで、天地のあひだに、いだから、はぐまれてをるのであります。一物として、このほかにをるものはありませぬ。しかも、天地のみめぐみたるや廣大無邊にして、なにもものも、これにたごへるべきものはありませぬ。したがって天地の恩といふやうなことを、しみじみ感じあぢはふことができないのであります。人は、しばしば天地自然さまをしまして、もごめても、もごめなくても、おのづからあたへられてをるがゆへに、かの『かしこきや、あまつひかけもなれなれて、つねのものごは、おもひなしぬる』の古歌のごとく、ほんごありふれた、つねのものとして、おもひすごしてをるのであります。金光大神は、この天地の廣大無邊の恩徳を、ことさらに痛感あそばされまして、わたくしごもに、そのかたじけなきごを、ふかくをしへさごされました。この恩徳を、

いかに痛感なされたか、こいふごは、天地をもつて神の神體ごさへ、おかんがへあそばされて、天地をみだりにけがし、天地にたいして、無禮なふるまひをすることがあつてはならぬ、ごごそかに、いましめられたごによつても、その一斑をしるごができます。金光大神におかせられては、なにゆへに天地が神の神體であるか、こいふやうな、議論論索をこえて、たゞ、かくのごとくに御信じなされたのであつて、それほご天地の御恩を、ふかく感泣せられました。このかぎりなき天地の恩恵にたいしては、わたくしごもは、なにをもつてむくいまつるべきであるかの道をわきまへませぬ。たゞ、ふかく、よりふかく、この恩をおもひわきまへてゆくごもに、せめては光陰をむなしくすごすごのなきやう、おのれのわざにはけみつごめるごもに、ものをそまつにするごもなく、いはゆる冥利冥加をつゝしみたふごび、『神は荒地荒屋敷をお嫌ひなさる』ごのおごごばのごとく、わがちからのおよぶかぎり、天地の生々化育の徳をたすけてゆくごが、おたがひの大切な道であります。

以上のごまくにして、われわれは、父母の恩、國の恩、世の中の恩、天地の恩をうけて、かくのごまく、この世にうまれて、わがよわたりを、いみなむごまかできてをるのでありますが、かく、みめぐみふかき父母のあひだにうまれて、そだて、いたゞくごまかできて、このありがたき御國の民ごうまれるごまかでき、この世のなかに人ごなるごまかでき、この天地のあひだに、いだから、はごくまれてゆくことができてゐるのは、一にわが天地のおやがみさまの御恩徳によるのでありまして、かみさまのみかけによらずして、さうして、かくのごまかし、あはせがえられるであります。かぎりなき神のみかけは、これを、父母の恩、國の恩、社會の恩、天地の恩にわけることができ、父母の恩、國の恩、社會の恩、天地の恩は、そのまゝこれを神のみかけに歸せねばなりません。したがつて神の御恩にたいする御禮の道は、父母に孝に、國君に忠に、社會に愛に、天地に順にしてゆくよりほかにありません。父母につかへてゆくごまか、そのまゝ、神につかへてゆくわけがらになり、君に忠義をつくすごまか、そのまゝに神につかへてゆく道になり、世のなかにたいするごまかにおこたりのなきごまか、そのまゝ神につかへる道になり、天地の冥利を、たふごんでゆくごまか、そのまゝ、神につかへてゆくわけがらになるのであります。しかるに、神につかへてゆく道は、父母

に孝、君に忠以外にあるものであるかのごまか、かんがへをもつものが、世のなかには、すくなくあります。したがつて、神を信するがゆへに父母にそむき、國君に忠ならざるものがあるのは、神をもつて、父母や國家に對立してをるものご見てをるわけになるのであります。はなはだその意をえぬごまか、いはねばなりません。『信心する人は何事にも真心になれよ』ごまか、この理をみをしへくだされたものご信念いたします。

五

わたくしごまものよわたりは、日々くりかへすごまほりでありまして、けつして二様も三様もあるわけはありませんが、このよわたりを、いかにこゝろえていごまなみゆくべきかといふごまは、人ごして、なにより大切なごまか、おもひます。わが、我慾をみたすためのものごかんがへる人もあります。一身一家の繁榮のためごまおもふ人もあります。またうまれてきたから、やむをえず、いきてゆくのであるごまいふ人もあります。おもひは人々によつて、ごまなるであります。そのなかに、わたくしごまは、あひがたきこの世に人ごしてうまれてきたごまを、ありがたくたふごまおもふ

ものでありまして、しかも、わが、かくあることは、すべての他のみめぐみによることをおもひ、日夜に報恩の生活をいこなませて、いただきたいのでありまして、この生活のなかにおいてのみ、真にありがたき一生をおくらせて、もらふことが出来るに信するのであります。(大正八年七月)

すなほの徳

一

金光大神は、つねに、時節にまかせよ、ごみをしへくだされませぬ。いはゆる時節にまかせよとは、『すなほになれ』のおことばであります。すなほといふことは、おほくは婦人に關する道徳上のものとして、こなへられるやうであります。これはたゞ婦人のみではありません。男子にしても、またまことに大切なことからであります。すなほは、わたくしごもが、よわたりのうへに、なにごとも、我をさり、おのれをすて、他にしたがふことが、人にして、ここに信心させていたゞくものとして大切であるならば、すなほなごもちは、何人にも通じて、大切なものといはなければなりません。すなほといふことは、普通は消極的な徳目として、かんがへられてをるやうであります。我をさり、おのれをすてる、といふすがたからかんがへるご、いかにも消極的なもの、如くであります。しかしながら、我心をさつて、一層ひろい、ふかい心をもつて、よわたりをするこ

このできるうへから、かんがへてみますれば、かへつて、それはかへつて積極的な徳でなければなりません。ここわざにも「柳にゆきををれなし」を、まをしてをります。柳の枝は、なよなよとした、まごころに、よわよわしい姿をそなへてをりまして、すこしの風にも、なびきますが、これに對して、松の樹なきは、いかにもごつごつとした、つよそうにみえるのでありますが、その、つよそうにみえる松の樹は、雪にも風にも、をれやすいのに、柳の枝のみは、いかなる風にも、いかなる雪にも、をれたためしはありません。なよなよした姿は、いかにも、よわそうであります。雪にも風にも、をれないのは、雪や風を、よく容れて、さからはぬ、おほいなるもちまへがあるからであります。「柔よく剛を制す」をいふことも、意義は多少こころなありますが、また、おなじおもむきのあることばであります。金光大神が、「我情我慾を放れて眞の道を知れよ」を、みをしへくされたのは、すなはち、このてんでありまして、ちいさな我のよわたりをすて、神ごころなる、他ごころなる、すなはち、おほいなる道にす、みいれよ、との意であります。

そこで、わたくしごころは、いかなる場合にすなほであるべきか、まごころに對して、金光大神は、すくなくとも、三つのばあひを、お示しくだされてあります。すなはち、その一は、天地自然

に對してすなほであるべきこと。これは「四季の變りは人の力に及ばぬ事ぞ、物事時節にまかせよ」ごあるおことばに、あらはれてをります。その二は、境遇に對してすなほであるべきこと。これは「物毎に時節を待たず苦をする事」ごあるおことばに、あらはれてをります。その三は、他人に對してすなほであるべきこと。これは「討向ふ者には負けて時節に任せ」ごのおことばに、あらはれてをります。

二

わたくしごころは、祖先以來、幾萬年のあひだ、天地自然にいだかれ、はごくまれてまゐりました。しかしながら、その天地自然の、うつりかはりは、まごころごとく、人間の都合のよいやうにばかりは、まゐりませんでした。あついで時もあり、さむい時もありました。風のふくごころもあれば、水のでるごころもありました。そこで人はたえず、これら都合のわるいごころを、都合のよいやうに、あらためやうにして、つめてまゐりました。電信や電話や、汽船や飛行機や、そのほかあらゆるものが發明されました。いはゆる文明はかくのごころにして、わたくしごころの世のなかにうまれてまゐ

りました。人はこれを、自然の征服とまをしてをります。たゞは、夏のあつさをふせぐためには、扇風機も工夫されました、氷をつくることもかんがへられました。海水浴もはやるやうになりました。しかしながら、これは人の力をもつて、あつさを、あるところまでふせぐといふのにござまつてゐて、あつさ、そのものを、そのまゝ、冷しくすることが、かつてできたでありませうか。今後は、しらす、すくなくとも今日までは、さやうなことはできませんでした。今後いへぎも、おそらく、左様なことはなしうべきではありません。ことに人間のなやみがありまして、あつくなること、たゞ、あつい、あついでいうて苦みもがきます。あついでおもへば、おもふほど、一層あつくなりました。それがために自分のすべき、しごとも手につきませんでした。これは、わたくしきもが、たゞ、あつさをいさひ、あつさにさらふがためでありまして、このてんに對して、金光大神は、『四季の變り人は人の方に及ばぬ事ぞ、物事時節にまかせよ』とおいましめくだされました。いかにおもへばきて、あつい夏の時候は、いかにすることもできぬ。くるしんだきて、さわいだきて、さうにもすることはできぬ。されば、あついで夏のあたりまへである。あつければこそ、ものもそだつのである。かく一度あつさにすなはな心をもつて、あつさに、對した時に、あつさは、さほ苦に

はなりませんでした。一日あせみごろになつてはたらいで、わがやにかへつて、行水一杯もあみて、夕風にふかれてをります。東の山からは、まごかな月も、くつきりみのほりました。銀のすゝをふるやうなきよらかな聲をして、ひぐらしもなきました。そのまきのころもちは、あつい夏でなければ味へませぬ。かくして一日の苦熱もわすれてやすむことが出来ます。朝はやくおきらう、ひやひやとした風もそよよふいてをります。草のはすゑに、白い露をのせていきいきしてをります。そして、わたくしきもは、今日一日のはたらきに、うまれかはずたごき心もちで、いさまくで、ゆくことが出来ます。

現在の、大教會所が、以前御改築のみぎり、一時、おひろまへを假移轉なされましたのは、わづか六疊じきばかりの家で、しかも、それが、南が壁になつてゐて、北が入口、東が山でふさがり、わづかに西が障子のあかりりになつてゐて、冬はさむく、夏はあついでいふつくりかたでありました。をりから夏のことで、ひるさがりの西日を障子からまごもにうけて、そのせまい家のなかは、さながら、むろにでもはいつてをるやうでありましたが、四神さまには、そのなかに、おひろまへをおつこめくだされました。ある人がまるつて、拜します。玉のごき汗をたれたまひつ、端

然して御奉仕なされてをります。その人は、おもはず『金光さま、さだめて、おあつくゐらせられませう』と、ごきげんをおうか喜びいたしましたのに對して、『あついでにおもひ、さむいにおもふことが、年のうちに三日もあらうか、それも、氣のせいぢや』とおほせられましたので、いたく恐縮したまをすことでもあります。これは、そのあつさが、けつしてあつくないもの、おほしめしでなくして、あつさのなかに、喜びこんで、しかもあつさを意になされなかつた、まことにたふさき御態度のあらはれた、おこさばであります。おひおひ時候もあつくなりますが、これらのたふさきおはなしを、つねに心にわすれぬやうにして、すなほな心をもつて、あついで時のわがづかみにをこたりのないやうにせねばならぬこと、おもひます。

人間は、ミてもかくても、大天地大自然を、はなれることはできないのみならず、これに抱かれ、これに養はれ、これに育まれて、ゆくべき運命にあるのでありまして、すなほな心もちで、わが身をこれに托してゆくことによつて、わたくしきもは、つねに自然によつてはけまされ、自然によつてなぐさめられ、天地自然に融合した妙境にいることができるであります。

三

さらに、わたくしきもの境遇、すなはち、わが身のまわりの事情は、うまれてから、しにゆくまで、けつして一様ではありませぬ。あだかも道中するのにおなじでありまして、山もあれば河もあり、都會もあれば野原もあるやうに、人の一生も、ある時はたのしく、またある時はかなしく、ある時はあはせに、またある時にはふしあはせに、しゆじゆ、さまざまの境遇をこほりつゝ、わが一生のよわたりをいさなむのであります。そこでこれらの境遇に對して、わたくしきもはふしあはせであり、くるしくなれば、なほさらのこき、さもない時でありまして、まったくこれでおもふことはいさな大満足のあるものではありません。一步は一步より、つねに、これではならぬこき、精神的にも物質的にも、まへにすすみでやうにする、のぞみがたえる時はありませぬ。そこに人間の進歩といひ、向上といふものがあるのですが、その、のぞみが一步あやまりますと、あるひはわがみをなげき、人をうらみ、世をのろふたねこもなり、あるひはまた、一足こびに、のぞみをはたさうとするところから、おもはず、あせつたり、もがいたり、非常手段をこつて、人の道をふみはずしたりするやうなこきにもなる。ほんごうの進歩は、ひこあし、ひこあしと、さわがず、うろたへず、しつかりふみしめて、ゆくところにはあらはれるのであります。苦しければくるしみの

中に、貧乏であれば貧乏の中に、病氣であれば病氣の中に、すなほにやすんじて、その時、その時にまかせた心をもつて、しかもわが身のつこめに、おこたりのないやうにこつこめることが大切であります。この、すなほな心なくて、たゞいたづらに苦しむ、もがいてゐたならば、かへつて一層のふしあはせに、おちいるよりほかはありません。金光大神は、このてんを『物毎に時節を待たず苦をする事』とおいしましめくたされたのであります。

畑先生が、かつて病氣に對する御態度について、おはなしなされたことがあります。自分は、時に病氣にかゝることもあるが、病氣は自分のうちへ来たお客であるとおもつてをる。お客ならば、お客相當のあしらしをしておけば、用事がすんだらかへるにちがひない、それなのに、お客が来たがために、自分いふ主人がまごついて、わが家から、ほりだされてしまつてはならぬ。こまをされたが、これは、やまひに對してすなほであるべき、みをしへであります。やまひに對して、このすなほな心がないがゆえに、これを苦にして、くびをくゝつたり、うろたへ、まよつて、なほさら、からだをこわしてしまふようにもなるのであります。すなほにおちついた心をもつて、しつかりしてをれば、いつのまにかなほつてしまふであります。いかなる境遇にあつても、すなほな心をも

つて順應してゆくところに、眞の安心もあり、よろこびもあつて、そしてそのなかに、一步一步わが運命をひらいてゆくこまができるのであります。

四

つぎに、わたくしきもは、よのなかの、おほくの人のこまに、あひたすけ、あひ、きゐて、たがひのよわたりをいみなむのであります。自分ひりのみ、ほつんご世にあるのではありません。そして、それら、よのなかの人々は、みなそれぞれ、こまなつたおもわくをもち、ちがつたかんがへをいだいてをるのであつて、こまわざにも『人の心の、こまなつてをるこまは、なほその顔のこまなつてをるがこまである』こまをしてをるこまほりであります。人のかほかたちは、たがひに、おほよそは、似てゐるのであります。目の豎にひらいてゐる人もなければ、鼻の横についてゐる人もありません。さればこま一分一厘ちがはぬ、かほかたちの人が、それが二人あるかといふこま、おなじ親からうまれた兄弟でも、そんな人はありませんが、人の心もちも、それがおなじく、みな、きれいなこまをこのみ、きたないこまをきらひ、よいこまをしやうこまもひ、わるいこまをすま

い、さおもふやうな、おほよそのところは、にてゐるのでありますが、さればこゝで、まづたくおなじ心もちをもつてゐるものは、兄弟同志でも、親子でもあるものではありませぬ。そしてまた、そこになまこゝに、おもしろいところがあるのであります。農業をいこなむもの、商業にしたがふもの、學問をもつて世にたつもの、醫術にはけむもの、車をひくもの、船にのるもの、みな、こゝになつたおもわくをもつて、それぞれ、こゝになつたしこゝに、たづさはるがゆえに、有無あひ通じ、長短あひ補ひつゝ、おのづから、めいめいのしあはせを得るこゝができるのであります。

しかしながら、もし自分のおもわくのみを、もこゝしてかんがへたならば、このたがひの心もちがちがつてゐるこゝが、あるひは癪にさはるこゝもなり、腹のたつこゝにもなり、あらそひをするもこゝにもなり、喧嘩のたねにもなるのであります。一日こゝしてやすき日はありますまい。我心のかたくなに、つよいわたくしは、日夜にこれがために、くるしんでをります。ひこゝあらそつた結果は、人もきづき、自分もきづつき、こゝだほれになるよりほかはありませぬ。それゆえに、金光大神は『討向ふ者には負けて時節に任せ』とおいしましめくだされました。たこゝへ自分にわるいところはない、さおもはれるばあいにも、他がわが身をくるしめるやうなこゝを仕向けるについては、

こゝにか自分になりないところが、あるにちがひない、自分がよいものさおもはれるのは、なほ自分の省察がたりないのである。ひこゝに、わび、あやまるよりほかはない、さいふこゝから、すなほに人のいふこゝ、するこゝをうけいれて、うらむこゝもなく、くるるこゝのないやうになるのが、このおいましめの神意でありまして、『負けて』こゝあるのは、勝つこゝを豫想へての、勝つための『負ける』こゝでなくして、こゝまでもわが身のつみあやまち、わが身の不徳をわびるの意であります。金光大神は、いかなる人のくるしめをも、『ひこゝにわたくしの不徳ゆえであります』と神さまにおわびなされました。また『人を打つたものは、夜ねるにも心もちがわるからうが、人に打たれたものは心もちがよい』さもおほせられました。眞の心のおちつき、安心は、この心境にあつて、はじめてあぢはひえられるのであります。しかも、われひこゝ、たがひにたちゆくこゝができるのであります。

五

以上のこゝに於いて、わたくしききは、なにこゝにも、時節にまかせ、すなほな心になつて、ひ

ろくゆたかに、おちついたよわたりをさせていたゞかねばならぬのでありますが、この何事にもすなほに、なりえられる根拠はいづれにあるかといへば、それは信心といふものゝ、二つのはたらきからであるのであります。

その一は、信心とは、神のすくひを信じて、およそ、わがよわたりのうへの、よきことも、あしきことも、しあはせも、ふしあはせも、すべて神さまに、おまかせをしておいて、いづれにも、よろしきやうに、おくりあはせくだされ、一心に信頼し信順するに、ほかならぬがゆえに、いかなる時、いかなる場合にありましても、神一心にたのみまゐらせて、いたづらに小い我心のはからひをすてるによつて、したがつて何事にも、おのづから、すなほになれるのであります。

その二は、信心とは、『わが心が神に向ふ』のをいふのであつて、つねに神さまを、あてにし、神さまに心を専らにして、わきめをふらぬのであります。つねに神さまに心をむけ、神さまの、みひかりにわが心をたしていたゞく時、わたくしごもは、何もまをすごとはない、たゞわが身のいたらぬこと、つみあやまちのおほきこと、めぐりのふかきことをおもひ、おわびするよりほかはないのであります。この、つねにわび、つねにへりくだる心がみちてをるがゆえに、したがつて、いか

なる場合にも、おのづから、すなほになれるにはをられないのであります。

金光大神の御一代は、このすなほなる御生活をもつて終始してをります。『時節にまかせよ』このおことばや、『何事もおほせごほりに致し』あるおことばは、やがて御一代の御生活の、あらはれであります。御幼少のときから、つらいこと、難儀なごころしいごころにも、たびたびおであひなされ、他の攻撃、非難も御歸幽にいたるまで、うちつゞきました。が、すなほな、まるい、むりのない玉のごとき御心のひかりは、いつごころも、すこしのくもりもかゝりませんでした。わがみちの信心のうへのよわたりは、すなほにむりのないものでなければなりません。わたくしごもが、いまだ何事にも、すなほになれるのは、すなはち、いまだ信心ができてゐないしであります。まごころにあひすまぬごころでありまして、さうか、いかなる時、いかなる場合にも、信順な心から、おちついた、ひろいよわたりのできるやうにならせていたゞきたいものであります。

いま、かうして筆をこつてをる、わたくしごのさなり、大阪へかへるといふ、さしよりの人が腰をかけてをります。が、さきほどから、あれむりをはじめて、わたくしごの方へむやみにたほれかゝります。わたくしごの一篇をつゞりつゞ、しかも、このさしよりのたほれかゝるのを、こまるさといふやうに感じてをります。すなほにその枕になつてあげることができません。なんさといふ皮肉でありますか。

(大正八年六月十四日、汽車の中にて)

信心と生活

八二

信心と生活との關係については、おほよそ三つほどの見かたがあります。すなはち、その一は、信心と生活を全くべつべつのものであると見なすのであります。その二は、信心は生活の上の、ある時、ある場合にいりやうなものであると見なすのであります。その三は、信心と生活とが、全くあひ一致すべきものであると見なすのであります。

一

信心と生活を、まったくべつべつのものであると見なすのは、さういふことであるかといふこと、信心といふものは、たふさぐものであるにちがひないにしても、それは、ふつうの人には、とてもできぬことであつて、僧侶とか、教師とか、乃至は、よほぎ特志な人でなければ、できぬことでもあるし、

二

また、しなくてもよいことであること考へるのであつて、さらに甚しきは、信心といふものは、一部の學問のない、常識のない迷信家のすることであつて、智識あるものには、よいものではないものであること考へるのであります。

信心をもつて、生活の上の、或る時、或る場合に、やくだてやうにするか、なかなかに世の中にすくなくありません。たゞせば、ひごろは信心なきは、よしのなきものともいふ、神にも佛にも、手をあはせたことのないものが、なにか病氣にでもかゝるか、災難にでもあふか、そのほか、なにか心配ごころにでも、であふさぐ場合には、いはゆる、かなはぬ時のかみだのみ、さういふことわざのさほり、にはかに神さまをまつり、佛さまにてをあはすといふやうなのは、このたくひであります。それから、このごろはよく、「宗教利用」といふことを耳にいたします。さうも社會の傾向がおもしろくないとか、人心の趨向が着實でないとか、いふやうなことを心配する、それでは宗教の布教をさかんにするとか、よい宗教家を養成するとかして、ひみに信仰心をふるひおこさせるやうにしたならばよいであらう、さういふやうなことを、わけもなく考へつく。このごろは、さうも工場職工たちのかんがへが危険性をおびてきた、その中に、なにその宗教を信心するも

八三

のは、大層ぐあいがいよいよ、それゆへに、信仰のあるものを、さしごしつかふやうにしたならばよいであらうといふやうに、工場をもつてゐる人もかんがへ、役人もそれに同感であるといふやうな話も耳にいたします。およそ、かやうなたぐひは、あながちにわるいことはおもひませぬ。しかしながら、ひごろこのないときには、信心のシの字も口にせず、神さまのカの字もおもひださぬものが、病氣や災難のある時だけ、社會人心の傾向がおもしろくない時だけ、火のついたやうにさわぐのは、決してほめたことではありませぬ。「利用」いふことは、文字通り道具あつかひにするの意味であつて、道具いふものは、いる時にいり、いらぬ時にはいらぬのが、そのもちまへであります。いる時には、にはかにはたきをかけたり、雑巾でふいたりして、もちですが、いらぬ時には、棚へあけておいたり、物置につきこんでおいたり、天井裏へでもあけておいて、すこしもかへりみないのが道具であります。信心をもつて、一種の道具視するのが、この第二の場合であります。さらに、第三のものは、すなはち信心と生活とが、まったく一致せねばならぬものもかんがへるものであります。まことの信心は、かならず人間の實生活のすべてにわたつて、力をあたへ光をあたへ命をあたへるべきものであり、またまことの生活をいこなまうとするには、かならずまこと

の信心を得なければならぬ、さうなすにをられぬといふのが、すなはちこれでありませぬ。

三

信心と生活を、まったくわけてかんがへてをる人のなかには、信心を、きわめてせまくみて、あの宗旨、この教派といふやうな、いはゆる既成の宗教の鼓吹する信心のみをみて、そこから生活と信心とをべつべつにわけてをる人もすくなくありません。しかしさういふ意味でなく、きはめて広い意味の信仰といふものなしに、はたして、わたくしごもは、まことの生活をいこなみ得られるかごうか。たごへば、ある理想にあこがれて、それに到達しやう、それを實現しやうとするはたらき。天地のさまをみ、世のなかのさまをみて、いはゆる、ものゝあはれを催し、ものゝ恩を感ずるこいふやうなこころもち。ふかくわが身にかへりみて、わがみの、罪ふかきこと、過おほきことをなげきかこつこころもち。わがみのかぎりある、かよわきものであることを知つて、驚き悲むこころもち。およそ、かやうなたぐひは、人間の生活を、ほんごうにいこなまうとするもの、かならず、もつてゐるものでないものはありませぬ。もし、かゝるたぐひを心にもつてゐる人であ

るならば、それは決して信心と生活を別々にこりあつかつてゐる人ではなく、しらす、しらすの間に、この兩者は、たがひに交渉してゐるものといはねばなりません。なぜなれば、いはゆる信心とは、まへのべたやうなもの、はつきりこあらはれたものに、ほかあらぬからであります。しかしながら、この二つを全くべつものにしてゐる人が世の中には、なかなか、すくなく、信心者それみづからにも、この種のかんがへをいだいて居るものもすくなくない。それは、信心は、世間のわづらひがあつては、できえないものであるとおもつて、あるひは出家するといひ、あるひは遁世するといふものがあるのは、すなはちこれであります。出家も遁世も、信心をえるための一時のよぎないでだてにすぎずして、ふたよび家にかへり、世の中にでよくるものであるなれば、それはまことに結構でありますけれども、ふたよびかへつてこないのもすくなくない。これは死んだ人もおなじであります、いたづらに死ぬるといふことが、わたくしごもにつて、無意味であるかぎり、かやうなたぐひの信心は、また、まことに無意味なものといふのほかはありません。

信心を生活の道具とするものについての、わたくしごものあきたらぬてんは、さきに、すこしくのべたごほりであります。或る信心の道では、自分から、すんで道具あつかひをうけるやうに、

しむけてをるものもないわけではありませぬ。それは、いはゆる御祈禱とか加持とか禁厭とか卜占とかいふやうなものを、存在の唯一の理由としてをる宗旨や、いはゆる精神療法なきを行つてをる宗教は、みなこのたぐひであります。しかしながら、人生の、さうした一時一時のできごみや、すゑのこごのみにあたまをつきこんでをるごごが、はたして、まごごの信心のはたらきであるでありますか。またそれと同時に、人間のよわたりのうへの、一時一時のできごみや、すゑのこごのみに信心はいりようであるごかんがへをつて、はたして、まごごの、よわたりをいごなむごごができるでありますか。

このてんにおいて、わたくしごもは、まごごの信心と、まごごの生活とは、かならず一致すべきものであり、またせねばならぬものであると信ずるものであります。さきにのべたごごく、いはゆる「くるしい時の神のみ」ごいふごごも、これは決していつはりの心からで、をる要求ごはおもはぬのであります。そこには、よぎない、やむにやむごごをえない、また、さうあるべき人間本来のねがひ、要求が、一時そのすがたをあらはしたのであります。しかしながら、この「くるしいごご」ごいふごごは、「くるしい時」ごいふ一時のごごであるかごうかごいふごごを、わたくしごもの

身のうへについて、眞實にかんがへてみるごときに、それは、たと、くるしい時だけに、くるしいのでなくして、もごもご、くるしい我が身のすがたが、「くるしい時」に、まざまざと、わがめにみえたのにすぎないのであります。けつして、一時の現象ではありませぬ。それは、ちやうど地球の中には、つねに火がもえてをるのであるが、それがたまたま、淺間山の、おそろしい煙になつてあられたのよ、おなじごとであります。淺間山以外の土地には、いつまでも火はふかぬものごかんがへてをるのは、わたくしごもの油断であり怠慢であり無智であります。それゆゑに、金光大神は『まめなごも信心の油断をすな』と申しへいましめられました。

人の世に、しんばいのある時に神にいのるごいふごも、これごおなじでありますして、心配のある時だけに心配があるのでなく、また『うきごこの品ごかはれ世のなかに、心やすくてむす人ぞなき』ごも申してをるごご、たと心配性の人にかぎつて心配するごいふのではありません。これは有限なる人間の智力の破綻を意味してゐるのであります。有限なる人智が、たまたま、ある事情によつて現實を暴露したにほかならぬのであります。そこに、無限のある力にたよらずにはをられぬ要求があるのであります。そして、それはたと心配事のある時だけのこごではありませぬ。それゆ

へに、眞實に、こゝろのまごごをつくさうごねがふものは、神はごけの御力にすがり祈つたのでありますして、祈るごところに眞實のまごごがあるのであります。ひごのよく、ひきあひこたす歌に『心だにまごこの道にかなひなば、いのらすごも神やまもらむ』ごいふのがあります。或るひごは菅公の歌だごいひますが、歌の調も菅公のものごおもはれぬほご俗であり、また菅公は大に祈られたお方でありまして、天拜山の遺蹟なごはすなはちそのしるしの一であります。それは、ごにかくごして『心だにまごこの道にかなひなば』ごいふごは、わが心のまごごをつくさうご努力する人ごは、さうしてもいへぬごごばであります。なぜなれば、これがまごごであるごいふ、さかひめはごこにもないのでありますして、ちやうど、目のさきに見える富士の山が、ちかづけば、ちかづくにしがたがつて、益々ごぼくなるのよおなじわけであります。むしろ、自分はさうしても、まごごはつくし得られぬ、ごふかく我が心のたらはぬごごをなけごごころに、まごごそのものが存するのよも知れませぬ。さうにかしてまごごをつくしたいごねがふ人は、かならずや祈らずにをられぬのでありますして、自分は、まごごをつくした、ごおもふのは、人間のはかない驕慢であり淺薄であります。楠木正成卿や、廣瀬中佐が『七生報國』ご祈つたのよ、みな眞實のこゝろをつくさうご努力した結

果であります。

また眞實の信心を得てをる人であつたならば、かならずや何事にも實意をつくさずにはをられな
いはづでありまして、信心するものは悪いことをしてはならぬといふのでなく、昨日まで如何なる
悪事をはたらいたひも、ひこたび一心に神にすがり、佛をたのむがゆえに、おのづからわるいこ
とがやむのであります。信心しながら、わたくしにも悪心のあるのは、眞實に神一心のころに
なれてをらぬし、であります。神訓に「信心する人は何事にも眞心になれよ」とは、この信心と
生活との一致すべきものであることを、みをしへくだされたおことばであります。かくの如くにし
て、信心と生活とは、畢竟、あひ一致すべきはづのものでありまして、金光大神の道は、すなはち、
この點をあきらかにしたまふものであり、生神とは、それを如實に、あらはしたまふおかたをまを
すことばであります。

四

信心と生活との關係については、以上のごくおほよそ三つのかんがへがありますが、そのなか

で金光大神の道は、じつにその第三にいるべきものであります。しかしながら、おなじく、この金
光大神の道を信じて、あるひは道の教師もなり、あるひは信徒もなつてをるもの、間にも、な
ほ、おのづから、前にあけた三つの區別があるやうにおもはれます。

信ずる教そのものには、かはりはないのであります。事實のうへに、やつて居ること、おもう
てをるところもちを、しらべてみるに、實際いろいろの種類があるのでありまして、信心は信心、
商賣は商賣、お廣前はお廣前、我が家は我が家、今は御祈念をしてをる時である。今は居間にをる
時である。こいふやうに、彼こそを、きつぱりきわけてをるやうな場合が、わたくしにも、少
くないのであります。これはまへにあけた第一のたぐひに在るべきものであります。かうしたか
んがへは、信心のいまだあさいものにもありますが、さうでなく、比較的に信心のうへのごみや、
生活のこを、まぢめにかんがへてをる人にも少くありません。ほんとうに信心の道によつて商賣
しやうとするに、さうも商賣がてきまきでできなくなる。ほんとうに商賣しやうとするに、神のみ
まへに、うしろめたいころもちを禁ずることができぬ。信心するのくもくしく、商賣をするのも
くるしい。せつばつまつて、こゝまでは信心、こゝからは商賣といふやうに、きつぱり區別して、

やつこ心をやすめるといふ、ゆきかたであります。これは、室のなかに、塵がたくさんたまつて居るのが、めにつくのがくるしいからきて、めをつぶつてをるのこ、すこしもかはりはありません。信心と商賣とが、はたして兩立せぬものであるか、こいへば、けつしてさうでなく、かへつて信心によつて、商賣は眞實にさかえてゆくのであります。兩立せぬこかんがへるのは、わたくしごも我情我慾によるのであります。しかしながら、『信心は容易いものぢやが、皆氏子からむづかしい』と、あります。こも、あります。こも、わたくしごもに我情我慾のねが、ふかくこ、ろに、おりてをります。けに、信心を本としてそれにたがはずに生活するこいふこは、餘程にむづかしいこであります。むづかしくても、なんでも、われわれは、さうしても、この兩者一致のためにつこめねばならぬのであります。この點に對して、古人も『大死一番』と申し、『こいへ、』と、めてをります。大死し、こいへ、しかるのちに、ほんごうに、いきるべき道がひらけ、うきあがる道がひらけてくるのであります。わたくしごもは、さうかして、かゝるたふこい境地に進ませていたときたいものであります。

さらに、金光大神の道を奉じてをりながらも、信心こいふものが、やはり一種のよわたりの上の

道具であるかのごこくにかんがへてをる人も少くありません。これは、さきにごましたごこく、全くまちがつたかんがへこは、まをさせぬが、すくなくこも、生活にたいし、信心にたいして、充分なるかんがへをもつてをる人こいふこはできません。かりに信心が、よわたりの上の道具であるとしても、それは、わたくしごもにこつて、もこも根本的な、もつこも普遍的な、いつも、いかなるごこくにも、なくてはならぬ、もつこも大切な道具こいはねばなりません。『こいへは信心の稽古をしに来るのである。よく稽古をして歸れ、夜夜中さう云ふ事が無いこも限らぬ』と、兎角信心は地を肥せ、常平生からの信心が肝要ぢや』とある御理解を、わたくしごもは、ふかくあぢはふべきであります。

五

以上のごこくにして、われわれは、肉體的にも、精神的にも、信心をはなれては、眞實のはたきはでき得ないのであります。眞實のはたきをしたこいへば、かならずや、一心に神さまにおすがり申してゆかねばなりません。かくて金光大神の信心は、すなはち眞實の人間の生活の道

であり、眞實の生活は、やがてまた金光大神の信心に一致すべきであります。さうか、これもごもに、この金光大神の信心のもつことも大切な點を、しつかりとつかまへて、そのみこころにかなふやうなさかひにすゝませていたゞきたいことあります。

(大正八年七月)

信心のあぢはひ

ものを味ふといふころもちは、なに事にたいしても、また如何なる場合においても、きはめて大切なことあります。

わたくしきもの、最もおちいりやすい弊害は、ものごとのねうちを、輕卒にさだめて、これはよい、これはわるい、あれはすきた、あれはきらひだ、といふやうに思ひこんでしまひやすいことあります。まして、こゝから、日常のよわたりの上に、いろいろの過失や損害や不道德をかさねることが少くありません。たゞへば、たゞのものにしても、「喰はずぎらひ」「いふことがあつて、たべて見れば、ずいぶんうまくもあり、滋養もあるものでも、その格好がわるいとか、にほひがよくないとか、あるひは、他がおいしくない」と云つたからとか、そのほかの事情で、さいしよから箸をおろさずして、あれはきらひだ、けぎらひするやうなことがありますが、これは趣味のうへからも、營養のうへ

からも、まことに損なわけであります。たゞひ、はじめは、きらひであるとおもはれるやうな物でも、それをあぢはふことによつて、つひには、このまじきものになることは、わたくしきもの、しばらく経験するところであります。人さまはるうへにも、やゝもすれば、單に感情のうへから、あの人はすきである、この人はきらひである、とはじめから決めてしまふのが、わたくしきものつねであります。いやだとおもふ人でも來るこゝ、まだものいはぬさきから、あだかも電氣に感じたまじきのやうに、あ、いやなやつが來たなと思ふ感じが、さまだちます。かやうなしないでありますから、その人の、よいところも、すぐれた點も、自分にまつてためになるものも、すべて「きらひな」こゝいふ感じに、ぬりつぶされてしまつて、人にまぢはるうへにも、自己の人格を陶冶するうへにも、利害のうへにも、はなはだこのまじからぬ結果をまねくことがすくなくありません。かゝる場合にも、あぢはふこゝろもちをもつて、人にむかふまじには、きらひであるとおもはれる點は、いづれにあるかを、かんがへる餘地が生じて、わるい點は、その人にも注意し、自分もいまいめるこゝができるやうになり、きらひなおもはれる點以外の、よいところが、したがつてあきらかになつて、しだいに人にしたしみ、なかよくするこゝもでき、たがひにあひ益しあふこゝもで

きるやうになるものであります。ある科の學問をおさめる場合にも、ある種の業務にたづさはる場合にも、またこれに類することゝがすくなくありません。たゞへば、學校なごにかよつてをる場合に、學校でをしへられる學科が、こゝこゝく自分にすきなものゝみはありません。科目によつては、はじめから、これはきらひな學科である、これは自分の性分にあはぬ科目である、こゝいふやうに、きめてかよつてをるものもすくなくありませんが、試験なごの關係から、よぎなく勉強したこゝが縁になつて、のちには、すきな得意なものになるこゝもありうるのであつて、これまた、あぢはふこゝろもちによるのであります。

二

以上のこゝく、あぢはふこゝろもちは、わたくしきものよわたりのうへに、まことに、大切なやくめをもつてをるのであります。この、あぢはふこゝろもちには、二つの方法があります。すなはちその一つは、そのものを、よくこゝろみる場合であり、他の一つは、ほかのものにくらべて、そのものゝあぢはひを知る場合であります。たとへば、砂糖のあまさを知るにも、ただ口のな

かへいれて、まるのみしたのでは、ほんごうのあちはわかりません。口のなかにいれて、舌のうへで、よくつばきにこかしたのちに、のみこんでこそ、はじめて、そのあまさがわかるのであります。これは砂糖のあまさを知る一つの方法でありますが、さらに、鹽のからさをあぢはひ、唐辛のからさをあぢはひ、すつばいものもなめてみ、にがいものもなめてみ、また、おなじくあまいものでも、くだものあまさをあぢはひ、サツカリンなどのあまさをあぢはつてみるに、さて、砂糖のあまさをいふものは、かようなものであるか、さいふこごが、ほんごうに知れるやうになるものであります。これまたその一つの方法であります。そして、これら二つの方法は、なにもものをあぢはふうへにも、いづれも大切でありまして、決して、はなればなれであつてはなりません。

三

そこで、この、あぢはふさいふこごもちは、わたくしども、信心をさせていたゞくうへにも、またもつとも大切なるこごがらであります。これなくしては信心のありがたさも、信心のわけがらも、ほんごうにわかるものではありません。

信心のうへの、もつとも陥りやすい弊害は、これをもつて、よわたりのうへの一つの道具視する點にあります。道具といふものゝ一つのもちまへは、まにあふまか、用をかゝぬまか、役にたつまいふところにあるのでありまして、信心をよわたりのうへの道具とおもふ人にあつては、信心といふものが、はたしてそんなものであらうとも、單に一時の心配ごみや、びやうきや、さいなんごみなごの、くるしみに對して、一時のまにあへば、それでよろしいと、かんがへる人なのであります。一時のまにあひさへすれば、それ以外に用はないのであります。いる時にいり、いらぬ時にいらぬのが、いはゆる道具であるがごとく、信心も、いる時にはなくてはならぬが、いらぬ時にはむしろ邪魔になるやうに、おもはれるこごのあるのは、いづれも信心をもつて道具視してゐる場合なのであります。かような、かんがへの人にとつては、信心のいかなるものかを、あぢはふさいふこごもおこらず、またその必要もないのであります。この種の信心をする人を、いはゆる迷信といふのであります。なにが眞信であり、なにが迷信であるか、さいふこごについては、世間に、いろくの議論のあるこごであります。その區別は、よりおほく、それを信する人のこごもちらにたちいつて、みなければならぬこごでありまして、たごへ進歩した教養をもつてをる宗教であります。

しても、それを信ずる人のころによつては、あるひは眞信をえてゐる人もありませうし、また妄信に墮してゐる人もありませう。いかなる宗教を信ずる人でありましても、これを道具視する人に、まことの信心のありうる筈はありませぬ。金光大神が、『信心する人の眞の信心なき事』をいましめたまふたのも、おそらくこの點に御神意があらせられたこと、信じます。

ほんとうに、あぢはふころもちのある人、ない人は、をしへをうけたまはるにしても、よほごのちがひがあります。あぢはふころのない人にまつては、たゞへば、一箇條の神訓をき、一節の御理解をうけたまはつても、あのおこしは、自分は知つてゐる、あれは、かようかやうの、わけがらのをしへである、と、ころのみ、をふさいで、のぞんでをりますから、その人にまゐりしては、あたらしい話や、かはつたことのみにと、ろがうつり、いはゆる、うはすべりがして、『神の一言は千兩の金にも代られぬ』眞味をうかがひ得ることが、はなはだ、むつかしいものになつてをります。しんにあぢはふころのあるときには、おなじおこしを、毎日、ましても、その日その日で、かはつたありがたさを、おほえることができ、一言のをしへをうけても、そのなかに無限の意義をくみとることができるのであります。

さらに、あぢはふころのある人、ない人によつては、いはゆる、『おかけ』の意義も、よほごかはつてまゐります。金光大神は『信心する人の眞の神徳を知らぬ事』とおいしましめくだされましたが、あぢはふころのない人にまつての『おかけ』の意義は、おほくは、目にみ、耳にき、えられる、有形上のものであるか、あるひは普通の意味において、おもしろいこと、たのしいこと、うれしいことにかぎられてゐるのであります。それ以外のものは、おほくは、『おかけ』のなかに、はいらぬものになるのであります。『おかけ』のなたるかは、信ずる人のころのあぢはひかたによつて、必ずしも一樣ではありませぬ。病氣も災難もありがたきおかけとして、これをよろこぶことができます。眼にみえぬところ、知りえぬところにありがたさを感じて、『彼もおかけであつた、此もおかけであつた』と云ふ事が了解るやうになる。『これ程信心するのにさうしてかういふ事が出来るであらうか』とおもはれるやうな場合にも、『これは未だ信心が足らぬのぢやと思ひ、一心に信心して行く』と云ふことができるやうになる。これは、あぢはふころもちの人でなくてはできないことでもあります。

安政六年五月のすゑのこゝでありました。教祖のかみの次女（九歳、現藤井恒次郎氏室）が病氣にかゝられたこゝがあります。金光大神は、もこより神さまにおねがひなされてありましたが、病勢はしだいにつのりました。神さまのおしらせには『すてをいて農業にでよ、……うちく』（前々家族病氣の場合）は夜もねず、醫師、法印（祈禱者）、隣家、親類、講中（組合中）まで、しんばいかけ、日夜まぜかへし、それでも死なうが、死んだらまよよおもうて、しんばいせず、農業家業出精いたし、病人のそばにをるな、病人を見をるゝ氣がせてわるい』とありましたので、教祖御夫婦は、爾來、このおこさばさうりになされてをりましたが、廿七日には、早仕舞をしてかへられました。するゝ、母御が、おくさまに『お倉はよくねむつてをるのか、おひるにも、粥も水もいはなかつたが、行つてみなさい』とまをしてをられますので、教祖はこりあへず庭におたちになつたまゝ、神さまにおうかがひなされるゝ、『心配なし』といふこゝでありましたので、教祖は御飯をめしあがつてをられますゝ、病人のそばにまゐられたおくさまは、『お倉やお倉や』とよびかけられましたけれども、返事もなく、からだもつめたくなつてをります。『かゝさん油断でありました。お倉は死んでをります』とさけばれましたので、母御もともに、ふかくなけさかなしんでをられま

したが、教祖は『なにをいふのぢや、今わしは、おうかゞひ申したら、心配ないとおしらせがあつたのに』と申されたけれども、おくさまは『なんの死んだものに心配……』といひかけられるのをさへぎつて『いよく死んでをるか、よくあらためてみよ』と申されますゝに、よくあらためてみられるゝ、かすかに吐くいきがかよつてをり、背にまだあたゝかみがのこつてをりました、『はやく御祈念を』と申されますゝに、食事をさしをいて御祈念をなされ、すでに目をつりあげ、口をくひしばつてをられる病人を、だきおこして、小掛で口をあけて、神酒をうつしこまれたが、よいぐわいにそれがおさまりました。神さまから、『暮六つ時には験をやる、生き祝もおもうて、このかた廣前にてやすめ、かないはそばにをつてやれ』とのこゝであつたので、教祖は食事をすまされたのち、なかざかひの襖をしめきつて、たゞひこり御廣前におやすみになりました。そして、つくくゝこ來しかたをかへりみて、『先前は、をしへてくださる神さまもなかつたのに、今度は、結構におしらせくだされてありがたい。これで病人が死んでもおかけである。いま、では大入費をいれて死なせ、隣家、親類、谷中の御厄介になつたが、此度は入費もつかはさせられないな』と、無限の歡喜にみちておいでになりましたが、『もういけませぬ、今のうちに死土産に今一度おねがひなされてくだされ』と

いふおくさまのおこゑがいたしますので、教祖が御祈念なされるに、神さまから『祈念しても、せいでも一つこゝし、しやうごおもへばせよ、しないよりはよからう』このおこゝばがあり、さらに、『暮れ六つまでは、まだ間がある、ほごなく験をやる、一口ないても験、ものいうても験ぞ』といふおしらせがありました。教祖は、また横におなりになつて、『信心をしてゐても、さうもならぬものぢや、また、あすこには、子が死んだ三人にはれるのが残念な、しかしいたしかたもない、世にもあるこぢや。神さまの仰せさうりにいたし、病中も入費いれず、ありがたい、葬式は夜の間「ださう」なき物案じをしてをられますに、たちまち『おかあさん、小便がでる』といふ聲がきこえますので、教祖はおさういて、でてごらんになるに、おくさまは戸外のりかたづけものをしてをられました、病人が奥の間から入口のこころまで出て、夢中で跪まつてをられました。そこへ飛んでこられたおくさまに『それ見よ験をくださったな、ありがたいこぢや』と共によろこばれて、病人をつれもさつて、ねかしつけられました、神さまに御禮を申しあげられました、やがて七つ、半時になるに、病人はまた小便を申して入口まで出てこられてしたゝかに通じがありました。これがおかけのうけはじめになつて、つゞいて天然痘にもかゝられましたけれども、それもかろくす

み、まもなく全快せられました。

以上は、金光大神御一代の御信心の、たゞ一事實にすぎないのでありますが、この事實の前後にわたつての、その御心事を拜しまするに、金光大神が、いかに信心の眞實眞味を、あぢは、せられてあつたかを、うかゞひまつるにこのできる、まことにありがたきおはなしでありませぬか。

五

鹽もなめ、酢もこゝろみてこそ、砂糖のあまさは、ほんこゝろに知れるように、信心のあぢはひも、またいろいろの境遇をへてこそ、いよくそのたふさを、ささるこゝろができるのであります。

人の一生に、うれしいこぢや、かなしいこぢや、たのしいこぢや、くるしいこぢやがあるのは、何人といへどもまぬがれるこぢはできません。これはこれ「人間」といふものゝ、もつてうまれてきた約束ごこでありまして、いかんにもするこぢはできません。「人間」のくるしさも、また「人間」のいきがひも、みなそのなかに宿つてをるのであります。

こしをへて浮世の橋をみかへればさてもあやふくわたりぬるかな

こは、たれの歌かは知りませぬけれども、年をいて、今や世をはらうとするもの、うきふし繁かりしおのが一生を、いまさらのごとくにふりかへつての心情を、しみぐさあぢはよせられる、おもしろい歌であります。

ある時は、やまひのために、くるしめられることもありませう。ある時は、貧苦のきんどきに、うめくこともありませう。ある時は、子にさきたれ、妻にわかれることもありませう。ある時は事業のつまづきにあふこともありませう。またある時は、他にの、しられ、ふみにぢられることもありませう。しかしながら、その時その時に、一つ／＼信心のあぢはひを、ほんとうに、あぢは、せていたゞいて、さておのが最後の時のせまつてきた時に、彼の胸中には、はたして何物があるでありません、嗚呼、あの時に自分に信心がなかつたならば、今はさうなつてをるであらう。この時に自分に神さまを念ずる心がなかつたならば、今はさうなつてをるであらう。よくも自分は、いままゝで信心をさせていたゞいてをつたことである。よくも自分はいま、でいきられたことである。おほつかなくも、神の御綱をつかまへ、神の御手にすがつてをつたればこそ、今日の自分があつたのである、ご歡天喜地の大安樂をえて、こゝろのさかに神さまのみもごに、かへらせていたゞくこと

ができるでありませう。

金光大神、御歸幽にさきたつこと二十日、明治十六年九月廿六日、をりから參拜なされてあつた西六の高橋富枝先生に、「自分のやうなものによくも神さまが、これだけの道を、ひらかせてくだされたか、ごおもふに、ありがたくて、ありがたくて、なくまいごおもうても、なみだがごほれる」にて、御袖をうるほはせた、まうたごおごはは、これをいかに解しまつるべきでありませう。御一代のあひだ、恩愛別離のくるしみをなめさせ給うたご幾度であつたか、一度は御身、おもし病にかゝらせられて、火のきわたごとき暗愁に、御一家が、ござされたごもおありなされました。よしなき人のたくみによつて、胸をさき臆をえぐるがごごきおもひをなされたごも、幾度であらせられたでありませう。しかも、たてそめたまうた大信念の柱は、いさゝかもゆるぐごごなくして、やすらかに現世をかむざりたまふ、出世の本懐、信心の勝利、人生の歡喜、萬感ごも／＼せまつての御一語が、即ちこのおごははでありませぬか。「此方がおかけの受け初めである、皆もその通りにおかけが受けられるぞ」ごおほせくだされます。さうか、わたくしごも、金光大神の御手に、ひきつられながら、この一生の信心を成就させていたゞいて、眞實の信心のあぢはひを、あぢは、せていたゞきたいごであります。

(大正八年三月)

頼むころろ

一心に頼め

金光大神は、私ごもに『一心に頼め』と仰せ下されます。即ち、神さまは私ごもの願ひを聞きこけて、救ひ助けて下される、との金光大神のおこしばを、そのまゝに信じて、ごうぞお助け下され、ご一心におたのみ申すのが、我が道の信心の大切なるわけがらであります。そこで、かく『一心に頼む』といふことが、我が道の信心であります。私ごもは、如何いふことを頼みするのか、お頼みする神さまは如何いふお方さまであるか、お頼する心は、如何いふやうにあるべきか、といふやうな問題が、私ごもの前に現れて参ります。

何を頼むのか

如何いふことを頼むのか、といふに對して、みなさまの中には、今日まで信心させて戴いて、實

際にいろいろの日常のできごとについて、神さまにお頼み申しまた、實際に、それくみかけを受けて居るのであるから、今更さることについて考へるの要はないではないか、といふお方があるかも知れませぬ。もごより、金光大神は『答のころんだごごでも、お願ひせよご』御理解下されて、これは神さまにお頼みしてよいであらうか、あれは神さまにお頼みしてはわるいであらうか、かやうなごごまで御心配をかけては、あひすまぬ、自分ごものやうなものが、お願ひするのは餘りに恐れ多い、といふやうに、心に思ひ煩ふのは、神さまに對する私ごもの隔て心でありまして、『信頼心に隔なく祈れ』ごもある如く、何事も神さまに打ちあけて頼む心になるごごが大切であります。臆の上から答のころんだごごぐらゐは、何でもないごごのやうに考へられますが、それを何でもないごご、考へるのは私ごもの淺はかな考へであります。答のころんだのは何でもないごご、生命にかゝるやうな大病に罹つたのは大變なできごと、といふやうに、自分の淺はかな心で考へる所から、私ごもには、おこたり心や油断の心や、また、うろたへ心、騒ぎ驚く心も生じて來、また何かのごごについて、おろそかに、ごんざいに取扱ふやうなごごができて來るのであります。金光大神さまの意實叮嚀にして、神さまに隔て心のあらせられぬ御心からは、生命にかゝるやうな事件も、

膳から箸のころんだやうな事件も、さもに手厚い御心を以て、しづかに神さまの、おくりあはせをお祈り遊ばされたのであります。これは神さまに隔てなく頼む心からは、生命にかゝはるやうな事件も驚かず、箸のころんだやうな事件にも油断せず、何ごも小供が親に物申すやうなうぶな心になつてお縋り申すごことが大切であります。

しかしながら、こゝに私ごもの心せねばならぬごことは、私ごもは、さかくに、眼前のごこには心を奪れ易いのであります。遠く深い所に心をいたすごことができないのが常であります。病ひあれば病ひの癒えんごことを祈り、災難あれば災難をまぬがれんごことを祈り、悩み苦しみあれば、悩み苦しみのおさまらんごことを祈るが、それらの由つてきたる所をたづねて、それをのぞいて貰ふごこには心を注がず、眼前のごこは心配するが、將來のごこには心配するごことがない。従つて、金光四神さまも、この點をお誡めくだされて、『めさき、めさきのおかけでは、末の安心ができぬぞ』と仰せられ、金光大神も『病人や、代々難儀の續く人が、神のおかけを受けるのは、井戸替をするに、八九分替へて、退屈して止めれば掃除は出来ぬ、それで矢張り水は濁つて居るやうなもので、信心も途中で止めれば病氣、災難の根は切れぬ。井戸は清水になる迄、病氣、災難は根の切れる迄、一心

に、壯健で繁昌するやう、元氣な心で信心せよ』とお誡め下されました。

たゞ、眼前のごこのみを心に奪はれ、眼前のごこのみ都合よく行けば、うまく行けば、如何にかなつて行けば、さいふやうに考へて居るのは、あだかも庭の草をさるのに、地面に現れて居る葉や莖を刈りこつただけで、草をさりつくした、と思つて居るのとおなじごこであつて、たゞそれだけでは、あごから、あごから芽がふいて出て、殆んど盡きる時がない。草をさるには、地の底にかくれて見えぬ所にある根から堀りをして捨てねばならぬと同じやうに、その場その場の苦しみは逃れても、たゞ一時の場塞ぎや、一時逃れのごこだけでは、恰も庭の草をさるごこいうて、葉や莖だけを刈りこつてすまして居るのと同じく、いつまでたつても、同じごこを繰り返すに過ぎないで、一生を盡して、さらに極まる所はありませぬ。『病氣、災難は根の切れる迄』とある如く、私ごもの身の一切の苦しみの由つて起る所のもを尋ねて、それを取り除いて戴かねばなりません。

唯一の理由

信心さいふごことが、たゞその場その場のおかけを受けるだけのためのものである、さしまするな

らば、私わたくしもは、強しひて、生い神がみ金こん光くわう大たい神じんさまのお取り次つぎを頼たのむの要要もないほほぎのここではありま
すまいか。世よの中なかには、神かみさま名なのつき、佛ほとけさまと名なのつくお方かたは決けつして少すくくありません。しか
も、それら、神かみ佛ほとけを信しんずる人ひとが、昔むかしから今いま日に至いたるまで、絶たえない、といふここは、それら神かみ
さまや佛ほとけさまに祈いのれば、なにがしかの利益りやくがあるといふここを、信しんじて居ゐるからのここでありまして、
また、實じつ際さいにならかの利益りやくがあるといふここは、私わたくしも、亦また信しんずるのでありまして、無む下に斥しりぞけ
るべきではありません。それ故ゆに、もし信しん心しんといふここが、たゞ日じつ常じょうの痛いたいここや痒かゆいここだけを
直ただすのみのことならば、それら、世よ間の多おほくの神かみさまや、佛ほとけさまに祈いのつて、その利益りやくをうけたなら
ば足たりるここであつて、わざわざ生い神がみ金こん光くわう大たい神じんさま、天てん地ち金こん乃の神かみさままと申まをして、お願ねがひをするまで
もないほほぎのここではありますまいか、我わがが道みちの信しん心しんする人ひとのなかには、我わがが道みちの神かみさまに祈いのるの
は、ほかの、神かみさまや、佛ほとけさまよりも多おほくのおかけを受けるここが出来できる、大おほきなおかけを受ける
ここが出来できる、それゆへ我わがが道みちの信しん心しんするのである、といふ人ひともなかなか少すくくないやうでありま
すが、これはももより間ま違ちがつて居ゐるここはいへぬにしても、かゝる考かんがへのなかには、かれかれここを
比くらべて、あれよりもこれの方が餘よ計けいに難ありない、あれよりもこれの方が、餘よ計けいにおかけが受うけられる、

ここといふやうに比くらべて居ゐる人ひとでありますから、今いま日まで金こん光くわう大たい神じんさまが難ありないと思おもうて居ゐても、
明日あしたこの神かみさまよりも、更さらに難ありないと思おもはれる、神かみさまや佛ほとけさまがあると思おもはれるここ、さる人ひとは直ただ
にその方かたへ心こころの移うつつて行いく人ひとなのでありまして、比くらべて得えた所ところのものは、はじめよりこれに限かぎ
る、これより外ほかに求もとむべきものはない、ここいふたしかな理わけ由ゆを見出みだすここは出来できませぬ。恰あたも親おや子こ
の間あひだが、ある人ひとここの人ひとここ、比くらべて親おやになつて貰もらつて居ゐるのでなく、また子ここして居ゐるのでは
ありませぬ。比くらべて得えた所ところの人ひとは、真まこと實じつの親おやでなく、また真まこと實じつの子こではありませぬ。世よの中なかに、
多おほくの難ありない神かみさまや佛ほとけさまの、おはしますその中なかに、私わたくしもが、生い神がみ金こん光くわう大たい神じんさままと申まをして、お
頼たのみするについては、必かならずや、この神かみさまでなくてはならぬといふ唯一ただひとの理わけ由ゆがなくては、真まこと實じつの
信しん心しんといふここはできず、またその唯一ただひとの理わけ由ゆを見出みだすここができなくては、真まこと實じつの信しん心しん者しやといふ
ここはできませぬ。

苦 みの 根

そもそも、私わたくしも身みの上うへに迫せまつて來きる、一さい切きつの苦くるしみの本もとここなり、根ねこなる所ところのものは何なんである

か、金光大神は、これに對して「前々のめぐり合せで難を受け居る」に御教へ下されました。即ち神傳に「天地金乃神に申す事は、天地の間に氏子居つておかけを知らず、神佛の宮寺氏子の家宅、皆神の地所、其理知らず、方角日柄ばかり見て無禮致し、前々の巡り合せで難を受け居る」にがあるのがこれであります。「信心して神の大恩を知れば、無事健康で、子孫も續き、身代も出来、一年勝り代勝りのおかけを受ける事が出来るぞ」にがあるおこまにも現れて居るやうに、私どもは、祖先以來、天地の恵に浴して、この世に生れ、この世にいき行くことが出来て居るにか、はらず、かうして居ることが、あたりまへであるかに考へて、その御恵のありがたいことも知らず、その恵に報いまつり、天地の親神さまの御心に副ひまつることが、出来ないのみでなく、むしろその御心に反き、その御恵にうらぎることを働きつ、重き罪過をかさね、深きめぐりを積んで来たのでありまして、これがために私どもは現在の如く、強い我情に驅られ、強い我慾に囚はれて、知つて犯す罪もあり、知らず知らず他に氣の毒なことを仕むけ、悪いこと知りつ、如何にもすることが出来ず、善いこと知りつ、善いことが出来ず、善いこと思つてしたことが、そのまゝに悪いことになり、他をいつわつたことになるといふやうなぐあいには、心の自由を失うて、いやが上にめぐりを積み、

罪をかさねつ、いろいろの苦しみ悲しみに充ちた、よわたりをしなければならぬ淺ましい身の上になつて居るのでありまして、これに神の大恩を知らぬ所から出て來つためぐりに由るのであります。

若し、今日のまゝにして過ぎたならば、私どもは遠からずして、我が身を亡ほし、我が子孫をやし、我が家をたやしてしまふやうな、おそれるべき悲むべき運命におちいらねばなりません。これ、天地の御恵にそむき、神の御心にそむきつ、ある私どもの、當然の結果といはねばなりません。しかしながら、これは私どもの忍ぶことのできない悲しみであります。しかも、この已れを救ふの道は、金力で得ること出来ず、地位や學問の力で得ること出来ませぬ。また、世の中の多くの神さまや佛さまの御力にも及ばぬことでもあります。死したる後、極樂へつれて行つてやらうといつて下さるお方はあります、天國へ入らせてやらうといふて下さるお方はあります、また一時の病氣や災難を助けてやらうといつて下さるお方はあります。けれども、前々の重いめぐりの綱を断ち切つて、「先の世までも持つて行かれ、子孫までも残る神徳」を蒙つて、我が靈魂も神に借なる永き生命を得、子孫も榮え、家も立ち行くやうには、我が生神金光大神さま、天地金乃神さまより外におはし

まさぬのであります。

神と氏子

しかも、我が天地の親神さまは、『氏子ありての神、神ありての氏子』『神も助かり氏子も立ち行き』とある如く、神さまも、私どももは決して別ものではありませぬ。親があつての子であり、子があつての親である。親の喜びは子の喜びであり、子の悲みは親の悲みに外ならぬ、我が子が立ち行かぬ、こいふこいは親の道の立ち行かぬことでもあります。『子供の中に屑の子があれば、それが可愛いのが親の心ちや』、たゞへ身を粉にくだいても、我が子を苦しみの中から助けねば、その身は死んでも死にきれぬ、とお嘆き下さるのが、眞實の親でありまして、その身の不心得、不始末から、あのやうに苦むので、これも自業自得ぢやと空嘯ぶいて居るやうな親が、若しあつたならば、それは眞實の親ではなくして、他人であるこいはねばなりません。『氏子ありての神、神ありての氏子』『神も助かり氏子も立ち行き』とは、眞實の親さまでなくては仰せられ得ぬありがたきお言葉であります。氏子の苦しみを見て居るに堪へられぬ。氏子の亡びることは、そのまゝ、神の道の滅亡であります。

り、天地の破滅である。なんぞかして助けてやらすには居られぬと思召される親心の現れが、このお言葉であります。さればこそ、『今般、生神金光大神を差向け、願ふ氏子におかけを授け、理解申して聞かせ、末々迄繁昌致す事。氏子ありての神、神ありての氏子、上下立つやうに致す』にて、我が生神金光大神を、私どもの上におつかはし下されて、『神も助かり氏子も立ち行く』道をお聞き下されたのであります。

神の悲願

めさき、めさきのこより外に、末々のこまで考へる餘裕がないこいふ人、我が身のめぐりのおそろべきことを知らぬこいふ人、我が家の亡びゆくさまを悲まぬこいふ人は、致し方もありません。少くとも、私ども、金光大神の御教を聞かせて戴いて、我が身の上のおそろべきこと、我が行末の悲むべきことを知らせていたゞいたものは、神の御教を聞くにつけても、しみじみ、我が身、我が家の行末の、如何になり行くかを考へさせていたゞいて、いよく、如何するこども出来ぬ、こいふこいを悟らせていたゞいたならば、金光大神より外に助けていたゞくお方はないこ、一心を

定めて、ひたすらにおすがり申して、その御誓ひのまゝに救ひ助けていたゞかねばなりません。私どもの進むべき道は、たゞ一筋より外にありません。たゞへつらくとも、苦しくとも、是非この道の進ませたいといひて、末々まで立ち行くやうにして貫はねばなりません。『一心に頼め』とは、この心を御催し下さる神さまの悲願であります。

打込んでの信心

かく『一心に頼め』と仰せ下されてあるからして、金光大神が、かやうに仰せられたから、自分も、然う思はなくしてはなるまいか、と思ふのは眞實ではありません。金光大神は『人に誘はれて仕事なしの信心は附焼及の信心ぢや』とお説め下されたが、かく思ふ人は、これは金光大神に誘はれての、附焼及の信心であつて、『其身から打込んでの眞の信心』といふわけにはまゐりませぬ。金光大神のお言葉を縁とし、便ししてわが心の奥底から、眞實に、神さまに引き上げていたゞかなくては、堪へられぬといふ一念をふるひ起すことが、何よりも肝要なことであります。私どものこの世における一大事は、正にかゝつて此の一事に存するのであります。この一大事の頼みごことが成

就いたしましてこそ、そこに神の道も立ち、金光大神のお誓ひも全うせられ、家も榮え、國も榮え、天地も永久に榮えゆくのであります。

善のころんだことも忽せに思はず、何事も隔てなく神さまにお頼み申して、その日その日の身邊をさせていたゞくと共に、それらすべての苦しみの根を断ち切つていたゞいて、かく身も家も國も天地もともに立ち榮え行くべき大願を實にさせていたゞくことを第一の祈りとして、日々一心に元氣な心で信心させていたゞかねばなりません。

(大正七年七月)

信心の生活

110

信心と生活

金光大神は、我が道の信心の要諦を示して『信心する人は、何事にも真心になれよ』と教へられました。これは信心の道にいへば、單に神佛を禮拜することであり、お社やお堂に參拜することであつて、日常の生活の上の萬事は、これ、信心以外のことであるかに考へる、世俗の誤謬を匡正して、信心の生活に、二にして一、一にして二なる所以の道を教へ示された、重要な神訓であります。信心の生活を、別物と考へる所から、あのやうに熱心に信心して居る人が、如何して、あのやうな間違つたことをするであらうか、さういふやうに怪まれる人が、往々にして世の中にあるものであります。我が道の信心する人にも、これに類する人が、決してないとは限りませぬが、これは皆、信心は信心、家業は家業、教會は教會、我が家は我が家、さういふやうに兩者を別物に考へる所からの過りであります。固より金光大神も『何程、人に惡事をせぬ正直者でも、人が善いのみ、神

に信心して、おかけを受けるのことは別物ぞ』と御理解下されて、所謂『善人』所謂『善行』と信心のことは、その根本義を異にして居る由をお示し下されました如く、一つの守る所なく、一つの信する所なく、一つの執る所なくして、その場その場を取繕うての生活は、信仰的生活は、全然別の意義を有つて居ることを知らねばなりません。神に一心にお籠り申して居れば、日夜の生活は、兎にもあれ角にもあれ、如何いふ風であつても宜い、さういふのではなく、萬事萬行が、信心から流れ出て自ら誠に、萬事萬行を信心化して、親切な人ともなり、丁寧な人ともなり、偽りなき人ともならねばならぬのであります。この一つの點が、お互に信心させて戴くものによつて、重要な點でもあり、また、最も難しきせられる點でもあります。

信心と料理

私どもの生活を、信心化して行かうとする心持ちは、さながら、婦人のお方が、お料理をなさる時の心持ちに似て居ると思ひます。即ち、お料理をなさる時の心持ちは、今、俎の上に載つて居る大根ならば大根を、鯛ならば鯛を、如何にして、美味しく食べるやうにしやうか、さういふ一點に集つて

居ります。そして、その時の心の向け方、庖丁の執り方、味のつけ方如何によりまして、同じ大根、同じ鯛、同じ醤油、同じ煎汁、同じ砂糖を用ひましても、或は美味く、或は不味くなるのであつて、同じ材料を以つて、あのやうな結構なものを、こんなに美味しく食べられるのか、驚かれるやうにもなるし、また、あのやうな結構なものを、こんなに咽喉も通らぬやうにして、了つた罵られるやうにもなります。奥へられた材料を、如何に取扱ふべきか、といふことは、お料理をする人の、深く心せねばならぬことでもあります。

お互ひに信心させて戴くものゝ生活の上の心持ちも、これと同じことでありまして、日夜に遭遇ふ事柄や、交際ふ人に對して、これを信心し、いふ料理法によつて、如何に取扱ふべきか、いふことに、常に心を注がねばなりません。

世の中に二つなし

私どもの生活の上には、或は嬉しいことあれば、悲しいこともあり、楽しいことあれば、苦しいこともあり、幸福と思ふことあれば、不幸と思ふこともあり、壯健な時あれば、病氣の時

もあり、暑い時あれば寒い時もあり、貧乏な時あれば、金持ちの時もある。また、善いと思ふ人に出會ふことあれば、悪いと思ふ人に出會ふこともあり、善い事をいふ人もあれば、悪いことをいふ人もあり、好きと思はれる人もあれば、嫌だと思はれる人もあります。種々の事に出會ひ、様々の人に出會ふのが、此の世の常の様でありまして、これは信心するものも、信心せぬものも、大した相違はありません。

世には往々にして、信心するものは、少しも悪いことや、苦しいことや、不幸なことに會はぬ、よいことや、楽しいことや、幸福なことばかりが、自然に赴いて来るものであるか、に思ひ違ひをする人があるやうであります。従つて、信心すれば、如何なよいことが在るのでありますか、なきいふ奇問に會ふことありますが、如何に信心すれば、別な天地に住むのではなく、別な社會に在るのでもありません。轉變限りなき自然界に住み、複雑極りなき社會に伍して居る以上は、決して、うまいことのみ出来て来るものではありません。否、寧ろ信心するものゝ心には、世人の味ひ得ぬ、幾多の苦みが在る、と申すのが本當であります。古人の歌に『相ひ見ての後の心に比ぶれば、昔はものを思はざりけり』とあります。この歌は戀の苦しさを歌つたものであつて、戀しいへば、

他人は楽しいもの、甘いもののみ思ふのでありますが、眞實に戀する人の心は、他の窺ひ知るこゝの出来ぬ苦しさ、遺溺なさがある。戀によつて、世の苦しさを知り始めた、さいふが如く、私ごもは、信心によつて、これまでに何ごも思はなかつたこと、それほごに思はなかつたこと、次第に深く、次第に強く感するやうになる、そこに私ごもの信心は、一段一段に深められ、強められて行くのでありますが、要する所、信心する吾人も、この自然界に住み、この社會に住む以上、日夜に幾多の事に出會ひ、幾多の人に出會ふのでありまして、出會ふその事その人は、私ごもに與へられたる信心の材料でありまして、恰もお料理する方の俎の上に、大根が載り鯛が載つたのと同じことでもあります。私ごもは、その與へられた材料の上に、如何に神の教を活用せて、我が信心を成就すべきかを思はねばなりません。

與へられたる苦み

例へば、或る病氣に罹りまして、病氣の苦しさは信心する人もせぬ人も、皆同じやうに之を感じるのでありまして、信心する人は、それを少しく感じ、信心せぬ人は多く感するさいふことはあ

りませぬ。たゞ、信心さいふことを、知らぬ人に取つては、病ひの苦みが動もすれば、悲みの種になり、愚痴の種になり、世を果敢なむ種になり、そして將來の一層の不幸の本ごもなり易いのに、神の御教を受けて居るものは、『やれ痛やさいふ心で、難有、今靈驗をさいふ心になれよ』とある如く、或る人は、同じ病苦を以て、自分の從來の不養生、不身持に對して、與へられたる懲戒に信じて、これによつて、將來を神が償ませて下さるのである、難有いこと、甘んじてその苦みに當るでありませう。また或る人は、自分の從來の深き罪、重きめぐりを、これによつて神がお取拂ひ下される、この苦みを通り過せば、一段難有き境に進み得られる、信心して、その苦みに打突つて行くでありませう。また或る人は、大難を小難に、おまつりかへ下されるのであると信じて、感謝するでありませう。また或る人は、眞實に他人の苦難に同情するこゝの出来得なかつた自分をして、他に對して眞實に同情慈愛の念を有たしめやう、廣い深い深い悲情を抱いて、生活させやうこの神の御心に出たるものごも信するでありませう。また或人は、『痛いのが治つたので難有いのではない、何時も壯健なが難有い』とある如く、その『何時も壯健なが難有い』ことを、眞實に知り得なかつた自分をして、しみくそれを味はしてやりたい、この深き神の御心に出たるものごも信する

でありませう。片岡次郎四郎帥、或る時の金光大神御廣前参拜の途中、非常な腹痛に罹られたが、如何せん未だ人力車の便もなく、立ち寄つて休まれる處もない、殆ん死に苦しむ苦みをなされつゝ、且つ這ひ且つ仆れて、漸くのこゝで靈地に辿り着かれたが、その砌りに、賜りたる御理解に『神信心をして、御告を得て参詣して居るのに、此の腹痛は何事ぞ、と思ふやうにやらうけれども、吾が内に居て、此れ程痛かつたら、家内中心配するけれども、旅で痛いのは、其の身一人の難儀で濟まうが、これも神信心の御蔭ぞ。明日は常平生の通り、歩いて下向の出来るやうに御蔭を授けてやるぞ』とありました。病氣の苦みを、斯様にも信じて喜ぶこゝも出来ず。如何に之を信受し、如何に之に信順するかといふこゝは、私どもの、神の御教の受取り方如何により、また身の時處位によつて異なるに致しまして、與へられたる病ひの苦みが、自分に取つての、信心修行となるこゝは一でありませう。以上は、單に病ひの苦みといふこゝだけに就いてのお話であります。何事も皆その通りに、與へられたる事柄は一でありませう、その受け方、その取り方、その心の向け方によつては、將來の、我が眞實の幸福も、また不幸もなるのでありまして、料理の上手と下手によつて、同じものが、美味も不味もなるのこゝ、同様であります。

生活の信心化

かゝる信心の生活に於ては、如何なる事柄も、如何なる人も、決して擇み好み、好き嫌ひをするの要はありません。一切の事人とは、みな我が信心修行の對象となるのでありまして、凡べてが自分にためになるもの、みになるのであります。世の中の事人によつて、擇み好み、好き嫌ひを云うて居つたならば、私どもの世界は狭く狭くなつて、果ては我が身の置き處もないこゝになりませう。一寸考へて見ても、病ひの苦みは厭であるとして、或る程度まで之を避け得るにしても、一生を通じて之を避けるこゝが出来るか、若し出来なければ、私どもはそれを如何するか。暑いのは嫌ひである、寒いのは嫌ひであるとして、果して眞實にそれを避けるこゝが出来るか、否でも應でもそれに對面せねばならぬ。それをしも避けやうとすれば、私どもは自殺するより外はない。一家のこゝに於ても、好きな人もあれば、嫌ひなものもある。嫌ひなものは如何するか、對手を出さるか、自分が家出するか、何れかでなくてはならぬ。一家は直ちに破滅してしまふ、一家のこゝは、それでもかまわぬとして、他人は如何するか。世の中は厭な奴ばかりだ、といふこゝになつたならば、

對手を外へやることは出来ない、是非とも自分が世の中を避けるか、自殺するかの他に道はないではありませんか。此の如きは、私どもの執るべき道ではありませんか。

以上の如くにして、私どもの信仰の生活は、神の御教を本として、有ゆる事、有ゆる人にも、順應して行くの道であります。苦しいことにも、楽しいことにも、嬉しいことにも、悲しいことにも、好きな人にも、嫌ひな人にも、善いことを云つて呉れる人にも、悪いことをいふ人にも、暑い時にも、寒い時にも、富貴にも、貧窮にも、有ゆる事、有ゆる人にも、順應して行くことは、即ち有ゆる事、人々を、自分いふものに、醇化し抱擁して行くの道でありまして、凡ての世界は、みな私どものなるのであります。そこに私どもの新しき天地が開けて来、新しき社會が開けて参る筈であります。金光大神が『今、天地の開ける音を聞いて、眼をさませ』と獅子吼された境地が開けて参る筈であります。

新しき天地

有ゆる事、有ゆる人々に順應する生活に於ては、これはおかけであつて、あれはおかけでない、

こいふやうな境はなくつて、凡てのことが、私どもに取つては、悉く難有いおかけになるのであります。

私どもは、動もすれば、對うの事柄そのものゝ上に、これはおかけであり、あれはおかけでないといふ區別を立て易いのであります。従つて、金光大神も『これ程信心するのには、さうしてかういふ事が出来るであらうか、と思へば、信心はもう止つて居る』とお諭め下さるやうに、信心を呪ひ、神を怨み、自分を啣つやうなことになるのであります。これはおかけである、あれはおかけでない、こいふのは、自分の頑な愚な浅い狭い考へで、對象のものを區別して居るのであります。それ故、今日おかけや喜んだことが、明日はもうおかけでなくなつて悔みになつて残つて居ることが多いのであります。有ゆることに順應して、それを難有い方へ、善い方へみらせて貰ふものに取つては、悉くが難有いおかけになるのであります。『おかけは我心にあり』とは、この活機を教へ示し給うたお言葉であつて、對うからおかけになつて来るのではなく、自分からおかけにするのであります。有ゆる事、有ゆる人々が、皆我が心におかけとなつて現れ来る信心の生活は實に貴く森嚴に自由に難有いではありませんか。

我が道に於ては別段の修行はないと教へられます。若し修行といふことが、水を浴びたり、火を渡つたり、断食をしたりといふやうに、人間離れをした藝當をするの意味であれば、固より、する修行の法はありませぬ。若し修行といふことが、人間の有りの儘なる生活を、眞實にする所以の謂でありまするならば、私どもの日夜の萬事萬行はいふまでもなく悉く信心修行なるべきであります。我が金光大神は、この修行を、日夜を徹し、一生を通じて行ぜられたのであります。決して人間離れをした、藝當をして生神ならせ給うたものではありません。さればこそ「此方がおかけの受け初めである、皆もその通りにおかけが受けられるぞ」と私どもを奨め勵まし給ふのであります。私どもは、日夜に出會ふ、有ゆる事、有ゆる人によつて我が信心修行を一步一步に成就させて戴いてこの身の儘、難有い生活をさせて戴きたい。「何事にも眞心になれよ」とは、この生活を私どもに求め給ふ神の御聲であります。

(大正七年六月)

あひよ、かけよ

氏子ありての神

安政六年十月二十一日の立教の神宣の末節に「氏子ありての神、神ありての氏子」と仰せられたお言葉は、神と氏子との間柄を、最も直截に、最も簡明に示され、同時に、神が、如何に私どもを深く信頼せさせ給ひ、如何に厚く期待せさせ給ふか、いふ畏き神意の程を窺ひ奉るここの出来る、限りなく有難きお言葉であります。

或る時、藤守先生が、金光大神の大廣前に参向せられました際に、「此方金光大神あつて、天地金乃神のおかけを受けられるやうになつた。此方金光大神あつて、神は世に出たのである。神からも氏子からも、兩方からの恩人は、此方金光大神である。金光大神の言ふ事に背かぬやう、よく守つて信心せよ」との御神傳が、天地金乃神によつて下つたといふことではありますが、金光大神は、神前から、御机の前に退かれて後、藤守先生に對して、「神様は、あ、仰せられるけれも、私は百姓で、

何もわからぬ、天地金乃神云うて、神様の御袖に縋りなされ」云仰せられた。その時、恰もある氏子が、何かの心願があつて、御取次ぎを願つたので、金光大神は再び神前に進まれるに、更に「近藤さん、金光大神は、あゝいふが、金光大神に縋つて居れば、らくぢや。まさかの折には、天地金乃神云ふには及ばぬ、金光大神助けて呉れ、云へばすぐに御蔭を授けてやる」この神傳が續いて下つたといふことですが、この神様のお言葉に、金光大神のお言葉を、相對照して見るときは、「氏子ありての神、神ありての氏子」のお言葉が、神と金光大神との御間に、如何にも美しく尊く現はれて、神の道も金光大神の道も、この間に自から確立して居るのを知ることが出来るのであります。神様が、「氏子ありての神」に、私をも深く信頼し給ひ、厚く期待し給ふこの御神意は、則がて、私どもが、この世に處して行く上の根本の精神であるべきであつて、これによつて私どもは、我執のない眞實の道を辿ることが出来、それによつて亦、家庭の平和も、社會國家の幸福も、自ら得ることが出来るのであります。

家庭の平和

私どもの一家は、親子、夫婦、兄弟、その他主人と召使ひ、といふやうな色々な關係によつて成立つて居るのであります。即ち、親に對しては子であり、子に對しては親であり、夫に對しては妻であり、妻に對しては夫であり、兄に對しては弟であり、弟に對しては兄であり、主人に對しては召使ひであり、召使ひに對しては主人であります。これ等の關係に於て、「氏子ありての神」に、あります如く、親は子に對し、夫は妻に對し、兄は弟に對し、主人は召使ひに對して、「お前が居つて呉れるので始めて、自分も斯うして居ることが出来るのである」に、己れを空うして、他に頼り、他を待ち、子にしても親に對し、妻にしても夫に對し、弟にしても兄に對し、召使ひにしても主人に對して、「あなた様のお蔭によつて、私も斯うして居ることが出来るのであります」に、己れを空うして日上の人に頼り縋つて行く心になつたならば、私どもの一家は、如何に睦まじく、如何に平和に、如何に楽しく日々を送ることが出来るでありませうか。私共のはこれが動もすれば反對になりまして、親は親の威光を亂用して我が子を損ふやうなことが出来、子としては、自分の働きで、親を養つてやつて居るのであるといふやうな間違つた考へになり、夫は「亭主關白の位」なご申して、我が妻をあるかなきかに取扱ひ、體よき子守か女中位に考へ易く、妻も夫を蔑如にするやうな

間違つた考へになり、兄は弟を侮り、弟は兄を凌ぐやうなことが出来、主人は召使ひを、犬猫の如くに追ひ使ひ、召使ひは主人を敵の如くに思ふやうなことが出来て、日夜面白くない思ひをして生活さねばならぬことになり易いのであります。

姑ご嫁ごは、昔から仲が悪いの定つて居る如くに考へられ、家庭不和の唯一の原因の如くなつて居りますが、これは甚だ遺憾なことであります。かゝる關係から、今日では、親子別居して、別々に家を構へるやうな傾向にもなり、また如何なる所に調和點を見出すべきか、いふやうなことに對して頭を悩ます人も少くないやうであります。いづぞや、或る家庭雜誌に、家庭問題の一として、親子は別居すべきか否か、いふやうな課題を設けて、識者の意見を徴したことがありました。これに對する多くの人の意見は、或は同居を主張し、或は別居を主張して、それぞれ意義ある理由を附してありましたが、その中で、私の如何にも穩健な説であると思ひました一つは、『親子しては別居することを主張し、親子しては同居を主張するやうにしたい』といふ意見でありました。これは如何にも立派な考へであつて、親子が互にこの考へで、各自の道を盡して行けば、或は同居しても、或は別居しても、何れにしても、平和圓滿な家庭を實現することが出来るであらうと思つたこと

であります。

更に「兄弟は他人の始まり」なき申して兄弟の争ひが、これまた家庭不和合の原因の一つであります。これが、これまでも、兄は弟に譲り、弟は兄を推すやうにする所に、何等の争ひも生ずるものではないと思ふ。

國民としての道

國民として、君に仕へ國に盡すべき道も、亦斯くの如く、君あり國ありて、私ごも國民として、今日の幸福を享けることが出来るのである、この心得を以て、己れを空うして、君ご國ごの御爲に盡し奉る所がなくてはなりません。

『民本主義』といふ語が、今日に荐りに人の口の上るやうであります。これは、我が國に取つて、歐洲の戦亂が生んだ影響の最も大なる一でありませう。政治上の道理を研究する學問上の議論として、『民本主義』なきいふことを稱へるのは、それは自由であります。若し臣民として、「天皇は民を以て御政治の本となさるばらねばならぬ」と主張し、要求するのであつたならば、それは他國はい

ざ知らず、我が國に於ては國體の根本を破壊する所の不都合な言ひ分ちして大に警のねばなりませぬ。天皇の御政治の上からは、我が國は古來民主主義を以て、歴代聖帝の要道に納し給うた所であつて、我が國に於ては決して珍らしいことではありませぬ。民の疲弊を慰ませ給うて、三年の間租税を免じ給ひ、畏くも官殿損じ御衣破れて、なほ民の竈の煙の盛に立ち登るのを御覽はして、『朕富めり』と宣はせられた、仁徳天皇の御仁徳は、百世の下、今もなほ國民の等しく讃仰し奉つて措かざる所でありませぬ。明治天皇即位の始に、『今般、朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事、朕自、身骨を勞し、心志を苦め、艱難の先に立、古、列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治蹟を勤めてこそ、始て天職を奉じて、億兆の君たる所に背かざるべし』と宣はせられ、また曾て、『罪あらばわれをこがめよ天津神、民はわが身の生みし子なれば』と御製遊ばされ、また古來、聖天子が國民を呼ばせ給ふに、大御實に仰せられたのは、所謂、民を本とするを以て、御政治の要道に遊ばされたことを知り得られる御事ごもであり、更にその御政治さへ『知ろし召す』と仰せられて、天日の下界を照す如く、臣下のする政務を御照覽遊ばされるのを以て、君の御事ごなし給うた。天皇はかく「民ありての君」の道を盡させ給ふのであるが、國民は

それと同時に「君ありての民」の道を盡して、君を本として、その御聖徳に浴し奉り、總べてを擧げて、上御一人に歸し奉らねばならぬ。君は民を本とし給ひ、民は君を本とし奉る、こゝに我が尊嚴なる國體は、その精華を發揚するのであります。想ひ起す、日露戦争の大團圓たりし、日本海の大激戦が帝國の大捷に歸した際の、東郷聯合艦隊司令長官の、奉告書の末文に『我が聯合艦隊が能く勝を制して、前記の如き奇蹟を收め得たるものは、一に天皇陛下の御稜威の致す所にして、固より人爲の能くすべきにあらず』と奏し、陛下より東郷大將に賜りたる勅語には『朕は汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に對ふるを得るを擇ぶ』との優渥なる御詔を下されました。何ごいふ美しくもまた難有いことでありませうか。即ち『民主主義』とは、政治學上の議論を別として、民の口より申すべきことではありませぬ。我が國に於ては、君より民に對し給ふ場合に於てのみ言ひ得られる言葉であつて、民よりは、只、何處までも『君本主義』であるべきであつて、何事も君を本とし、君を中心とし、君を本位とし奉らねばなりません。かくしてこそ、始めて君臣の情義明かにして、各々その道を完うすることが出来るのであつて、君民一體といひ、君民同治といふやうな美しい状態を現はすることが出来るのであります。

各種の社會問題

一三八

我が國に於ても、追々世界の風潮が流れて来て、資本と労働、地主と小作、富者と貧者、男子と女子との間の各種の社會問題が、頭を擡げて参りました。日本が、歐米に於ける先進國と、同じやうな道を辿つて、發達しやうとする限り、これ等の社會問題は、當然起り來るべき運命にあるものこそせねばなりません。彼等先進國の苦んだ經驗を、日本も亦同じやうに味はねばならぬといふことは、誠に苦々しい次第であります。これ等でも、眞に『氏子ありての神、神ありての氏子』といふ、あひよ、かけよの理によつて、互ひ互ひに他に頼り他に待つゝの美風を振興したならば、いろいろの難しい問題も、自ら霧散してしまふこと、信じます。

資本が如何に豊かに有りましたが、手を下してそれを働かせるものがなくては如何に多くの資本も、更にその用をなさぬのでありますし、亦如何に立派な働きを有ら、如何に立派な腕を有つて居ても、資本がなくては、その働きは現はれないのであります。また、如何に廣い立派な地面を有つて居ても、それを使ひて、それを耕す人がなくては、それは寶の持ち腐れでありますし、如何に勤

はありまして、それを使ふべき地面がなくては、その用をなしません。男子と女子との間もその通りで、男子のみで世の中は保ち得ないと同時に、女子のみでも社會は保ち得ないのであります。その他、社會の各階級を通じて、各職業を通じて、一として、互ひに他に頼り他に待つて、各々その處を得ないものはありません。然るに、資本家は資本家面をして労働者を蔑ろにし、労働者は労働者で我が儘を働かうとする。そこに同盟罷工といふが如き忌はしい騒動が起るのであります。地主が地主面をして、小作を苛めるによつて、小作もそれに反抗するやうになり、小作が我が儘を働くによつて、地主も之を承知せぬこととなる。男子は、この世の中を男子のものとして考へて我が儘に振舞ひ、女子は恰も男子を附屬物かの如く思ひなす所から、所謂、婦人問題も喧しくなるのであります。その他の社會問題、凡べてこれ同じやうな弊害がその原因をなすのであります。若し、資本家は労働者に向つて、あなた方のお蔭で、自分等もこの世に在り得られるのである、といふ心になり、労働者も、資本家に向つて、あなた方の御恩によつて、自分等もその務めを完うすること出来るのであります、といふやうな心になつて、己れを空しうして、他の爲めに盡す心になつたならば、如何にして労働問題の起る餘地があるでございませうか。あなたによつて私はあり得られる

一三九

のである、さういふ考へが、何人にも徹底して居たならば、いろいろの社會問題は、期せずして、その形を潜めて了ふであらませう。

歐洲の戦亂

今や世界は、未曾有の戦亂によつて、東西の強大國は、何れも必死に鎧を削りつゝ、ありますが、この大戦亂は、去る大正三年六月二十八日に、塞耳比亞人が、奧太利の皇太子を暗殺したさいふ一事がその導火線となつたのであるが、この一導火線によつて、世界一面の火に化るに至つた原因は、現下世界各國が、國際的に、あひよ、かけよの道を履み過つた所に、その最大の理由があります。今日の大戦亂が、世界の文明史の上から見て、それだけの意義があるかは、暫く別として、幾多の悲惨事が日々數限りなく演ぜられつゝ、あり、世界を通じて困憊の極みに達して居る現状は、眞に私どもの忍び得ぬ所であります。世界各國の相ひ互ひの關係は、彼の戊申詔書に「東西相倚り、彼此相濟し、以て、其の福利を共にす」の宣はせられました通りであります。此の國際的あひよかけよの道にして、眞に世界各國に徹底して居たならば、惟ふに、現下の如き不幸は、之を見ずして、そ

の幸福を互ひに享け得て居たことであらうと思ひます。世界各國にして、眞にあひよかけよの神意を體することの出来ない限りは、今回の事變が、假令、遠からずその局を結ぶにしても、盡未來際に亘つて、此の種の不幸を熄めることは出来ぬであらませう。

平和幸福の基調

かくの如く、小は我が一身一家の事より、大は國家世界の事に至るまで、總べての平和圓滿幸福は、悉く相互に「氏子ありての神、神ありての氏子」とある根本の神意を奉體して、あひよ、かけよの道を盡すことによつてのみ、之を享有することが出来るのであります。

人間は、各々自分の獨立、自由を欲して止まぬ性向を有つて居るものであるが、その所謂獨立といひ自由といふことは、これを社會の共同生活の中にのみ、本當に見出すことが出来るのであつて、社會を離れ、共同主義を外にして、絶對の獨立も自由も存するものではなく、社會共同の精神を外にしての獨立といふは、それは孤立といふことであり、社會共同の精神を外にしての自由といふはそれは我が儘といふことであります。孤立や我が儘は、自他互ひの滅亡を來すより外はないことを

意味して居ります。然らば、その所謂、社會共同といふことは、如何なる程度に分量に於てするのであるか。あひよ、かけよの教は、自他互ひに、己れを虚うし、我心我執なく、總べてを擧げて他に頼り、他に待ち、他に推し、他に譲り、他に奉仕し、他によりて自らの存在を見出すことを示し給ふのであります。

普遍と特殊

最後に誠に解り切つたことではありませんが、一言申し添へて置きたいのは、普遍と特殊といふことではありません。前にも申し述べました如く、國家の道義に於て、君主は民本を以て大御心遊ばされ、臣民は君本を以て心こするに云ふが如きは、誠に曖昧な話であつて、そこには、君も民も共に、據りて奉すべき普通の道が示されて居ない、それと同様に、あひよ、かけよといふことは、その人その人によつて、皆する事が違ふやうになつて、一つの據るべき道が明かでない、こいふやうに危まれるかも知れぬが、金光大神も『我情我慾を離れて眞の道を知れよ』と教へ給うた如く、己れを虚うして他に奉仕する所に、自ら私ごもの據りて進むべき道が顯現れ来るのであります。例へば、

人間は正直にしないでならぬ、私ごものは常に教へられます。正直といふことは、何人も履まなくてはならぬ唯一の道でありますが、如何にすることが、正直な事であるか、こいふことは、その場その場に於て必ずしも一様ではありません。正直にしないでならぬと申しても、軍事の秘密を發いたり、要もないのに、他人の秘密を暴露することは、決して許されませぬ。『親は子の爲めにかくし、子は親の爲めにかくす。なほきこし、其の中にあり』と古人も申して居ります。杉の眞直なる、松の曲折せる、何れも自然の眞を現はして居るものであります。此の如く、普通の道は、私ごもの日常の事實の上には、皆それら、その場合に應じ、その關係に従つて異つた形を取つて現はれるのであるが、「直きこしはその中にある」のであります。私ごものが、あひよ、かけよの教によつて、他に奉仕する、そこに唯一絶対の眞の道は自ら現はれるのであります。

之を要するに、私ごもの此の世に在るや、親としては子に對し、子としては親に對し、夫として妻に對し、妻としては夫に對し、國民としては國君に對し、社會の一員としては、他の凡べての人に對して、相ひ關係し、相ひ交渉しつゝ、日夜にその生活を保ちつゝあるのであります。従つて私ごものは、それ等他の一切に對して、『氏子ありての神、神ありての氏子……末々親にかゝり子に

かゝり、あひよ、かけよ、で立ち行く」云あるお言葉に、籠もつて居る神意を奉體して、己れを慮しうして、他に待ち、他に頼る心を以て、その務め、その業に勤んで、小は一家の平和幸福より、大は社會、國家、全世界の平和幸福を致すことに心を注ぐべきでありまして、かくてこそ、世の一切のものは立ち行き、榮え行き、神の御心をも安め奉り、金光大神の神業をも成就せしめ奉るここが出来るであります。

(大正七年五月)

他も我が身も皆人

人道主義的教義

金光大神は「人(他)の身が大事か我身が大事か、人(他)も我身も皆人」と神訓し給うた。これ本教に於ける人道主義的教義の最も代表的なお言葉であります。

「人も我身も皆人」このお言葉は、少くとも之を二方面より解釋すべきであります。即ち、一は人間同志のお互に有つて居る情操の上から、他は神の御心の上から。前者は「同情」を本とした解釋であり、後者は「神の氏子」といふ觀念を本とした解釋であります。

同情

私どもは、自分に慶事のある時に、自分と同じやうに、他が眞底から喜んで下されば、何んな嬉しいものであります。自分に悲しい事や、苦しい事のある時に、他が眞底から喜んで下され、

慰めて下され、助けて下され、ば、また何もなく嬉しいものであります。かく、我が身の吉きにつ
 け、凶きにつけて、他の誠の籠つた心を取けることが、此の上もなく難有く、嬉しく思はれるなら
 ば、この心もちを、直ちに以て他の上に移して、同じく人であり、互に同じ感情を有つて居る以上
 は、他もまた、その慶びを共にして呉れる人のあることを喜び、その憂ひ苦みを共にして呉れる人
 のあることを喜ぶに違ひないとの思ひを以て、他の慶びを共に喜び、人の悲みを共に悲み、人の苦
 みを共に苦んで、我が力に應じ、分に従つて、之を慰め、之を助けさせて貰ふことは、人としての
 大切な道であります。かく、我が思ひを他に致すまいふことが、所謂、同情といふものであつて、
 『我身の苦難を知らぬ事』とは即ちこの同情といふことについての御誠
 であります。

神 一 一 一 一 一

他の苦難を見て、「気の毒である」と思ひ、「可愛想な」と思ふ心ほご、私ごにも取つて美しい貴い
 ものはありませぬ。藤守先生が、或る時の靈地参拜の道次、鳥を鷹に使つて、小鳥を捕つて居る状

を御覧になつて、世には誠に可愛想なことをするものもあるものかな、心窃かに思はれて、金光
 大神に「金光様、世には誠に可愛想なことをするものもあります」とて、ありし次第を御物語りに
 なりました節に「その可愛い(可愛想な)と思ふ心が神心ぢや」と御理解下されたことを承ります。
 神様が私ごもの祈りを、聞き届けて下さるのは、單に、親なり子なりの間であるから、こいふや
 うな一片の義理づくの御心からではなく、世の總べてのものを可愛いと思召し、可愛想な思召し、
 不憚なものと思召し下さる御心に由るのであります。神の御心は、世の總べてのものを可愛いと
 思召し下さるより外には何物もおはしませぬ、金光大神は、即ちこの神の御心を、御取次ぎ下さる
 のであり、取次ぎの先生は、この金光大神の手代りとして、更に私ごにもお取次ぎ下さるのであり
 ます。そして私ごも、この可愛いと思ふ心を、他に施すことによつて、また神の御徳を我が身に
 顯はすことが出来るのであつて、「金光大神が教へた事を、違はぬやうに人に傳へて、眞の信心をさ
 せるのが、神への御禮ぞ、これが神になるのぞ」と御理解下され、また「一人助ければ一人の神、
 二人助ければ二人の神」とあるのは、即ちこの點を教へ給うたものと信するのであります。
 この神心は、如何なる人にも在るのであつて、他の苦難を見ては、大抵の人は「あ、気の毒な」

「あ、可愛想な」と思ふ心は閃くのであるけれども、それがいろいろの雑念雑情の爲めに、動もすれば消え失せ易いのであつて、初心を貫くといふことは、中心容易な事ではありませぬ。假令、初心のままに貫いたとしてもそれによつて、我が身に貴い神の徳を、顯はす所以たることは忘れて、これだけのよいことをしたから、後に何かの報いがあるであらう、といふやうなさもしい心が得て伴ひ易いのであります。

有難い事ではないか

されば金光大神は、「人間は、人を助ける事が出来るのは、難有い事ではないか。牛馬は、我子が水に落ちて居ても、助ける事が出来ぬ。人間が見るに助けてやる。人間は、病氣災難の時、神に助けて貰ふのであるから、人の難儀を助けるのが、難有い事心得て信心せよ」と御理解下されて、「人を助ける事が出来る」だけの力と徳とを、特別に私どもは神様から、賦與して戴いて居るのであつて、この力と徳とを顯はすことが、人間として選ばれたる特權であつて、人間のみが、神の御業を翼賛し奉ることが出来るのであります。金光大神は、これを、世の何物にも比べることの出来ぬ難

有い貴いこと、思召して、私どもにも、斯く御教へ下されたのであります。

積極的同情

他の苦難を見て、それを「氣の毒である」と、同情して、之を慰め、之を助けることが、若し消極的同情といひ得られるならば、他の慶び、他の樂みを見て、またその人の心を心して、之を喜び、之を樂む心は、積極的同情であるといはねばなりません。私どもは前に述べたる消極的同情は、その事柄が事柄であり、場合が場合であるだけ、何れかといへば、比較的に起り易いのであります。が、私どもには、人を羨み、人を嫉み、人を争ふ心が強くありまして、この積極的な同情は、中々に起り難いものであります。「好き仲も近頃疎くなりけり、隣家に蔵を建てし頃より」さかいふ古人の歌があるに聞きました。これは隣り同志で貧乏な間は、互に親密にして居たものが、一方が出世した爲めに、仲違ひを生じて了つたといふ、心でありませう。伊豫の大洲の盤珪禪師は、一代の巨匠でありました。或る時、姫路に行つた際に、或る替者が、その聲音を聞いて、如何にも崇高な人格であることを感歎したといふことでもあります。それは、人には、他の不幸を窃かに喜び、他の

幸福を窃かに厭ふ心もちがあるものであつて、従つてめでたいいふ喜びの言葉に屢々陰の氣が籠り、お氣の毒なごいふ、憂ひの言葉に屢々陽の氣が籠るのが多いのに、この禪師ばかりは、それがなく、眞實の聲であるからである、その譬者は説明したいいふことではありますが、これ等は何れも人の心の機微を穿つた話ではありませぬか。

自他の幸福

之を要するに、他も我が身も、等しく人間である以上は、互にその慶びを喜びあひ、その悲みを悲みあひ、その樂みを樂みあひ、その苦みを苦みあうて、そして、我が身としては神の徳ミカミを身に實に顯現し、而も他の身ミ家ミに幸あらしめ、相ひ率ゐ、相ひ助け、相ひ勵まし、相ひ奨めて、私ミもの世の中を一段一段高く進めて行くことは、眞に自他の幸福之に過ぎたるものはないと信じます。

神の氏子

更に、私ミものは、「神の氏子」といふ上からは、「人も我身も皆人」であつて、毫も互ひの間に相違も懸隔もあるものではありません。固より現在の私ミもの上には、賢愚、富貧、貴賤、男女、善惡等の相違があるのは事實であります。併しこれは絶対の相違ではないのであります。『天地の間に、棲む人間は、皆神の氏子』と仰せられ、『此方の事を、神、神云ふが、此方ばかりではない、此所に參つて居る人々が、皆神の氏子ぢや。生神ミは、こゝに神が生れると云ふ事で、此方がおかけの受け初めである。皆もその通りにおかけが受けられるぞ』と仰せられる如く、人は皆、研げば光を現はすべき神の魂を分けて戴いて居るもの、みであり、況んや神は、私をまたなきもの、慈み給ふ如く、彼の人をもまたなきもの、愛で給ふのであります。他の皮相を見、他の暫しの状を見て、或は敬ひ或は卑み、或は驕り或は侮り、或は惡むのが、私ミもの習ひであります。『皆神の氏子』たる自覺の上からは、自ら侮り自ら輕んずる要もない。同時に、他をも侮り輕んずることのないやうにせねばなりません。この故に、金光大神は、生神であらせられたと同時に「無學の百姓」であらせられました。『他人の事を惡しざまにいふものは、神の氣感に叶はぬぞ』と戒められ、『人間を輕う見な、輕う見てはおかけはなし』人には上下があるが、神には上下がない、人間は皆同じやうに神

の氏子ぢやによつて、見下したり、きたながつたりしてはならぬぞ』と諭されました、婦人といへば、悉くこれ男子の玩弄物か、子を産む機械か、下女か子守かの如くにのみ見て居た時に於て、『女は世界の田地である』『女は家の家老ぢや』と警められました。

敬神の眞義

私ごもは、皆神の氏子であります。『氏子ありての神、神ありての氏子』とある如く、私自身を尊重するところが、即ち神を尊重し奉る所以であり、私自身を侮蔑するところは、即ち神を侮蔑し奉る所以であります。それと同時に私自身を尊重するところは、即ち他人を尊重する所以であり、他人を侮蔑するところは、即ち他人を侮蔑する所以であります。従つて他人を尊重するところは、即ち神を尊重し奉る所以であり、他人を侮蔑するところは、即ち神を侮蔑し奉る所以であります。如何に神様を立派な社に祭り立て、之を祈り立て拜み倒して居ても、自他互に尊重するところが出来なくては悉く神に對する非禮であり、虚儀であります。人間を輕う見ではおかけがない筈ではありませんか。

平等と差別とに對する僻見

されば、如何に我が家の召使であるからして、犬や猫でも追ひ廻すやうに、虐使うてはなりません。これは主人と召使との差別を思ひ誤つたものであります、さればして、召使の分として、俺は神の氏子であるとして、主人を蔑如にするところは平等を思ひ誤つたものであります。神の氏子といふ點からは主人も召使もありませぬが、併し主人は主人として、召使は召使として、各々その分があり務むべき所のもので定つて居ります。召使として、この務に怠つて、動もすれば奉公人根性になるが故に、主人も犬猫扱ひするやうになり、主人が我儘をするが故に、召使も奉公人根性にも墮ち易い。家庭に於ける、夫と妻との間柄も、親子との間柄も、親と子との間柄も、社會問題としての、資本家と労働者との間柄も、男子と女子との間柄も、國家に於ける治者と被治者との間柄も、亦その通りであります、差別の中に自ら平等があり、平等の中に、亦自ら差別のあることを知つて、その地位に應じ、その身分に應じ、その業務に應じて、その幸福を全うすることが、私ごもの最も肝要なところと信じます。そしてこれ等は何れも、眞實に自分を尊重し他を尊重するところによつてのみ、之を

得るこゝが出来るものであるといふこゝを知らねばなりません。

廣く深き御教

以上の如くにして、『人も我身も皆人』この金光大神の神訓は、その神意極めて廣く深くありまして、而もその及ぼす所は、小は一身一家の事より、大は社會國家の上に亘つて居りまして、私ごも、全生活の上に此の上もなく大切な御教であり、従つて仔細にお話することも、容易ではありませぬが、兎にも角にも、私ごもは、我れも神の氏子なり、他も神の氏子なり、我れの、好む所は、他も好む所であらう、我が忌む所は他も忌むであらうといふ、一面に神を本とし一面に同情を本として、相ひ共に、家と社會と國とに奉仕して参りたいもの、深く祈る次第であります。

(大正七年三月)

生活の統一

迷ひとは「めよひ」

金光大神は「神に一心とは、迷ひのない事ぞ」御理解下されました。「迷ふ」は「目酔ふ」こゝの義であるといふ説いて居る人があります。これが果して正當な語義であるか否か、暫く別として、誠に巧みな解釋の中してよろしい。例へば婦人達が呉服店の賣出しに出掛けた時の様を見るに、種々の反物や切地が陳ねられて居て、あれも好い縞柄である、これも適はしい地合である。あの色も好く、この色も似合ふ。あれも慾しい、これも慾しい。これよりは、あれが好い。あれよりは、これが好い。あれにしやうか、これにしやうか。こゝとつ追ひつ考へ合せた末に、これもこれも要るやうに思はれ、そして、これもこれも要らぬやうにも思はれて、結局財布の口を開かずして、歸つて來るこゝがよくあると聞きます。幼兒を玩具店へ連れて行つた時の様も、それと同じやうであつて、あれにこれに、こゝみやみに眼移りがして、さん慾しいものが定まらずして、終には泣き出す

「いさへありますが、これが即ち「眼酔ふ」らしいものであります。

一つの道に迷ひなし

私共が道路を歩く場合にも、一筋道には、迷ひたくも迷ふことは無い、足を動して居りさへすれば、厭でも應でも目的地へ行き着くことが出来るのであります。二股道があつたり、四つ辻があつたりして、而も、何の道を執つても、目的地へ行くことが出来るやうに思はれる時に、さちらにしたものか、始めて心にあれかこれかと思ひ煩ふのであります。

病に罹つた場合にも、極く軽症で、放つて置いて自ら治癒するやうな場合には、至極呑気に構へて晝休みをして居る位に考へて別に迷ふこともありませんが、少しく永引くミ、これはと思つて、先づ甲の醫者に診て貰ふ。それで良くならぬミ、薬を取り代へて見て呉れミ頼む。薬を取り代へても効能がないミ、この醫者は存外下手である。乙の醫者に掛つて見る。そしてそれでも良くならぬミ、これも駄目だミ愛想をつかして、丙の醫者に掛る。それでも良くならぬミ、薬では直らぬ、やれ灸がよいミか、禁厭がよいミか、氣合術がよいミか、さては何かの祟りではあるまいか考へ出

して、祈禱をして貰ふ、口寄せをして貰ふ。よいミいふ、有ゆるよい事を試して見て、さて今は如何にも施すべき手段が盡きて、而も病勢は刻一刻に昂進んで、今は死を待つのみ状態に陥るミ、ここに始めて腹のさん底から覺悟が定まる。これが私共の常であります。

人間到る處青山あり

「人間到る處青山あり」ミは一種の人生觀であつて、その中に、貴き眞理が含まれて居るが、さて、人間は何處へ行つても、何をしてでも食へる、このみ單的に考へるのは、誠に危険なことであります。して「人間到る處青山あり」ミ共に「人間到る處に青山はなし」といふのが一層適切であります。何處へ行つても、何をしてでも、思ひますから、朝鮮へ飛んだり、北海道へも行つて見たり、支那へもうろつき、亞米利加へも行つて見、商賣にも手を出せば、勤め人にもなつて見、やくざな専賣品も發明して見たり、職工にもなつて見て、さて五十年六十年経つた後、一體私は何をしにこの世に生れて來たのか、ミ今更に考へ直して見て、愈々考へ直した所で生命の方が無くなつて了ふミいふのも私共の常であります。

さうにかして生きられるさういふ考は、また人間の道徳心を消耗せしめることが少くありません。人間の有ゆる背徳有ゆる罪惡有ゆる不品行を敢えてしても、生きられて居る間は、それでよいと思つて居ります。そしていよく運命の窮つた時に至つて、「人の將に死なんとするや其の言善し」といふが如く、始めて過去の一生を悔悟して、死後の活路を辛うじて見出し得るさういふやうなことも亦私共の常であります。

美人薄命

古から、美人薄命といふことを申して居ります。醜婦にも薄命な人も少くないではありませんが、美人であるだけ、それだけ目に立つのかも知れませぬが、併しざる事實が世の中に少くありません。美人であれば「氏なくして玉の興」といふ如く、何れも幸福が得られるべき筈でありますのに、薄命に身を泣き叩つ人が多いのは何が故であります。固より一概にいふことも出来ぬ、美人であるだけ、世の誘惑の魔手に襲はれて知らず知らず薄運の深い淵に身を陥れることも多くありませんが、併しながら「自分は美人である、この容色さへあれば、何處に行つても、何をしても、生きるには

困らぬ」といふ自負の心、輕薄な念心が、何時の間にかその貞操觀念を薄弱ならしめて、思はず誘惑の魔手にかゝり、轉々流離、遂に徒らに醜骸を市に曝らすに至る、これまた私共の常の様であります。

正直は必ず一つのみ

二つの點の間の二直線は、必ず一線に重るさういひます。幾何も道があるやうに思はれても、その正道といふべきものは、必ず一つより外にはなく、他に多くあるやうに見ゆるのは、或は間道であるか、或は權道であるか、或は危道であるか、或は副道であつて、決して正道乃至常道ではありません。

例へば病氣に罹つた場合でも、私共の執るべき道は、只神にまかせ、すぐるさういふの外はないではありませんか。我が先生は常に仰せられます。自分は病氣によく罹る。そして傍の人から、彼はいはれるが、自分は病氣は、我が家へ来た客人であると思つて居る。客人には客人相當の接待をし、相當の禮を盡して置けば、また歸つて行くものである。併し客人の爲めに主人が追ひ出されてはな

らぬ。病氣に對する自分の心持も亦その通りである。ミ。先生にミつては、これが御病氣の際に執り給ふ唯一の道なのでありまして、そこには、少しの迷ひの潜む餘地がないのであります。私共の業務に致しまして、今我が執る業が、これ即ち神より與へられた天職であるに信じて、それに向つて、努力を集中して、何等迷ふことがなかつたならば、その種類に貴賤、大小の別はありません。必ずや人を動かし、神を動かすに足るべき實意が顯現はれるに相違なく、そして必ずその人に適はしい精神的にも物質的にも幸福を享け得られることでありませう。婦人の守るべき貞操も亦これと同様であつて、唯一に奉仕して、死生を盡して渝らざる所に、その美德は存するのであります。金光大神は、この一筋の道を迎らせ給うて、『參つて尋ねる處がなかつた』に拘らず、遂に生神の御徳にお進み遊ばされ、天地の親神に參じて、そして一筋の道の到り達して、そこに開展けた新しき天地の莊嚴、新しき世界の消息を物語らせ給ふ。この一筋の道を示し、この到り達し給うた新天地の消息を傳へ給うてあるのが、即ちその數多の御教であります。『此方がおかけの受けはじめであつて、皆もその通りにおかけが受けられる』とある如く、私共もその一筋なる道を、金光大神の業に従つて進んで行けば、我が行手にも、亦新しき天地の偉大なる莊嚴を仰ぎ得られるのであります。

迷はぬ道に迷ひあり

私共は、今この一筋の道を、覺束なくも迎らせて戴かうに祈りつゝある身の上ではありますが、この一筋の道にありながら、なほそこに幾多の迷ひ心が去りませぬ。これ即ち心に躁急るが故であります。

私の實父は以前郷里から岡山通ひの商業を營んで居りました。車を携へて往復するのであります。歸郷の報のあつた日には、私は小學校が退けて後、途中まで何時でも迎ひに參りました。そして車を助けて歸りましたが、道は高梁川に沿うた一筋の道であります。大抵三里位參りました。日曜日なごには朝から出掛けて六七里行くこもありません。一筋の道であり、今日は歸られるに、定まつて居るのであるから、歩いて行つて居りさへすれば、何時かは出會ふのであります。餘りに歸りの晚い時なごは、一方は川、一方は山の淋しい夜道を、ミほミほ歩きながら、たまらなく便りない思ひが致しました。そして行き交ふ人に尋ねても見る、若しも歸られぬかも知れないから、この儘引返して歸らうかとも思ひます。何か變つたこもあつたのではないかとも危ぶんで見ます。

そして小供心に歩きながら泣くことさへありました。その時の思ひは今も心に往來致します。そしていよいよ出會つた時の喜ばしさも一通りではありませんでした。行けば出會へるものを、もごかしと躁急る所から、迷はぬ道にも迷ふのであります。それ故、金光大神は常に「物事に時節を待たず苦をする事」も「人より一年後れて分限者になる氣で居れ」も「驕りがましい事をすな、ものは細うても永く續かねば繁昌でないぞ」も仰せられて、常に急ぐな、躁急るなとお誡め下されます。金光大神の現世に於ける御特色の一として、私共は、この「急ぐな」の常の御聲を擧げるこゝが出来ます。道の弘通について、常に直信等を誠め勵まし給つたお言葉として、或は「三十年先きでは世も變り、此道も貫く」いひ、或は「神は守りの徳がつくまで待つ、それまでは假令身に襦袢を纏ひ、粥の湯をすゝつて居らうとも、修行して時を待て」云ひ、或は「假令一時はむづかしい事があつても、辛抱して行く間には徳が受けられる」いふ類ひの尊いお言葉を到る處に拜するこゝが出来るのであります。

いそがずばぬれまじものを旅人の後より霽る、野路の村雨

いふ古歌がありますが、真にその通りでありまして、迷はぬ道に迷ひ易い私共も、亦この旅人の

やうであります。急ぐなにて、一處に立ち止つて居るのでは、何時でも時節は來ぬ。只一步一步に踏み占めて歩いて居さへすれば、必ずや神は喜ばしい時節をお與へ下さるであります。

統一ある所に力あり

昔、毛利元就は、その臨終の一期に、我が子等を枕頭に喚び寄せて、矢を試みしめて、その死後を誡めたといふことですが、一本の毛筋は、真に強いものであるけれども、糾へる毛綱は、千鈞の重きをも繋ぐに足るのであります。私共の身體の力量も、その壯健な時に於て加はるのであります。體の丈夫といふことは、即ち全身の諸機關が何れも一つに統一され調和された時の様を申すのであります。指先きに僅かばかりの傷があつても、決して重いものは持てませぬ。一國の強さも、一社會の強さもこれ少しも異りはありませぬ。私共の精神の力、意志の強さも、亦我が情意が一つに集つて居る所に始めて生ずるのであつて、誠はこの心の状態を申すのであります。私共が迷ふといふのは、情意が右に左に前に後に、種々に働いて居る場合を申すのであります。彼の祭禮の神輿は右に寄つて見たり、左に寄つて見たり、進んで見たり、退いて見たり、果ては大地へ

取落して了ふことがありまして、中々思ふやうに行かぬものでありますが、これは昇いで居る興丁等が各自勝手な方へ行かうとするからであります。私共の心もその通りで、終には一生の行路の中道にして、吾れも我が身を持ってあまして投げ捨て、了はねばならぬやうな無残なごにもなるのであります。

『急ぐな』とお誡め下されつゝ、ある金光大神が現世に於ける七十年にして、天地に塞がる偉大なる御徳を現はさせ給うたのは、一に迷ひなき一心の御力の致す所申すの外はありますまい。

迷はぬ道に迷ひ易いのが私共の常であります。唯日々を神に祈り、御教を唯一の葉として、一歩づつ、でも前に前に、我が信心の道を進ませて戴きたいものであります。金光大神は

信心は容易いものぢやが、皆氏子からむづかしうする。三年五年の信心では、まだ迷ひ易い。十年の信心が續いたら、我ながら喜んで我心をまつれ。日は年月の始めぢやによつて、其日其日のおかけを受けて行けば立行かうが。容易う信心をするがよいぞ

ご御理解下されました。更に片岡次郎四郎先生は

まごごで成就せぬものはなし。成就せぬ時は、まごごがかけたとさこれ。

ご遺言なされたご承ります。迷ひなき心即ち一心であつて、一心即ち誠、誠即ち力であります。力の貫く所、自ら弘通成就し、亦自ら神の御徳を受け得るのであります。さうか、何事も迷ひなき心で人生の務めに盡させて戴きたいものであります。

(大正六年十一月)

依頼と信頼

一六六

我が道の信心

我が道の信心は「頼む」といふことに外ならぬ。少くとも、これが信心の中心であります。されば金光大神の御教には「今月今日で一心に頼めおかけは和賀心にあり」このお言葉を始めとして、「神は晝夜も遠きも近きも問はざるものぞ信頼心に隔なく祈れ」と教へ給ひ、更に御理解に「祈るよりは眞實で頼め」と仰せられたことも承つて居ります。

さて「頼む」といふことが、かく我が道の信心の中心ともいふべきであるが、等しく「頼む」と申してもその意義は必ずしも一様ではありません。その解り方如何によつては、信心といふものが、貴きものとも、つまらぬものともなるのであります。それ故、私はこの點について、暫く私の平生思つて居る所を、お話して見たいと思ひます。

「頼む」の解

そこで「頼む」といふことには、種々の意義があるでありませうが、私はその中で、依頼といふこと、信頼といふことの二つを取り出してお話し致します。依頼と信頼とは、解釋の仕方でも双方とも同じ心持を言ひ現はす言葉とも謂ひ得られるのでありませうが、こゝに私が依頼といふのは「頼みにする」といふ意味であつて、信頼といふのは「頼みにおもふ」といふ意味であります。

「頼みにする」といふのは、例へば、字の書ける人に字を書いて下されし頼み、裁縫の出来る人に着物を縫うて下されし頼み、走り歩きの出来る人に、用使ひを頼むといふやうな場合であつて、自分はその用事を、よろしく願ふし頼み、頼まれた人は、宜しい引受けました、ご承知して呉れる。かく約束が成立つた上は、自分としては、別に筆を執つて字を書く必要もなく、針を執つて縫仕事する必要もなく、また尻をからけて用達しに出なくても済む、その間は、寝轉んで居ても遊んで居ても、頼んだ丈の用事は、すん／＼進行するのであります。これが私のいふ「頼みにする」といふ場合であります。

「頼みにおもふ」といふのは、別段、あの用事、この用事と個々の場合の用事を頼むといふことになしに、例へば親子、夫婦の間の如く「頼みにおもふ」によつて、却つて心に元氣と樂みを得て、

一六七

未だ頼みに思はなかつた以前よりも、一層勢ひよく元氣よく働くことが出来るこいふ場合をいふのであります。

固より同じ親子の間でも、夫婦の間でも「頼みにおもふ」「こいふよりは、頼みにする」「こいふ心の強い人もない譯ではありませぬ。例へば、不心得な親になるこ、我が最愛の子を賣り飛ばして、自分は左團扇で贅澤に生活するものもあります。また不心得な子になるこ、親の財産や、親の地位を的にして、放埒な生活をする所謂「親の脛を噛む」ものもない譯ではありませぬ。夫婦の間でもその通りで、働きもの、女房を有つた亭主が怠惰者であつたり、遊蕩者であつたりする例が乏しくなく、或は夫の月給や、夫の働きを目的にして、虚榮三昧に耽る不貞の妻も決して少くはありませぬ。併しながら、眞實の親子の間、夫婦の間は、互に頼みにおもふことによつて、親は親として、子は子として、夫は夫として、妻は妻として、それ々の務めに一層力を盡すやうになり得るものであります。

何等手助けにもなつて呉れぬ、寧ろ手足纏ひになる我が子でも、假令口には「子は三界の首枷」なき、申して居りまして、その子があるが故に、働き効もあるこ、毎日樂みに働くことが出来るのであるが、若しその子が亡くなれば、働く力も勢も失くなつた、ミ力を落すのが眞實の親の情であります。更に子が親を頼みにおもふのも、その通りであつて、よほくの爺や婆で只息が通つて居るだけであつても、たまに世話をするかと思ふこ、吐言位のものであつても、その親が生きて居て下さる、こいふこそれだけで、子としては働き効があるこ、毎日精出して働くのが、眞實の子としての情であります。或る未開民族の中には、老齡に及んだ親や、病氣で役に立たなくなつた親は、或は殺したり、棄てたりするものもあるといふこであります。我が國の傳説の中にも、それに類したこがあるやうでありますが、近き過去に於て、左様な無徳にして無道なこがあつたこも思はれませぬ。

夫婦の間でも、亦その通りであつて、頼みに思ふ妻が家に在り、頼みに思ふ夫が外に働いて居る時には、妻としては、夫が一牛懸命に働いて下されてあるのであるから、妾までも怠けて居るこは出来ませぬ、こいふこになつて、一層家を齊へ、子の養育に力を盡して、夫をして所謂後顧の慮なからしめるやうに自ら心掛けるこになり、夫にしても、家に、後顧の慮なからしめる妻があれば、安心して、喜び勇んで人一倍働くこが出来る。この場合には、夫婦こいへば身體は二つで

ありまして、働く力の上からは、即ち、家にある妻の上に夫の力が加はり、外にある夫の上に妻の力が働いて居りますから、内外合せて四人前の力が得られるのでありますが、これに反對の場合には、外にある夫は妻の力を殺ぎ、内にある妻は夫の働きを妨げることになつて、身體は二つであつても、その力の上からは、合せて一人分にも當らぬことになる。「笑ふ門には福來る」は、唯ゆるく笑つてさへ居れば福の神が舞ひ込むの謂ではなく、相ひ和合し、相ひ信頼し合つた家族は、以上の如く一層よく働くこゝが出来ることが故に、さる家庭は自然に榮ゆるのであります。されば金光大神も「信心は家内に不和のなきが元なり」と御教へ下されて、如何に家の榮を祈り、身の幸福を願ふとも、家族が不和では、神の御力にも及ばぬ由を戒め給うたのであります。

道具と生命

依頼と信頼とは、かくの如く、頼む心持ちが一方は「頼みにする」のこ他は「頼みにおもふ」の相違があるのであるが、更に頼まれる相手方の意義も亦相違があります。

即ち依頼される所の人、極端に謂へば一種の道具に過ぎないのであります。道具の性質は、要する時には無くてはならぬものであるが、要らぬ時には寧ろ邪魔になる位のものであり、そして不適當なものは自由に取り代へ得る筈のものであります。字の書ける人に字を書いて貰ひ、裁縫の出来る人に着物を縫うて貰ふ場合について考へて見ても、書いて貰ひ、縫うて貰ふ時には入用な人であるが、さもない時には、あつてもなくてもよいのである。そして昨日までは甲の人に頼んで来たのであるが、もつと上手な乙の人が見付かつた場合には、今日から乙の人に頼んでも、相當な順序さへ踏んで置けば別段人の道に背くものといふことは出来ませぬ。親の脛を噛む子は、親の脛が入用なのであつて、機嫌よく噛らせて呉れ、ば誰の脛でもよいのであります。妻の働を目的に夫婦になつて居る男子は、女の働が入用なのであつて、遊んで食はせて呉れ、ば、その女でも宜しいといふのが、この種の人の心持ちであらうと思はれます。

之に反して、信頼される所的人是、眞實の意味に於て我が生命となり、或は我が生命の支持者となるのであります。即ち眞實の親子、夫婦の間では、親は子の生命となり、子は親の生命となり、夫は妻の生命となり、妻は夫の生命となるのであります。

従つて親子、夫婦の間は取り代へやうにも、取り代へ得られるものでなく、また取り代へるこゝに

を欲しないのであります。世間に地位あり學問あり財産ある、立派な人の多くある中に、我が親が、如何につまらぬ人間であつても、眞實に懐かしく慕はしく力になるものは我が親を措いて外になく、我が子が、如何に馬鹿でも利巧でも、眞實に可愛くたよりに思はれるものは我が子を措いて外になく、即ち取り代へ得られぬ絶對の間柄が親子でありますが、眞實の夫婦の間もまた此の如くあるべきであります。

更に頼む上の條件から考へても、依頼の場合は、何等かの形に於て報酬といふものが要るのであります。信頼の場合は、報酬を求めるどころではなく、そこには、無條件の愛があるばかりであり、犠牲的精神が存するのみであつて、その外に求むべき何物もありません。

依頼の信心

以上の如く、等しく「頼む」といふ言葉でも、依頼と信頼とは、その意義が種々の點に於て異つて居るのであります。さて我が道の信心は、前述の如く「頼む」といふことが、その中心となつて居るのであるが、その所謂「頼む」とは右兩意義の何れに屬するものであるか。

世俗には各種の神や佛を信する人があつて、その信心の状態を考へるに、宛ら私共が他人にものを依頼するやうに、商賣繁榮は甲の神様、災難除けは乙の佛様、安産は此の神様、縁談は彼の佛様といふやうな具合に、頼む用件に従つて頼む神様や佛様が違ふのが世俗の有様であります。そして商賣繁榮の御札を戴いて家に張つて置けば商業が繁昌する、酉の市で熊手を求めて置けば財産が出来る、息災延命の守札を身に着けて居れば災もなく長生が出来るといふのであります。五錢や十錢で求めたそれ等のもので、果してかく自在の幸福が得られるものならば、世の中に、さまで苦勞する人もないことであらうし、また、さる容易い世の中ならば、この世は誠につまらぬ、生き効のないものでありませう。そして、かく御札や守札を持つて居れば、思ふまゝになるものこそば、人間は努力し奮闘するの要はありませぬ。従つて信心するが故に人間は益々墮落することになる譯であります。この種の信仰の盛んな社會は、漸次に退歩するより外はないことになりました。信仰といへば、全く人間に害あつて益なきものこそ謂はれるのはかゝる信心を指していふのであります。かゝる信心が無用であるからして、若し一切の信仰が不必要だといふ人があれば、それは甚だ見當違ひこそ謂はねばなりません。

この種の信心は、従つて、頼むことを、もつとよく聞いて下され、もつと難有い神や佛があるに聞けば、自由に、平氣に取り代へ得られるのであつて、またその頼み方も、若し聞き容れて下されば、かく／＼のお禮を致します、この願ひを聞いて下されるまでは、これこれの行を致します、斷物を致します、日參を致します、さいふやうに、交換條件をつけるのであります。甚だ淺はかな次第に申さねばなりません。

信頼の信心

我が道の信心者にも、中には、あの神様よりも、この佛様よりも、金光大神の教へ給ふ神様の方が、それ以上に難有いから信心するさいふ人がない譯ではありませんが、これは彼に此を比較して居る人なのであります。比較しての信心でありますから、若し他日、我が神様よりも、もつと難有い神様がお在しますに聞けば、彼は何の躊躇もなく直ちにその方に移り代はる人なのであります。自分の親よりも隣の小父さんの方がよいから逃げて出て行くやうなものであります。信仰は絶對であるべきであつて、決して比へて得べきものではありません。比へて得べきは眞實の親子、

夫婦でないが如く、比へて移るのは眞實の信心ではありません。

金光大神は『神は我本體の大祖ぞ信心は親に孝行するもおなじ事』と教へ給ひ、更に『我子の可愛さを知りて神の氏子を守りくださる事を悟れよ』と諭し給うた。安政六年十月二十一日の立教神宣に『氏子あつての神、神あつての氏子』と仰せられました。私のやうに、神の御教の一つも守るここが出来ず、神の御心に一つも副ひ得られぬ、神の御手足纏ひにのみなる私をも、神は『氏子ありての神』、お前をたよりに思ひ、お前があつての神であるに、畏くも御信頼下されてある。この神の大愛に對して、私は何も申すことが出来ませぬ、難有いなさいふも誠に愚かな次第であります。されば私は『神あつての氏子』とある如く、私を忘れて神様にお縋り申さねばならぬのであります。私のやうなやくざなものも、神様に頼ませて貰ふことが出来る、おかけのあるなし、さいふやうな眼前の事を申して居る暇はありません、この私のやうなものさへも、生神金光大神の御取次によつて、頼ませて貰ふことが出来るさいふも、それが世にも難有いこと、幸福なこと、嬉しいことでもあります。

宿入りの心を思ふ

私は親の家に歸る心持を思ひます。他に使はれて居るものが、正月の十六日や、盆の十六日に、宿入り三稱へて、親の家に歸ります。奉公して居る家は立派であるのに、親の家は見る影もないあばら家であり、奉公して居る家では美味いものが食べられるのに、親の家へ歸れば——たこへお心を籠められたものでも——不味いものばかりであり、奉公して居る地は繁華なのに、親の居られる地は淋しい片田舎であります。歸つたて何の楽しみがありません。それにも關らず、明日は歸れると思ふに、心は浮き立つて夜もろくには寝られぬ程である、歸つても別段の話もありませんが、只親の許に歸るにいふこと、それ自身が楽しみであり、嬉しいのであつて、この外に何物もありません。併しこれ程美しい、貴いことはありません。これが元氣の源となり、方の恢復になつて、更に後半を元氣よく働くことが出来るのであります。

私共の信心もこの美しい貴い心持でありたい。生神金光大神様！天地の親神様！祈らせて貰ひ、神の廣前に引き寄せて戴くことが出来ること、それ自らが難有く嬉しく、それが元氣の本となり、生命の源となつて「信心してまめで家業を務めよ君の爲なり國の爲なり」にある如く、信心しない者よりも、一層元氣に、一層嬉しく、身も丈夫に、心もいさぎよく家の業、國の務めに盡させて戴

きたい。

「親にかゝり、子にかゝり、あひよ、かけよで立ち行く」このお言葉の如く、神は御手足纏ひになる私をも見捨て給はぬ。「無信心者ほご神は可愛い」無條件の大愛を私の上に、お垂れ下されてあります。私も、おかけを目前に下され、ば難有い、下されねば怨めしいといふやうな條件付きでなく、只親様に縋らせて貰ふこと、それが何よりも嬉しく難有いこの心から無條件に神様に頼ませて戴きたい。神は氏子に、氏子は神に、互に頼りに思ひあふことによつて、神の道もいや立ち榮え、氏子の身もいや立ち行きて、家も國も一層榮え行くやうにあらせて戴きたい。これが私の祈りであり頼む心であります。

(大正六年十月)

四種の氏子

一七八

神の平等

「人間は皆神の氏子」といひ、「神は平等におかけを授ける」といひ、「人(の身分)には上下があるが神(の愛)には上下がない」といひ、「我子の可愛さを知りて神の氏子を守りくださる事を悟れよ」といふは、皆神の御恵の氏子に平等であり、一視同仁であるべき由を教へ給うた我が教祖のお言葉であります。此等のお言葉に現れて居る如く、天地の親神の我等の上を恵み給ひ、我が教祖の神の我等が上を神に取次ぎ給ふ御心は、固より一様であらせられて、誰れは可愛い、誰れは憎い、誰れには多くみかけを遣るが、彼れには少しもか遣らぬ、こいふやうな別け隔てのあらせられる筈はありません。さればこそ、如何に罪重きものも、如何にめぐり深きものも、如何に貧苦に悩めるものも、我が生神金光大神のお取次ぎに取次ぎつて一心に頼み込めば、神は如何なる氏子にも、難有き御恵を垂れて、生死共にお助け下さるのであります。

神の差別

然るに私は、今茲に『四種の氏子』を題して、この平等なる神の上に、殊更に差別を立て、お話しやうとするのは、甚だその意を得ぬこのやうにも思はれるのでありますが、これは決して奇を衒ふ譯でも、他に逆ふ譯でもなく、實際、教祖の御教には、神の差別の方面が嚴密して存して居るのであります。お互は單に教祖の神の平等の御心のみに着眼するに急であつて、動もすれば、他に差別の方面のあることを忘れて、従つて神の平等に狂れ、一視同仁なる御慈愛に泥んで、我儘なる自分を我儘でよいもの、如く思ひ、罪過の多い自分をそれでよいもの、如く思ひ、甚しきは我儘であり罪過の多い自分を神の御前に強ひるやうな、道ならぬ考へを敢へてして少しも憚らず愧ぢざるこゝが甚だ多いのであります。これは信仰上の所謂悪平等の見に陥つて居るものであつて、誠に思はざるも甚しき次第であります。

それ故に私は、神の差別の方面を一通り考へて、自分は今その何れの部分に屬して居るものであるかを、反省致したいと思ふのであります。

平等と差別

そこで、お話を進める前に、少しく申して置きたいのは、この平等と差別とは、如何いふ關係にあるか、さういふ點であります。そして之れを一言にしていへば、神の御恵みには、前述の如く固より彼此の差別はない、皆平等であつて差別は一に氏子の信する心の上に存じて居るのであります。信する心に彼此の差別があるが故に、従つて神の御恵にも實際の上に於て差別があるかの如くに現れるのであります。この點を我が教祖は「神は平等におかけを授けるが、氏子の受物が悪ければ、おかけが漏るぞ」と宣うて、その兩方を相對照して御教へ下されました。差別の見にのみ偏る時は、私共は「自分のやうなものでは、さてもみかけは蒙れるものでない」と自棄して了ふことになりません。それ故に、四神様は「一心になればおかけの受けられるものを、私のやうにめぐりの深いものは、さてもおかけは受けられぬと諦めて居るのは、精出して働けば儲かるものを、何分世間が不景氣であるから、と諦めて居るのと同じ事ぢや」といふ意味の御理解を下されたこと承つて居ります。平等の見に狂れて自分を省みるこゝが出来ず、差別の見に偏つて、自暴自棄に陥つて了ふ、こ

れ等は何れも誤れるの甚しいものであります。

氏子の四種

さて、所謂、四種の氏子とは、如何なるものを指すかといふに、第一は神の信じ給ふ氏子。第二は、神の喜び給ふ氏子。第三は、神の憐み給ふ氏子。第四は、神の見捨て給ふ氏子。この四つである。

第一の、神の信じ給ふ氏子とは、御理解第三十節に「神を信する者は多いが、神に信ぜられる者が少い」とあるにより、第二の、神の喜び給ふ氏子とは、御理解第五十九節に「おかけを受けて呉れ、ば、神も喜び、金光大神も喜び、氏子も喜びぢや」とあるにより、第三の、神の憐み給ふ氏子とは、御理解第八節に「無信心者は神は可愛い、信心しておかけを受けて呉れよ」とあるにより、第四の、神の見捨て給ふ氏子とは、御理解第二十節に「此方が天地金乃神より、おかけを受けて居る事を話にして聞かすのぞ。疑うて聞かぬものは、是非に及ばず、可愛いものぢや、又時を待つておかけを受けるがよし」とあるによつて、假りにかく名付け、かく差別したのであります。

神の憐み給ふ氏子

世の一切の氏子は、皆神の憐み給ふものゝみであります。彼の神傳に、「天地金乃神と申す事は、天地の間に氏子居つておかけを知らず、神佛の宮寺、氏子の家宅、皆神の地所。其理知らず、方角日柄ばかり見て、無禮致し、前々の巡り合せて難を受け居る。」とある如く、私共は、天地の恵を知らず、神の御思ひを辨へないで、祖先以來、重い罪の中に苦み、深いめぐりの中に悲み、所謂一生造悪の淺間しい身の上に生れて来て、自分自身では如何にもするここの出来ない不自由な果敢ない運命にあるものであります。この憐れなる世の吾等氏子を、救ひ助けて遣りたいこの思召から神は我が教祖に、「此方のやうに實意可憐に神信心致して居る氏子が、世間に何程も難儀して居る、取次ぎ助けてやつて呉れ、神も助かり、氏子も立行く」といふ重大なる御頼み事があつて、こゝに我が教祖の救ひの道は開け、御慈みの御手は擴げられるに至つたのであります。世の氏子が、この憐むべき状態に居らなかつたならば、固より神の道は教祖によつて開かれるまでもなく、初めから一切の氏子は神と倍なる無上の境界に住して居たのでありませう。氏子が憐むべき状態に在り、之を憐

ませ給ふ神が在したが故に、吾等の爲に此道は開け、神の御手は垂れられるに至つたのであります。

神の喜び給ふ氏子

それ故に、私共は我が身の眞實にめぐり深く、罪深く、自分自身で如何することも出来ないことを覺つたならば、必ずや教祖の御手に取籠らずには居られませぬ、教祖のお取次ぎに頼らずには居られませぬ。一度教祖の御手にお籠り申すことが出来れば、神の御救ひは、暗い室に窓が開くと同じ時に光が射す如く、眞空な器に穴が開くと共に、空氣が充ちる如くに、必ずや直に我が身の上に加はつて来るのであります。そこには何等の隔ても、何等の猶豫もあらせられませぬ。そして、それは氏子の爲めに、わざ／＼神がさうして遣る、さういふやうな、特別なお扱ひではなくして、『神も助かり、氏子も立行く』とあるが如く、氏子の助かるのは、即ち神の助かり（自己救済）であらせられ、氏子の喜びは、その儘神の御喜びであらせられ、氏子の願ひは、そのまゝ神の御祈願であらせられる。そして、この氏子と神との喜びの一致する所に、我が教祖の神の御取次は成就するのであつて、亦教祖の神の無上の喜びとなし給ふ所であります。『神も喜び、金光大神も喜び、氏子も

喜びぢや』とあるはこの難有き點をお示し遊ばされたお言葉であります。氏子が、教祖のお取次ぎによつて助かり行く様を御覽遊ばされて、神は如何に喜ばせ給うたでありませう。『此方金光大神あつて天地金光神のおかけを受けられるやうになつた。此方金光大神あつて神は世に出たのである。神からも、氏子からも兩方からの恩人は此方金光大神である……まさかの折には、天地金光神云ふに及ばぬ、金光大神助けて呉れ云へば、おかけを授けてやる』と宣い、『天地乃神のひれいが見え出した、忝く、金光、神が一禮申す』と宣うたこれ等の神傳の中には、抑ふるに物なき、限りなき神の御喜びの御有様が躍如として、難有く拜されるではありませんか。

神の見捨て給ふ氏子

かく、氏子の助かるを以て、無限の喜びをなし給ふ神の御恵みは、眞に廣大無邊といふも愚かなことである。然るに私共は愚痴なる心から神の教に疑ひをかけ、教祖の御取次ぎに迷ひをかけ、昔ながらの深いめぐりの中に蕩掻きつゝ、自ら苦んで居るものは、神はこれを憐ませ給うて『無信心者ほき神は可愛い』とまで仰せ下さるが、神の如何なる御方便も、教祖の如何なる御心盡しも、

更に何ごも思はずして、神の御心に背き、神の御教に違ふものは、如何にも教祖の思召にも、神の御慈愛にも洩れ果てた氏子であつて、『是非に及ばず』と見捨て給ひ、而も『また時を待つておかけを受けるがよし』『神の綱が切れた云ふが、神は切らぬ、氏子から切るな』とて、『またさうはいふもの、』といふ親の子を思ふ深き御情から、一縷の御望みをおかけ下されてあることは、如何にも畏れ多く、忝けないごも難有いごも、申し様なき次第であります。『貴様のやうな奴は家に置かぬ、出て行け、親子の縁を切る』とまで叱る言葉の中には、親の無限の慈愛が籠つて居りますが、教祖が、『是非に及ばず』と投げ出し給うた、そのお言葉も、親の子に對する愛憎つかしと同様であつて、その中には無量の御涙を宿させ給うてある忝けなさを感謝し奉らでは居られぬ次第であります。『本を執つて道を開くものは、あられぬ行もする』この教祖の御述懐御心事は、私共はこれを如何に解らせて戴くべきでありませうか。四神様も、御歸幽に先つて、『今日までは氏子の爲めに只管お詫びもして來たが、最早自分のお詫びも叶はなくなつた……』と御嘆き遊ばされたご承ります。見捨て給はんとして、さすがに見捨て給ひ得ざる御慈悲の程を、私共は何を以て報ひ奉ることが出来るでありませう。

神の信じ給ふ氏子

神の御手に縋つて助けて戴いて、一度は「神も喜び、金光大神も喜ぶ」を仰せ下された私共でも、疑ひ迷ひに心が眩めば、可愛いものぢや、憐ませ給ひ、是非に及ばず、見捨て給ふやうにもなる。一度は神もお喜び下されても、我が信心が、所謂不退轉に進まなくては、「この氏子ならば」を眞底から神の御信任を受け奉ることは出来ませぬ。「末頼もしき氏子ぢや」この神の御信任を受け奉ることは出来ませぬ。「此方が祈る所は、天地金乃神一心なり」「金光大神助けて呉れ云へばおかげを授けてやる」を仰せられた教祖の神は、如何に厚き神の御信用をお受けになつて居たのであらうか。「片岡次郎四郎、子の生、神が頼に思ふ、金光之位をつけよ」を仰せられた片岡先生は如何に深き神の御信任をお受けになつて居たのであらうか。その教祖の神すら「此方いへさも、一つ間違へば御暇が出る」をて慎ませ給うたを承ります。

神の御信任は、或る者は受け得られるが、或る者は受け得られぬといふことはない筈であります。これ神の平等であらせられる所以であります。學問の有無、身分の有無、財産の有無、教職の有無

といふやうなことに區別はありません。信用は元來相互の間に成立つものであつて、こちらが對手を絶對に信じて疑はねば、對手もこちらを絶對に信じて下さるのが、即ち世の信用といふものであります。抑々、神は吾等を「氏子」を仰せられるのであります。これ程の御信用はない筈であります。すのに、私共は神を眞に親様と信ずることが出来ないのであります。假令、口先きでは「信じます」を申して居りましても、それが單に口先きに出る言葉だけであつたり、「信じます」を單に心に思うて居るだけで、實際の實行の上には、事毎に神の教を裏切つて居り、背いて居つては、眞實の信用ではありませぬ。眞實の信用は、生死も毀譽も榮辱も苦樂も、凡べてを投げ棄て、尙ほ心の動かぬ、即ち我が全生命を投げ出してかゝつてこそ、そこに初めて實現されるのであるが、神より「氏子」を信じて下されてあつても、右申す通りであるから、神も眞底から御信用下されないのであります。神に對し奉つて、眞に我が全生命を擲つたお方は、我が教祖を首めとして、教師であらうが、信者であらうが、未だ信者でなく神の御名を聞いたゞけの者でも、乃至は神の御名を知らぬ者でも、この神の御信任は下るのであります。こゝに至つてこそ、私共は信心の極致に到達したを申して宜しいであります。

我等の現状如何

以上の如く、等しく天地の親神の氏子にありながらも、天地一目に御照覽遊ばされる、一視同仁なる天地の恵の中に生きながら、或る方々は、神の信じ給ふ、極致の境界に、神一に、神三借に、悠久なる眞生命を得、天地の神業に參與して、神の御心を廣く遠く現はすべき限りなき尊き道に在らせられるであります。更に或る方々は、神三教祖に我が身喜びを一にし得られる幸福なる境界に居られるであります。更に或る人々は、常に、可愛なものぢや、不愆なものぢや、憐れなものぢや、神に御苦勞、御心配のみお掛け申して居るであります。更に或る人々は、『最早之れまでぢや』『最早是非に及ばぬ』と神の御胸を扶り奉つて居るであります。私共の信心の現状は、これ等の部類の中の、何れに彷彿うて居るのであります。各自に自ら反みて、誠に思ひ半ばに過ぎる次第であります。

日々の改り

以上四種の區別は、單に區別であつて、所謂位階の如く、一段一段を漸を追ひ、順に従つて上つたり下つたりするものではありません。これ日々生きる信心の上からは當然の事であつて、昨日まで神の厚き御信任を待て居たものも、今日は既に見捨てられることになるかも知れず、昨日までは見捨てられて居たものが、今日は絶對の御信任を辱うするかも知れぬ。一念發起する所、正にかくあるべきであるが故に、我が教祖は一面に油斷、慢心の恐るべきことを教へ給ふと共に、更に他面に於て、『信心は日々の改りが第一』義諦であることを諭し給ふのであります。

それ故に、我が眞の道の信心に於ては、無上の信心を獲た人も、未だ以て晏如たることは許されず、それと同時に、罪惡の最底に墮ちて居る人も、亦以て失望することを要せぬのであつて、要は信の一念發起して、眞實に神の懷ろに飛込み得るか否かといふことが、その骨子であり生命であります。さうか、お互に無上の信心に進み入るここの出来るやうになりたいものであります。

(大正六年四月)

心は神信心の定規

心の定規

我が教祖は『心は神信心(生活)の定規ぢや』(九八)と御理解下された如く、常に吾々の生活を定め、吾々の生活を導くものは我が心の外にはないのでありますが、恰も定規が狂つて居る線を真直に引いた積りでも、自ら狂つて居ると同じく、吾々の心の定規にして狂つて居たならば、自分では別に間違つた行爲はないやうに思つて居ても、正しき道に照し、或は他人の眼から観たならば多くの點に狂ひが出来て居るに相違ありません。木石ならぬ人間が、この生きたる世の中に處して行く上には、或は嬉しい事や悲しい事、或は腹立たしい事や心配事に遭遇して、所謂、喜怒哀樂の情念に動されるのが、吾々の日夜の有様であります。そこに人間生活の情味も在るのでありますが、併しながら私共はこれ等喜怒哀樂の爲めに、心の籜を除して了つたり、心の分別を失つたり、心を痛めたり、心を驕らせて、知らず識らず心の定規に狂ひを來して、身を損ひ家を毀り、人を苦しめ

世を紊すやうなことを惹き起すことがあるのであります。

根本の傾向

心の定規に狂ひを來さしめるものは、單にこれ等日常の喜怒哀樂といふやうな出來事のみではなくして、吾々は、皆有つて生れた狂ひが、心の根本に蟠つて居ります。我が教祖は、これを「我情我慾」にお示し下されました。御神訓に「我情我慾を放れて眞の道を知れよ」とあるのは、即ちこれでありませう。この有つて生れた心の根本に根ざす所の傾向は、之をよい意味から申して見ますれば、所謂、個性といふものであつて、人々互ひに異つた感情を有ち、違つた意志を有つて、その身に應じた動作を現はし、或は商賣を営むものもあり、或は農業に従ふものもあり、或は政治に志すものもあり、或は國家の干城を以て任ずるものもあり、或は工藝に向ふものもあり、或は教育に或は藝術に、その他百般の事に従つて、彼此相濟し相助け相補つて、人生の進歩と幸福との爲めに奉仕することを得るのでありますが、他面この心の奥底に根ざして居る我が心の傾向を省みれば、吾々の心は各種の點に於て限られて、自ら小さい殻の中に跪踏つて了つて、眞に廣々とした自

由の境界に住まふことが出来ず、眞に神の御心に副ひ奉るやうな、本當の生活を営むことが出来ないのは、誠に私共の絶わざる悲哀であります。

愛憎の念

吾々は常に愛憎の念にこの世の中の凡べてのものに差別を設けて居ります。これが爲めに私共の心の定規を狂はせることは如何程でありませう。彼の「痘痕も笑靨」さいひ、「坊主が憎くければ袈裟まで」さいふ諺は、即ちこれを物語つて居るのであります。例へば日常の交際にでも、自分の好まぬ人が来るに未だその人に會つて話を聞かないのに、「厭やな奴が来た」さいふ心の閃きが、先づ我が心を支配して了ふが故に、その人の善い點も善いと思はれない、善い言葉も耳に入らないで、好い加減にあしらつて、早く追ひ返してやらうさいふやうな不埒な考が起つて参ります。我が國では、嫁と姑との間の悪いのが家庭の通り相場になつて居るやうであります。世の中の何れの嫁姑となる人も、悉く鬼ばかりではなく蛇ばかりではない、それにも係らず姑から嫁を見るに、爲る事成す事が、悉く意地悪く見たり、嫁から姑を見るに、凡べての事が意地悪く見えるのは、何

が故であるかといへば、皆この愛憎の念から心の定規が狂つたからであります。鬼子母神の傳説には、我が子を可愛いと思ふ餘りに、他人の子を取り殺した、さいふことがあるさうであります。愛着の念も亦憎悪の情と同じく、動もすれば心の定規を狂はせ易い。我が子の病氣でも、可愛く思つてうろたへるさいけぬぞ。云ふ事を聞かぬ時に、まよふ思つて放つておくやうな氣になつて、信心してやれ、おかけが受けられる。我が教祖も御理解下されて、この點を深くお誡め下されました。

利害關係

更に『慾得にふけりて、身を苦しむる事なかれ』我が教祖もお誡め下された如く、利害の念ばかり我が心を惑はすものはありませぬ。私共は、極めて些細な事についても、これは自分の得になるであらうか、損になるであらうか、斯うすれば得になるであらうか、あ、すれば損になるであらうか、さいふやうな利害の關係を思ふ心が鋭くして、一つの事を爲るにも、最初には全く利害の觀念の混つて居ない、清らかな心に出でつゝも漸次に利害の觀念の爲めに濃く彩られて了つて、清い

心に起つたことも、誠に汚い結果に終つて了ふやうなことが、殆んど日夜に絶えず起つて來まして、その煩苦に堪へ得られぬ思ひがあります。我が教祖は『お伺ひする時には取わけ平氣でなければならぬ、落着いて靜に願へ』(九八)と御理解下されてありますが、我が前途の方針を定め、或は今の心を如何に向くべきか、について神の御心をお伺ひする時の如き、いろくの雜情雜慾に我が心を亂され易くありますが、取り分けこの利害の觀念はその最も甚しいものであります。従つて折角お指圖を戴いても、我が豫期に反くやうな場合があるに『しまつた、お伺ひせねばよかつた』といふやうな心持ちのするところがある。斯の如きは、神を試みるものであつて、その心事を甚だ陋せねばなりません、それなれば始めから『お伺ひ』なさせずして、『斯く斯く致しますが故に、宜しくお願ひ致します』と申すに勝つたことはいない。四神様御在世中に、

一人の婆さんがやつて來て、金光様、娘を嫁にやらうと存じますが、一方は年が若くて金があり、一方は年を取つて居る上に金がありませんが……とお伺ひした所が、年を取つた方が親切であらうが、お仰せられる。婆さんは、さうですけれども、其の方は年がいつて居ますから、好まぬ返辭をして居るので、四神様は、年を取つて居ても長生をさしてやらばよからうが……と諭さ

れたなれど、婆さんは矢張り、一方は年が若くて金がありますから……と強情を張るので、それではお前さんの好きな方にするがよい、わるかつたら、やり直すまでぢや、と仰せられたので、さすがの婆さんも終に恐入つた事があります。(金光四神貫行之君の事ども)

斯の如きは、その適い例ではありませぬか。利を得れば得意になり、これに反すれば失意の人となつて、心に不平を起したり、他を妬んだり、世を果敢なんだり、或は自暴自棄の人となつて、一層の不幸に沈淪するところもなる。されば

明治天皇の御製にも

思ふにはまかせずとも人心たひらかにこそあらまほしけれ
と遊ばされましたが、誠に尊い御教事であります。

尊卑の分別

更に私共は心に他に對する尊卑の分別を立てまして、所謂、事大の弊に陥り易い。一度心を平かにして見ますれば、犬猫のすることにも、草木の狀にも、必ずや取つて以て我が教にすべきものが

あります。我が教祖は『人間は萬物の靈長であるから萬物を觀て、道理に合ふ信心をせねばならぬ』(七〇)と御理解下されましたが、萬物によつて教を受けるには、我が心が平らかでなくてはならぬ。固より長上は何處までも敬はねばならぬが、長上を敬ふが故に、目下なものは卑めねばならぬ、こいふことはいふことではない。長上の教は、謹で之に承服せねばならぬが、その故に否らざるものいふことは一も二もなく斥けねばならぬこいふことありませぬ。尊い人のいふこと、することは理が非でも之に従ひ、卑しと思はれるものいふこと、することは假令善い事でも、『貴様等のすることは……』』と一概に貶して了ふのが階級に慣れ、相對に囚はれて居る私共の常であります。それがそれだけ狭い天地に屈まつて居なければならぬのであります。岡本駒之助氏は老後を靈地に送つた、誠に篤信な人でありましたが、或時、四神様のお居間に召されて參つた節に、四方山の物語の序に、何心なく『金光様、世の中に、親辛棒、子樂、孫布衣人(乞食)こいふ諺がありますが……』と申上けるに、四神様はこの語を以て、直ちにお側に坐しました現御廣前様をお誠の遊ばされたので、氏は恐懼措く所を知らなかつた、と傳へられて居りますが、虚心坦懐なるその御心事の程を仰き奉るに餘りある御事ごもではありませぬか。

心の寶藏

我が心の缺點を指摘したならば、尙ほ此の他にも少からず潜んで居るこころでありませうが、兎に角私共は、以上の如く有つて生れた心の悪い傾向の爲めに、難有い神の御教を受けても尊い師のお誠めを受けても、眞に飛び込んで守るこころが出来ず、悪いこころ知らながら改めるこころが出来ず、恐ろしき知りながら一歩一歩深いめぐりの奥底に陥りつゝある我が身を悲しく恐ろしく思ふの外はありませぬ。

抑々教祖の神の示し給つた教は、もこゝく教祖の神が、好い加減に拵へ出して吾々に教へ示されたものではなくして、實は私共の心の中にも存して居るものを、假りに神訓なり御理解なりを以て、示して下されたに過ぎないものであります。譬へば藏の中に納めてある寶物を、一つ一つ展べ擴け取出して、觀覽せしめるやうなもので、藏の中に在れば、人には少しも知れぬものを、斯かる貴いものもある、斯かる珍しいものもある、斯かる大切なものもあるに、觀せて貰つて始めて知るこころが出来るやうに、我が教祖は、吾々の心の寶物藏を開いて、お前の心の藏の中には、斯かる貴いも

のもある、斯かる珍しいものもある、斯かる大切なものもあるぞ、こそ御教を以て、一つ一つにお示し下されたに過ぎないのであります。神の教を一つ一つに守らねばならぬ、と思ふが故に私共の信心は、漸次に苦しく難しく窮屈になつて、信心ばかり難しいものはないと思はれ、従つて私共の生活は至つて狭苦しいものになり、夜晝絶えず不安な念に襲はれ、動きのこれぬものになつて了ふのであります。『信心は容易いものぢやが、皆氏子からむつかしうする』(六九)『我が教祖は此の心の弊をお誡め下されました。一旦狂つた心の定規が直つて見れば、難しく苦しいものと思はれた信心も容易くなり、狭苦しく思はれた神の御教も、之を守らねばならぬぞ、思ふより先に、吾々は知らず識らず自然に之に合致ふやうになるべきものぞ信するのであります。』

解決は只一

例へば我が教祖は『信心は家内の不和のなきが元なり』とお示し下されたが、固より心の定規の狂つた人のみが集つて一家を成して居るのであるから、如何に苦めばきて、如何に務めればきて、一日として眞の和合は來たし得ない、若し和合して居るに見えれば、それは好い加減に飾り拵へ装

つて居るのが常であるが故に、さる偽善的な平和は忽ちにして破れて了ひます。之に反して『夜が明けたら元日と思つて、日々嬉しう暮せば、家内に不和はない』(三五)とある如く、正月元日のやうな、のんびりした、何れにも傾かず偏らず、平らかな静かな心に立ち復るこゝが出來れば、家内の和合は自然に實現されるのであります。乃至、腹を立てるな、心配するな、陰日向の心を持つなと教へ諭されるのであります。腹を立てまいと思へば、却つて腹立たしくなり、心配すまいと思へば尙更心配になり、陰日向の心を持つまいと思へば、尙の事陰日向が出来る。結局残る所のものは我が心の苦み悲みのみであります。これ等多くの教祖の教に對する解決は、歸する所、到底只一つであつて他に求めるこゝは出來ない。所謂、只一つは、我心の定規を直してかゝるこゝに外ならぬのであります。

一心に頼め

されど、元來有つて生れた此の心の狂ひであります。如何にせばきて、自らの力により、自らの計らひによつて改め直さうとするのは歪んだ砥石を、歪んだ石に合せるやうなものであつて、到底

その目的を達することは出来ませぬ。我が教祖は『今月今日で一心に頼め』とお勧め下されました。我が計ひによつて成し得ざる吾々は、只神に一心にお縋り申し、お頼み申すより外はない。『一心に頼め』活路を吾々の爲めにお啓き下されてある此の難有き思召を、唯一のたよりとして、兎にも角にも神にお縋り申して助けて戴くより外はありません。

生神金光大神

(大正六年四月)

一念發起

難有と思ふ心

我が教祖は『真に難有き思ふ心直に靈験の始めなり』、御教へ下されましたが、こゝに所謂眞に難有きは如何なる心持らをお指し示し下されたものでありませうか。

凡そ如何なる教を信する人も、何等か難有き思ふ隨喜の心のないものはありません。難有くも何とも思はれぬものに對して祈をかけ、死生を托するこいふやうなことは出来るものではありません。

難有の二義

併しながら、難有いこいふ言葉は、同じでありまして、私共のこの言葉によつて包まれる心持ちは、時と場合によつて決して一様ではありません。

この言葉によつて包まれる心持ちを、よく考へて見ますと、大體に於て二様あるやうに私は思ふのであります。即ち、その一つは、あの事柄について、この事柄について、こいふやうな風に、何か一つの理由があつて起る所の心持ちであります。例へば或る人から、これこれの物を貰つたか、或は某人からこれこれのお世話を受けたかといふ場合に、私共は必ず難有いと思ふ心が起るのであります。この場合はこれこれの譯けによつて難有いのであるといふ必ずそこに理由があるのであります。所が、それに對して今一つの場合は、殆んき理由もなにもない、ないといふことが出来なければ、殆んき理由を考へるよりも先に起る所の難有いと思ふ心持ちであります。例へば、彼の西行法師が伊勢神宮に詣でた時の歌であるに承つて居りますが『何事のおはしますかは知らねども、忝けなさに涙こぼる』如何いふ神様であるやら、如何いふ御威徳のあらせらるゝお方やら、左様な證議立てするよりも先に、伊勢に參つて見るに何はなしに唯難有くて、涙をこぼすまい、と思つても自然に涙のこぼるゝを禁ずることが出来ないといふ心持ちの歌でありませうが、かかる場合は、難有いと思ふ心に別段に取り立て、これこれの譯で、こいふやうな理由を考へる事なしに起る所の心持ちであります。

理由あるによりて難有し

理由を考へての難有いといふ心持ちは、その理由の如何によつては如何にでも變るものであります。澤山な物を貰つたり、大きなお世話に預つて居ると、それに對する難有いと思ふ心持ちも餘計に出るのであります。少しの物を貰つたか、少しのお世話になつた、こいふやうな場合には、またそれに應じた丈けの、少しの難有いと思ふ心しか起らぬ、物も貰はぬ、お世話にもならぬといふ人に對しては、始めから難有くも何とも思はれぬのが常であります。それと反對に今一つの場合は、理由が考へられねば考へられぬ程、難有いと思ふ心持ちは益々強くなるものであります。

何となく有難し

親子の間柄を考へて見るに、親は何故に我が子が可愛いのか、殆んきそこには理由を考へることが出来ませぬ、強いて理由を求めれば、我が子であるが故に可愛い、可愛いが故に可愛いのであるといふより外はないのであります。或る人は、それは行末は親に孝行を盡し、親を養つて呉れるが

故に我が子は可愛いのである。いふかもしれませぬが、親に不孝ばかりして居り、親に心配ばかりかけて居る子供でも親はそれを不感に思ひ、その行末を憂いて、死んでも死に切れぬまで深く思ひをかけて下さるのであります。然らば我が子が恫瀆であるが故に、顔容が美しいが故に可愛いのか。いふさうでもなく、人並みでない、愚かな子供や、容態の悪い子供程親の不感が増すものであります。『子供の中に肩の子があれば、それが可愛いのが親の心ちや』『我が教祖も仰せられて、この親の難有き思ひのほごを御教へ下されましたが、親の子供に對する愛は、これこれの爲めに、こいふ取り立て、擧ぐべき理由は考へられないのであります。かく親の子に對する情に理由がないが如く、子にして親に對して、難有いこいふ心持ちの起るのも決して理由はない。親は吾れを生み、吾れを育て、下されたが故に難有いのである。世間普通には申して居るのであります。それはいひ現はし方がない故に、暫らく斯く申して居るに過ぎないのであります。その眞底の心持ちは、いひやうがないのであります。誰れの子でありましたも、親を捉へて、このお方は私を生んで下され、私を育て、下されたが故に、こいふやうな事を考へた後、徐ろに難有いこいふ心が湧いて来るやうな人はありませぬ、生んで下され、育て、下されたと思はぬ先きに、寧ろ親と思はぬ先きに、

こいふこいふの出来ぬ難有さの心に充されて居るのが眞實の子の親に對する場合であります。

親に捨てられた子の心

生れて間もなく親に捨てられた、こいふやうな人が、尙ほ見知らぬ親に憧憬れて、艱難辛苦して親を尋ねて歩く人も少くない。餘程以前の新聞に載せられてあつた話であります。千葉縣のある資産家に生れた或る人が、その幼い時分に、故あつて母親は、その子を殘して家出をしたが、漸く齡を加へるに従つて母戀しの念に迫られて、十五の春、これも家出をして、心當りの茨城、埼玉兩縣下を尋ねて歩いたが、一向知れないので、尋ねあぐんで東京へ出て来て、さる商家に奉公をして、その傍ら母を尋ねて居たのであります。かゝる眞心のある人であるから、誠に實意に働くので、主人の信用も追々厚くなつて、遂に京橋區内に石炭商を営む事になつたが、店も相應に繁昌するこゝとなつたが、かゝる間にも母を尋ねるこゝには會て怠つたこゝがなかつた。所がある時、用事があつて、兩國から汽車に乗つて千葉縣の野田驛にさしかつた所が、同じ車室の中に一人の老婆が暑氣中りの爲めに切りに苦んで居るのを見て、親切に介抱してやつて、色々話を聞いて見るこゝ、何ぞ

圖らん、それが四十年來尋ねて居た、生みの母親であつたので、その奇遇を喜びの餘り、その人は聲をも惜しまず泣いたさいふこであります。そして早速我が家に引き取つて、親戚知友を招いて盛大な祝宴を開くと共に、母親も今は人妻になつて居るので、その夫をも我が家に迎へて、孝養を盡して居るさいふ事でありました。斯くの如きは、誠に珍しいお話であります。見ぬ親を尋ねて歩く憐れなる人は世に少くないのであります。考へて見ますれば、これ等の人は、親が自分を捨て、出られたばかりに、幼い時から色々の辛酸を嘗めるのであつて、いはゞ捨て、出た親故にその難儀をするのであるから、若し我が親が自分を育て、下されたが故に難有いさいふ人に取つては、さる親は難有いさいふも何さいふも思はれぬのみか、寧ろ我が敵の如くに思はれねばならぬ筈であります。眞實の親となり子となつた間柄は決してそんなものではありませぬ。子の親に對する難有しの心は、斯くの如く、判然とした理由を考へるこゝが出来ないのであつて理由を考へて然る後、親に對する難有いさいふ心が起るやうでは、眞の親子の間にはいひ得られぬのであります。親子の間のこの心持ちは、假りに生命に對する感じでも名づくべきでありませうか、人間の心の奥底より湧いて出る、最も深く最も貴い心持ちでありまして、我が教祖が「眞に難有」を仰せられたのは、即ちこの

種の心持ちを申すのではありますまいか。

神に仕ふる人の心

以上の如く、同じく難有いさいふ言葉を以て、言ひ現はしても、その中に包まれて居る心持ちは決して一樣ではありませぬが、神佛に對する人の難有いさいふ心持ちも、斯様な次第で決して同様ではありませぬ。或る人は神様はこれこれの利益を下さるが故に、佛様はこれこれの慈悲を垂れ給ふが故に、さいふやうな、ある格段な理由があつて、然る後難有いさいふ居るのであります。かゝる人は時々場合々によつて、その心持ちは色々に變るでありませう。即ち或る場合には大きな利益を與へられたから、大きな難有いさいふ心が起つた。或る場合には我が望みよりも小さい利益が與へられた、それ故それに相應した丈の少しの難有しの心しか起らなかつた。或る場合には待ち設けて居たに係らず聊かの利益にも與るこゝが出来なかつた、それ故この場合には難有くも何さいふも思はれなかつた。或る場合には、利益を祈りつゝ、却つて苦しい目に出遭つた、それ故この場合には寧ろ不平の心や、怨みがかましい心が起つたさいふやうな風になるのであります。我が道を信する

人の中にも斯かる類ひのものが少くありません。否、私自身に時あつて、神様に對する心持ちが色々變るのであります。誠に嘆かしく、愧づかしい次第であります。自分の思ふ通りになる時には神様は難有い申して居りまして、己が期する所に相違したことが起る。神様に對して怨みがましい心も起つて參るのであります。誠に淺薄な心根はねばなりません。それ故我が教祖も「これ程信心するのに、さうしてかういふ事が出来るであらうかと思へば、信心はもう止つて居る」信心の脈は上つて居るぞとお誡め下されました。

神の愛に理由ありや

神の氏子を愛し給ふ御心には殆んど理由はあらせられぬやうに窺ひ奉られるのであります。信心心をするから、善い事をするから可愛がつてやるが、信心の出来ぬもの、善い事の出来ぬものは悪く思召すか、さういふにさうでなくして「無信心者ほ神は可愛い」信心はせぬでもおかけはやつてある。「神は平等におかけを授ける」など、仰せられてある如く、眞の親心を以て、さる者ほ憐はれに思召し下され、彼の立教の神宣に「神も助かり氏子も立ち行き」もある如く、神の御心に從は

ずして、自ら苦んで居る氏子を御覽しては、神御親ら助からぬまで深く御心をおかけ下さるのであります。この難有き神の親心に對し奉つて、私共氏子にして、單にその場、その場の事のみを見て、何れにも移り變るやうな淺はかな心では、決して氏子としての道は立たぬのであります。誠に申譯もない次第。謂はねばなりません。

眞に難有と思ふ心

神は天地の親神様であらせられ、吾れを天地に生み出し、吾れを日夜に守り恵み給ふが故に、さういふ譯を聞かなくては、成る程難有い神様であると思はれないのが、私共の常であります。かゝる理由を考へた後でなくては難有く思はれぬといふのは、まだ眞實に神に對し奉る心ではありませぬ。甚だ漠然とした言ひ方ではありますが、彼の親に離れた人が、親を求めずして、片時の間も安んずるこゝが出来ないが如く、生神金光大神様、天地金乃神様、神の御名を稱へずしては一日片時の間も、凝乎して居るこゝが出来ぬ。神様さういふこゝを思はずして、一日片時の間も安んずるこゝが出来ない、さういふ程の思ひ餘つた、切なる心より神にお仕へ申すのでなくては、「眞に難有と思ふ

心」から信心させて戴くものはいひ得られないと思ふのであります。

生命の接觸

併しながら、この人の心の奥底の眞實の誠は、人の話を聞き、先生の御理解を承つたのみで、出るものではありません。出さうとして出せる筈のものでなく、拵へやうとして拵へられる譯のものでもありません。出さうとして容易く出すことが出来、拵へやうとして譯もなく拵へられるやうなもの決して眞實のものではありません。『信心は話を聞くだけが能でない、吾心からも練り出すがよい』とは即ちこの點であつて、吾々には殆んど如何にもするこの出来ぬ境であります。併しながら、如何に出ないからして、私共には殆んど心根が無いのかといへば、決してさうでなく、神の御生命も、我が生命と相ひ觸れ合ふ刹那に於て、必ずこの心持ちは、我が心の奥底から閃めき出るに違ひないのであります。この一念發起する時、私共は幸も不幸も、苦も樂も、生も死も、悉く眞に難有しの心によりて覆ひ包まれるであります。我が教祖の神は、この靈境妙地に止住し給つた第一人者であらせられます。

一念の發起

昔、或る親不孝な子が、世間の人にも見放され、親類縁者にも夢想をつかされて、その親にその子を義絶せよと迫りましたので、両親も今は是非なく之を承諾して、いよくいふ間際に、如何しても之を勘當するに忍びないで『皆様には誠に御迷惑をかけて相ひ濟みませぬが、あの子は私共夫婦には、天にも地にも、かけ代へのない子であります。假令子供の後について、日本國中を乞食をして歩いて、野たれ死にをして、並木の肥料になるやうな事がありましたも、それが可愛い我が子の爲めであると思へば、結句私共には幸福に思ひます』と親戚の前に嘆き懇へて居る親の一言を、その場に躍り込んで亂暴してやらうと謀つて、物蔭に陰れて居た親不孝者が立ち聞きして、忽ち心氣一轉して、即座に改心したのみならず、非常な親孝行者となつて、其の筋からの褒美をさへ受ける程のものとなつたといふ話があります。

また昔し備前の領分内に、親の遺産の争が本になつて兄弟の不和を起し、果ては親類のものなり村方のものなりが、二派に對立して、あわや大きな騒ぎにならうとした時に、池田侯の家臣の或る

者が、両親の膝下に兄弟の互に幼なかつた頃の睦じかつた昔の状態を思ひ出させるやうに爲向けて、遂にこの騒ぎを取鎮めたといふ話もありますが、親不孝者であつたり、同じ親の腹から生れ出た兄弟に争ひがあつたりするのは、皆私共の眞實の心が光を潜めて居るからでありまして、心の奥底の眞實の一念の發起する時に於て、不孝ものも救はれ、見苦しい争をした兄弟も救はれ、悪人も善人に生れ變り、不孝な人も幸福な世界に生れ變る事が出来るのであります。「眞に難有と思ふ心直に靈驗の始めなり」といひ、「今天地の聞ける音を聞いて眼をさませ」といふ御教は、この一念發起した刹那に於て、私共の生れ變り得る事を示し給うたものであります。

我が願ひ

私共、兎にも角にも我が道の信心に入れて戴いて居りながらも、腹立たしい心や、愆深い心や、心配する心や、苦しい事に出遭うと、徒らに藻掻く心や、他に對する隔て心が、常に心頭に往來して、一日として静かな思ひがないのは、信心して居るさういひつゝも、尙ほ「眞に難有」の一念の發起しないが故でありまして、一度この心にして閃き出でんか、私共はこの身この儘にして新しき天

地に生れ、新しき境界に、眞に幸福の生活に入る事が出来るであります。

自ら出さうとして出だし得ない、如何にもする事の出来ざるこの心を、我が心の奥底より喚び覺まし、引き出すべき時と機會とを與へ給はんことを、只管に神に祈り奉るより外ないのが、私共の断々たる心の願ひであります。

(大正五年九月)

「頼む」の二義

一

我が道の信心は、一面から之を定義しますれば、頼むといふ事に外ならぬ。即ち神は吾等の頼みを、お聞き届け下されて、みかけをお授け下さるお方であるに信じ奉つて、只管頼み参せるのが信心であります。されば我が教祖は「一心に頼め」も「信頼心に隔なく祈れ」も御教へ下されました。

二

さて、この頼むといふ事は、之を言葉の上から見れば一様であります。その意義の上から考へて見るに、決して一様ではありません。この言葉を意義の上から別けて見るに、大凡そ二通りに考へる事が出来るであります。

其の一は普通お互の使ふ所謂頼むといふ場合でありまして、即ち一寸用使を頼むか、一寸手紙を人に書いて貰ふか、或る用事を他人に處置して貰ふかといふ様な時の頼むといふ場合であつて、今一は例へば親子の間に、親は子を頼みに思ひ、子は親を頼みに思ふ、また夫婦の間に、夫は妻を頼みに思ひ、妻は夫を頼みに思ふ、といふ様な場合であります。この二つの場合を考へるに、その言葉は一つであつても、その意義に至つては、實に天地雲泥の差があるに申しても宜しいであります。

三

そこでこの二つの場合は、色々の點に異つた所がありますが、今その一二を擧げて見ます。第一には頼む事柄、第二には頼む相手の性質が夫々異つて居ります。即ち、前の、或る用事を或る人に頼む、といふ様な場合の頼む事柄は、彼の事柄、此の事柄といふ如く、僅かに吾々の世渡りの上の一部一部の用件に過ぎないのであります。従つて、頼まれ手となる對うの人も、必ずしもその人でなくてはならぬといふ限りはないのであります。自分の頼む事を好意をもつて聞いて呉れ、自

分の思ふ通りに仕送けて呉れさへすれば、實は何誰でもよいのであります。所が、之に反對に親子、夫婦の場合は、此の用事、彼の用事といふ様な、お互の世渡りの上の一部分一部分の事を頼むといふのでなくして、幸福も不幸も、苦みも樂みも、浮きも沈みも、殆んど己が一生を擧げて頼み込み、互の運命を共にするといふ様な深い意義の籠つて居る場合でありまして、従つて頼まれ手となる親なり子なり、夫なり妻なり、都合のよいものを選んで自由自在に取代へ得るものではありません。

世間には、學問もあり、財産もあり、地位もある人が少くありません。その中に我が親は、學問もなく、地位、財産もない誠につまらぬ人間であつても、それが我が親である以上は、世の如何なる人にも代へ難い懐しき慕しさを覺え、世の何物にも立ち優つて、難有く頼りに思はれるのが、子としての眞情でありまして、假令我が親が人の道に背き、國の法度に違つた事をしたものでありましても、子としては、尙ほそこに深い情が繋がれて居るものでありまして、他人ならば不都合があれば追ひ出して丁ふ、關係を斷つて了ふといふ事もあるが、我が親は何處までも我が親であつて、不都合なものであるからして、之を捨て、顧みないのは、子としての道でもなく、また情として事實さる事をなし得られるものでありません。我が子に對する場合も亦その通りでありまして、世間

には賢い働きのあるそして顔形も立派な人が多に係らず、我が子は野良息子であり、野良娘であり、不具であり、病人であつても、子は子であつて、他の善い人取代へ得られぬのみならず、親の情としては、左様な子供程一層不慈に思はれて、可愛さが増すものであります。かく親子の間柄は、我が勝手に他のもの取代へられぬ、所謂絶対の關係にあるのであります。これは親子の間柄のみでなく、夫婦の關係も亦これに等しいものであります。

世には「合せものは離れもの」なさいふ善くない俚諺があつて、元來夫婦は一人の男子一人の女が出合つて夫婦といふ一つの關係を結ぶ事になつたのであつて、親子の様に、先天的な關係は違ふ、従つて一旦夫婦になつても、場合によつては以前の通り見識らずの他人になつても、かまわぬものである、さいふ様な考を抱いて居るものも少くありません。従つて、榮耀榮華をなし得られる間は、あなたは私の夫でありますといふ具合に妻として侍いて居る様であるが、少しく夫が不幸に出合つて、何かにつけて思ふ様にならぬと、斯んな人に何時迄引つ懸つて居た所が税は上がらぬ、よい加減な所で見切りをつけた方がよいといふ様な考から、逃げ出して了つたり、苦勞をして居る間は、お前は俺の妻であるといつて、共稼ぎして居るが、少しく芽が萌いて、生活に餘裕が出

来るに、所謂精誠の妻を捨て、顧みぬ、さいふ様な薄情なものも世に多くある事ではありますが、世界に幾億さいふ多くの人間の棲んで居る中で縁あつて只一人の男一人の女が、夫婦の契を結ぶ、さいふ事は、私は此世ならぬ深い不思議な關係であつて、決して假染の事ではないと思ふのであります。

皆様は彼の『蕺坂靈驗記』さいふ劇を御覽になつた事があるでありませう。あの劇を観て泣かぬものはありませぬ。貧苦のどん底に陥り、而も病餘明を失つた我が夫澤市に對して「假令火の中、水の底、未來までも夫婦ぢや」さいつて、苦樂、浮沈は愚か、死生をも共にしたいと誓つて心を盡し、情を籠めて仕へるお里の眞情に對しては、夫は流石にさもない我が心を愧ぢ且つは身の不幸を嘆いて自殺した、妻もその後を慕つて同じく自殺した、この夫婦の心根、殊にも妻の貞心に感應して蕺坂の觀世音は、夫婦の生命を救つたのみか、夫の眼も見える様にして下されたのであります。觀世音が果してかゝる靈驗を發したか如何か、さいふ事は暫く別として、この夫婦の眞實には實に神佛も感動し給つたのでありませう。かく一世の榮枯浮沈も、更に死生をも共にする、さいふ程に互に頼み合つてこそ、眞に夫婦の道も立ち行くのであります。固より世の中の事は一片の理屈によ

つて押し通されるものでなく、人により家によつて、他人の窺ひ知る事の出来ぬ、色々の込み入つた事情の爲めに餘儀なくされて、夫婦別れをするさいふ様な例も少くないでありませうが、併しそれが正しいのではなく、さうするのが善い譯でもないのであります。

四

以上の如く、頼むさいふ事は、その言葉は一つでありまして、その意義は非常に違ふ場合があるのであります。我が教祖が「一心に頼め」を教へ、「信頼心に隔なく祈れ」を教へて、吾々に求め給ふ信心の道は、以上の二義の中、何れをお示し下されたものでありませうか。また皆様は此等の神訓を戴いて、之を如何に解して居られるでありませうか。

世の中に信心の名のつくものも少くなく、神佛に對して信心する人も多い事ではありますが、その中で所謂信心家さいひ、所謂信心好きといはれる人達の振り合ひを見ますと、神に縋り佛に祈りかけける様が、恰も吾々が日常の一寸した用事を他に頼み、一寸した用使ひを頼む様な風に見えるのが多いのであります。即ちこの病氣を助けて貰ふには此の神様、彼の災難を助けて貰ふのは彼の

佛様といふ様な具合に、頼む用件の性質に従つて、頼まれ手になるべき神様や佛様が色々別れて来る。そして頼んだ事が頼んだ通りになれば、先づ難有かつた、さいつて御禮をし、願はごきをして置けば、それで一切の手は切れたといふ様な事をする。若し頼んだ通りにならねば、此の神様も彼の佛様も當てにならぬ、外にもつゝよく頼みを聞いて下さるお方はあるまいか、此外の方を捜し廻るのであつて、頼む用件も多くは日常生活の一部分一部分の事であり、頼まれ手になる神佛も、始めより絶対の關係にあるのでなくして、實は都合の好さ、うなのを夫々捜し求めて頼むといふに過ぎないのであります。斯の如きは誠に此の上もなき淺はかな次第であります、我が道の信者の中でも、往々にして「頼め」とあるお言葉を、斯ういふ風に解して居る人が無い譯ではありません。併しながらこれでは眞の信心といふ事は出来ないであります。

五

我が教祖は「神は我本體の大祖ぞ、信心は親に孝行するもおなじ事」。『我子の可愛さを知りて、神の氏子を守りくださる事を悟れよ』とて、神と人との間柄は、親と子との間と同じである、この御

教へ下され、更に「神も助かり、氏子も立ち行き……」『氏子ありての神、神ありての氏子』「子供の中に、屑の子があれば、それが可愛いのが親の心ぢや、無信心者ほど神は可愛い。信心しておかゆを受けて呉れよ」とて親と座す神の無邊の大愛の程と、如何に氏子をお頼り下されてあるか、こいふ御心の程をお知らせ下されました。

『氏子ありての神』とは、神の氏子を最も信頼せさせ給ふ御心の現れたお言葉であります。世の親の我が子を命の綱として生き給ふ如く、神は實に吾等氏子を唯一の頼みとし給ふ、吾等氏子を離れて神は御在まされぬのであります。また「神も助かり、氏子も立ち行き……」とは、氏子が立ち行く様になるその氏子の喜びを御覽して、神自ら助けられ給うたかの如くに喜び給ふ、との切なる神意を明かにお示し下されたお言葉であります。我が子の病氣には、親は假令肉を殺ぎ、骨を削つても、之を救ひ助けてやらうと思つて下さる。我が子が心得違ひをして、親の許を離れ流離うて居れば、親は之を惡むよりも、寧ろ身も世もなくお嘆き遊ばされる、我が子の病氣が助かれば、神自ら助かつたかの如くに喜び下され、家出した子が再び膝下に立復れば、親は我が生命を生き延びたかの如くに喜び下さる。『神も助かり、氏子も立ち行く』。こはこの親の眞情を教へ下されたので

あつて、神を離れ、神に背いて、我れ自ら身を壊り、生命を損うて居る世の憐れな氏子を、神は遠き昔より神自らの御事として深くお嘆き遊ばされ、如何にもして之を悉く救ひ助けてやりたいと思召し下されてありました。この深き思召は『今般生神金光大神を差向け』とある如く我が教祖の神の御出現によつて達せられ、茲に氏子も喜び、神も亦お喜び下される誠に難有き世となつたのであります。

六

吾々が神のみかけを蒙り得るのは實に神のこの大愛と、信頼の御心の發現に外ならぬのであります。されば吾々も亦『神ありての氏子』とのお言葉の如く、神によつて吾れは在り、神によつて吾は生かされてある、神を離れて吾はなく、神を外にして我が生命の保ち得ない事を思つて、幸福な時も、不幸な時も、楽しき時も苦しき時も、思ふ事の成就する場合も、成就しない場合も、固より神を離れて居るのでないと、何時も喜ばせて戴き、生死共に頼み参らせて、更に迷ひ疑ひを挿む事があつてはなりません。

我が思ふ事が目前に遂げ得られ、ば、神様は難有い喜びが、思ふ事が成就せねば、昨日まで生死共に助けて下され、さまでお頼り申した我が神様を、弊た履を捨てるが如くにして、更に意にしない様なものもない譯ではないが、これは恰も親を捨て、夫を捨て、顧みぬ世の薄情者、異つた事はないのであります。誠に淺ましき次第であります。神は吾々を『氏子ありての神』と、信頼せさせ給ふに係らず、吾々が『神ありての氏子』と神をお頼り申す事が出来ないが故に、神の御心も遂には及ばぬ様になるのであります。やがて、吾れ自ら身を苦めて、自分の様なものは神佛にも見放され、世の中からも見捨てられた世を怨み神を怨み、我が身を啣つに至るのであります。『無信心者程可愛い』と仰せられ、『神の綱が切れたと云ふが、神は切らぬ、氏子から切るな』とさへ諭されてある如く、先きの先き迄神は吾々をお見捨て遊ばす事はありませぬ。親を離れて子はなく、子を離れて親はなく、夫を外にして妻はなく、妻を外にして夫はないが如く、吾を離れて神はなく、神を離れて吾はない。神人、畢竟は絶対の關係にあつて、天地の間、何物を以てしても、取り代へ得られるものはないのであります。さればこの點を深く悟らせて戴いて、生死變らぬ心を以て絶対の御信頼申すのが吾等氏子の道であります。

「頼む」といふ語には變りはなくても、その意義は一樣ではありませぬ。之を相對義に解する所に本教の信心はない、只之を絶對義に解する所にのみ本教の信心は成立つのであります。

(大正五年三月)

熱心と聰明と護持と

神に一心とは迷のない事ぞ

謂はゆる熱心

熱心なる信仰、是れ有ゆる信仰者の等しく望んで止まぬ所のものであります。私は世に所謂熱心といふ事は、頗る危険なるものにして、餘り價値を認めぬものであります。所謂熱心といふ事は、人の感情のみに訴へて居る場合が多い。

感情は人の心の作用の主なる部分を占めて居るものでありまして、人間生活の上に缺く可らざるものであります。嬉しい事に出會うて嬉しいと思ひ、悲しい事に出會うて悲しいと思ひ、美しいものを見て美しいと感じ、醜いものを見て醜いと感じ、恩を受けて難有しと思ひ、人に遭うて懐しいと思ふ、凡べて是れ情の働きでありまして、情なき人は眞に木石の如きものであつて、價値ある人といふ事は出来ない、情味のなき世の中は、眞に氷よりも冷く、冬枯よりも淋しい。

かく情は人間生活に缺く可らざるものでありますが、併しながら感情一片の生活は恰も手綱を放れた馬の如きものであつて危険の上もない。感情の強い人は僅かなる事にも非常に喜び非常に悲む、一時は難有い難有いというて居るかと思ふも、忽ちにして難有くなくなる。朝に蜜の如く親しかつたものが、夕には行路の人の如く、仇敵の如くなる事も稀れでない、忽ちにして腹立ち、忽ちにして和ぐ。さういふ様に時々刻々に變動して、毫も定まる所がない。

感情一片に驅られたる信仰は、己が氣の向いた時には、譯も何も分らずに、唯難有い難有いといつて、狂氣にならねばよいが、傍から危ぶまれる程、一心不亂になつて居る様であるが、その間、少しでも自分の氣に入らぬ事が出来たり、面白くないと思はれる様な事に出遭ふも、直ちに忘れたかの如くに捨て去つて顧みない様にもなる。昨日まで生命の親様である、生死共にお助け下され、さうして居るかと思ふも、今日は早くも神に不平を並べ、神を罵り道を譏る様になる。誠に淺間しき次第であります。感情の強い人程油断のならぬものはなく、感情一片に驅られた信心程危険なものはありません。

迷のなき事

それ故に恰も馬に手綱をつけて之を御して行くに等しく吾人は常にこの感情を程々に制御して行く事が大切であります。この感情を程々に制御して行くのは何の役目であるかといふも、それは即ち吾人の智慧の働であります。我が教祖は「神に一心は迷のない事ぞ」を御理解下されて、智慧の眼の光を失はぬ様にせよと教へ給うた。

正を正とし、邪を邪とし、善を善と見て善に移り、惡を惡と見て惡を改め、右すべきに右し、左すべきに左して聊かも惑ふ所のないのは智慧の眼の明かな所以であります。

迷いふものは、譬へば一筋の道には有り得ない事であり、また解り切つた道にも有り得ない事であり、我が家を出て、目指す處へ行かうとする場合に、心得た道筋であれば、如何に紛はしき道でも、始めから迷ふ事はない。けれども、道は幾筋にも岐れて居る、その上不安な場合には、左すべきか右すべきか、左しながら、後戻りして更に右に行かうとし、右しながら、また後戻りして左せんとする、この心の状態を迷ひといふのであります、即ち心には是れを、守る所がなく、定まる所がなくして事に當つた場合を迷ひと謂ふのであります。

一筋道に迷ひはない、平生事のない時には、迷ふ人も迷はされる人もない。皆一様に信者の態度

を装うて居りますが、例へば一朝にして病氣にでも罹るに、神に祈りつゝ回復を待つべきであるか、薬を仰いで苦を免るべきであるか、神に祈りつゝ回復を待つのは餘りに苦みに堪へ兼ねる。薬を仰いで苦みを免れるには餘りに腑甲斐なしに嘲けられるに堪へない。神を祈りつゝも不安の念を禁じ難く、薬を仰ぎつゝ安んずる所がない。これ即ち智慧の光りの暗い人の、二筋道に出會した場合の迷ひであります。今眼の前に何がしかの儲け口がある、併しこの儲けの手段は尋常の事でない。儲けを得んか神の教に背くを如何せん。神の教を守らんか、捕へかけた魚を逃す様なものである。所謂鯨は喰ひたし、生命は惜し、いふ様な事もある、これまた心の迷ひであります。『神に一心は迷のない事ぞ』この御教は、如何に神に一心不亂に信仰して居る様に見ても、如何に難有たさうに信心して居る様であつても、一旦事あるに従つて心に迷ひ疑ひを生ずる様な事では、決して一心の籠つた信心いふ事は出来ぬ。如何なる時に處し、如何なる場合に遭遇しても、智慧の光明にして斷々乎として事物の處理が出来て、己が生活の上に迷のない様であつてこそ、初めて眞の信心いふ事が出来るこの御神意であります。

そこで、この迷ひいふものは、こゝに事ある時に當つて起るものであると申しましたが、その

事は單に大事の起つた場合だけであるかといふに、決してさうではありません。吾々は動もすれば、小さな事には迷はぬが、大きな事には迷ふ、といふ様に思ひ易いのでありますが、迷ふ事柄が小さくして、さちらにしても大した結果を來さぬから、小さい事は、決して迷うて居らぬと思ふて居るのであります。けれども仔細に考へて見ますれば、私共は日夜の一擧手一投足にも殆んど迷はぬいふ事がないのであります。

例へば朝起きる時にでも、一方には早く起き出でねばならぬと思ふ心があると共に、他の一方には、今少し、今暫く、寢床の裡に包まれて居たいと思ふ心がある。それが毎朝毎朝多かれ少かれ頭の中で漸や暫く暗闘をした末でなくては、何れにこそ定め兼ねるのであります。それから電車なごに乗つて居る場合に、年老つた人が乗込む、心の一方には立つて席を譲つてあげやう、と思ふに、また一方には、自分も疲れて居るのであるからさか、誰れか他の人が立つてあけるであらうから、さかいふやうにも考へる、それで終に席を譲らずに了る様な事もある。此等は何れも心の迷ひでありまして、事が些細であれば、またそれに従つて、それだけ心を悩ますのであつて、誠に淺ましい次第であります。

さて此等心の迷ひなく、大事にも小事にも潔よく處理して行くべき智慧の光は、何によつて得るのであるかといふに、それは申すまでもなく、我が教祖生神金光大神によつて傳へられたる神の教そのものによるの外はないのであります。神の教は即ち我が心の定規であり、我が行爲の軌範であります。吾人はこれを本として一切の場合を判断し、一切の場合を處理して行かねばなりません。それ故に我が教祖は、神の教を承はる事を信心を得る上の要義をなし給つた。我が道は祈念、祈禱で助かるのではない、話を聞いて助かる道である。『さへ御理解下された。世間には、斷食や水行をせねば信心ではない。祈禱や加持をせねば神佛の利益は受け得られぬといふ信心の道も少なくないが、その中に於て、『話を聞いて助かる』といふ、これ程難有き道がまたあるではありませんか。誠に難有く尊き事の限り申さねばなりません。この尊き神の教は日夜に到る處の教會所廣前に於て説かれつゝある。かく進めよ、かく生活をせよ、かくの如き人たれ、三日夜に示されて居るのが我が道の教會所廣前にあります。されば吾人は暇ある度に廣前に參つて、絶えず新たなる心の定規を得なくてはなりません。

辛棒の徳

かくの如くにして吾々は眞の信心を得させて戴くのであります。この智慧の働きも元來一時一時のものであります。感情の働も前に述べた如く忽ちにして變り易いものであります。そこで、この迷ひなき信心を何時までも捨てぬ様、願くは我が生命を終ふる迄之を護持して、神の氏子として眞の生活を営ませて戴かねばならぬが、この持續といひ、辛棒といふ事は、吾人の意志の力による事でありませぬ。

何事も辛棒が大事であります。つまりぬ事の様であつても、五年十年、三十年五十年と辛棒するといふ事は、中々出来難い事でありませぬ。永い間には色々の困難な事も起つて来る、邪魔も入つて来る、他に嘲けられる様な事もある。

我が教祖の神、道を開かせ給ふの初め、種々困難な場合に遭遇なされましたが、その御困難なる中にも、常に『今こそ徳川時代で、石垣を積んだやうで、ピリもするものではないが、三十年先

きでは、世も變り、此道も貫く。神は守りの徳がつくまで待つ。それ迄は假令身に襤褸を纏ひ、粥の湯をすゝつて居らうとも修行して時を待て『世の人があれこれ神の事を口端にかけけるのも神のひれいぢや、人の口には戸が立てられぬ。先を知つては居らぬぞ。如何に世の人が顔にかゝるやうな事を言うても腹を立てな、神が顔を洗うてやる』等誠め勵まし給うて、御親ら二十五年の永き間、六疊一室に日さなく夜さなく、氏子の爲め、神の爲めにお盡し下された事は、如何に幸棒強き事でありましたらう。教祖の神の、此の御辛棒の御徳によつて吾人は今かく此の道に生きる事が出来る様になつたのであります。

『神に一心は迷のない事ぞ』は一面に於てこの一念護持して終世捨てぬ様にせよこの教も含まれて居ります。辛棒が出来ないといふのも亦心の迷ひより起る事でありまして『真心の道を迷はず失はず、末の末まで教へ傳へよ』は此の意味の御教であります。『信心は容易いものぢやか、皆氏子からむつかしうする。三年五年の信心では、まだ迷ひ易い。十年の信心が續いたら、我ながら喜んで我心をまつれ』是れ、辛棒の徳を教へ給うた御教であります。

神に一心

神に一心といふ事は、上來述べました如く、單に感情のみの謂でなく、更に智慧も意志も加はつて、所謂智、情、意三作用を神の教のまゝに圓滿に働かせて行く、これ即ち一心であります。言を換へて申しますれば、この三作用の極致が一心となつて現はれるのであります。我が教祖生神金光大神之を最も圓滿に、最も美しく神に致し給うたお方であります。即ち一心の誠天地に貫いて生神金光大神ならせ給うたのであります。吾人は生神金光大神の御徳を稱へ奉るに共に、生神金光大神の御徳の如何にして現はれたかを思ひ、吾れも亦其の御徳に神習らはせて戴く事を日夜の念にしなければなりません。

(大正四年十一月)

みかけの泉

今月今日で一心に頼めおかげは和賀心にあり

日々の信心

『今月今日で一心に頼め、おかげは和賀心にあり』この神訓は、吾々信心させて頂くもの、日夜の最も大切なる心得をお示し下されたものであつて、今日一日の我が心の持ち方によつて、或は神のみかけも受けられ、或は受け得られぬ事なるが故に、その日その日の心掛けを大切にせよ、この神意であります。

自分はこれまで何年の間信心をして居る、これまで道の爲めにも、教會の爲めにも色々御用を勤めたから、さいふ心が先き立つて、今の信心を疎かにしたり、今の非を蔽はんとする様な信者も、廣い世の中にはないではないが、これ程間違つた考はありません。固より神様は、假令唯今の信心が出来て居なくても、直ちにその者をお見捨て遊ばされるが如きお方ではありません。その者に今

日迄の功があれば尙ほの事、如何にもして、その者の爲めに御心をお碎き下さるのでありますが、信心するものとしてこれまで熱心な信心をして来たから、これまで道の爲め、教會の爲めに盡したから、さいふ事を鼻にかけて、今の心掛けを疎かにし、今の非を蔽ふのは、決して眞の信仰者さいふ事は出来ませぬ。信心するもの、心掛けとしては、假令神様は如何に思召し下されやうも昨日は昨日、今日は今日、さいふ覺悟を以て、日夜の心がけを謹み、日夜の信心を手厚くせねばなりません。

例へば吾人が生命を繋ぐ爲めに食餌を攝る様なものでありまして、私は昨年まで澤山御飯を食べましたから、今年は食へなくても働きます、先月中ごつさり食事をして置いたから、今月は食事しなくても宜しいさいふものはありません。昨年、先月の事は愚か、朝の御飯を戴いても、早やお晝飯が待遠ほしく思はれ、お晝飯を戴いても、また夕食を戴かねば充分に働く事が出来ないのが吾人の常であります。これが生命を繋いで行く上の必要條件なのであります。

我が教祖は『日に日に生きるが信心なり』とも諭された如く、如何ばかり昨日までの信心が出来たにせよ、今日の信心が出来なくては、食事をするのと同じで、今日の眞の生命を全うする事は出

來ませぬ。昨日の信心は昨日の眞生命を繋ぐ爲めに大切であつたのであります。昨日左様に大切であつた如く、今日の信心も今日の眞生命を繋ぐ爲めに亦大切なのであります。それ故に吾人は「今日」の信心を護持する事を、我が日夜の一大事と心得ねばなりません。

心の改まり

『今日』の信心とは、言ひ代へて見ますれば日々改つたる信心といふ事でありませぬ。我が教祖は「信心は日々の改りが第一ぢや」と御理解下されてありますが、日々に改まる所に眞の信心の力は生ずるのであります。本来信心といふことが即ち心の改まりといふ事でありませぬ。これ迄信心の出来なかつた人が一日翻然として心を改めて、我が教祖の教に基づく事が出来ればこれが即ち立派なる信心であります。身は幾年の間信徒の藉に在ることも、教師といふもの、席に列つて居ることも、この心の改まり得ざるものは、信者といふ事は出来ませぬ。

私は信仰の當初、これくゞ教へられましたので、教へられた通りにさへして居りますれば、別に改める事もなく、人のいふ事を聞くの要もないと思ひます、といふ様な事を言ひ張つて如何なるほろろ腐敗り易く、力が抜け易いものであります。

清と穢

昔し兩部神道で用ひた「一切成就の祓」といふものがありました。極く短い祓詞ではありますが、頗る理に詰んだものでありまして「極めて汚きも滞なければ穢者はあらず、内外の玉垣清淨と齋ひ申す」といふのであります。極めて汚きも滞なければ穢者はあらず、とは譬へば水にしましても、如何に汚ない泥溝の水も、始終流れて居ればほうふらも生かす、自然の作用によつて清らかな水にもなるが、如何なる清水も一所に滞ほつて居たならば、遂にはほうふらも生き、微菌も生く。人の心の持ち方もその通りでありまして、世には好きな悪人、嫌ひな善人があります。随分過失もあり、人にも迷惑をかけて、實に悪い奴であると思ひつゝ、而もその顔を見るに自ら心が解けて了ふといふ様なものが、所謂好きな悪人といふべきものであります。この種の人を何故人が好

くのかさいふに、過失はありながら、人に迷惑をかける様な事をしながら、自ら省みて、忽ち悪かつたに潔く心を改めるが故でありまして、恰度汚い水でも流れて居るに、ほうふらが生かぬと同じいのであります。所が又世には、彼の人は誠に正直者ぢや圓い人ぢやこいはれる様な人でありながら、その人の顔を見るさへ氣持ちが悪くなる様な人もあります。嫌ひな善人はこの種の人をいふのでありますが、何故かさいふに、正直者である丈に、一度腹を立てるに、何時までも何時までも心が解けないで居たり、一度心配事が出来るに、何時までも鬱いで居たり、一度つまらぬ事が出来ると、何時までも愚痴や泣事ばかり並べるが故でありまして、恰度、清水も滞ほるにほうふらが生く様なものであります。神様はこの二人の何れをお好み遊ばさるかさいへば、寧ろ前の人の方であらうと思ひます。

凡べて心に潔く改まる所がなかつたならば、外形は立派に見えても、その中味は既に死んで居るのであります。まさかの役には立ちませぬ。いつぞや、近所の或る店で玉子を二ツ三ツ買った事がありました、割つて見るに何れも腐つて居りますので、それを取代にやつて、持つて歸つた代りのを割つて見るに、それも腐つて居る、用が缺けるものでありますから三度ばかり取り代へにや

つたが、何れも腐つて居る。私も氣の毒になり、店でも氣持ち悪く思ふだらうと考へて、他の店へ買ひにやられた事がありました、その店頭を通るに、澤山玉子が並んで居るのを見て、腐つたのばかり並べて居るわい、可笑しく思つた事がありました、信心もその通りで、外形は他の眞の信者と變りはない様でも、心に改まりのない人の中味が腐つて居るから、いざさいふ時の間には合はぬものであります。

心の改まりと神のみかけ

以前承つたお話であつて或は聞き誤りの點があるかも知れませぬが、或る地に熱心な一信者がありました。夫婦暮しであるが、稼業は紙屑を商ふ人であつたさうであります、如何にも貧しい人であつて、毎日一生懸命に稼いで、元金も利益も入れて日に十錢餘位づゝしか収入がないので、殆んどその日の煙も立て兼ねるさいふ様な有様であつたが、それでも毎日缺かさず朝夕教會所に参拜して居りました。その間に或日ふと思ふ様は、斯様な貧しい生活では誠に困る。朝夕お廣前に参拜する暇にそれだけ餘計に働いたならば、それだけ収入も多くなるだらう、と勘定を立て、やが

て翌日からは、その通りに實行する事になつた。相變らず一生懸命に働いて居つたさうであります
 が、暫く経つて、ふとした事から病み付いて、主人は全く病床の人になつた。唯さへ食ふや食はず
 のものが、かうなるに全く火の消いた様な始末になりまして、果ては如何にもする事の出来ない不
 幸の真底に陥つて了つた。そこに至つて主人は漸くの事で氣がついた。それはさうかといふに、教
 會所へ参る暇で、最初思つたのが、抑々信心の抜ける初めであつた。自分は元來めぐりの深い身
 であるのを、出来ないながらも、信心させて戴いて居たおかげで、神様が重いめぐりをも押へて下
 されてあつたのであるが、信心が抜けたから、我から神の御手を振り切つたが故に、重いめぐりが、
 その儘に現はれる様になつたのである。誠に申譯のない事をしたと思ひつきました。さう思ふに矢
 も權も溜らず、せめては妻なりにもお廣前へお詫びにやりたい、妻を呼んで見たが、妻の居る氣
 配がないので、さらばせめても我が家の神前でなりにもお詫びを申上げねば濟まぬ、と思ひ立つて、
 重い頭も、やつと擡げるこゝが出来て柱や壁を力に辿りついて見るに、神棚は塵に埋れ、立て、あ
 る櫛は、何時のものか全然焼付けの様になつて居るこゝ始末であります。恐入つて、あたりを拂
 ひ清めて、心の底から、前非を深くお詫び申上げました。そこへ妻も外から歸つて來たが、病床に

あつた我が夫が、そこに居りますので、その故を尋ねるに、實はこれくであるに、我が心の中を
 明しましたが、妻も、實は私も今日といふ今日は、そこに氣がつかまつたので、あなたには無斷で
 唯今お廣前にお詫の爲めに参拜して歸つた所でありまして、さういふ様な事であつたが、かく夫妻期せ
 ずして同じ心に改まりましたが、それと同時に主人の病氣も漸次に快方に赴き、日ならずして全快
 するに共に、稼業の方も、以前に立増さつた収入を得る事が出来る様になつた、さういふ事でありませう。
 この人が初め信心に迷ひ心が出来たのも、一つは貧苦に迫つての事ではありませうが、信心さへ
 健固であれば、貧苦に迫れば迫る程、益々心は確かになつて來べき筈なのでありますが、日夜の参
 拜が、いつか外形のみに流れて、實際の中味は空になつて居たものに見えます。その人の不幸は、
 即ち心の改まりの出来なかつた所に生じたのでありませうが、併し以前熱心な信者であつた丈に、
 不幸のどん底に陥つてからではあつたが、心を改める事が出来たが故に、またみかけ花咲く春も回
 つて來たものと思はれます。改りなき心程危いものはなく、改まつた心程強いものはありませぬ。

知らず識らずの罪

吾人の心は管に滯ほつて、自然に腐敗を來すといふ丈けに止らないで、恰も新しい衣物の袂にも、何時の間にか袂くそが溜ると同じ様に、それ心には意識ないでも、種々の罪惡を累ねるのであります。

凡そ信心する程の人でありましたならば、苟にも國の法律に背く様な惡事や、人の目に見て譏しられる程の惡業を犯すものはない筈であります。しかしながら、如何國法に觸れず、世間の所謂道徳律に反らぬからきて、寸毫の罪惡を心に犯さぬかといへば、決してさうでない、或時、二代様は御親らの事に擬へて「私でも奇麗な人が參つて來れば、ア、美人ぢやと思ひます。さう思ふと共に神様に相濟まぬ事を思ひました」とお説を致します。「といふ意味のお話を以て、或る者をお誠め遊ばされた」と承つて居りますが、吾人にはかゝる心持ちが絶えず頭の中を往來して居ります。また人が好い物を持って居れば、ア、好い物ぢやと思ふ心もある、これ知らず識らずの間に人を犯し、人の物を食ふ心であります。老人が電車に乗れば、席を譲つてあげやうと思ふが、自分も疲れて居るのであるからと思ひを翻して、席を譲る事を自ら拒む事もある、これ知らず識らずの間に人を苦めて居るものではありませぬか、自ら偽つて居るのではありませぬか。凡そ斯の如きは他人も何ご

も思はねば、ましてや國法に觸れるといふ程の事でもない、併しながら罪は慥かに罪であります。これ等幾多の罪惡が我が心の滯ほりにつけ入つて、終には深いめぐりの谷間に身を陥れる事にもなるのであります。

己が我が強い場合には、我が爲めに良心の働きが鈍つて了つて、一旦は悪い氣がついても、直ぐにまわりの人を見廻してあの人でさへ彼の様な事をしたのであるものを、自分の之れ位の事は、さ打消して了つたり「盜賊にも三分の理あり」といふが如く、さうにか理屈をつけて、己が不安を韜晦す様な場合もある、誠に恐ろしき我が心と申さねばなりません。

神の恵に差別ありや

神が氏子を慈ませ給ふ御心は、人の智愚善惡によつて差別はありませぬ。是れは賢いから多く恵んでやるが、彼れは愚かであるから少しの恵みしか垂れ給はぬさか、是れは善い事をするから餘計に可愛がつてやるが、彼れは悪い事をするから苦めてやるさか、いふ様な別け隔てをなさる事はない。子供の中に屑の子があれば、それが可愛いのが親の心ぢや。無信心者は神は可愛い。信心し

ておかけを受けて呉れよ」こまで思召下さるのが我が親神様の御心であります。然るに、この平等なる神の御恵に與るものゝ與り得ないものが出来るのは、何所にその區別があるのか、こいふこと、皆己が心々による事であつて、神には會つて變りはあらせられぬ。譬へば、同じ光を浴び、同じ濕ひを得、同じ空氣の中に生ひ立つ草木も、われから倒れて了つては、その平等なる恩恵を受ける事が出来ぬ。「おかけは和賀心にあり」とは即ちこゝの處でありまして、心の改をなし得るか否かの、一本の毛筋を争ふほどの僅かの所に區別がある。

元日も大晦日も天地に變りあるのではなく、世の中に變りがあるのではありませぬ。然るに元日の天地に大晦日の天地は、全然變つて居るかの如くに思はれる。元日の世の中は、大晦日の世の中は、全く入れ代つたかの如くに思はれるのが常であるが、天地に變りなく、世の中に變りはないが、我が心に變りがあるが故に、かくの如くに感ぜられるのであります。悪い奴ぢやと怨んだ人も、我が心が改まれば難有い人ぢやと思はれるのが世の常であります。

新しき天地

『今天地の開ける音を聞いて眼をさませ』我が教祖は警告し給うたが、天も地も昔から今日に至つて寸毫の變りはない。その變りなき天地に住しつゝも、身にめぐりあり、心に罪あり、愚痴貪慾の殻の中に屈んで居たならば、天地は常に薄暗く狭苦しいのであります。一度我が教祖の教によつて吾人が心を改めて觀たならば、明るく廣く神の恵に充ちた天地はそこに顯現されるのであります。改まる所に信心の力は生じ、改まる所に我が行く道は開け、改まる所に天地の無限の光明の恵澤を吾身に齎し來るのであります。吾人に取つて「今月今日の信心」ほご大切なものはないではありませんませぬか。

(大正四年十月)

我情我慾

二四六

一

我が教祖は「我情我慾を放れて眞の道を知れよ」と神訓せさせ給うたが、この我情我慾といふ事を、普通には身慾身勝手、即ち自分の幸福を希ひ、自分の喜びを得るが爲めには、假令人は泣いても悲しんでも、假令人は苦しんでも不幸になつても關はぬといふ恐ろしく淺ましい心の働きを指し示されたものであるといふ様に解するのでありますが、勿論これ等は、我情我慾の大なるものではありますが、凡そ信心するといふ程の人であつたならば、誰にてもかゝる恐ろしく淺ましい心を持つものはありませぬ。然らばお互信心するものに取つては、この我情我慾といふものが無い、従つてこの神訓は吾々には要のないものであるか、といふに決してさうではありませぬ。

二

私共の日夜に心に思ひ、身に行つて居る事を、仔細に省みまするに、殆んど凡べてが、我情我慾によつて縛られて居る様に思はれます。従つてこの神訓はお互の片時の間も忽せに思つてはならぬ大切なお言葉であると思ひます。

三

例へば日夜の心の働の中に、腹立つ、といふ事がある。我が教祖は「腹立ば心の鏡のくもる事」を戒め給うたが、この腹立つ、といふ事が、吾々にあるのは、何が故であるかといふに、自分には間違ひない、自分は正しい道を履んで居るのに、誰某が、自分にこれ／＼の事を言ひ掛けた、これ／＼の事を仕向けて来た、誠によくない人である、悪い奴である、怨めしい奴である、悔しい事だ、腹立たしい事だといふのが即ち吾々の腹立つ時の心状であります。ここに、自分には間違ひない、自分は正しい道を履んで居るのに、と思ふ心は、抑々吾々の「我」のいふものではありませんまいか。凡そ他の人が自分に對して、何さか彼さか言掛けたり、仕向けたりするのは、固よりその人に善くない點もあるであらうが、かくの如くにされるについては、自分の何處かに間違ひがあり、何處か

二四七

に足りない點があるに相違ない。吾々か一度己が「我」の殻から立ち出で、穩かなる心、靜かな平らかな心になつて考へるに、何人もそこに考へ至るでありませう。一度かく考へて見ますに、徒らに他に對してのみ怒を含み、怨を覺え、自ら業を煮やす事はありません。却つて自ら戒め、自ら慎み、自ら教へ、従つて正しい道に自ら進む事が出来るのであります。即ち心の鏡清らかに照らし、眞の道自から現前れるのであります。昔の話に、或る仲の悪るい夫婦があつて、毎日の如くに喧嘩をする。或る日も例の如く争を起して、果ては切るの殺すのこいふ騒ぎを惹き起しました、その家主は、またか、と思ひ、何にかして之を改めさせねばならぬと考へて、喧嘩して居る最中に、その家に飛び込んで、突然、店に列べてある商品をボカク、外へ投げ出すので、今迄夢中になつて争つて居た夫婦も、その様を見て非常に驚いて、今迄の争も忘れて、何故他の家のものを、そんなに投げ出すか、如何に家主さんでも餘りの事であるか詰つた。家主は、お前等には、もう要のないものだと思つたから投げ出したのだと答へた。何故かと質すに、家主は濟して、只今聞いて居れば、お前等は切るの殺すのこ云うて居る、何方が切れても殺されても、お前等は今日限り此の家へ歸つて来る事も出来ねば、この大切な物を所有つ事も出来ない、それ故、今のうちに、斯うして投げ出して

やるのだ、と答へたので、夫婦も漸く心づき、誠に申譯のない、つまらぬ争を致しましたが、以後はきつと改めます、と謝したこいふ話がありますが、これは即ち人心の機微なる點を捉へて戒めたものであります。夫婦喧嘩をして居る時には、互に己が「我」に囚はれて言ひ争つて、果ては切るの殺すのこいふ騒も起つたのであります、一度家主こいふ他人が入つて来て、大切な品物をむやみに投げ出す。これは夫に取つても損であれば妻に取つても損である。即ち利害が一致するが故に、その時は互に「我」が無くなつて、自から今迄の争も止んだのであります。吾々の日常の事に、腹の立つ場合のあるのは概ねかゝる事が本になるのであります。

四

更に吾々には日夜に絶えぬ心配事があります。この心配の起るのは、如何なる事に萌すか、こいふに、即ちこれも自分で始末せねばならぬ、あれも自分で工面せねばならぬ、自分であれも、これも、と思ふ所から、固より限りある我が身であるが故に、あれも心配になる、これも氣掛かりになるこいふ様になるのであります。かくて心配は心配を生み、苦みは苦みを累ねて、終には心を害ひ

身を毀るに至るのであります。我が教祖は「心配する心で信心をせよ」と諭し給うた如く、自分であれも、これも、と思ふ「我」の殻を破つて、一旦廣く大なる心になり、「我身は神徳の中にいかされてあり」と開悟する時、そこに始めて大なる天地開け、明かなる神の御光を仰ぎ、我が進むべき道も自から開展するのであります。お互の多くの心配も、萌す所は亦己が「我」に執着するからであります。

五

可愛いと思ふは人の最も美しく貴い心根であります。我が教祖は「可愛いと思ふ心が神心ぢや」とまで仰せ遊ばされました。この可愛いと思ふ美しい貴い心も、動もすれば我情に走せて、一方を可愛いと思ふ餘りに他方を疎外し、可愛いと思ふ餘りに正道を踏み外す事も出来ます。されば教祖の神も「わが子の病氣でも、可愛い」と思つて、うろたへるまいけぬぞ、云ふ事を聞かぬ時は、まよふと思つて、放つておくやうな氣になつて信心してやれ、おかけが受けられる」とも諭されました。

慶應三年九月に、教祖の神の或るお子様が病氣に罹られました。二十二日には已に九死一生といふ重態に陥られました。夫人は教祖に對ひ給つて、「この通りであります、如何致しませうか、命乞ひをお願ひをして下され」と請はれました。所が教祖は「命乞ひの願ひに、する、内の者は皆神様の物、日頃の心得方を改めよ。大切な年に一度の御祭に、死ぬるまいふ様な病氣になるのも、家中の心から、致し方なし、死んでも大事な、放つて置け。私は今日はあなた(神)への御用致さねばならん」と厳しく申渡されました。恰も「可愛いと思ふな、打ち殺して丁へ」との御神傳さへありました。かくて教祖は「これでも持つて行つてねぶらせ(嘗めさせ)てやれ」と御神前の神酒を下けて夫人にお渡し遊ばされました。かくて忽ち快方に赴かれて十月の朔日には全快遊ばされた事申す事でありませう。私共は教祖の神に申せば、誠に穩かなお方であらせられた、このみ思ふのであります。私情に囚はれさせ給はぬ教祖には、かゝる秋霜烈日も申すべき冒す可らざる一方向が懺存遊ばされたのであります。

六

その他お互に、何卒して神の教通り守らせて頂きたい、神の教を實行に現はしたい、と思ふこの
 貴い心の中にも、動もすれば己が「我」の囁きを聞く事があります。神の教を守らせて頂きたいと思
 ふは人の貴き願ひでありまして、その心の中には「我」の交る事はあるまいと思はれるのであります
 が、實際は「我」に囚はれる事がある。その證には、如何にしても教が守れず、却つて教に背く事が
 出来るこゝ、その場合には何もなく神様を恐れ、神様に隔てを置き、自ら神に遠かる様な心が起りま
 す。我が教祖は「神を怖れるやうにするに信心にならぬ、神に近寄るやうにせよ」と諭されてあり
 ますが、前述の如く實際怖れ遠かる心になる事があります。それと同時に、若し一つでも神の教に
 副つた行が出来ることなるこゝ、今度は人に誇りがましき心になり、他に銜ふ心を抑へる事が出来ぬの
 であります。これ「我」に囚はれて居るが爲めではありますまいか。神の教を守らせて頂きたいと思
 ひつゝ、神に離れ神に遠かるのは誠に悲しい事でありまして、また守れたからとて人に誇り顔になる
 のも淺ましい事でありまして、守らうと思ふそこに「我」の潜む穴がある。守らんとして守り得ざ
 る程自分は何ぐり深き身である、かゝるめぐり深きつまらぬ吾をも神は天地の懷ろに入れて愛し導
 き恵み給ふ、と思へば、只難有しと思ふ心の外はありませぬ。心一度びこの境地に入つたならば、

守らう、と思はなくても自然に神の御心に副ふ行爲も現れ来るであります。

七

更にまた私共は、みかけを頂きたいに神に求める心が強い、信心を結果の上から見れば、畢竟み
 かけを蒙る爲めの信心であります。併しなからみかけを頂きたい、頂きたい、このみ思ひ募つて居
 りますこゝ、そこに「我」のいふ恐しいものが潜む事になります。即ち我が願ひ通りにみかけを蒙るこゝ、
 信心が不要になつたり、みかけが思ふ通りに蒙れぬこゝ、神に不足を申し上げ、神を怨み、自分を果
 敢なみ、果ては神を對ふに廻はす様な心にもなる。何れも「我」の執着があるからであります。自分
 で斯うして頂きたい、あゝして貰ひたいと強請らなくても、固より神は我が心の内も外も、身の現
 在の状も、行末の事も一切を知食し給ふ。されば一度神を信じ奉る上は、一切を捧けて、神の思召
 の儘に、任せ頼る心になる事が最第一でありまして、自分でかくなれば善い、と思つても先に行つ
 た悪しき事があり、目前に斯くあれと祈る事が、却つて我身を損ふ様な事柄がある場合もあります。
 されば眞に神を信する上は、廣く大きな心になつて、徒らに齷齪せぬ事が肝要であります。

以上の如く、假令お互は、身慾身勝手な心で、人を苦め他を傷ける様な悪心がなくても、日常の我が心の働き、身の行爲を省みるこゝ、そこに幾多の我情我慾が潜んで居て、殆んど一にして、その纏縛によつて苦められぬ事がないかの有様にあります。この我情我慾を如何にかして放れたい、と思ふ心も實は大きな「我」の執着であります。

お互は今は何思ふ事もありません、かゝる身をも神は我が子として、この天地に生かさせ給ひ、神の懐に入れて愛育し給ふこの「神徳の中に生されてあり」てふ事實を只有難しき信樂して、一念惑ふ事なく神にお任せ申し、お縋り申して行くより外はない。この一念の發起する所に神のみかけも人の道も自ら現れ来るのであります。我が教祖の御理解に、

信心すれば、眼に見ゆるおかけより、眼に見えぬおかけが多い。知つたおかけより、知らぬおかけが多いぞ。後で考へて、彼もおかけであつた、此もおかけであつた云ふ事が了解るやうになる、さうなれば眞實の信者ぢや。

ごあります。一切の我情我慾の離れ得た刹那に、この眞實の信者は現はれる事信じます。あゝこの眞實の信者！

(大正四年八月)

歡喜の生活

我身が我自由に成らぬものぞ

二五六

天地自然の征服

人は飽くまでも自由を希ひ、何事も我が力、我が智慧により爲し得ない事の無い様になりたく欲する性向を有つて居るものであります。天地自然をも人の力によつて左右し、征服したいと巧らんで居るのであります。近代の文明は、實に人間の此の性向の現れでありまして、昔は鳥の外には空は飛び得ないものと思はれて居たものが、今日では機械の力によつて、人も亦自由自在に空を驅ける事が出来、昔は魚の外には水は潜り得ないものと思はれて居たものが、今日では機械の力によつて、人も亦自由自在に水を潜る事が出来る様になつた。汽車、汽船といひ、電信、電話であるといひ、無線電信、無線電話であるといひ、その他日常萬般の事に於て、昔の人の夢にだも見る事の出来なかつた利便を得て、誠に幸福なる生活を遂げる事が出来る様になりましたが、これ等は一人間の能力の發現でありまして、この先何處まで人智が進むか、殆んど計り知る事が出来ない様な有様であります。

天地自然の復讐

所が一步退いて此の日進月歩なる文明の裏面を一度窺つたならば如何でありませう。表面に於ては、昔の人の知る事の出来なかつた色々の便利にして幸福な生活を遂げて居る様であります。その裏面に於ては、亦昔の人の知る事の出来なかつた色々の苦痛や不幸を嘗めて居る様であります。例へば、手近い所から考へて見ましても、今日は昔の人の曾て罹つた事のない様な幾多の新しい病氣の爲めに苦められて居ります。尤もこの病氣の中には、昔は在つても氣のつかなかつたものが今日次第に知れて来て、病の數が殖いた見られるものもありませうが、併しながら、世の進むにつれ、社會の複雑になるにつれて、新たに發生したのも少なくないでありませう。殊に精神病者の如きは、年一半、その數が増して来る様であります。その他自殺者の如き、犯罪者の如き墮落者の如き、これ亦年一年と殖えて来る様に思はれます。總じて今日の人の心には餘裕がありません。

二五七

生活難の逼迫の如きは云はずもあれ、一寸道を歩くのにも、電車に來ればせぬか、自動車に衝突か
 れはしないか、さういふ様な不安な思ひに襲はれながら恟々しつゝ、歩かねばならぬ。野に出て、煙
 突の煙に苦められたり、機械の響きに惱まされたりして、晝も夜も、居ても起つても、殆んご心に
 餘裕さういふものはありません。

表面に於ては世の中が進んで來た、便利になつた、幸福になつたと思ひますが、その裏面
 には忙しくなつた、弱くなつた、苦しくなつた、物狂ほしくなつたと思ひて居るのであります、
 恰もゴム風船を押す様なもので、一方が飛び出たかと思ふと一方が引つ込んで居るのであります。
 一方に人は天地自然をも征服すると思ひて得意になつて居る間に、突んど知らん他方からは着々々
 して天地自然の復讐を受けて居るのであります。

人間の慢心

若し人間の能力が眞に限りなく働くものであると思ひましたならば、かゝる矛盾はない筈であり
 まして、表面が幸福であれば、裏面も亦幸福であるべきであります。然るに實際は、さう行かぬ

いふ事は、即ち人の力に限りある事を明にして居るのではありますまいか。

吾人は身體が壯健であれば、それに慢じて、健康さへあれば世の中の事は思ふ儘であると思へ、
 財産があれば、財産あるに任せて、金銭さへあれば世の中は自由自在であると思ひ、學問のあるも
 のは、亦學問さへあれば世の中の事は心配するに及ばぬと思ひ、門地のあるものは亦身分さへあれ
 ば、世の中の事は如何様にもなるものと思へるのであります。併しながら吾々一寸足を動したくて
 も、一寸手を動かしたくて、如何にも身體を動かす事の出來ぬ事があります。日に三度の食事は、
 自分の力で求め、自分の力で食へるのだと思つて居りますが、時による、求めるべき金銭は積ん
 でありながらも、一粒の米さへ求める事の出來ぬ事があり、前に山海の珍味が列ねられてありなが
 らも、自ら箸を下す事さへ出來ぬ事があり、更に箸を執つて口にしても、臆を嚙むが如く、砂を嚙
 むが如き思ひのする事もあります、何時までも若くてありたいと思ひつゝ、腰が弓の如くになり、
 髪が霜の如くになつて、老ひさらばうた醜い體を市に晒さなければならぬ様にもなるし、何時迄
 も生きて居りたいと思つても愛別の涙を潑がねばならぬ時もあるであります。我が教祖は『我身
 が我自由にならぬものぞ』障子一重がま、ならぬ人の身ぞ』とて、人の身のま、ならぬ淺間しきも

のなる事を教へ給ふた。人の力や分別が限りなく何事にも働くものであると思ふのは、即ち人間の慢心であります。抑々人間の身體がかく各自に小さく分れて居るこいふのが、既に不自由極まるものであるこいふ證ではありませんか。我が教祖は『慢心が大げがの元なり』と戒め給うたが、前に述べた天地自然の復讐こいふも、即ちこの人間の慢心に伴ふ果報であります。

あ き ら め

かく人は小さく弱く、まゝならぬ不自由なるものであつて、榮枯盛衰常なき、憐れなる一生を營むのは、誠に悲しく淺間しき限りであります。如何に努力すればとて、既に見當は定まつて居り、如何に奮勵した所が大凡そ先きは見えて居る。かくて吾々は動もすれば人の身にあきらめをつけ、人の世に見限りをつけて、世を捨て、家を遁れて佗しい世渡りをしやうとする心にもなり、若くは浮世を程よい加減にして渡つて行かうとするのであります。古の世捨て人は、皆この人の身にあきらめをつけ、人の世に見限りをつけた人等なのであります。

我 の 執 着

以上、人の能力は如何なる時にも、如何なる場合にも、限りなく成し遂げ得られるものである。天地自然も悉く人力の左右し得るものであるこいふ、思ひ昂り、慢じたる心、人の身は果敢ないものである、世の中は淺間しいものであるこいふ、あきらめ果てた心は、これを吾々是如何に考ふべきであるか。慢じたる心も己が我情我慾の働きであり、あきらめ果てた心も亦己が我の執着の結果であります。我が力、我が智慧で斯うしやう、彼しなればならぬ、通常に我が小さき力により、我が果敢なき分別に頼つて居ればこそ、何物も辨へ得られるこいふ様な慢心も起れば、さうも思ふ様になり兼ねるこいふあきらめた心にもなるのであつて、吾々は何れも人生の眞に正しき行き方であるこは思はぬのであります。

神 徳 の 中

我が教祖は『疑ひを離れて廣き眞の大道を開き見よ、我身は神徳の中にいかされてあり』と教へ給うたが、かく天地自然を征服するこいふ人も、浮世をあきらめたこいふ人も、何れも神の御徳の外にあるではありません。如何なる人も、何處の果てに住む人も、天地の神徳の外に居るのでは

ありません、悉く神の懐の裡に生きて居るのであります。吾々が、斯く生きて居る事が自分の力であると思ひ、我が力で爲し、我が分別で辨へると思つて居るのは、悉く我が我情我慾の作用であつて、我が力では足一つ動す事も、手一つ動す事も出来ないであります。そして、この我が力といふのも、既に我が力ではありません。魚は我が力で水を泳いで居ると思つて居る、併し水を離れては一寸も動く事は出来ません。天地の神徳を離れ、神の慈愛深き思召を外にしては、我が身は存在しないのであります。

人事を盡して天命を待つといふ事

よく人は「人事を盡して天命を待つ」と申します、例へば病氣に罹つた場合にても、醫者にも診て貰ひ、人が、功能があるといふ事、悉くをし盡して、而も醫者も終に見放し、功能があるといふ事をし盡して功能もない、といふ行詰りまで行く、斯程までに心を盡し、力を盡して効驗がないのであるから、これ以上は神の御力によらなくてはならぬ、といふ様な事を申します。即ち十のものならば、六七分までは人間の力で出来るが、餘の三四分といふ處は神の力によらなくてはならぬ

といふ考へを普通によく持つのであります、これは非常な間違ひを謂はなくてはなりません。これまで人の力で出来るが、といひ、こゝからは神の力によらねばならぬ、といふ程度は、吾々は何によつて定めるのでありませうか、こゝ迄は、といひ、これ以上は、といふ事も一切が神の力によらなくてはならぬのであります。それを「人事を盡して」といふのは神の力を人間の力の補ひにし、助けにするといふ考へでありまして、此上もない不了見を謂はねばなりません。「人事を盡す」といふ事それ自身が既に神の力によるのであります。

神の御心

我が教祖は「我子の可愛さを知りて神の氏子を守り下さる事をさこれよ」と教へ給うたが、親が我が子を愛して下さるのは、決して一時の氣紛ぐれではありません、一時の氣紛ぐれといふのは、今一時可愛いと思つたから可愛がる、今悪いと思つたから悪がる、といふ様なものが即ちそれでありませんが、他人の子ならばいざ知らず、我が子に限つてそんな事はありませぬ。我が子の身の上に起り来る事は、善き事も、悪しき事も、幸福も不幸も、一切を親は我が身の責任として、我が身に引

受けて下さるのが眞の親の愛であります。即ち我が子が悪い事をした、國の法律に背き、人の道に外れた事をした場合にも、親としては、子供の心掛けが間違つて居るから、かゝる事も仕出來たのであるから自分は關係がない、さうして済まして居られるか、さういへば決してさうでない。我が子が不幸に遭つた場合にも、親としては、それは子供のやり方が善くなかつたから、こんな事にもなつたのであつて、自分は更らに存せぬ事であるとして、平氣で居られるか、さういへば決してそんな事はない。我が子が人の道に背き國の法律に觸れる様な悪事を働いた時にも、我が子を責めるよりも、親自身の身を責めて悲しく思ふて下され、不幸に泣く時にも、親は我が子を責めるよりも親自身の子に對する心掛けが足りなかつた故に、かゝる事にもなつたのであると、不慙に思つて下されるのが即ち親心でありまして、親としては我が子の一切の運命が悉く親の手にあるものと思つて、善きにつけ悪しきにつけて、我が子の行末遠き後の事までも、彼此心配して下さるのが即ち親心であります。神が吾々氏子を愛して下さるのも亦此の如く、氏子の身の一切の事、氏子の運命は、悉く神御自ら責を負うて深く厚く思召し下さるのが即ち神心であります。「子供の中に屑の子があれば、それが可愛いのが親の心ちや。無信心者ほど神は可愛い。信心しておかけを受けて呉れよ」

こは、この切なる神の御心をのべ給うた御理解であります。

吾々が不幸な時も幸福な時も、善い事をした場合も、悪い事をした場合も、神は時の間も我れに御心を離し給ふ事なくして、一切を神御自身に引受けて御心配下され、思召し下されてあるのが即ち我が天地の親神の御心であります。

子供が濫き親の懷に抱かれて居る時に、何の不安がありますか、何の苦痛がありますか、何のもごかしく思ふ事がありますか、我が身が神の大愛に抱かれ、神の慈愛に包まれて居るに悟る時、我れに何の不安があり、何の苦痛があり、何のもごかしく思ふ事がありますか。我が力で何事も出来ると思ひ昂り慢する事も要らなければ、また身を果敢なみ、世を厭ふ要もない。只神の思召のまゝに、只神の御教のまゝに日々を嬉しく勇ましく、實意可憐に我が務めに盡させて頂く事が吾々の道ではありませぬか。

我が教祖の御生活

我が教祖の神は、御生涯を、何も知らぬ無學の百姓として、常に御身を遜り遊ばされ、何事をな

さるにも、更に自らの御計らひに出でさせ給ふ事なく、日常一切の事、悉く神の御心により、神の御教によつて之を決し給うた。教祖の御生涯を一方から拜しました時、世にこれ程弱き小さき意気地なき生涯がありませうか。併し他の一面から拜します時に『天地の神と同根なり』此方が祈る所は天地金乃神と一心なり』とある如く、神と共に悠久にして遍満なる教祖一代の御生涯は、實に無限の尊さ、無限の權威、無限の大さを感ぜずには居られませぬ。最も弱きもの最も意気地なきものが、同時に最も強きもの最も大なるもの最も權威あるものとなつたのが、即ち我が教祖の神の御生涯であります。信仰の尊さは即ちこの一點に存するのであります。

歡喜の生活

我れに我の執着があるが故に、吾々は自ら慢じたる心になつて罪の果報を受けねばならぬ。我れに我の縛縛があるが故に、吾々は自ら身を厭い、世を果敢なむ心にもならねばならぬ。一度「我身は神徳の中にかされてあり」と悟る時、一切の我情もなく我慾も起らず、只天地の親神の大愛に抱き取られ、天地の親神の光明に攝取せられ、一の慢心もなく、一の悲観もなく、最も弱く小さき生

活は、最も強く大なる生活の開展を見、日夜を歡喜の中に實意叮嚀の道を歩みつゝ、無限の神の道を進む事が出来る、是れ金光教徒の生活であります。

(大正四年七月)

我が祈り

二六八

信心する人は何事にも真心になれよ

我が教祖は「信心する人は何事にも真心になれよ」を教へ給うて、日常一切の行爲に對して「實意叮嚀」なるべきを吾々に求め給うた。従つて我が道に入つて居る人は、此の神意のまゝに、何事にも實意叮嚀を基本として、日夜に生活して居られる事信じます。

何の爲めの實意叮嚀

實意叮嚀なるべき事を吾人の日夜の心掛けすべき事については、我が道の人は何人も異議のない事でありませうが、然らば、何故に何事にも真心にならねばならぬか、何故に實意叮嚀であるべきであるか、さういふ事については、必ずしも人々の思ふ所が一致して居るさういふ事は出来ないのでありませう。この點について、實際にある最も多くの人の考へは、實意叮嚀にするのは、神の恵を得

る爲め、或は神の咎を蒙らぬ爲めである、さういふ事にある様に思はれる。かゝる考へは、固より間違つて居ることは謂へぬけれども、充分立派な心掛けであるさういふ事は出来ませぬ。それは何故であるかといへば、善い事をする、悪い事をしてないさういふ事が、神の恵に與りたい、神の咎を受けたくないさういふ點にあるのであつて、言葉を代へて謂へば、神の恵に與りたいから善い事をする、神の咎を得たくないから、悪い事をしてないさういふ事になるのでありまして、茲に最も極端な例を取つてお話するに、猫や犬は、主人の大切な物でも何でも、自分の好む物は容赦なく之を食むものであるが、若し人が監視して居る中々手を出さぬ、見ても見ない様な風をし、欲しくても欲しくない様な様子を装ふ。この場合は、眞に彼等が行儀が良いのであるか、さういへば決してさうではありませぬ。約りは下手な事をして、主人から叱言の一つもいはれ、頭の一つも打たれる事が恐しいから、唯だ一時外形に装うて居るに過ぎないのでありまして、畜生の本性は決して失つて居るのではありませぬ。前述の如き觀念から善い事をするさういふ人は恰も彼等に類した考を有つて居るものも申しても差支ありません。

信心の本末

二六九

抑々人が善い事をする、悪い事をしない、さいふのは、神の御恵に與る與らぬ、信心するから、信心しないから、さいふ様な事の爲めではありませぬ。此等は末の末でありまして、その根本義とする所は、神の氏子たる本來の面目を全うする點にあるのであります。神の氏子たる本來の面目を全うする爲めには、その身の目前の利不利幸不幸さいふ様な事を顧るの暇はない筈であります。

教祖の御生涯

我が教祖の神は、我が天地の親神を信じ給ふ様になつて後に始めて實意叮嚀の御心を發し給うたのであるか、さいふに決してさうではあらせられなかつた。何れか謂へば、教祖の生來の實意叮嚀なる美しき御資性に對し、至誠至純の御心に對して、天地の親神が感應遊ばされ、顯現遊ばされたのであります。この點は吾人の常に尊く難有く思ふ所でありまして、吾人我が道を行くもの、忘れてはならぬ最も大切な點であります。我が教祖は、齡十二歳にして川手氏に養はれ給ふや、御養父母に對し奉られての最初の願は『私は神佛に参りたうござりますから、休日には心ようお暇を下さりませ』さいふにあらせられました。如何に尊いお言葉であります。こゝに『休日には心ようお

暇を下さりませ』とある御一言は、既に教祖の全御生涯を盡して居るではありませんか。教祖のこの幼き御心には、如何に神佛への参拜なりとも、それが爲めに稼業に差支を來たして、延いて御両親に御迷惑なき掛けては、折角の参拜が無意味になるから、働くべき時には充分に働き、そして休日を以て神佛に参拜したいと思はれたのでありませう、その休日の参拜も、御両親が御不承知であったり、承知はなされても、内心快く思召されぬ様では、却つて親に不孝であり、また神佛に對し奉つて不敬である、この尊き御心があらせられたものご伺ひ奉られるのであります。御齡三十三にして四國八十八ヶ所を巡拜遊ばされた際の如きも、連れの人等は行手を急ぐ所から、邊鄙の地に於る靈場は、いつも街道から『何々地にましますお大師様』とて遙かに拜んで行き過ぎるのであつたが、教祖は、いたく之を心なき事に思召して、教祖のみは如何なる山の奥、山の底にある靈蹟へも、夫々叮嚀に巡拜されたが、先を急いだ人々は、降雨の爲めに橋が落ちたとか、川止めであるとか、いふ様な事で宿にごろ／＼して居る間に、追ひ着かれるさいふ風で、さして遅れ給ふ事なくして歸られたさいふ事でありませぬ。この時代の教祖は、未だ世俗に従つての神佛信仰であらせられましたか、如何に實意叮嚀なるなされ方であつたか、さいふ事が窺はれるではありませんか。

教祖三十七歳にして母屋を改築されましたが、これがへうび金神に障つて居るさいふので、その四十二歳の年に御大患に罹らせ給うたが、普通の人は、固より方角を見、日柄を選んで建てた事であるから、金神に障りはないと考へて居たのに、左様な通り一片なるお考へで済されなかつた教祖は、これを最も憐れず思召して、病床に呻吟しつゝも『私戌年年廻り凶し、ならぬ所を、方角見て貰ひ、何月何日と申して建てましたが、狭い家を大家に仕り、その方角へ御無禮出来て居るやら、凡夫で相分らず、方角見て済んだとは思ひませぬ、以後御無禮の御差許を願ひ奉る』とて、事によつては家を滅亡せしめ、教祖の生命を取らうとまで祟り障りする恐しい金神に對しても、斯く謝し給うた、これは神の咎を恐れる御心よりは、苟くも神あるお方に對して、凡夫の至らぬ心から禮に適はぬ事の出来るのが、相済まぬさういふ純粹無垢の御心より逆しり出でたお言葉であります。かゝる尊き御心であらせられたが故に、この御心に我が天地の大靈が感應しましたして教祖四十五歳の年、七月十三日に始めて神の御聲を聞き給ふに至り、その年九月二十三日には神より一の弟子に貰ひ受けるまで、以後神より直々に御修行をおさせなされる様になり、越えて翌年即ち安政六年の十月二十一日には、神の御依さしにより神三人の爲めに我が道を開かせ給ふに至りました。か

くて神の道も立ち、氏子も立ち行き、慶應三年十一月二十四日には、天地金乃神のひれいが見え出した。忝なく、金光、神が一禮申す』この神傳あり、また或時には『神からも氏子からも、兩方からの恩人は此方金光大神である。金光大神の言ふ事に背かぬやう、よく守つて信心せよ。まさかの折には、天地金乃神と云ふに及ばぬ、金光大神助けて呉れと云へば、おかけを授けてやる』この神傳もあり、更に明治三年十月二十六日には『生神金光大神當年十三年(立教より)に相成る、辛抱致し、神徳をもて、天地の神と同根なり』この神傳さへあつて、我が教祖は茲に天地の大靈と冥合歸一遊ばされるに至つたのであります。

以上取り摘んでお話し上げた如く、我が教祖の神に於かせられては、實意可憐さいふ事が本であり、神の御徳は末でありました。然るに吾人は單に教祖の光り輝く神徳の一面のみを仰ぎ奉るに急であつて、その然る所以の他の一面を見落し易いのであります。さればお互我が教祖の御跡に従ひ奉らうとするものは、亦この大切な點に深く心して『信心する人は何事にも真心になれよ』この御教のまゝに日夜に實意可憐に誠を盡す事が大切であります。

明日ありと思ふ心

さてこの何事にも實意叮嚀になる、即ち何事にも我が全心全力を注いで苟くもする事のない様にするは、吾人にとつて最も難い事でありませぬ。何事にも全心全力を注ぐ事の出来ぬ根本の障碍は、吾人の心の奥の何處にか、「明日がある」「先きは永い」「こいふ様な不眞面目な心持ちが潜んで居る事でありませぬ。」「先きは永い」と思ふが故に、今は斯うして居ても、先きで取り返しをつける、さか明日頃め合せをする、さか來月は何かしやう、來年は如何にかなるだらう、こいふ様な心持ちが除きませぬ。まだ先きがある、まだ先きがある、こ思つて居る間に暮れ易いのが人の一生でありませぬ。人間の身の上は、眞に「明日ありこ思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものは」である。固より吾人は、身を果敢なむの要はないが、「明日もある」と思ひ「先は永い」と考へて、現在を不眞面目に過す事は出来ぬ。夫として、妻として、親として、子として、國民として、神の氏子として、人には無限の責任がある。一面この重き責任を思ふと共に、他面我が身の明日を知らぬ身である事を考へた時に、吾人は殆んど居ても立つても居られぬ、こいふ、感があるではありませんか。徒らに死を思ひ煩ふは人の迷ひであります、併し死こいふ事吾人の心を眞面目にするものはありません。思ひ一度こゝに至りましたならば、吾人は一日片時たりとも疎かに思ひ過す事は出来ませぬ。

一舉手一投足にも眞面目なる心の誠を盡さねばなりませぬ。

不完全なる吾れ

併しながら、吾人は如何に全心全力を注がんとしても、この現在の不完全なる我が身には、果して最善の道を盡す事が出来るでありませうか。恰も己が影を踏まんとするが如く、一步は一步、及び到らぬのが吾人の現在のさまであります。吾人は到底祈らすには居られません。我が教祖は「今月今日で一心に頼め」と諭し給うたが、今月今日なる我が生命を思ひ、今月今日の神の御力を仰ぎ、そして、今月今日の生命の充實を希求はねばなりませぬ。

不眞面目なる歌

世には、よく「心だに眞の道にかなひなば、祈らすとも神や守らむ」といふ道歌を引用して、心さへ間違つて居らねば、別に神に祈らなくてもよい、こいふものがある。これは菅公の歌である。こいふ人もあるが、菅公は、かゝる淺薄な事をいふお方ではあるまいと思ふ、彼れは大に祈つた人

である、現に天拜山で祈りを捧げたといふ傳説さへある程であります。「眞の道にかなひなば」は何人が鑑定しての言ひ分でありませうか、不完全なる人間として、果して如何丈かで眞の道にかなつた事が出るでありません、この歌が若し神よりのお言葉であるにすれば固よりさもあるべき事であらうが、人の言葉としては不眞面目極まるものであつて、歌の詞そのものが既に眞の道に適つては居らぬ様に思はれます。

我が祈り

之を要するに吾人は神の氏子として、國民として、夫として、妻として、親として、子として無限の責任があり務めがある、この責任を果すが爲め、日夜の萬事萬行に、實意叮嚀の誠を盡し、最善の道を盡すべきは、神の恵に與る與らぬ、神の咎を受ける受けぬ、幸不幸、利不利に係らず、人としては片時も忘れる事の出来ない一大事であります。この眞面目なる心ありてこそ、始めて「先の世までも持つて行かれ、子孫までも残る」神徳を蒙る事が出来るのであります。

吾人は、只眼前の小利小慾のみに驅られ、明日をも知らぬ身を以て西に東に狼狽へ徘徊うて居る

が故に、一生を藻掻き通しにし迷ひ苦みぬいて、誠に淺ましい終りを告げねばならぬ事なるのであります。假令身は浮世の苦しい痛い煩はしい中に生活して居りましたが、我が日夜の心掛けは、常に心を神に向けて、迷はず疑はず、一事一物にも實意叮嚀の道を進ませて戴くといふ一念を護持して行けば、それ以上は「我が子の可愛さを知りて神の氏子を守りくださる事を悟れよ」を教へ給へる如く、我が天地の親神は、その御心のまゝに如何様にもお導き下さるであります。この一事を吾人の安立地として、我が教祖の神の如く泰然として而も希望に充ちた清い貴い生活を遂げさせて戴きたい。吾人の日夜の祈りは此の外に出づる所はありません。

(大正四年五月)

神吾れにあり

二七八

一心を立てれば我心に神が御座る

馬鹿か聖人か

世の中に「馬鹿か聖人か」といふ事を申しますが、これは中々意味のある言葉であります。凡人にして心配のないといふ人はいないでありませうが、若し世に、自分には一つの心配もないといふ人があるにすれば、その人は亦馬鹿でなければ聖人、聖人でなければ馬鹿でありませう。人は心配事の器に、申します如く、普通の人にして恐らく心配事のないといふ人はありませぬ。

そこで心配いふものは、如何なる點から吾々に起り來るのであるか、と申しますに、一つは吾が、それ／＼或る責任を以て居るといふ事、他は吾々の智慧にも、力にもそれ／＼一定の限度があるといふ事によるものであると信じます。

人にして責任なきはあらず

凡そ人にして、この世に生存る者に、何等か責任のないといふ人はありません。上は一國の國務大臣から、下は勞働に従事するものまで、男も女も、老人も青年も、乃至小學校に通學ふ兒童に至るまで、皆大なり小なり、その身その身に應じて夫々の責任を有つて居ります。極めて幼い、親の膝に抱かれて慈育はれて居る様な小兒には、固より何等責任の感じはありませんが、既に小學校に通ふ程の兒童になりますれば、自分の兩親なり、教へて下さる教師なりに對して、修學上の責任の感じを持つ様になります。親や妻子あるものは、その親や妻子に對して、親や夫を持つものは親や夫に對して、一家を治めるものは一家に對して、主人あるものは主人に對して、商業するものは商業に對して、農工業するものは農工業に對して、公務に従ふものはその公務に對して、各々責任のないものはありませぬ。

責任の感

そこで、この責任を感じるといふ事は、前お話する如く、何人にもあるのでありますが、その感じ方は、人々によつて大きくもなり、小さくもなり、廣くもなり狭くもなり、決して一樣ではあり

ませぬ。即ち、或人は、單に自分一身のこころしか考へぬ人もあり、或人は自分一身のみならず一族の事を考へるこいふ人もあり、更に或人は廣く社會、國家の上の事を考へるこいふ人もありませう。また自分一個の事でも、單に眼前の事しか考へぬこいふ人もあり、或人は遠き將來の事までも考へるこいふ事もありませう、死後の事をも考へる人もありませう、一家族の事でも、單に今日只今の事丈けしか考へぬ人もあれば、遠き子孫の後の事まで考へるこいふ人もある。社會、國家の事についても又その通りであります。

我が智と力

かく己が責任を感じる事は、人の知識の程度や、恩恵分別の差異によつて、夫々異つて居ります。が、この責任を果して行かねばならぬ吾々の身の上は、抑々如何なるものであるかこいふに、先にも述べた如く、その智慧に於ても力量に於ても限りがある。且つや吾々の生息するこの天地は、廣大限りなきものであり、その天地の状態は、何時も同じであるこいふ事は出来ぬ。所謂、天變地妖こいふものが、何時吾人を襲ひ來るかも分らぬ。更に吾々の周圍の社會、國家の状態も亦複雑極り

なきものでありまして、誠に煩はしく、厭はしい事のみが、常に多く我が身邊に迫り來るのであります。吾々の身の上に心配事の多いこいふ事は、寧ろ當然の次第ではありませぬか。

心配は大なれ

されば、責任の感じのある所には、必ず心配が伴ひ勝ちのものでありまして、責任の感じが大なれば大なる丈け、廣く深ければ廣く深い丈け、その心配は大くなるこいふ事も思はねばなりません。吾々が通常心配のなさうな顔をして、一日一日を呑気に暮らす事が出来て居るのは、眞に安心を得て居るのではなくして、實は責任の感じが薄いだ場合、乃至責任の感じが無い場合か、若くは我が現在の智慧や我が力量の程を辨へぬによるのであります。前に申した小兒や馬鹿なものに心配がないこいふのは即ちそれでありませぬ。

かく謂へばとて、誰しも心配そのものを好むものは世に一人もありません。相成るべくは心配のない事を欲するのでありますが、しかしながら、心に欲しないながら絶えず起り來るのが即ちこの世の有様であります。

されば吾々は、心配のなき様に願ふよりは、寧ろ、この起り来る心配を如何に處理しなければならぬか、といふ事を深く思ふべきであります。一つの心配が起れば一つ處理し、二つの心配が起れば二つ處理するといふ鹽梅に、絶えず起り来る心配を絶えず征服する事を要する。さすれば、これは言葉を代へて言へば一つ一つに我が身の責任を果して、次第に吾々の生活を着實に、そして大きく大きくして来る事になるのであります。

過失と心配

これを例へて謂へば、彼の過失は固より吾々に望ましい事ではない、成るべくは過失なく、スラ、いゝ世を渡りたいのでありますが、凡そ人をして過失なきものはありません。何れかといへば、過失のあるのが人の常態であります。唯この過失を改め得るか、得ないか、といふ事で人間のね、うちが定まるのであります。一つの過失あればこれを改め、更に二つの過失あればこれを累ねる事のない様に改善すれば、一つは一つだけ、我が心を磨き我が徳を修める實際の力になるのであります。吾々の心配事もそれと同じく、一つの心配起ればそれを處理し、更に第二の心配が起ればそれを處

理するといふ風に努めて行けば、心配があればあるだけ、多ければ多いだけ、我が心の力を増し、我が務めをより廣く大きく盡して行く事が出来る譯であります。彼の日蓮上人の歌に聞いて居りますが、

うき事のなほ此上に積れかし限りある身の力ためさん

こあるのは、誠に勇ましく結構な歌であります。かゝる點に人間としての眞骨頭が存するのではありますまいか。

人の弱音

私共は我が身我が家に起り来る心配事を處理するといふよりは、寧ろこれを恐れこれを憚つて、少しでも心配事のなき様に、所謂「兎角世間に事勿れ」主義に傾き易い。信仰といふ事も、この心配事を處理する丈の徳ミ力ミを得て責任を果すよりも、何れか謂へば、一つでも心配事のなき様に、願ふ所からするのが多い様に思はれます。「心配する心で信心せよ」は、左様な意味の教へではありません。かゝる弱々しい心あればこそ、教祖の御理解の如く「これ程信心するのに、さ

うして、かういふ事が出来るであらうか』といふ様な嘆き聲が出るのであつて、かゝるものに對して、教祖は『信心はもう止つて居る。これは未だ信心が足らぬのぢや、と思ひ、一心に信心して行けば、そこからおかけが受けられる』『信心するものは驚いてはならぬ、これから後さのやうな大きな事が出来て來ても、少しも驚く事はならぬ』と且つ誠め、且つ勵まし給ふのであります。

如何に希はなくても、心配事は必ず我が身にふりかゝる。そこで世の中には、止む事を得ずこれを處理する爲めに、方角や日柄の吉凶を改め見るこゝか、九星を調べるこゝか、八卦を置いて貰ふこゝか、或は苦しまぎれの神佛信心をするこゝか、或は今日では、姓名判断といふ様な事さへ稱道へ、信ずる様になりました。

私共が、東京の場末を通る毎に、必ず一ヶ所や二ヶ所、人だかりのして居るのを見受ける。何であるか、ミ立寄つて見るこゝ、その中には、必ず方角、日柄の吉凶や九星判断、その他姓名判断の書物を賣つて居るのを見受けるのであります。立止つて居る人々の顔には、言ひ知れぬ憂ひの色と、そしてその不思議を信ずる一種の喜びの色とが浮んで居るのが目につくのであります。これ等は何を物語つて居るでありませうか、如何に世の中に、多くの心配事を持ちあぐんで居る人の少くない

かを推し知る事が出来るではありませんか。

我が以外の物

我が身に迫る多くの心配事が、果してこれ等のものに依つて眞に處理し得られるでありませうか。我が教祖は『我心で我身を救ひ助けよ』と教へ給ふた。我れ以外の世の何物も我が身の心配を處理して呉れるものはありませぬ。世の所謂、神といひ佛といひ、乃至方角、日柄の吉凶といひ、九星や姓名の判断といひ、その物の眞偽は別として、要するに外物であります。眞に我れを救ひ、我が身の心配事を處理して呉れるものは、『我心の外には何物もありません。』『我心で我身を救ひ助けよ』とは、即ち我れを以て我れを助けよ、この教であり、自己奮闘の力によつて我が身を救ひ助けよ、この勇ましくもまた尊く有難き教訓であります。

大なる我れ

かく謂へば、必ず私を語る人があるでありませう。汝の信ずる天地金乃神とは、即ち亦汝以外

のものではないか、ミ。我が天地金乃神を我れ以外のものミ信じて居る人にミつては、誠にこの質問は當つて居るでありませうが、吾々の信ずる我が神は、決して我れ以外のお方ではありませぬ。「神は我本體の大祖ぞ」この我が教祖の神訓は、乃ち之を證し給へるものであります。「氏子ありての神、神ありての氏子」ミは、即ちこの消息を語り傳へ給ふものであります。親を離れて子はなく、子を離れて親はありませぬ。親の中に子は存し、子の中に親は存するのであります。決して別々のものでありませぬ。別々のものは、眞の親子ではありませぬ。神ミ氏子ミの間も亦此の如く、氏子を離れて神なく、神を離れて氏子なく、神の中に氏子あり、氏子の中に神います。これ我が金光教祖神人不二の教義であります。而して我が教祖は身親ら之を實證し給ふた。

或る學者は、宗教の信仰は、池の中の蛙が、水の面に浮いて居る木や竹の切れ端に捉つて、浮んで居る様なものである。神ミは水面に浮んで居る木切や竹切の様なもので、それを信ずるミいふ人は即ち蛙のやうなものだミ批評したさうであります。世の所謂神佛を信ずるもの、中には、さるものもないではありますまいが、吾々の信仰は、自分ミいふ現在の果敢なき我れが、生神金光大神の手續きミ、その教ミによつて、天地金乃神ミいふ、大いなる我れを實現すの道を申すのであり

まして、これ以外に本教の信仰はない。

小なる我れと大なる我れ

多くの起り來る心配事は、現在の果敢なき自分には到底之を處理するだけの徳も力もない。併しながら吾々は生神金光大神の手續きによつて、大いなる、力強き我れを實現して、以てこれ等の心配事を處理して、廣く遠く大きい我々の責任を完ふする、これ即ち「我心で我身を救ひ助けよ」ミの教であつて、臆がて我が教祖の神意であります。

大木に蟬

然るにこの理を辨へずして、「兎角世間に事勿れ」の弱音を吐いて「これ程信心するのに、さうしてかういふ事が出来るであらう」かミ嘆いたり、我が信ずる神を我が身より別のものミ思ひ、これに縋るミいふ事が、恰も大木に夏の蟬が止つてデンデンわめき立て、而も僅かな風にも僅かな雨にも、驚いて飛び離れるミ一般のものミなり終り易いのは、誠に情ない次第ミ申さねばなりません。

「一心を立てれば、我心に神が御座るから、おかけになるのぢや、生きたる神を信心せよ」こは即ちこの點を論し給ふたお言葉であります。何卒お互に大木に蟬が止つて、わめき立てゝ居る様な無意味な、力のない、徒らなる信心を改めて、我が心に生きたる神を信じて、そして、如何なる憂き事にも、如何なる難き事にも打克つて、我が教祖の示し給へる人生の理想に突き進ませて頂きたいものであります。

(大正四年三月)

人の務め

信心は本心の玉を研くものぞや

人の思ひ違ひ

信心とは普通に、神に縋り、神に頼んで、そして其の御教を得るの道であるを解する所から、信心するには、唯だ対象とする神様の事のみを考へて、一向に縋り頼み求むればよいものであるを考へる人が多い。これは固より、その通りであつて、みがけは神より下さるものであるから、神にお縋り申すより外はない事であるけれども、吾々の眼が只對ふにのみ向ひて居るに、遂にはこれ程信心して居るのに、何故みかけを蒙る事が出来ぬかと嘆かねばならぬ事が出来て来る。神に縋り頼み求める、こいふ一面のみを知つて居て、而も他の一面に更に大切な人の務のある事を知らぬものは、眞に神の御心を悟り得た人と思す事は出来ないものであります。

「我子の可愛さを知りて神の氏子を守りくださる事を悟れよ」こもある如く、神様は吾々の親様で

あるが故に、吾々が唯に自分の眼前の狭い考から、斯うして下され、彼して下され、追らなくても、神は吾々の來し方、行末を知食して、願ふよりも先に吾々を思ひ、縋り頼むよりも先に吾々を愛し、求めるよりも先に吾々に與へてやらうと思召し下されてあるのであつて、恰も親として我が子の行末悪かれと思ふものはなく、皆幸多かれと祈つて下さるゝ同じ事でありませぬ。されば我が教祖も「天地金乃神」云へば、天地一目に覽て居るぞ、神は平等におかけを授けるが受物が悪ければおかけが漏るぞ」も御理解下されて、貴賤、貧富、賢愚、男女の差別なく、行末かけて平等に御惠深く思召し下されてあるのでありますが、吾々の受け物が悪いが爲めに、それを得受ける事が出来ないうで、先きの様な嘆聲を洩すに至るのであります。水を掬ふにも手の指と指との間が透いて居ては、何時まで経つても掬ひ上げる事は出来ない、掬ふ事が出来ないからきて、水が無い譯ではない、水は掬はれたくてならぬのであるけれども、手が之を掬ふ様になつて居ないからであります。故に整然と指と指とを揃へて掬へば、水は幾何でも掬ひ上げられるのでありますが、神の御救を得る道も亦これと同じ事でありませぬ。

信心の意義

然らばこの神のみかけを得るには、如何にすべきか、さういへば先に述べた如く、外のみに向つて居る眼を、吾が心の内に向け直す事が大切であります。

抑々信心といふ事は、如何にして成立つのであるかと言へば、即ち神と氏子との中間に成立つものであります。恰も手を拍つに、片手では音が出ぬと同じく、また話をするのに、話者と聞者が居らなくては話は出来ぬと同じであります。如何に話したくても、聞者が居なくては話が出来ぬし、聞きたいと思ふ人はあつても話す人がなくては、また話は聞かれない、聞く人が熱心ならば、話者も一生懸命に話し、話者が熱心に話せば、聞者も一生懸命に聞く様なもので、信心も神と氏子との間に成立つので、神のみかけは、そこに始めて事實となつて吾々の上に現はれるのであります。如何に神様が吾々を助けて遣りたいと思召しても、吾々がそれを受ける事が出来る様になつて居なくてはならぬし、如何に吾々が助けて戴きたいと思つても、神の御救ひがなくてはまたみかけを蒙る事は出来ませぬ。この理を我が教祖は「氏子ありての神、神ありての氏子、上下立つやうに致す」と仰せられたのであります。みかけは神より下さるものであるに係らず、我が教祖が吾々に對して「我心で我身を救ひ助けよ」とお諭し下されたのは、即ちこの點を明かに遊ばされたものであります。

す。然らばこの『我心で我身を救ひ助けよ』氏子ありての神』てふ言葉は如何にすれば實際に現はし守る事が出来るのであるか、こいふに、更に我が教祖は『信心は本心の玉を研くものぞや』とお示し下されました。即ち吾々が神より與へられたる『本心の玉』を曇りなく、汚れなく磨き上げたならば、恰も鏡に物が映る如く、神のみかけはその清く曇りなき本心の玉の光りに映り來るのであります。

心の定規

そこで、本心の玉の光を曇りなく磨き上げる上の砥石もなり定規もなるものは、即ち神の教であり、取次の先生のお誡めであります。人には、それ／＼「我」こいふものがありまして、自分の考へでは間違ひないと思ひ、曲つては居ないと思つて居りまして、之を神の教に照して見ますれば、間違つた所も多く、曲つた所も少くないのであります。恰も紙に線を引くに當つて、自分の眼分量では真直である様に見えても定規にあて、見るに曲つた所が少くない、故に定規をあて、線を引けば、何時も真直に引く事が出来る。道を歩くに當つても、眼を閉いで居るに、足取りは動もす

れば右に曲り、左に曲る。やがては溝へ落ちたり、電信柱で頭を打つ。眼を見開いて居れば、動もすれば曲らうとする足取りを、右に左に矯めて参りますから、真直に道を歩む事が出来る。吾々の心の持ち方、身の行ひ方について、定規もなり、眼もなつて吾々を導いて下さるのは神の教であり、先生の御理解であります。

傍観八目

世に傍観八目といふ諺がありますが、碁を打つのに、局に對つて打つて居る人には知れぬ油断や誤りや足りない點も、傍で觀て居る人には、それが一々判然と知れる。それなれば盤に對つて居る人が弱いのであつて、傍観して居る人が強いのであるかと言へば、必ずしも、さうでないのに、何故打つて居る當人には知れぬ缺點が傍に觀て居る人には能く知れるか、こいへば、實際に打つて居る人には、慾が伴ひ、我が伴うて居ります。何卒して對手に負けたくないものである、己れが一つ彼れに勝つて鼻柱を挫いて遣らう、なごいふ念がありますから、割合に上手でも、眼が見えなくなる。所が、傍観して居る人は、何れが勝つても、何れが負けても、我が得にも損にもなるものでな

我が故に、従つて心が公平になり、静かになつて、善い點、悪い點が一々明瞭になるのであります。吾々は心に曲つた點がなく、行爲に悪い所はない様でありましたも、實世間の世渡りの上には、或は世の中が不景氣であつたり、生活が困難であつたり、色々の誘惑に會つたり、その他色々の事を見、色々の事を聞いては、何卒して立派になりたい、何卒して出世したい、何卒かして、何卒かして、と思ふ間に自然慾が伴ひ、我が伴うて、あんな事をする様な人間とは思はなかつた、さか、見掛け倒しな人間である、さか、日頃には似合はぬ事をしたさか、色々の案の外なる事を仕出來す様な事があります。されば傍觀八目さいふが如く、他の公平なる見地から觀て戴き、批評して戴いて、自ら氣のつかぬ缺點や短所を指摘して貰つて、我が誤りや、曲つて居る所を直して行くに力めなくてはなりません。

「我」の主張

我が教祖は「我情我慾を放れて眞の道を知れよ」「慾得にふけりて身を苦しむる事なかれ」「戒め給うたが、この「我」の執着を離れて、我が誤りを直して行く程人生に於て難かしい事はありません。

昔の人も「山中の賊を平けるのは易いが、心の賊を平けるのは難しい」と申し居る如く、他から刃を執つて迫つて來るのは防ぐ事も出来るけれども、心の刃によつて傷けられる事は、自分には分り難く、また其の害も甚しい。

吾々が、他から教を受け、誠めを受けた場合に、難有い事聞く事は扱て措き、心を公平にして、その儘を聞き入れる事は如何にも難しいものであります。これ等の場合に先づ現はれるのが不快の顔色であります。續いて出るものが辯解であります。それが漸次に上手になるに、外形には誠に難く承けた様な風を装ひ、而も内心には「我」の籠を拵へて、「餘計な事をいふな」といふ様な念が除れない。それでありますから、何時まで経つても、心を直す事は出来ません。誠めて下さる方も、彼の人間は何を言つて遣つても効能はない、言つて遣つて、却つて嫌な思ひをする丈け損であるから、彼の爲すが儘に任せて放つて置くより他に致方はないと言はれる様になつたならば、世の中にこれ程損な、これ程淋しい、情ないものはありません。廣い世の中を「我」といふ小さな殻の中に閉ぢ籠もつて、遂には社會的の生命を失つて了ふのであります。

誰にても、人には好きな事を言つて遣りたい、氣に入らぬ事は言ひたくはないものであります。

それをも忍んで言つて下さるは、言つて下さる方も實はつらいのでありますが、畢竟吾々を可愛
いと思ひ、不愆と思つて下さるが故に、さる誠も下されるのでありますから、假令、如何なる人の
言つて下さる事でも、我が爲めに、さある以上は、難有く喜んで公平に承つて、自ら省み、自ら
改める事が吾々の心を磨き、行爲を正しうする上の最も重要な事であります。

神の一言

されば我が教祖も『此所へ参つても、神の言ふ通にする者は少ない。皆歸つてから、自分の好
やうにするので、おかけはなし。神のいふ事は道に落してしり、わが勝手にして神を恨むやうなも
のがある。神の一言は千兩の金にも代られぬ、難有受けて歸れば、土産は船にも車にも積めぬ程の
神徳がある。心の内を改める事が第一なり』とお説め下されましたが、實に身に沁みるお言葉では
ありませぬか。

「我」と信

世には、動もすれば「我」の強いもの、信仰力の強いものを穿き違へて居る人がある。成る程形の上
上から見るに、他のいふ事を聞かぬ、こいふ點から一寸似て居る様であります。その内容は大變
に相違して居ります。「我」の強い人は先にも述べた如く、最初は自分の思ひ通りにやつて居るが、
直ぐに行詰つて、小さな殻の中に、狭苦しい淋しい生活をして、遂にその生命を失つて了るのであ
りますが、信仰力の強い人は、その心、その行ひには、天地に貫く誠が籠つて居るが故に、最初は
人から見捨てられ、人から斥けられて居るやうでありますけれども、終には人を承服せしめ、人も
亦我れと同じ道を辿つて、廣い大きな天地に生活す事が出来るのであります。

教祖の御一代

我が教祖の御一代は、その一面に於て、誠に素直な、温和な、圓滿な御生活であらせられたこと共
に、他の一面に於ては、實に秋霜烈日の如く厳しい侵し難い御生活であらせられました。前の半面
は、教祖に一點の「我」のなき事を現はして居るものであり、後の半面は、教祖に天地に貫く信仰力
と誠實とがあつた事を現はすものであります。然るに吾々の日常の生活を見ますに、「我」を貫き

通さうとする事には、如何なる困難をも顧みない様であるが、「信」を貫かねばならぬ、さういふ場合には、誠に意氣地なく挫けて了ふのであります。斯の如くでは、何時まで経ても、吾々の狭い苦しい境界を脱する事は出来ませぬ。されば神の教によつて、我が心我が身を正しうするに務めて、曇りなき心の玉に神の御蔭の映つて何時までも消え失せる事のなき様に心掛けて『氏子ありての神』とある神意を全うさせて戴きたい事でありませぬ。

(大正三年十二月)

信心は生命なり

神信心の無き人は親に孝の無きも
人の道を知らぬも同事ぞや

生活の二方面

凡そ吾人の生活上には、各種の仕事があつて、殆んど擧げて數ふるに堪へぬ程であります。この日夜の各種の仕事は、之を大體二様に分類ける事が出来るのであります。即ち、その一は利益問題を本とした働きであつて、その二は利益問題は眼中に置くの暇がない、利益であらうが、缺損であらうが、必ず人間として、爲さねばならぬ、さういふ利益問題を超越した働きであります。

例へば、人が商賣を営むか、労働するか、或は暑い日中に傘を翳すか帽子を被るか、或は美しい衣物を着るか、お化粧をするか、いふ様なのは、利益を本とした仕事であつて、正直にするか、人に親切にするか、國君の爲めに戦争に出るか、或は親が子を慈み、子が親に孝

養を盡すか、いふ様なのは利益問題を超越した仕事であります。

利益を本とした仕事

利益を本とした仕事は、もごく／＼自分に取つて損得いふものが、その仕事の唯一の目的になつて居るのでありますから、得があればその仕事をする、損が立てばその仕事は中止の、いふ様な風に、その仕事の撰擇取捨は損得いふものが何時も標準になるのであります。例へば世の中の多くの商賣の中で、これを中廢めては、人の人たる資格が失くなつて了ふいふ様なものは只の一として存在しない。世に害を及ぼさない程の商賣であつたならば、何を營んでも、別に人から悪く言はれる事もなければ、また何の商賣を中廢めたからして、犬猫同様な奴になつた、こいはれる事もない。利益がありさへすれば、如何なる商賣を營むも人の自由であつて、利益がなければ、從來の商賣を中廢めるのも代へるのも亦全く人の自由であります。

暑い日中に傘を翳すか、帽子を被るかか、いふのも、暑さを防ぐか、いふ利益の爲めなのであつて、暑くても暑さを厭はぬか、傘もない帽子もないとか、有つても面倒であるから用ひぬか、いふ人は別に翳すにも被るには及ばぬのであつて、傘を翳さぬから、帽子を被らぬからして、彼は人面獸心であるに罵られる様な氣遣はない。用ひるのも用ひないのも、全く人の自由であります。

美しい衣服は、何人も之を着たがるのでありますが、これでも、他に立派に見られたい、他にゑらく思はれたいといふ一種の利益を本として居るのであつて、人の禮に缺けない以上は敢て華美を装ふ必要はない、木綿の粗服を着て居るから、彼は人の價値が無い人間であるとは誰からもいはれない、美服を着やうが、粗服を纏はうが全く人の自由であります。然るに世にはこの意味を考へ違へて、美服を着なければ、人間の價値が減るか或は無くなるかに心配する人もある様であるが、大變な誤りであります。

損得を超越した仕事

然るに損得を超越した仕事に至つては、前々全く反對であつて、これのみは損であらうが、得であらうが、必ず人間としては爲さなくてはならぬ、若し損になるから爲さない、いふ人があるならば、彼は人面獸心であるこの識を甘んじて受けねばならぬ人なのであります。

例へば、人が正直にするこいふ事は、得になるから爲る。損になるから爲ない、こいはれる譯のものではない。世には不正直にして、財産を積み、そして地位や名譽を取て居る人も少くない、生眞面目に正直にして居るものは、今の世の中では、何時でも人の尻に隨つて居なくてはならぬ、何時でも馬鹿を見なくてはならぬから、正直にするのは厭であるこいふ人があつたならば、それは眞の人間ではない、世を擧げて濁つて居ても、吾れ一人は清く持するの覺悟が人としては大切であります。

人に親切にする、氣の毒な人を見ては救ひ助ける、こいふ事は、正直にする場合とは違つて、自分の身體を勞するか、財布を開くか、多くは直接自分の目前の損をしなければならぬ仕事であるが、自分の損になるから、他に親切にしない、難儀な人を見ても憐れぬこいふ人があつたならば、それは人非人であり、不人情者である。『我身の苦難を知りながら人の身の苦難を知らぬ事』とあるが如く、他の難儀を見ては、その身に應じて之を助けるのが人の道であります。世には今日人を助けて置けば、明日その報いがある、と算盤づくで親切にする人もあるが、これは自分の利益を本とした考へであつて、眞の親切にはならぬ、『可愛いと思ふのが神心ちや』とあるが如く、我が衷なる神心

の發動によつて、之れを満足せしめたならば、それ以上求める所はない、他が禮をいはふが、いふまいが、報いが有らうが、有るまいが、それは他の上の事であつて、自分は自分の神心に満足を得たならば、それで充分であるこいふに至つて眞の親切であり、眞に貴い人間であります。

君國の難に赴いて、身を忘れ、家を忘れて報公の至誠を致すのも、前のと同じ事であります。

其他、親が子を慈育するのも、子が親に孝養を盡すのも亦その通りでありまして、若し世に、子を我が喰ひ物にする考へや、我が老後の安樂を願ふ心一つで子を育てる親があつたならば、それは眞の人間ではありません、可愛いと思はぬ前に自ら慈育する。子の爲めには肉を殺ぎ、骨を削つても盡してやりたい、と思ふ人にして、はじめて眞の人たる資格を具へた人であるこいふ事が出来る、子にしてそれと同じく、親を難有しと思はぬ前に、自ら親に對して至情を盡すのが、眞の人間であつて、茲には損になるから、得になるから、こいふ様な事を考へて居る暇はないのであります。

生命は唯一なり

そこで、かく正直にするか、他に親切にするか、君國の爲めに盡すか、親子の至情を盡す

さかひふ様な仕事は、何故に彼の利益問題を本とした仕事の様に、利害の關係によつて吾人の自由なる撰擇取捨を容さぬのであるかといふも、是等は人間の人間たる眞生命の一部分であるからであります。人間の生命は唯一絶対であつて、一時の都合や損得によつて取り代へ得られるものではない、若し取り代へ得られる生命があつたならば、それは眞の生命ではない。何人も奪ふ事能はず、また何人も與ふる事能はざるものが眞の生命であります。この唯一絶対なる人の眞生命の要素たるが故に利、不利を考へる餘裕がないのであります。然るに彼の利益問題を本とする日夜の仕事は、これ等人間の眞生命を發現し、或は存續ける爲めの方便であり、道具に過ぎないが故に、時の場合によつては如何様にも都合よく取り代へて差支ない、差支ないのみでなく、取り代へるのが寧ろ至當なのであります。

利益を本とする世俗の信仰

以上、人間の有ゆる仕事は、大體二種に分れるものであるといふ事について、述べたのであります。但し、世俗の所謂神佛を信する人の中には、利益を本として居るのが少くない。病難災厄を免れた

いさか、一時の身の都合、家の都合を好くしたいといふ様な事で、神佛を祈つて、己が氣に入る様になれば禮をする。然らざれば、弊履の如くに見捨てる、事なき時の信心も畢竟は事ある時に利益を得る爲めの繋ぎであるかの如くに考へて居る。之を譬へていふも、恰も他人に物を頼むと同じ事であつて、頼んで見て、頼んだ事を仕て呉れ、ば約束通り禮をする、爲て呉れなければ捨て、他へ行く、といふのと同じである。併しながら、世俗の所謂神佛も、それを信仰する人との間には、何等必然の關係はない、謂はば他人と他人との間柄と同じ譯であるから、上述の如き信心振りでも、大した差支はない様に思はれる。

神は我が親

所が、我教祖の教へ給へる天地金乃神と吾々との間は、決して他人と他人との間柄ではありませぬ。『神は我本體の大祖ぞ信心は親に孝行するもおなじ事』『我子の可愛さを知りて神の氏子を守り下さる事を悟れよ』とある如く、神は吾等の親に坐し、吾等は神の子とお慈み下さるのであります。神は我等を『氏子ありての神、神ありての氏子』と、お頼り遊ばされるのでありまして、『子供の中に

屑の子があれば、それが可愛いのが親の心ちや、無信心者ほご神は可愛い。信心しておかけを受け
て呉れよ」この悲情を以て、吾等の不幸、吾等の罪過を愍み給ふのであります。信心する者も信心
せぬ者も、神の御心に適ふ者も、適はぬ者も、如何なる國に住む人も、如何なる地位にある人も、
我が神を離れては一日片時も存在しないのであります。牢獄の裡にも日は照らし給ふ、人の道に背
き、神の御心を惱ませ奉る様な人も別に天地を離れて住んで居るのではない。

信心は生命なり

されば吾々は「神信心の無き人は親に孝の無きも人の道を知らぬも同事ぞや」にある如く、子に
して親に仕ふる真心を以て神に仕へ奉らねばならぬ、人にして神に仕へ、その御心を奉ずる事は、
正に吾等の眞生命であつて、其の間、利益も不利益も、好きも嫌ひも、いふ餘裕はないのでありま
す。然るに我が道を信する人の中にも、動もすれば目前の願望の成不成、目前の利益の有無を以て
信心の唯一の標準として居る人が少くないのは誠に淺間しき限りであります。人は目前我が思ふ通
りになれば喜び、若し然らざれば、直に神を怨むのであるが、神の御心には、吾等が病に苦み、不

幸に嘆きつゝある様を憐はして、常に事なき時よりも、幸ある他の氏子よりも、一段深く憐み給う
て、一日も速に安らかなる身の上に、なれかし、ご御心配下されてあるのであります。されば吾等
は神を怨み奉る所ではない、不幸であればある程、難多ければ多き程、一入深く神にお絶り申して、
早く神の御心を安め奉らんご心掛くべきではありませんか。我が教祖は「これ程信心するのに、ご
うしてかういふ事が出来るであらうかと思へば、信心はもう止つて居る」ご嘆かせ給うた、吾等は
この思召を深く味ふべきであります。また四神様は、曾て或る場合に「食べる物は食へなくても宜
しいから、さうか神様に丈けは仕へさして戴きたし」ご仰せられたご承つて居ります、信心を眞
生命ごさせ給ふた御心は、誠に畏き次第ではありませんか。

吾々は、この深き意義ある信心の道に入り、永遠に眞の生命を得、神の氏子たる務を完うせん事
を期すべきであります。

(大正三年九月)

親に仕ふるとしての信心

三〇八

本教信仰の中心觀念

親に仕ふるとしての信心である、こいふ觀念が、本教信仰の中心であります。我が教祖の神は「神は我本體の大祖ぞ信心は親に孝行するもおなじ事」こ、教へ給うた事は、今更申すまでもない事でありますが、何故に神は我が親に在まし、吾は神の氏子であるか、こいふ事を私は今茲にお話しなさい、またお話しするの要もない、神々人々は、親子の關係にある事は、これは天地の間の事實でありまして、議論ではない、議論や理窟によつて、此の關係が生じたのでもなければ、亦、教祖の教によつて、この關係が新に生じた譯でもない、恰も父母が我が親であり、吾れが其の子である、こいふ事は世間の事實であつて議論や辯證によつて途中で新しく出来たものでないのと同じであります。親子の關係は事實であつて而も絶對であります、他の何物にも代へる事は出来ません。世界に幾億の人が住んで居るけれども、我が父母は唯お一方宛しかない、他に如何程財産あり、身分あり、智

徳ある人が多く在りませうとも、それ等は親に代へる事は出来ない、如何にづまらぬ人であつても、世の何物にも代へる事の出来ない最も懐しい、最も難有い、最も頼りになる、最も大切なお方である、假令狂人でも、國の法律に觸れる様の事をする人でも、尙此等の情を除く事は出来ません、親にして我が子はその幾億萬の人の中で一人しかない、他に如何程發明な伶俐な立派な人か多からうが、それ等に代へる事は出来ない、馬鹿でも不具でも悪人でも、親自身を苦める様なものでも、尙身に代へてもこ可愛がつて下さるのであります、これ即ち親子は絶對の關係にあるからであります。

神々人々の間も亦斯の如く絶對の關係にあるのであります、「我子の可愛さを知りて神の氏子を守り下さる事を悟れよ」こあるが如く、神は吾々を、他の何物にも代へる事が出来ない可愛いものこ、日夜に御恵み下されてあるのであります、吾々は畢竟この事實この御恵みを知らないで過ぎて来たのであつたが、我が教祖の神の教によつて、初めて之れを知らせて頂いたのであります、唯知らせた頂いただけであつて、更に之れによつて神が新たに生じ給ひ、神々人々の親子の關係が突然に出来たものではありません。

そこで吾々は我が教祖によつて此の事實を知らせて頂いたのでありますが、これが生きたる信心となつて現はれるには、單に知つただけでは尙足りない、知ると共に、これが眞實眞味に我が物となつて、知らず知らずの間に、神の氏子としての眞情が凡べての場合に自ら現はれなくてはなりません。我が父母は自ら親と思はぬ先きに親としての情を吾々に注いで下され、吾々も亦その子であると思はぬ先きに、子としての情を親に致して居るのであります、これが眞實の親子の間柄であります。所が、眞實の親子の間でない間柄、所謂義理ある間では、先づ子であると思ひ、親であると思つた後にその情が従ふものである、これが義理ある間と謂はれる譯であります。

神と氏子との間は義理ある間ではない、教祖の教によつて途中から結び付けられたのではない、神は眞實眞味に可愛いと思召し下されてあるのでありますが、吾々は兎角に之に反して、教祖の教によつて、先づ神様は吾々の親様であるさうなさいふ事を一々考へて、然る後、之れに對し奉るの心情が從ひ易いのであります、思はぬ先きの思ひが働かない、これでは眞に信心する人といふ事は出来ないと思ふのであります。即ち本教信仰の中心點は、神は親なり、吾は神の氏子なり、この信念に存するのであります、思はぬ先きの思ひを以て神に仕へ奉るのが、吾々氏子の唯一の道であります。

あります。

我が生活一切が信心

本教信心の中心が右の點にある事から、吾々の信心は、我が生活の全體を覆ふ事になる、「信心する人は何事にも眞心になれよ」を教へられ「此方の行は水や火の行ではない家業の業ぞ」を教へられるのは之れが爲めであります。

之れを父子の間について考へて見ても、世には往々親に仕へるの道は、唯親に美しい衣服をお着せ申し、甘い食物を差上げる様な事のみにある人がありますが、これも其の一端ではあらうけれども、併しながら、如何に美衣珍肴を進めても、子が子として、人間として、間違つた行爲をし、善くない事をして、親の顔に泥を塗る様な事のみであるか、身體が弱くて始終心配ばかり、かけて居ては、親は決してそれを快くお受け下されるものではない、固より美衣美食を差上げるに越した事はないけれども、止むを得なければ、疎末な着物はお着せ申して居ても、不味い食物は差上げて居ても、子として人として、家族に對し、世に對して、何事にも實意、叮嚀、正直の道を守

りますれば、親にしては不自由な中にも此上もなくお喜び下され御安心下されるのであります。即ち子として親に仕へる道は、單に形式の上の一二の行爲に止らぬ、子としての生活全體が、その儘親に仕へる道になるのでありまして、病氣する、しないといふ事迄も、親に對する重要な道の一つになるのであります。吾々が親ある神にお仕へ申す道も、また斯くの如くでありまして、前掲の教祖の教は、この點を論し給うたものであります。

所が、世俗の所謂信心は、全く吾々の實生活に關係がない、念佛を稱へる事、神詣でをする事、斷食や水行する事、踊つたり唄つたりする事が、吾々の實生活ではない、此等の事も勿論日夜の生活に多少の影響はあり、多少の關係はあるであらうが、實生活その物ではありません。世俗の信心が何故實生活に關係のない、一種特別な藝當でもする様な事になるのかといふこと、即ち世俗の信仰する神佛は何等吾々ミ本来の關係はないのであります、他の何物にも代へる事の出来ないといふ、絶對の關係があるのでなくして、今己れの信する神佛より外にもつミ、功德の勝れた方があれば、直にそれに代へ得られる様な謂は、赤の他人を信じ頼んで居るのと同じいのであります。自分に何等深い關係はないが、頼めば親切にして下さる、頼めばいふ事を聞いて下さるといふに過ぎない他人

に頼んで居るのであります、吾々の信する神様は、吾々の頼まぬ先きに愛して下され恵み下されてあるのであります、信する者も信じない者も、神の御心に従ふ者も従はぬ者も、思はぬ先きの思ひを以て氏子の上をお守り下されてあるのであります。かく親みます天地の神は、吾々の身體の上の事から、日夜手を動かして足を動かす上の事に至るまで一切の事を御心におかけ下されてあるのでありますから、吾々は、凡ての事物、凡ての動作に心を盡して、何事にも實意、呵嘸、正直にして神に御心配をおかけ申さぬ様、喜んで頂く様に務めるのが、これが眞の信心であります。信心は只神を立派に祭ればよい、神を拜禮すればよい、神詣でをすればよい、斷食、水行をすればよいといふのみの狭いものでなく、吾々の生活全般を覆ふものであります。親に仕ふるごしての信心は、實に斯の如き、深い深い意義があるのでありまして、以下稍々巨細にこれをお話致しませう。

身體を大切にせよ

孟武伯が會て孔子に孝行の道を尋ねたのに對して、孔子は、父母は唯その疾を御心配なさるもの

だに教へられた。實にや親は子の身の病程御心をお痛め遊ばされるものはありませぬ。子の病は我が命に代へても、さまで御心配なされるものであります。之に反して、何時も機嫌よく、達者に働いて居る様を見ては、親は此上もなくお喜び下されるのであります。我が親神様が吾々の上を思召下されるのも亦その如くであります。「我子の可愛さを知りて神の氏子を守り下さる事を悟れよ」我が教祖の教へ給うたのは、即ちこれ等の思召を教へ給うたのであります。吾々が病氣、災難のある場合に神にお願ひ申して、それを助けて頂くのも神の此思召による事であります。神がこれ等の靈驗を下さる思召は、單に氏子を可愛いこの思召のみならず、更に吾々をして日夜に壯健にその家業に働かせて末々まで榮えさせやうとの廣い遠い思召による事でもあります。故に教祖の御理解にも「天地の間に棲む人間は神の氏子、身上に痛み病氣あつては家業出来難し、身上安全を願ひ、家業出精 五穀成就、牛馬に至る迄、氏子身上の事、何なりとも實意を以て願へ」と諭し給うた。所が、世には、かくて神が吾々に、みかけを下さるのを好い事にして、恰も道樂息子が親の金をせびり取る様な態度で、此神の愛を濫用し、此神のみかけを一時逃れの方便にして、神を道具扱にするものがあります。何といふ不眞面目な事でありませう。病氣、災難のある度に、一度みかけを頂け

ば一度だけ、二度みかけを頂けば二度だけ、益々我が身の心掛け、我が身の行爲を慎んで、神の御心を難有と思ひ、神の御教の儘に家業に精出して働いて、神に喜んで頂き、安心して頂く様にすることが、吾々の神に對する、切めてもの御禮の道であります。我が教祖は曾て或る者が神に助けられたお禮の爲にきて、金銭上で御用を勤めたいと申出たものに對して、「一度神に助けられたならば、以後の心掛け身持ちを慎んで、二度神に御心配をおかけ申さぬ様にするのが、神への第一の御禮の道である」とお諭し下された。承りますが、これはその人に對してのみでなく、一切の氏子に對するお誠であります。吾々は此點を呉々も慎まねばなりません。不心得な人は神や教會所やお取次の先生を、掃溜めか何かの如くに思ふて、平生何事もない時には、つまらぬ事のみ働いて、悪い事や、つまらぬ事が出来て来る度に、これは神様に頼めば何にかして下さる、こんな事は教會所へ持て行け、先生が何かと仕末をして下さる、といふ様な不謹慎な事を考へる人が少くないが、返す返すも不眞面目な人。申さねばなりません。

神の氏子たる手前

かくて吾々は、我が身體を大切にすることに共に、我れは神の氏子である、この資格を傷けぬ様に尊重して行かねばなりません。人間の世の中では、金銭の有無、學問の有無、力の有無によつて、人の資格が夫々異なるけれども、神の前には、何人も等しく神の可愛がつて下されてある氏子であります。故に、昔は武士は刀の手前、いふ事を尊重したさうであります。吾々は何事も吾れは神の氏子といふ手前にかけて、吾れ自らを卑める事のない様、吾れ自らを賤しくする事のない様に自分を尊重せねばなりません。併し自分を尊重するといふ事は、彼の驕慢な態度をいふのではありません。謙遜の徳は何人にも缺く可らざるものであります。故に教祖も『三寶様(穀物)は實る程かむ、人間は身代が出来たり、先生云はれるやうになるに、頭を下げる事を忘れる、神信心して身に徳がつく程屈んで通れ、兎角出る釘は打れる、よく頭を打つ云ふが、天で頭を打つのが一番恐ろしい』とて驕慢な心を戒め給うた。

謙遜と卑屈とは、形は一寸似て居る様であるけれども、その實は甚だ異なる、謙遜とは單に禮儀の上の語であります。卑屈とは價值の上の語であります。この點からいふに驕慢といふ事は一種の卑屈で、形は威張つて居る様でも、實は自分を卑めて居るのであります。

自ら卑めることは、如何いふ事か申します。即ち自分の爲す可き事を爲さない、いふ事であり、自分の爲すべき事を爲さない、怠り懶ける所から、他人の監督が要つたり、注意を受けたり、干渉されたり、或はつまらぬ事にも助けを乞ひ求める様なものが、即ち自ら自分を卑め、賤しくするものであります。日本人、殊にも日本婦人は此點に於て最も自らを卑める事の甚しい國民であります。我れは神の氏子なり、この手前にかけて、自らの爲すべき事は、他に頼らず他の手数を煩はさず、陰、日向なく、見る者のありなしに係らず、忠實に業に服して、獨立、自尊の道を全うして、そして神様に喜んで頂かねばなりません。自分を卑めるのは、即ち我が親に在りて神を卑める事になる、神を尊ぶとは、立派に祭り、形容を厚うして仕へるのみの謂ではない、そんな事は出来ても、神の氏子たる自分の爲すべき事をしないで、他の制裁や干渉を受けるのは即ち神の御顔に泥を塗つて居るものであります。神を敬ひ尊ぶとは、小兒だましの様な事をするの淺薄な謂ではありません。此の點、吾々の最も思を潜めて深く省みなければならぬ點であります。

他を尊重せよ

かく、自分の身體を大切にし、自分の資格を尊重するに共に、吾々は更に他人をも大切にし、尊重せねばなりません。自分の爲めに神が御心をおかけ下されてある如く、亦他人に對して等しく御心をおかけ下されてあるのであつて、有ゆる人間は悉く神の氏子であつて、氏子は互に兄弟であります。「天が下に他人いふ事はなきものぞ」はこれを教へ給うたのであります。されば「我身が大事か人(他)の身が大事か人(他)も我身も皆人」にて、自他互に尊重すべきを教へ給うたのであります。然るに不心得な人は、動もすれば、自分より貴い人の事は理が非でも御無理御尤も様承はるが、自分より賤しいと思ふ者のいふ事は、如何に採るべき正理でも、貴様等のいふ事は、さういふ様に一概に斥けてしまひ易い、我が教祖は舊幕時代、殆んど人として齡するを潔ししなかつた所謂部落の人に至るまで、何等他の階級の人を變らぬ態度を以て之に教へ、之を導き給うたに承はる、是れ神の御心を心し給ふが故であります。他人を卑めるのは、即ち我が兄弟を卑めるのであつて、兄弟を卑めるのは、更に亦神を卑め奉る事になるのである。されば我が教祖は他人を悪口する事を殊の外厭はせ給うた、如何なる御理解のある最中にでも、若し集つて居る人の中で他を悪し様に思ひ或は口にするものがあるに、其お話はハタ止つて、他を向はせ給うた儘、さり氣なき體を装ひ

給うたに申す事であり、御理解にも「人の悪い事をよう言ふものがある、そこに若し居たら、成る丈逃げよ、蔭で人を助けよ」も御親切なる御教を下された。自他共に他を尊び他を重んじ、他に譲り、他に遜り、互に大切に仲好くする様を御覽遊ばされて、我が親神は如何ばかりお喜び下されるであります。自他互の尊重は、親に仕ふるに於ての信心の、大切な心得の一つであります。

他の難を救へよ

以上は他人に事なき時即ち平常の心得であります。更に他の病氣、災難のときに、吾々は亦精神的にも物質的にも他を救ふ事を忘れてはならぬ、これは人間の心に宿る、同情といふ美しい情の現れでもあります。更に夫れ以上の貴い意義がある、即ち我が教祖は、「人間は人を助ける事が出来るのは難有い事ではないか、牛馬は我子が水に落ちて居ても助ける事が出来ぬ、人間が見るに助けてやる。人間は病氣、災難の時、神に助けて貰ふのであるから、人の難儀を助けるのが難有いに心得て信心せよ」を御理解下された。

人の難儀を助けるのが、何故に難有いのか、第一吾れにそれ丈けの資格を與へ給うた事、第二吾れに神の御業の一端を爲さしめ給う事、これが難有いのであります。

牛馬は我が子が水に溺れて居ても、可愛想に之れを助ける丈けの力を與へて頂いて居らぬのであるが、天地間、物多き其の中に、吾々人類のみが、他の難を見て助け得る丈けの能力を資格を與へて頂いて居るのは誠に難有い次第であります。この能力を資格を有して居りながら、之れを適當に行使ふ事を爲さないものは、畢竟實の持腐りである、勿體ない次第であります。更に吾々が病氣、災難のある時に神が助けて下されるのは、前にも述べた如く、吾々の末々の繁昌を致させやうこの深き思召による事であつて、神の御心、神の御業は我が一身、一家の末々の繁昌、一國の繁榮、人類の繁榮、天地の繁榮を致さしめ給ふこいふ點にあつて、是れ即ちが天地の神の御業であります。この御心この御業によつて、吾々は病氣、災難の時に助けて頂くのであるから、吾れも他の病氣、災難を見て、己が能力の及ぶ限り、それを助けて、その人の後々まで榮ゆる様に、心掛けるのは、實に天地の親神の深き御心、大なる御業の一端のお手傳をさせて頂く譯でありまして、此の我が身にかくも尊き仕事を爲し遂げ得られる事は、豈に尊く難有い次第ではありませぬか。

人の喜び、教祖の喜び、神の喜び、天地の榮へ

かくの如くにして、吾々が我が教祖の教へによつて信心の本義を體得して、自他共に喜び、共に榮へ行けば親みます天地の神も、之を嬉しむ御覽はし給ふであります。我が教祖の神も、出世の本懐達したりにお喜び下されるであります。かくて御國も榮へ、天地も亦永遠無窮に榮えて、人も喜び教祖もお喜び下され、神もお喜び下される様になれば、こゝに吾々は我が道の信心を全うする事を得るのであります。親に仕ふるこしての信心は、こゝに其の本義を究め得た事なるのであります。我が道の信心の意義や、嗚呼夫れ大なるかな、抑々また貴きかな。

(大正三年三月)

自分のものとせよ

聞法の要

教祖の神の御理解に「話を聞いて難有いこと了りさへすれば、神は拜まぬでもおかけは受けられる」
 と仰せられたこと承つて居りますが、これは唯話さへ聞けば、神を拜むの要はないこの意味ではな
 くして、神の教を承つて、心の底より、眞に難有しき會得する事が出来た時、形式に現はして神
 を拜するより先に、既に我が心神に通じておかけを受け得られるこの神意でありまして、我が道に
 於て教を聞く事が如何に信心の上に重要なる事項であるかは、此の御理解によつても知る事が出来
 るのであります。

吾々は、餘暇のある毎に教會所へ参れよ、といふ事を屢々教へられるが、多くの人の中には、教
 會所に参るのを、單に神様に對する拜禮の爲めであること心得て、参つて来ること、唯禮拜だけして、
 お取次の先生が居られても、その方には見向きもしないで、その儘歸つて行くのもありますが、こ

れは教會所に参る意義をよく辨へぬ人でありませう。素より教會所に参つたならば先づ禮拜する事は
 申す迄もないが、唯禮拜するのみであれば教會所に参らなくとも差支へはない、御理解にも「神に
 會はうと思へば庭の口を外へ出て見よ、空が神、下が神」
 といふ如く、神は天地到らぬ限なく充ち
 させ給ふのでありますから、止むを得ぬ時には道を歩みながらも、商賣しながらも、仕事しながら
 も尙拜する事が出来る、眞に止むを得なければ、臥床の裡ながら、便所の裡ながらも拜する事が
 出来るのであります、然るに教會所へ参れよと教へられるのは、何が爲めであるかといふこと、神に
 禮拜すること共に、神の教を聞かせて貰ふ爲めであつて、教會所に参つた以上は、假令一言でも半言
 でも教を承はらないでは歸らぬといふ程の手厚い心から、暇のある毎に参らせて貰はねばならぬ。
 さて教を聞くといふ事の要は何れに在るかといふこと、その一は教によつて、未だ辨へぬ道筋の案
 内を得るが爲めでありませう。恰も知らぬ道を歩くのに道案内を要するが如く、信心の道を歩む爲め
 の案内であります。案内を知らないで、唯自分勝手手の好い加減の考で道を歩いて居ては、徒らに時
 間や勞力のみが餘計に要つて何時まで経つても、我が目差す處に到着く事が出来ぬが如く、自分勝
 手の了見で、譯もなく神様にお縋り申して居ても、何時経つても我が念願の成就する時はない。そ

れでありますから、信心の道に入つたものは、先づ以て教を承る事を第一の要義とせねばなりません。

然らば、既に信心の道に入つて、相當の年月の経つた者には更に教を聞くの要はないか、さういふ事決してさうでない、信心の上には、日々に改まりが大切である事は吾々の常に教へられる所でありまして、この改りを心に得る最も捷徑は、日々に教を聞くに在ります。成る程、信心の年月が経ち、比較的教の筋々、教の言句は記憶する事が出来る様になりましたも、それを單に知つて居る、心得て居ると思ふて居るのは、それが既に直ぐ心の油斷となり、怠りとなり、信心の凝滞となるのであります、如何に教の筋々、教の文句は心得て居ても、また假令日毎に同一の教を受ける場合にも、現在教へ傳へられる教訓を、初めて承はるさういふ心になり、新しき心になつて承るさういふ所に、即ち我が心の改りは存するのであります。故に信心の日が浅ければ尙の事、また信心の日が舊ければ舊い丈、日夜に教を聞かして貰ふ事を忽せにしてはなりません。

疑ひ迷ひを去れ

そこで教を聞くについて、先づ去らねばならぬのは、疑ひ、迷ひの心であります。教を聞く事は、屢々食物を戴く事に譬へられるのであります、食物を戴く場合に、これを食へては毒になりはすまいか、身體に障りはすまいか、と思ひながら食へるさういふ、毒のない物でも身體に禍ひをする事がある、他から、あれを食へては毒になりはすまいか、さういふ様なものでも、大丈夫と信じて食へれば更に身體に障るものではない、さういふ様な事は、よく吾々の経験する所であります。神の教に固より毒の在る氣遣ひはないが、その教を受ける場合に於ても、自分の我執や偏見の爲めに、教にはこれ／＼あるが、如何にも疑はしい、さういふ、教にはかく／＼説かれてあるが、如何したものであらうか、といふ様な心があつては、決してその教は自分の爲めに充分の働きを現はすものではありませぬ、一切の疑ひ迷ひを捨て、一切の我執偏見を去つて、只々神の教の儘に信ずる心がなくては、その教は自分に活きて用をなすものではありません。

教は之れを味得せよ

次に教を承る上の大切な心得は、之れを十分に味得するさういふ事でありませぬ。味得さういふの

は、よく味ひ、よく咀嚼して納めるのをいふのでありますが、食物の場合について申しますと、如何に甘味い物を戴いても、碌々噛みもしないで、ぐツミ嚙んだのでは眞の味も分らねば、また滋養になるものでも、滋養にならないのみでなく、却つて身體の害をすることにありますが、假令不味くても滋養分は少くても、よく噛み締め味へば、それ相當の味もあり、また身體の滋養にもなるのであります。教を承はるについても、只教の語をそのままに記憶した丈けでは、前にも述べた如く、それが却つて信心の油断、怠りになり、凝滞になるのであります。之れに反して一見つまらぬ教の様でありまして、その教の筋々をよく心に吟味し、色々に考へて居りますと、言ふに言ふ事の出来ない難有さ尊さを感じる事が出来、従つて我が現在の心状態、現在の行爲に當て飲めて考へる事が出来る様になり、悪い點は改め、善い點は一層進めて行く様にもなるのであります。この點が確かに出来すれば、既にその教は大半自分のものとなり得たのであります。

守りて實行す

此の如くにして得たる神の教は、更に之れを實際に守り行ふ事が大切でありまして、如何に教を

信じて、如何に心に吟味し、咀嚼しても、之れを實行に移さぬ以上は眞の効力を現はす事は出来ませぬ。之れを譬へて申して見ますれば、茲に或る人が立派な寶物を持って居り、或は澤山の財産を持つて居るに致しましても、吾々が、只立派な寶物である、大金持ちである、と感心して徒らに褒めて居たり羨やんで居たのみでは、それでは何の役にも立たぬ、それではその寶なり、財産なりは、何時まで経つても、畢竟他人のものであつて自分のものではない、それを褒め、それを羨むと同時に、自分も亦、それを得る工夫をして、實際に我物とせねば、何の効もないのであります。神の教に對してもその通りで只難有い、結構な教であるに感心して居たのでは、恰も人の寶を見て羨んで居るのと異りはない、吾々はその教を自分のものにならなければなりません、自分のものにするには、如何にすべきかといへば、即ち吾れ自ら、實行するといふ事にあるのであります、實行によつて他の寶は直ちに自分のものとなるのであります。

徳とは働きなり

かく、教を守つて之れを實行する事によつて、吾々は今日まで我が身にもつて居なかつた新たな

働きを得るのであります。例へば今まで兎角腹立ち易かつた人が、教祖の教によつて、腹を立てる事のない、誠に穩かな人になる事が出来たならば、即ち何事も穩かにする、こいふ一つの働を新しく得たのであります。今まで動もすれば陰日向の心が出勝ちであつた人が、教によつて、更に陰日向のない、正直、實意な人になる事が出来たならば、それは即ち新しい一つの働を得たのであります。併しながら、この新しい働は、元來自分に全くなかつたものを途中から、他に之れを得て附け加へたのであるかこいふ事、決してさうではなく、固より自分の靈の中に本來具有して居たのであるが、畢竟その働を現はさないで居たものを、神の教を守る事によつて、本來の働を現はしたこいふに過ぎないのであります。

よく吾々は徳こいふ言葉を用ひます、神徳であるとか、人徳であるとか、智徳こいひますが、徳こは物の働を指していふ言葉であります。例へば家の徳こいへば、人を住はせて雨、露、寒、暑を凌がしめる働をいふのであつて、家は建つて居ても、屋根は抜け、壁や窓は落ちて了つて、人が住んでも一向雨、露も凌げ得ない、寒さ暑さも防げないこいふのでは家の徳はないこいふ事になる、衣物の徳こは何であるかこいへば、人の身體を包んで、人としての禮を缺かさぬ様、寒くない

様、暑くない様にしてくれるこいふにあるのであります。衣服は身には纏うて居るが、醜い處も陰せない、暖くもならねば涼しくもならぬこいふのでは、一向衣服の徳はないこいふ事になる。それと同じく人間が人間らしい働をしない、こいふのでは人としての徳はないこいふ事になるのであります。人としての働に缺けた所のないのを人徳ある人こいふのであります。人として普通の人以上、氣高く尊く、而も不可思議の働ある人を神徳ある人こいふのであります。人徳を得るこいひ、神徳を得るこいふ事は、何れもその働を現はす、こいふの謂であります。俗の考へによる徳を戴くこいふのは、何か天からでも、或る物を下けて下さるのを受取つて途中から我が身にその一種特別なものを附け加へるのであるこいふ様に思はれるのであります。決してさうでない、前にも述べた如く、元來、我が靈に本具へて居る隠れたる働を現はすこいふのが、即ち徳を得るこいふ事になるのであります。即ち吾々は、もこより神の氏子として、神の御心を現はし、神の御旨に副ふ働をする丈けの本性を有つて居るのであるが、今日迄畢竟それが現はれないのに過ぎない。そこで御互に信心して神の教を信じ、神の教を心に守り身に實行するこいふ事によつて、その本來の働を一つ一つに現はし、本來の光を一分一分に輝かして行く、これが即ち我が道の信仰の

要義であつて、これによつて神の氏子たる徳を漸次に得て行くのであります。

三三〇

自分のものとする

恐れながら、我が教祖生神金光大神も、本は備中大谷の一農民に過ぎ給はなかつたけれども、種々の境遇から天地の神を信じ、その教をお承け遊ばされて、身にお守り遊ばされ、その教のまゝに次第に徳を現はし給うて、最初は天地の神の徳より發した教であつたがその教を一つ一つに迷はず疑はず守らせ給ふ事によつて、終に神と同一の御徳を現はし給ふたのであります。吾々は更に、この天地の神と等しき神徳を得させ給ふた生神金光大神から、その御徳の現はれである所の御教を戴いたのでありますから、吾々も教祖の御跡を躡み、教祖の御恵に絶つて、その教を守らせて戴けば、教を一つ守れば一つ丈、半分守れば半分だけは、最初は教祖の教と思ふたものが、自ら自分のものとなり、それ丈けつ、我が靈に宿せる神徳を發現する事を得るに至るでありませう。この境界に立ち到るのが本教信仰の本旨であり、亦教祖立教の本願でありませう。

先の世までも

我が教祖は『先の世までも持つて行かれ、子孫までも残るものは神徳ぢや、神徳は信心すれば誰でも受ける事が出来る、みてる(盡きる)云ふ事がない』と御理解下されたが、吾々本教の信心の大願、終局の目的は、此の先の世までも持つて行かれ、子孫までも残る神徳を得るこいふ一點になくてはならぬ、目前の事を救ふて貰ふのみが信心の目的ではない、目前の事よりも寧ろ我々の一生の上であり、先の世までの上にあるべきであります。それと共に、誰でも受けられる、こある如く如何に學問なきものも、財産のなきものも身分のなきものも、尙我が信仰力によつて何人も受け得られるのであり、またその資格のあるものでありますから、吾々は自ら卑屈に流れる事もなく、自ら驕る心もなく、只真心一筋に神の教を信じて、之れを日夜に守り行ふ事に精進するより外には何物もありませぬ。

(大正三年二月)

求信の覺悟

三三二

信心には連は要らぬ、獨信心をせよ、信心に連が要れば死ぬるにも連が要らぬ、皆逃げて居るぞ。日に／＼生きるが信心なり。(御理解二六)

最初の覺悟が大事

何事をするにも、最初の覺悟が大切であります。例へば道を歩くにしても、最初から、今日は何程の道程を歩くのだ、こいふ事が定まつて居りますよ、その心になつて元氣よく進む事が出来ませぬれども、最初から何れ丈けこいふ事が定まつて居ないよ、同じ行程でも非常に遠い様に思はれたり、餘計に疲れを覺わたりして遂には歩くのが忌になつて了ふものである。學問を修めるにしても商賣をするにしても、その他何事をするにも、最初の覺悟の定め方の善い悪い、大い小さいによつて、その務め方の上にも、その結果の上にも非常の相違が生じて来る。

吾々が信仰に入る最初の覺悟の致し方も、尙且その通りでありまして、只假染の願望を達したい

こか、一時の氣まぐれで入つた信仰は、その願望が成就され次第、一時の熱が醒め次第に信仰の生命は盡きて了ふものであります。前に掲げました我が教祖の神の御理解「信心に連は要らぬ、獨信心をせよ、信心に連が要れば死ぬるにも連が要らぬが、皆逃げて居るぞ、日に日に生きるが信心なり」こは、即ち本教信仰に入るものは、如何なる覺悟を要するか、こいふ事について誠め給うた、最も切實なる、最も嚴肅なるお言葉であります。

生は人間それ自身である

生きたいと思ふ心は、人間に於て最も根本の慾求であつて、而も最も切ないものである。嬰兒が母の胎内から産れ出た瞬間、まだ何等の知識も何等の經驗もないのに係らず、先づ求めるものは何か云へば母の乳汁である、既に一人前の人間になつて後、人はそれ／＼生活の苦痛こいふものを嘗め盡すのであります、夏の炎天に燻かれながら、冬の寒風に晒されながら、夜々營々こいふものを道を求めて死ぬる迄一瞬間も休む時はありませぬ、人間こいふものを一層適切に申しましたならば、人間の心も身體も、一切の心の作用も、一切の勞働も、悉く、一つの生きたい、こいふ心の作

三三三

用の表現であるを申し宜しい。生活の爲めには人はいふにはれぬ苦痛を嘗めるのであるが、その苦痛の中にも一種の希望と満足を得て、自ら言ひ知れぬ慰藉を得るのでありますが、若しこれが他人から頼まれて生きて居るのであるとしたならば如何でありますか、その苦痛は到底耐へ忍ぶ事は出来ませぬ、それも三日か五日かならば、さうでもありませんが、五十年、七十年の長い間を、さうして我慢が出来て居るでありませう、一日も速に御免蒙るより外はない、假令我慢が出来て居ても、我慢をした爲めに、壽命は半分か三分一かに縮まつて了ふであります。然るに實際はさうでなく、老ひさらばうても、尙一日の長生を希ひ、死んでも命のあるやうに、願ふのは、これが人間自身の爲めであるからであります。

生は遊戯に非ず

人間は相集るのを喜んで、相離れるのを厭ふものでありますが、これは畢竟人間生活の爲めに必要であるからであつて、決して花見に行くとか、見物遊山に出掛けるのに相手がないと淋しいから、さういふ様な一種の贅澤や道樂の爲めでは必ずしもないのであります。その證據には難船に出遭

つた人の話をよく聞く事がありますが、水に溺れまい、命を助かりたいと思ふ時には、平生は親友であるとか、同船内で顔見知りの者であるとか、いふ様なもの、上を考へる暇はない、板子一枚でも、丸太一本でも、何んでも彼でも水に浮んで居るものを捉まへて放すまいとする、若しそこへ誰か来て自分の持つて居るものを捉へやうとするに殆んど死物狂ひになつて、それを追ひ斥けるさういふ様な事を聞きますが、生命に係はる一大事の差迫つた時には、他人の上なごを考へて居る暇がない。これが眞底の事實であります。固より人間には自他共に喜びたい、自他共に幸福でありたい、互に長命をしたいと思ふ心はありますが、しかし相手がなくては、友達なくては生きて行かないと思ふものはない、見物遊山ならば相手がなくてはつまらぬから今日は止さうさういふ事もあります。また昔から饑乏たる者は食を撰ばず、を申し居りますが、誠にその通りでありまして、平生何事もない時には食物一つについても、彼れは好きだ、是は嫌ひだ、彼れは甘い、是は不味い、を申し居りますが、食べたたくても食へる事が出来ない、腹が減つても誰も食物を與へて呉れるものがない、さういふ様な時には好きだの、嫌ひだの、甘いの不味いのを申し居る暇はない、何でも

彼でもお腹へ容れて、空腹い思ひをせねばよいといふ氣になる、愈々食べやうにも貰はうにも、物のない時には砂を嚙んでも生きたいと願ひ、石を搾つても飲みたいと思ふ様になる。私共が市中を歩いて居る間に、誰も世話する人がないのでありませう、老ひさらばひ、瘦せ衰えて、血の氣こては殆んどない、唯息が通うて居る丈けであるといふ様な憐れな人が、重い荷物を背負うたりして、よろめきながら歩いて居るのを見ることがありますが、私がかゝる氣の毒な人を見る度に、沁々生活の苦勞といふ事を思はずには居られないのでありますが、それと共に人の生は決して遊戯や冗談でない、最も切實であり眞實であり、最も嚴肅であり最も眞面目である事を感じて、思はず涙ぐむ事もあります。若しも人生が一種の道樂であり、遊戯や冗談であつたならば、何を苦んでか、何を好んでか、斯かる眞似をするものがありませう、疾くの昔に人間を御免蒙つて居るべき筈であります。

人頼みては生きられぬ

生きるといふ事が、斯くの如く人間の根本の慾求であり、人々別々であるに従つて、生きて行く爲めの衣食住も、亦人々別々であります。早いお話が、自分のお腹が空いて居るのに他人に御飯を

食べて貰つた所が、決して自分の腹のたしにはならぬ、自分が寒くて凍つて居るのに、如何に他人が炬燵に入つたからきて、綿入服の裏着をして呉れたからきて、自分の寒さを防ぐ事は出来ない、これは假令、親子、夫婦、兄弟、朋友たりとも個々別々であります。自分のお腹が減つて居れば自分自身に食を求めなければなりません、自分が寒ければ自分自身に衣服を纏はなければなりません。

生は日々新たなる事實

更に、昨日如何に三度の食事を戴いたからと申しましても、それは今日のお腹のたしにはなりません。世には一度に一升も二升も御飯の蓄食をして、それで三日も五日も食事しないで働ける人もありますが、これは例外であつて、普通のお話ではありませぬ。朝御飯を食べて置いたから晝も晩も食べないで宜いかといへばさうでもない。即ち昨日は昨日、今日は今日、明日は明日、朝は朝、晝は晝、晩は晩に食事をせねば働く事は出来ません。衣物でも住む家でも皆それ等しくその日の日に用意して、その日その日に生きて行かねばなりません。かくの如くにして續けられる吾々の生命は、亦その日その日新たなものであります、今日の生命は昨日の生命ではない、昨日の生命は

今日の生命でもない、今日の生命は亦明日の生命でもなく、明日の生命は亦今日の生命でもない、吾々は日々に死して日々に生れ變りつゝある、時々刻々に死して時々刻々に生れつゝある、これが人生の事實であります。

死も亦人々別々なり

かくの如くにして吾々は一定の壽命の終つた後には必ず死しいふものが来るのでありますが、死しいふ事も亦人間の一大事であります。生きる事が人間の遊戯でない、冗談でないが如くに死するしいふ事も決して冗談に出来るものではありません。死しにたいし考へても無暗に死しねる譯でなく、死しにたくないと思つた所が決して思ひ通りになるものではない。これ亦君臣、親子、夫婦、兄弟、朋友たりとも別々のものであつて、冥土の道連れが欲しいと考へた所が、試あに死しんで歸り得るものならば、お交際あいふ事もあるけれども、こればかりはお交際は出来ない、お交際が出来る様な死しに方ならば、それは事實に死しんだのではないのであります。

求 信 の 覺 悟

此の如く人の生死しいふ事は人間の一大事であつて、生死しいふ事を取去つては人生そのものは無くなつて了ふ程吾々に取つて最も切實なものでありますが、我が教祖の神様は、我が道の信仰しんぎやうも亦、生死しが人間に取つて一大事であるが如くに吾々に取つての一大事であり、生死しが人間に取つて最も切實であるが如くに吾々に取つて切實なものであると御教へ下されたのが即ち前に掲げた御理解の神意であります。故に眞に我が道の信仰しんぎやうに入らうとするものは、此信仰しんぎやうを措あいては吾々は生きる甲斐がない、信仰しんぎやうを外あにしては自分おれいふものはないといふ丈だけの一大覺悟を我が教祖は吾々に求め給ふのであります。如何に嚴肅なる御教事ではありませぬか。吾々は今日形の上では本教信仰ほんけうしんぎやう内に、兎も角も籍を有して居るものであります。しかしながら、果して教祖の求め給ふが如き覺悟が出来て入つて居るのでありませうか、今若し本教を信ずるものは首を刎ねる、と宣告されて、それでも結構であります、難有うござります、と平然として居る事が出来るでありませうか、少くもそれ丈だけの事が出来ないでは、お互たがひに外形では本教信仰ほんけうしんぎやうの徒であります、眞に教祖の求め給ふ氏子うぢこなる事は出来ないのであります。

信仰は遊戯にあらず

然るに世には、斯の如き確乎たる覺悟があるのでなくして、前にも述べた如く、目前の願望を成就させて貰いたいとか、一寸氣が向いたからとか、餘りに心配事があつて一時途方に暮れたものであるとか、私は一體何神様でも信心好きであるからとか、閑暇で仕方がないからとか、他人から無理遣りに勧められたから致方なしにとか、彼の人があるから御交際にとか、その他色々の考から信仰する輩も少くない様であります、かゝる人に限つて、信仰して居るらしく見たり、止めたらしく見たり、殆んど遊戯や冗談や贅澤の爲めのものゝ様に見るのであります、そんな不眞面目な、浮いた考では到底眞の信仰を得る事は出来ないのであります。故に吾々をしての大切な心掛けは、世の中のそんな不眞面目な人の上の事を見て、嘲つて見たり、腹を立て、見たり、他の思はくを計つて見たりして居る要はない、「信心に連は要らぬ」といふ心で自分自身の信仰の神の思召に副ふ様に且暮に深く心掛けて行く事が肝要であります。

信仰は自分自ら求めざるべからず

更に世には信仰の徳といふ事、信仰の覺悟といふ事を混同して居る人が尠くありません、例へ

ば親が信心して居られるからとか、妻が信心して呉れるからとか、子が信心して呉れるからとか、夫が信心して居て下さるから、といふ様な考から自分自ら信仰を求め事をしてしない様な事がある。固より一家内に一人信仰するものがあつても一家内中助けられ、一町内に一人信仰するものがあれば、一町内の人が幸福を得る、といふ事は事實に有り得る事ではありますが、これは信仰の徳の現はれでありまして、如何に親が信仰するから、夫が信仰して呉れるからとて、子をして、妻をして信仰する要はないといふ事はありません、それは信仰を求め覺悟の上の事で、もごく別な事柄であります。

お互人間は、如何なる人にも雖も、天地の親神様の深い御恵によつて此大天地に住ませて頂き、日夜にその御恩徳によつて、今月今日只今、此の如くに生きさせて戴いて居る事の尊さ、忝なさを思ひましたならば、吾々は只の一日片時たりも神様に御禮を申上げずには居られない、眞に神の御心に副ふ生活をさせて戴きたいと願はずには居られないのであります、この心の起らぬものは、眞に人間としての價値あるものとも思はれません。故に吾々は我が教祖の神が、人間としての眞の價値の爲めに、この御教を世に傳へ給うたお思召の程を日夜に奉戴して神の御心に副ひ奉る様に努め

ねばならぬ。さもなくばは身體は生きて居りまして、眞に神の氏子として生きて居るこいふ事は出来ません。身體だけ生きて居るこいふのでは、牛馬を撰ぶ所はない、草木を撰ぶ所はない、牛馬、草木も尙且身體は生きて居るのであります。併しながら萬物の靈長たり神の氏子たる人間はそれではすまされぬ。神の氏子として眞に恥づる事のなき様にして

日に日に生きるが信心なり

このお言葉の如くにその日その日新にこの尊い生活を續けて行かねばなりません、假令昨日まで立派な行爲が出来て居ても今日の信仰が出来なくては、今日の足しにはなりません、今日熱心に信心して居ても、明日の信心が出来なくては明日の充しにはならぬ、日々に新たに生きる工夫をせねばならぬ。その工夫の第一としては、日々新たな生命を繋ぐ爲めに日々新たに衣食するが如く、吾々は日々新たな心になつて、神の御教を聞かせて頂かなければなりません。世には、私はこの前の祭典に参つたから、この前の説教を聞いたから、昨日参拜したから今日は参拜しなくてもよい、教を聞かなくてもよい、説教でも、御理解でも何時も同じ様な事はかりだ、こいふ様な人がよくあり

ますが、これは、昨日御飯を頂いたから今日は食べなくてもよいこいふ人と同じであります。成る程耳には毎日の如くに同じ様な教を承つて居る方があるかも知れぬが、日々新たな心から改めて一つ教を聞くこいふ事は中々難かしい事でありまして、それであるから教が耳に残つて居る丈で、心の養ひとなり、眞生命の力とする事が出来ないものであります。今日の眞生命の爲めには、今日改めて教を承るこいふ丈けの熱烈な心掛がお互にありたいものであります。

固より教祖の神は、忙しい所を手間暇を費して迄教を聞きに來いこ仰せられるではありません。此點はくれども、昨日参つたから今日は参らなくても宜しいこいふ様な心は全く別であります。此點は動もすれば誤り易い所でありまして一言申添えて置くのであります。

何卒、共に折角この道の信仰に入れて戴いたのでありますから、信仰の眞義を了得て確かな覺悟の下に日々に新に、生涯中絶のない信仰を續けて、そして眞に神の氏子として日々に生きる事が出来て末々の繁昌を遂げさせて戴きたいものであります。

(大正二年十一月)

和 賀 心

今月今日で一心に頼めおかげは和賀心にあり

常 の 教

我が教祖は「今月今日で一心に頼め、おかげは和賀心にあり」を教へ給うたが、この神訓についてはこれ迄屢々お話し上げた如く、教祖が吾々に對して常の心得をお示し下されたものでありまして、即ち信心の道にある吾々は、日々新たな心になつて、神様に一心に信頼する事が大切である、この心になれば、吾々は自ら何事にも穩かに樂しくなる事が出来る、この穩かに樂み歡ぶ心だにあらば、神の御蔭はその上に加はつて、日々を安らかに幸福に送る事が出来る、この御教であります。ここに「和賀心」を仰せられたのは、自分自分の心といふ意味には違ひない事ではありますが、他の神訓には、悉く「我心」をお示しになつてあるのであります。この神訓に限つてのみ、かく萬葉假名にて「和賀」をお示しになつたのは、即ち神の御蔭は自分自分の心一つにある事であるが、その心

は、斯くあるべきであるといふ心持ちを、文字によつて示されたものであります。

和 の 字 の 意 義

「和賀心」とある和の字は、普通「やわらぐ」と訓む字であつて、賀の字は「よろこぶ」といふ意味の文字であります。この「和」の字は、御承知の如くに口といふ字に禾といふ字の從つて居る文字であります。私は文字の事はよく知りませぬが、和といふ文字の意味は、この文字の成立ちの上に、良く表はれて居るこいふ事でありませぬ。即ち口は吾々の食物を頂いて噛み締め味ふ機能をする處でありまして、禾は即ち稻の事でありませぬ。そこでこの和の字は、吾々が御飯を頂いて、これを口の中に噛み締め味ふ時の、言ふに云ふ事の出来ぬうま味のある味ひの如き心持を表はしたものだといふのであります。これは成る程頷かれるお話であります。實際吾々が御飯を頂く時に、茶漬やなかでサラ／＼と流し込んだのでは分らぬが、よく噛み締めた時には、誠に何とも言へぬ味が出て来るものであります。御飯の味ひは、固より鹹い事もなければ、酸い事もなく、辛い事もなく、苦い事もない、さればこいつて砂糖の如く甘い事もない、それならば、何の味ひもないか云へば、さ

うでない、其の間に何事も云へぬ一種のうま味が存して居る。吾々が一生の間、日に三度づゝ御飯を戴いて、而も今日は御飯に飽きた、こいふ事もなく、常に美味しく食べる事の出来るのは、このうま味があるからであります。如何に、しる、こが嗜きた、お刺身が好きだ、お酢鮓が甘いこいつても、三度、三度食べられるものではなく、直きに厭きの来るものであります、これ等は何故早く心に厭きが来るかこいへば、何れもその味が一方に偏つて居るからであります、然るに御飯の味は決して一方に偏らないで而も一種のうま味があるが故に、一生戴いて居ても少しも飽く事を知らないのであります。

これは吾々の心持の上に宛て飲めて考へて見ますと、人間の心持には、古から或は喜怒哀樂愛惡慾ださか、貪瞋痴慢疑ださか申しまして、色々ありますが、この喜ぶさか、怒るさか、悲むさか、樂むさか、可愛いがさか、悪むさか、欲がるさかこいふ様な心持ちは、何れも時に應じ、物に觸れて發する心の作用でありまして、人の生活の上には夫々相當の役目のあるものであります、さうも吾々人間の弱點として、一方に偏り易いものである。喜ぶこいふ事は、吾々に取つては最も大切な心持ちであります、世には喜びの餘りに亂暴を働いたり、油斷が出たり、怠りが出たりする事が

よくある。怒るこいふ事は、如何なる場合にもよくない事ではあるが、しかしながら、時によるこ怒るこいふ事も大切である、即ちものに奮發するさか、改めるさか、勇氣を出すさか、ものに恐れぬ、さかこいふ様な心の作用を起すのは、この怒るこいふ心持によるのであるが、是れが偏り過ぎる爲めに癩癩玉を破裂させて、大切な什器を壊すさか人を譏り傷け残ささか、或は一身一家を過る様な大變な事にもなるのであります。また哀しい事に出遭つて心が傷み悲むこいふ事も人の心の自然ではあります、世には悲みの餘りに氣を狂はせたり、家業に荒んだり、世の中を果敢なんたりする様な事もあります、樂みこいふ事は誰しも求めて止まぬものであります、その樂みが極まるこ、その後には必ず悲みが生ずる、所謂歡樂の悲哀こいふ事が伴ふものであります。故に、昔の人も「小人の樂みは眞の樂みにあらず、はては必ず苦みなる」こ申して居りますが、誠にその通りであります。その他物を可愛いがさか、物を悪むさか、物を欲しがるとかこいふ様な事も、一方に偏するが爲めに、自他共にその害を被る事が多くあります。これ等は何れも心に眞に「和」こいふものを得て居らない場合であります、嬉しい事に出遭つて嬉しいと思ひ、悲しい事に出遭つて悲しいと思ひ、腹立しい事に出遭つて腹立しく思ふのは人の心の常ではあります、吾々は常に是等の心持ちを制

限へるさいふ心掛けが大切であります、若しさうでなかつたならば、我が心は常に外界の物事に應じ、他人の爲る事爲す事につれ、時々の推移に應じて我が心は暫くも靜に穩かに保つ事は出来ません、従つて私共は常に變らぬ志を有て一つの事業に絶えず怠らず従事して行くさいふ様な事は出来なくなつて、尊い一生を誠に夢幻の間に終つて了ふ様な事にならねばなりません。何れの味ひにも偏らぬ御飯の味が一生人に飽かれぬが如く、喜怒哀樂、何れにも偏らざる眞の心の「和」さいふものを常に心に保つ事が出来たならば、吾々の心は一生の間眞に心のよろこびを得てその事業に盡す事が出来るであります。

和のある所に賀あり

この心のよろこびは、吾々が他から物を貰つて喜ぶとか、面白い物を見たり聞いたりして喜ぶとかいふ様な、取りたて、是れさいふ喜びではないけれども、何れもいふ事の出来ない、のんびりした、せいせいした心のよろこびであります。我が教祖は「正月元日の心になれ」を常々に教へ給ふたが、この心持が即ちそれである、正月元日の心は、別に是れさいふ特別に嬉しい事や面白い

事があるわけではありませんが、古人の所謂「昨日に變りたり」には、あらねど、ひきかへめづらしき心地ぞせらるゝ」で、大晦日の日影も、正月元日の日影も別に變つた事はないけれども、昨日迄の色々面倒な事も片付いて、何思ふ事なく迎へる元日の心程のびのびしたものは無い、せいせいしたものは無い、この時のみは我が心に「和」を保つて、眞に心によろこびを得たのであります、このよろこびは苦みの伴ふ様な事はありません、我が教祖が「正月元日の心になれ」を教へられたのは、我が神を信するものは、常にこののびのびした餘裕のある、いつも變る事のないよろこびを得てその日その日を暮す様にせよとの御教であります。眞に心に「和」を有つ時に眞のよろこびさいふものがあり、心に眞のよろこびある時が、即ち眞に心に「和」を得た時なのであります、「和賀心」には是を仰せられたものであります。

「心の信頼に求むべし」

吾々は、常にこの「和賀心」を有つて居りさへすれば、その心に對して、神の御蔭も一層加はるのであります、如何せん吾々の日夜に生息する實世間は、吾々が漠然考へて居る如く單純な平穩な

ものではなく、實に複雑極まりなく、浮き伏し繁く、思ふ様に行き兼ねるものであります、生活の上には心配がないと思ふも、或は病身であるとか、家族に病人が絶われないとか、或は家内に不和が絶えぬとか、子供が道樂者であるとか、いふ様な事が出来て来る。身體は丈夫であり、家内は無事であるが、さうも生活向きが不如意であるといふ様な事もある。先づこれで一安心だと思ふ矢先に不意に不幸な事が湧いて出る。いふ様な事もある。誠に思ふ様になり難いものであります、吾々はその度毎に、或は飛び上つて喜んで見たり、泣いて見たり、腹を立て、見たり、心配して見たり、業を煮やして見たり、悔しがつて見たり、さういふ風に、心が殆んど水の面に浮いて居る根なし草の如くに、日々にあちら、こちらに徘徊して居るのであります。斯様な有様で一生活を過して、さて過ぎ来し方を振り返つて見て、今迄何をして来たか一向に合點がゆかぬ、さういふ様な事では、この尊き生を與へ給うた神様に對して、誠に申譯のない次第であります。

儘にならないのは浮世の常であるが、儘にならない、その浮世のいさくさに我が心を投げ入れて、弄ばるゝ儘に任せて、あちら、こちらに徘徊ふ様な事では尊き價値ある人間といふ事は出来ない、犬や猫ならば致方もあるまいが、苟にも人間さある以上は、そんな事ではつまらぬではありますまいか。世には、自分は、かうした運命を持つて居るのだ、宿世の因縁である、とあきらめる人もあるが、一見立派な覺悟だと思はれるけれども、實は褒めた事ではありませぬ。固より我が智恵には限りがあり、我が能力には限りがあり、まして前々より、めぐり深く積み來つた吾々ではありますけれども、生神金光大神に一心に縋り、そのお取次の御手に頼り參らせたならば、我が信心は足らずとも、生神金光大神の御信仰の御徳により、生神金光大神の御修行成就の御徳によつて、『我子の可愛さを知りて、神の氏子を守りくださる事を悟れよ』この御教の如く、天地の親神の廣大無邊の御恵を得て、助けられ導かれて、如何なる事にも如何なる時にも、「和賀心」その儘に一生の旅行を終へて、生甲斐ありご微笑まれる時が來るであります。本教徒の生活は、實に斯くあるべきではありませんか。

餘裕ある生活

今や世の中が段々苦しくなつて參りました、生半可な事をやつて居たのでは實際その日その日の生活も難しい世の中であり、且つ我が國に向十七億圓からの借金を背負つて居るのであります。

そこへ持つて来て、驕奢の心が段々増長して参りまして、ごんな事をしてども、甘い物が食べたい、華美な衣服が着たい、ミいふ様な事を心掛ける人が多くなつて参りました。それが爲めには氣が狂つたとか、自殺を企てるとか、やけのヤン八になるとか、窃盗や強盗を仕事にするとか、大仕事な欺偽を働くとか、いふ様な者が、日々に多くなるではありませぬか。若し吾々が、この世の中の渦巻の中に巻き込まれて了つたならば、或は終に吾々も彼等の群に伍する様になるかも知れぬ、誠に危険至極な事であります。

吾々本教徒は、かゝる世の渦巻の中にあつても、生神金光大神の御手に、一心にお縋り申して、我が心のみは日々にのびのびとして餘裕ある世界に住して、よろこびの中に神の御導きのまゝに、眞の道を渡らせて頂き、帝國の臣民として、神の氏子としての分を盡させて頂きたいものであります。

(大正二年一月)

剛健の精神と信念の確立

一、剛健の意義

大正十二年十一月十日に、畏くも、下し賜つた國民精神作興に關する詔書は今日の世局に處して、吾等國民の、ミもに恪遵戒守せねばならぬ聖訓であることは、いまでも申すまでもありません。私は、この詔書の冒頭に、仰せいだされてある、

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセザルベカラズ

ごある剛健の精神ミ、信仰ミいふものミが、如何なる關係にあるかといふことについて、謹みて私の信する所を、お話ししてみたいと思ひます。

おたがひ國民に、この剛健の精神の、あるなしといふことは、この詔書に仰せられてあるごほり、直に我が國運の隆替に關係するのであります。従つて、いはゆる剛健なる精神ミは、如何なる意義

内容を有するものであるかといふことは、この詔書を奉戴してまゐります上の、まことに大切な點であると思ひます。

『剛』といふ字を解釋して、辭書には、およそ三通りの意義を與へて居ります。その一は『柔ならず』(堅)即ち、もの、手堅いことを、いひ現す言葉であるとして居ります。その二は『折れず』(勁)外物に出あうてくだけない、こいふやうな意義を現はす言葉であるとして居ります。その三は、以上を意解して『外物に對して、主義節操を變ぜざる、徳あるものにいふ言葉』であるとしてあります。『健』といふ文字は、勢力の強いことにいふ文字、或は、つこめて、やまざるにいふ文字である、こいふやうに申してありまして、日本の言葉で『まめ』『たけし』『つよし』『すこやか』なこいふ言葉が此の字で現はされて居るを申して居ります。これらの字義に従つて、この剛健といふ言葉を、一言にして解釋すれば『強いこゝろ』或は『如何なる場合に處しても、自分の主義とし、節操とする所を變へないで、突き進んでゆく』こいふやうな意義のある言葉であると思ひます。

しかしながら、單に『強いこゝろ』を申しても、その内容は必ずしも一樣ではありませぬ。彼のいはゆる、暴虎馮河の勇か、暴力を逞しうするとか、いふやうな場合も、やはり『強い』こいふ言葉で、いひあらはしますが、この剛健の精神といふことは、さういふ意味での『強い』ではありませぬ。然らば、之は如何なる内容をもつて居るのでありませうか。

まづ第一の要件としては肉體的の方面を擧げなければなりません。諺にも、『健全なる精神は、健全なる身體にやまゐる』こいふてあるやうに、身體が健全に發達してゐる人にして、はじめて健全なる精神も生れるのであります。病氣のために青い顔をして居つたり、神經衰弱のために、目のつりあがつてゐるやうな人からは、決してこの剛健な精神を、求めることはできないと思ひます。第二には強い意志を有つて居るこいふことが大切でありまして、自分の思ひ立つたことを、直に變へてしまつたり途中倒れしてしまふやうなこいふことではなりません。第三には、如何に意志が強くて、正しい道を辨へるこいふことがなくてはならぬのであつて、孔子も『剛を好んで、學を好まざれば、その弊や狂なり』を教へて居られます。如何に強いこいふことを好んでも、學問して智をみがき、道理を辨へるこいふを缺いだならば、その弊害こいふものは、きちがひ沙汰になる、こいふのであります。ほんこに強くあるがためには、正しい道理に合致するこいふこいふことは、缺くこいふの出來ぬ條件であります。第四には眞に強くあるがためには、教祖の常にいましめ給うてある『我』を去るこいふことが大切で

ありまして、一片私心私慾のまじつてゐる時には、決して強くあることはできない。私の心をはなれた、公明正大な心事に於てのみ、剛健の精神は發揮せられるのであります。それ故、ある時、孔子も『我れ未だ剛なるものを見ず』と嘆せられました。これに對して、その席に侍してゐた弟子が『申長、いふものがあるではありませんか』と答へた。するに、それに對して孔子は『悵や慾なり焉、ぞ剛なるを得ん』と喝破して居られます。第五には、適當なる感情をもつことが大切でありまして枯木、死灰の如く全く無感情な所に、強い精神の起るものでないのは、いふまでもありません。が、されば、僅かな事にも、すぐに、泣いたり怒つたりするやうな偏つたものでもありません。『文王一度怒つて天下治まる』といふやうな、ものでなくてはならぬと信するのであります。以上、剛健なる精神の内容は、いろいろあること、思はれますが、要するに、吾人の知情意の三作用の圓滿に調和せられ、健全に發達陶冶された所に湧き出づる、精神力を指して、剛健なる精神といふのであると考へられます。

二、剛健の精神と信念

さらに、剛健なる精神の、基礎となり、根柢となる所のものは、強い信念の力であります。いはゆる信仰とは、これを一面より謂へば、弱く醜いわれ／＼人間が天地の大生命を、あこがれる心の現はれであり、更に他の一面より謂へばこの天地の大生命に歸入しやうとする心の現はれであり、更にまた他の一面より謂へば、この心の要求のまへには、一切の疑もなく、一切の迷ひもなく、また一切の不安もなく、如何なる困難にも、如何なる障礙にも打ち克つて、少しもためらはず、心の現はれであります。それでありますから、信仰の一面の姿は、わが教祖の神の『世界を廣う考へて居れ世界は我が心にあるぞ』と仰せられ『天地日月の心になる事肝要なり』と仰せられてある如く、非常に雄大な美しいものであり、又他の一面の姿は、わが教祖の神の『信心するものは驚いてはならぬ、これから後このやうな大きなことが出来て來ても驚く事はならぬぞ』と仰せられ『生きて居る間は修行中ぢや』と仰せられてある如く、非常に根づよい力を以て、勇猛精進するの點に存してゐるのであります。

剛健なる精神は、この雄大な信念に根をおろし、勇猛精進の不斷の泉を汲んでこそ、始めて眞に剛健なる精神たるを得るのであります。例へば、家を建てるには、先づ以て堅固な土臺が必要

であると同じであります、如何なる大厦高樓も、砂上に築いたのでは、僅かな風にも、僅かな地震にも脅かされざるを得ないのであります。

強固なる信念を土臺として、健全なる肉體が柱となり、健全なる心理作用が梁となつて、こゝにはじめて剛健なる精神は溢れ出づるのであります。

三、國史の概観

詔書に「國家興隆の本は國民精神の剛健にあり」を仰せられてある如く、我が國上下三千年の歴史を通観するに、そこに、私どもは、國家興隆の時期において、つねに剛健なる精神の躍動して居るのを見いだすのであります。上下三千年の國史を通観して、大に國家興隆の氣運を拓いた時代を、私は大凡四つばかり、かぞへるこゝが出来ることと思ひます。

すなばち、第一は神武の創業であり、第二は神功の遠征であり、第三は大化の改新であり、第四は明治の維新であります。

神武の創業によつて、我が日本は、はじめて國家としての統一を見るこゝができて、わが國文化發

展の基礎が、こゝに確立いたしました。神功の遠征によつて、三韓を通じて大陸の文化が、わが國に注入せられる端緒がひらかれ、應神、仁德以後、いはゆる大倭朝廷の隆運を見るこゝとなりました。大化の改新は、從來の日本の氏族制度の弊が、その極に達して、ほごんき行きづまりの状態にあつたのを、根柢から改革して、やがて奈良朝、平安朝の燦然たる文化を將來するの機端を作ることになりました。明治の維新は、いまさら云ふまでもなく、わが國封建制度を改革して、中央集權地方自治の、統一分化の機能を活潑に活動せしめる新制度を立て、東西文化の精粹を蒐めつゝ、世界に於ける、日本帝國今日の地歩を、しむるに到らしめた、わが國前古未曾有の大事業でありました。

これ等、各時期において、發動してゐる精神には、それ々の特徴をみこめるこゝが出来ます。神武天皇の創業は、最も雄大にして、最も尊嚴なる、建國の大理想が現はれて居ります。これはいろいろの文献に徴するこゝができるのでありますが、中にも、かの橿原の宮御造の時の大詔は、その最も尊きものゝやうに拜せられます。即ち、

恭ミテ寶位ヲ臨ミ、以テ元々ヲ鎮メ、上ハ則乾靈國ヲ授クルノ德ニ答ヘ、下ハ則皇孫正

養フ心ヲ弘ムベシ。然ル後、六合ヲ兼テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ウテ宇ト爲ス。亦可カラズヤ。ごあります。即ち天地宇宙を開拓して、その中心に都を定め給ふ、こいふやうな、非常に雄渾な御精神が磅礴としてゐるのを、うかがひ見るごことが出来るのでありまして、この雄大なる御理想のみに、國を建て、民を養ひ給うたのであります。わが國三千年の今日、世界無比なる國體の尊嚴をたもつごことが出来たのも、まごに、その故ありご申すべきであります。神功皇后の三韓御親征は、もごく三韓の國々が、わが王化に服しない熊襲の國の、しりおしを、してゐるごを御看破あそばされての御企てでありまして、もごより、かの侵略主義に出でゐるのではありませぬ。それでありますから、御進發にさきだつて、親しく神をお祭り遊ばされ、皇軍の無事を、お祈り遊ばされました。その時に、あらはれ給うた神々は、多くおはしましたが、一番はじめに現はれ給うたのが、撞櫃 殿魂 天疎向津媛命ご申す神さまであります。これは天照皇大神の荒魂に、おはしまして、軍船の先に立つて皇軍をおみちびきあそばされました。やがて、めでたき御凱旋の御船が、務古の水門、すなはちいまの兵庫の沖に、さしかゝつた時に、船は、ただグルグル海中を回つてゐて、ごうしても前に進みませんでした。人々は皆あやしみました。やがて、この神のお言葉として『わが

荒魂は、皇居に近づくごはできない、御心廣田の國に鎮るべし』ご仰せられました。そこで皇后は、その神勅のまゝに、廣田の國に宮造りをなされ、この神をお鎮め申しあげられて、御凱旋なされたおもむきが、日本書紀に見えて居ります。私はこの『わが荒魂は皇居に近づくべからず』ご仰せられた天照大神のお言葉を、最も意義深く、尊きご三拜するのであります。三韓の御征伐はわが國自衛の上の、まごに止むを得ぬ御企てでありました。しかも當時の三韓は、先進國ごも申すべきでありまして、いはば強敵であつたであります。これを御征討なさるごいふごは、餘程の御決心でなくてはならなかつたご、想像されます。この場合神を祭られたごは、單にわが國古來の風習ごのみ見るべきではなく、この深き御決意の現はれご申すべきでありましたが、この惡を膺懲するがためには、天照大神は女神ながら、この荒魂を軍船の先に立たせて、敢然として、皇軍をおみちびきなされた。しかも事治つて、御凱旋に際しては『わが荒魂は皇居に近づくべからず』天皇の都は、これ、平和の源泉であり、神聖なる王府である、天照大神ごいへごも、その荒魂を以て、平和の府に入るに忍び給はぬ、こいふ尊い御神意が現はれてゐる、と信するのであります。わが皇室が常に平和を好愛し給ひ、正しき道を遵奉あそばされ、しかも無道を懲らし、罪惡を攻める

に方つて敢然として、一步も退き給はぬ、さいふ御精神は、わが國三千年を通じて、曾て更らせられぬ所であつて、この傳統の大精神が、最もよく現はれてゐるのが、この神功の御親征であると思ふのであります。

大化の改新は、さきにも一言いたしましたやうに、わが國氏族制度の弊害の極點に達した時に起された一大運動でありました。從來、わが國は、或は中臣氏ミか、或は大伴氏ミか、物部氏であるさか、いふやうないろくの氏族が、各々その部族をひきゐりて、朝廷に仕へ奉つてゐたのであります。後には、それ等の氏族は、土地と人民とを私有して、互に勢ひを争ひあふやうになりました。中にも蘇我氏は、かの神功皇后の功臣、武内宿禰の後裔であるのみならず、佛教崇否の紛争に勝ちを得て以來、頓に勢力を逞しうして、終には皇統の廢立をも恣にするやうにもなり、わが住む家を『宮門』ミミなへ、その子女に『王』の尊號を僭せしめました。しかも何人の力を以てしても、その勢を挫くことを憚りましたが、叡明文武なる中大兄皇子(天智)は、中臣鎌足ミ謀つて、皇極天皇の四年、三韓の使が入貢した時に、大極殿において、入鹿を誅戮し、更に兵を遣してその父蝦夷をも誅亡して、大化の改新を御成就あそばされました。正しき道の前には如何なる勢力も、如何

なる暴虐も懼れぬさいふ壯烈なる精神が、よくこの大事業を成し遂げしめたのであります。更に、

明治の維新は、

親ラ四方ヲ經營シ、汝億兆ヲ安撫シ、遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ、國威ヲ四方ニ宣布シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置ンコトヲ欲ス

さいふ神武の御創業にも比し奉るべき、明治大帝の御威徳の現れでありまして、四方の志士、この聖旨に感奮して、身を忘れ、家を棄て、この大業を翼賛し奉つたのでありまして、わが國前古未曾有の大事業は、この偉大なる精神の下に實現したのであります。

以上ば、わが國史のほんの概観にすぎないのでありまして、今これを詳細に述べる餘裕をもちませぬが、上に列擧した各時代の精神には、それ々の特色は存してをりますが、しかも、要する所は、剛健なる精神氣魄の發動でありまして、國家興隆の本は、國民精神の剛健に在り、ミ仰せられてあるお言葉を、明徴にして居る次第であるミ伺ひまつるのであります。

四、現代の傾向

現代の日本の傾向として、私どもの眼に、いちじるしく映ずるのは、すべての方面に、何んさなく落ちつきのない、さいふこと、何を見てもさつしりとした感じを得ない、さいふことであります。これを政治の方面に見ても、單に政權の爭奪、利權の獲得さいふやうな題目の外に、偉大なる理想、高邁なる氣魄を認めることができません。先年來起つた『憲政擁護』さいひ、『護憲』さいふやうな運動も、本來の意義は、固より貴いものを含んで居るでありませうが、私どもには、ほとんど、政權爭奪の上の、一時の名目、方便に過ぎないもの、やうに思はれてなりません。

これを外交の方面に見ても、これまでから、屢々『自主的外交』さいふことが唱へられました。これは、従來の外交が、やゝもすれば事大主義に陥り、右顧左眄、逡巡姑息に流れやすいことを、非難するの聲でありました。もさより外交の事は、一本調子でゆくものではありませんが、日本には、日本自身としての立場があり、主張があり、權利があり、理想があるべき筈でありまして、これが、苟くも正義公道に反いてるない以上は、如何なる場合に於ても、公々然として、最も大膽にその主張をなすべき筈でありまして更に躊躇すべきではないのであります。然るに、今日まで、私どもの見る所では、さやうに行きかねてゐるやうであります。そこには、やはり、外交の局にあ

たるものに、さつしりした精神に乏しいものがあるからではありますまいか。

これを産業、貿易の方面に見ても、日本の商品ほゞ、外國に評判のわるいものはない、さいふことでもあります。この不評判が、さういふ所から來るのかさいへば、わが同胞の、その場のがれの考へ、不信心態度から來るのでありまして、自己の面目、他に對する信義、仕事に對する忠實、永遠の利益、國家の名譽さいふやうな、廣い點、高い處に着眼して目前のさいだけでなく、さつしりした考へをもち、いつかりした行動をさるることが、刻下の急務ではありますまいか。

これを教育の方面に見ても、また同じさいでありまして、先年、虎の門外に起つた、一大不敬事件は、まことに未曾有の不祥事でありまして臣子の分として、たゞと恐懼の外はないのであります。が、さるにても當路者の、あわてかたさいふものは、全く見ぐるしきばかりでありまして、今更のごさくに偏知教育の弊を説き、教育に宗教の提擧を提唱する、さいふことは、何事でありませうか。凡そ教育の局にあるものに、いつかりした觀念が定まつてゐない、充分の教育上の根本が確立してゐない、さいふことを遺憾なく暴露してゐるものではありますまいか。

これを勞働問題に見ても、先年來、各地に頻發してゐる勞働上の、いろいろの爭議さいふものに

は、根本に於いて重要な意義を存して居るのでありまして、かの勞働の神聖といひ、人格の尊重といふことは、國家にまつても、社會にまつても、人道上から見ても、産業發達の上から見ても、非常に大切な事項でありまして、勞働者が、これを主張するといふことは、もこより當然であつて、國家社會の進歩發展の上から考へても、非常に意義の深いものであります。しかるに、これを主張し、種々の運動に、たづさはる勞働者諸君が、やゝもすれば、いろいろの非難の矢面に立つの餘儀ないここに陥るのは、必ずしも資本家を謳歌するが爲のみではなくして、その態度の如何にも疎野であり、不眞面目であり、不謹慎であり、無節制であるがためでありまして、その態度の不純さ、といふものが、自らに禍ひするのであります。歐米各國の人々は、ほごんご、生れながらにして、自治の精神、秩序節制の精神に養はれて居りまして、従つて、勞働運動の如きも、立派な統一秩序が保たれて居るを、聞くことであります。その皮相を學んで、その眞相を詳かにせず、日本には、自ら日本としての勞働運動があるべき點に、氣づかぬ所に、この種の運動の喜悲劇が演ぜられるのであります。この點に於ても、さうか、ごつしりした考へをもつて、もらはねばならぬと思ひます。

これを今日の風俗に見ても、男女の服裝、家屋の構造等に、すこしも落ちついた所のないのが、著しく私ごもの眼につきます。殊に婦人の服裝といふものが殆んど美にも趣味にもなつてゐない。只、おかねのかつた、ケバケバしいなりをすれば、宜しいといふので、蠅のせなかのやうに、赤い色や、青い色や、黒い色を、雜然混然として、からだに巻きつけてゐる、といふに過ぎない。そして神經衰弱のやうな、貧弱な顔に、コテコテ、白いものや、赤いものを塗りつけて、われこそ、といふ風に、潤歩する様は、殆んど、まじめに見上げることは出来ませぬ。ここにゆかしい趣味性が現はれてゐますか、ここに犯しがたい氣品が見えますか。家屋の構造にても、同じ事でありまして、日本の家やら、西洋の家やら分らぬものがデコボコに立ち並んでゐるさまは、醜態にも陋態にも申しやうがありません。この風俗の混沌とした、秩序なく節制なきさまは、亦おちつきのない人心傾向の反映でありまして、殆んど話にはなりません。

さらに、これを思想界の傾向に見ても、上述の風潮といふものが、殊に甚しいのを見るのであります。知識を廣く世界に求める、といふ事は、明治維新以來の國是でありまして、固より國家社會の進運の上に最も大切なことでありまして、例へば、身體の健康を保つためには、毎日同じものを

のみ攝つてゐてはならぬ。いろいろのものを、いろいろにして、食べるのが、必要であるのミ、同じことでもあります。しかしながら、その、いろいろのものを、如何ほご食べても、それが、そのまゝ、腹の中を通過したゞけでは、身體の榮養にならぬばかりでなく、ために非常な害毒を與へることになるのでありますが、私ごもの、知識を求めものも、これと同じことでありまして、種々の知識を取り入れ、色々の思想を吸取つても、これを、よく吟味し、よく咀嚼して、神聖なる我が國體、それ自身のものごしなくては、害ごそれ、更に益にはならぬものご思ふのであります。「倭魂漢才」「倭魂洋才」なき申しますが、これは單に言葉のあやが、面白いただけであつて、よく考へて見るミ、意味のない言葉であります。日本人が「漢才」であつたり、「洋才」であつては、たまりませぬ。日本人には、ごごまでも「倭魂倭才」でなくてはならぬのは、いふまでもなく明瞭なことであります。然るに今日のわが思想界は、たゞ目新しいもの、毛いろの變つたものを、翻譯したり、直譯したりして、次から次へ持ちこんで来て、もの、半年か、やまやま一年位、お目みえをして、行き過ぎてしまふ。甲來り、乙去り、まるで走馬燈のやうな有様であります。例へば、世界的の學者で、かの「相對性原理」を以て知られて居るアインシュタイン氏が來た時に、その來遊の前後には、その學說

について、我が上下は、これほごの大さわぎをしたか。或は講演に、或は活動寫眞に、盛んに説きまわられました。然るに三四年後の今日、何人の人が、これを筆にし、口にして居るものがあるでありませんか。もごより、その學說は、非常に難解なものごされて居りまして、専門家にさへ充分わかりかねるもので、あるごいふ事でありまして、一般の人から忘れられ果てる、ごいふのも無理のないことではありますが、難解なものであれば、尙のごミ、これを慎重に取扱はねばならぬ筈でありましたが、あの當時は、誰もかれも解つたやうな顔をして、騒ぎまわつたその態度は、見ぐるしいごも、片腹いたごも思つたごごでありました。この邊にも、わが民心の、おちついた、ごつしりした所のないごごを遺憾なく暴露してゐるではありませぬか。

現代人心の傾向を指摘して、浮華、放縱、輕佻、詭激ミ、詔書には仰せられてあります。浮華ミは、心のウキウキして居るなごであり、放縱ミは、しまりのない、我儘な心をいふのであり、輕佻ミは、心のかるはづみなごごであり、詭激ミは、いはゆる無鐵砲のごごでありまして、今日の傾向を指摘して餘蘊なきものがあります。これら、いろいろの傾向を通じて、その奥底を流れてゐるものは、確乎たる信念の缺乏ごいふごごでありまして、ものに、おちつきがないごいふごごも、事に當

つて、ごつじりした所のないいふことも、みな此の一點に歸するのであると思ひます。

五、信念確立の急務

今や、わが國は、内には前古未曾有の大災害がありまして、百億の物資も、幾十萬の生靈もを失ひ、國歩に一大蹶跌を來しました。外には、アメリカにおける排日問題なきがかりまして、内憂外患一時に到るの狀態にあります。この時に際して、わが民心の傾向が、實に前述のごごとくである、こいふことは、國家前途のため、誠に寒心にたへぬ次第でありまして、畏くも、聖上陛下には、今ニ及ビテ時弊ヲ革メズムバ、或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル

ごまで、宸襟を惱ませ給つてをるこいふことは、私ども臣子にして、恐懼措くところを知らぬ次第であります。この時に當つて、われわれは、我が祖先傳統の剛健なる精神を、もう一度奮ひおこして、内憂に堪へ、外患に打ち克ち、國家の興隆を祈り、以て 陛下の大御心を安んじまつらねばならませぬ。

殊に、私ども「神ミ皇上ミの大恩を知れ」ミ教へられてある金光大神の道を奉じてをるものは、一

面に於いて「吾は大和民族なり」吾は神の氏子なり」この一大信念の上に立ち、他面に於いて、神の御力をわが力とさせていたとき、神の御徳を、わが徳とさせていたといて、世人の「善い手本」になる信心を、させていたとき、他のあらゆる國民の先に立つて、神ミ皇上ミの大恩に、つゝしみて報いまつる所がなくてはならぬことあります。

(大正十三年八月)

後

篇

教祖大祭の意義

—

十月十日は、我が教祖の神去り給うた日であるといふを以ての故のみに教祖大祭が奉仕されるのでなくして、實は生神金光大神そのもの、御祭日であるといふ事は、兼て神より、教祖に九月九日十日（明治十六年に至つて舊九月九日十日は十月九日十日に相合せり）を以て、御祭を仰せ付けられ、教祖は乃ち或は鏡餅を搗いたり、或は大小の幟を立てたり、或は神燈を點じたりしてこの日を祝し給へるによつても知る事が出来る。

生神金光大神そのもの、御祭日が、明治十六年十月十日の、教祖の御歸幽によつて、教祖の神の御靈祭日と合一したのは、偏に幽妙なる神慮による事である。

十月九日十日は、かく意義深き日であるが、これを以て、單に教祖の御靈祭日の如くにのみ思ひ、兼て神より教祖に仰せ付けられたる九月九日十日の御祭も、唯教祖歸幽の日の豫示的のものとの

み思うて居た從來の、吾等の考は、教祖の御靈祭といふ事を主としたものであつて、甚だ不徹底な考であつたと思ふ。教祖の御靈祭を主とするいふよりは、寧ろ生神金光大神そのもの御祭といふ事が主であつて、教祖は即ちこの御祭日を以て歸幽されたのであると解する事が正當であると思ふ。

この點から謂へば、教祖の御祭日は、その御肉體の生と死と存と亡とを問はぬ次第である。然るに從來の考へ方では、若し教祖が(明治十六年の)十月十日に御歸幽にならなかつたならば、九月九日十日の御祭といふものは、全く意義なきものとなつて了ふと見做さねばならぬ。これ等兩義の何れを主とするかは、さまで重大な事ではないといふ人があるかも知れぬ。また何れでもよい様であるが、實は何れの義を主とするかによつて、教祖大祭の意義は非常な相違を來す事になる。

即ち從來の様な考では、世上普通に行はる、如く、單に死したる人の靈祭といふ事に止るものであつて、同じく教祖の御徳を稱へ奉るいふも、唯その御生存中に、これくの事を成し置かれた、又今もこれくの事をして下されてあるといふに對して、追回的な感謝といふものが主となるのである。

これ固より教祖大祭の一面の意味ではあらうが、生神金光大神そのもの御祭といふ考へから謂へば、それ以上、我が教祖が、天地と共に滅せざる悠久の生命に歸入し給へる事を讃嘆し奉るのであつて、教祖御自身に御祭をなされたといふ事は、即ちこの無限の生命を尊重禮拜されたものであつて、『我ながら喜んで我心をまつれ』とあるは是れである。從來吾等は、教祖の御靈祭のみ考へて教祖大祭を奉仕して來たが、この點から謂へば、幽界なる教祖御自身も、猶この御祭を御親ら奉仕遊ばされて居る事であらう。誠に尊貴限りなき事ではないか。

二

殊にも、教祖は神命のまゝに、明治二年以來毎年この九月の九日十日を以て『先祖のまつり』を行はれ、身内、親類を招待されたといふ事であるが、これは極めて意義ある事と思ふ。單なる先祖のまつりといふ丈けならば、夫々にその祭るべき日がある筈であるのにそれ等をわざと廢して、特に此の日を以て祭られたといふ事は抑々何故であらう。これに對して吾人の推測を加へるのは、甚だ畏れ入る事ではあるが、吾人の見る所を以てすれば、教祖の神の、生神金光大神の御靈徳に進

ませ給へるは、管に教祖御自身が天地に共なる生命に入らせ給へるのみの事ではなくして、それと同時に先祖の靈も亦無限の生命に入つたのであつて、教祖無限の生命は總がてその祖先の、悠久なる生命に復活歸入さるゝ事を意味する。さればこそ、生神金光大神の御祭と共にその祖先をも祭れよこの神宣もあつたのであると信ずる。

生神金光大神の御祭日に、教祖の先祖をも祭られたる事實は、前述の如き意義から延いて、生神金光大神の取次によつて、神の靈徳に浴し、生神金光大神によつて無限の生命に入るを得る世の氏子自身の祭りも亦同時に、教祖の御祭に包容されるものであるといふ事が謂はれる。即ち教祖の御祭は無限の生命の禮拜であると同時に、信者の無限の生命に入るの歡喜の現れである。「我心のまつり」である。我と偕なる教祖の御祭りであり、教祖と偕なる我が祭りである。是れ教祖大祭の意義であつて、換言すれば、教祖大祭は、無教祖限の生命頌讚の象徴であり、氏子無限の生命歡喜の象徴であり、更に國家無限の生命祝福の象徴であり、天地無限の生命嘆美の象徴である。單なる教祖の御靈祭ではない。如何に況んや彼の空疎なる儀式の謂ではない。

三

然るに今日迄の、教祖大祭は、前述の如くにして、一教祖の神の御靈祭であるかに思はれて居たから、教祖に對する追回的感謝の意は致されても、「我心のまつり」にはなつて居なかつた、それ故に動もすれば、「教祖大祭」いふ一の騒ぎになり易く、儀式拜觀者の群集になり易かつたのである。「我心のまつり」の義を忘却するから、勢ひ空虚なる儀式の如きが重せられる様になる。斯の如きは甚だ嘆すべき事である。

そは兎も角もとして、吾等は十月十日の聖祭日をば如上の如き意義に解しつゝ、格みて迎へ奉りた

(大正四年十月七日)

金光大神の二相

三七八

人より神へ

一

金光大神御一代の、御信仰の基調となつて居るものは、『わが心が、神に向ふのを信心と云ふのぢや』とある所のものであつて、あたかも、磁石の針が、如何に狂はせて置いても、いつの間にか南北を指すが如く。愛らしい葵の花が、何日も暖かい日の光をなつかしむが如く、親おもひの子が、うれしい事があれば、うれしいにつけ、悲しい事があれば、かなしいにつけて、常に親からその心がはなれないが如く、常にその御心は、しばらくも神よりはなれ給ふ時とはあらせられませんでした。金光大神の、神をもめて止み給はぬ御心は、決して中途から、偶然に生じたのでなく、人の心の漸く人の世にめざめかけた、その始めからのこゝでありました。年十二歳にして、養はれて川手家に入りたまふや、養父母に對しての、はじめてのお願いは、『私は、神佛へ参りたうござりまするか

ら、休日には、心ようお暇を下さりませ』といふにありました。なにこいふけなげにも尊いおこゝばであります。『神佛に参りたい』とこいふおこゝろもちには、これこいふ、瞭然した目的は含まれて居りませぬ。それならば、彼の腕白盛りの子の遊び半分のお参りとおなじであつたかこいふに、それにしては、あまりに實意のこもつた、行きこゝといたお願いではありませぬか。『神佛』におぼせられてあるのはたゞいたづらに、あすこのお社、この御堂、心のこかに参られるの意味ではありませぬ。そこには、やさしい、すなほな、敬虔にみちた心から、路ばたの石地藏をも、鏡のほりの祠をも、そのまゝには、す通りするこゝでできなかったお心にも、よつたでありませうし、一つには、彼のあはれなる孤兒が、その父を戀ひ、その母を慕ひながら、野を求め、里を尋ねて、いづこを果てと定めなく、さすらひ迷ふが如く、まごを如何にして尋ねたならば、まごこの親神さまに、おめにかゝることができらうか、まごを尋ね、神を求めて止み給はぬ、御心のおくそこから湧いて出て渾々としてつきざる求道の精神の現れでありました。而も、『此方は参つて尋ねる所がなかつた』とのおこゝばの如く、かしこのお社にぬかつき、この御堂に詣でも、その求めたまふ所のものを、にはかに得るこゝが、おできにならなかつた。然り、年ふるまで、これを得たま

三七九

はなかつた。しかしながら金光大神におかせられては、得られねば、中道にして、これを断念せられたか、断念することができたか、それは断念することが出来る程、さばかり弱い願ひではなかつた。得られねば得られぬほご、その願ひは、ますます力を加へ、いよいよ根を強くして、あたかも、彼の噴火口が強くさざされて居れば居るほご、その爆發の程度の烈しい如く、男女の戀が、せかれ、ば、せかれるほご、更に強さをますます如くでありました。

二

金光大神のこの願ひは、なにゆへに斯様でありましたか。若し、これが一時の病氣や災難や、乃至、一時一時の不幸に對してのものでありましたならば、その願ひが達せられねば、それを、あきらめるといふこゝもあるひはできないこゝも、なかつたでありませう。しかしながら、金光大神におかせられての願ひは、その場、その場の出来事に對してのこゝでなくして、それ等、出来事の奥底によつたはつて居る、弱く、はかなく、不完全な、この人間の身そのもの、上にあつた。わたくしごもの身の上に、病があるといふこゝも、災難があるといふこゝも、過失や罪惡が多くあるこゝ

ふこゝも、それは疫病神のわざでもなく、禍神や惡魔のわざでもありません。まつたく、人間の身の弱くはかない、あはれなる姿が、あるひは病氣といひ、あるひは災難といひ、あるひは過失や罪惡といふ形をこつてまざまざと、わたくしごもの心にうつるのに過ぎないのであります。されば、わたくしごものは、病ひのある時だけに病ひがあるのではない、災難のある時だけに災難があるのではない、過失や罪惡のある時だけに、過失や罪惡があるのでなく、人間そのものが、もこゝ、それ等のかたまりであります。「障子」にへがま、ならぬ人の身ぞ『我身が我自由にならぬものぞ』『夜夜中さう云ふ事が無いこゝも限らぬ』とは、即ちこの謂ひにほかならぬ。この人間の、あさましき姿を、まざまざとこゝもあがめた時に、わたくしごものは、神さまを求めずには居られませぬ。『神ありての氏子』とある如く、人間は神によつてのみ、はじめてその全きを得ることが出来るので、神を外にした人間といふものは、到底考へるに勝へられぬほご、あはれなるものであります。わたくしごものは、我心に囚はれて居る時に、神も佛もあるものかといふ心になり、いろいろの病氣や、災難や、不幸や、罪惡を、みづから逃れやうとしてもがくのであります。もがけばもがくほご、ますます、その度を深くするこゝになる。ひまたび、この我心からめざめたものは、必ずや神を求め、信仰を

求めずには居られぬのでありまして、金光大神が、もゆるが如き誠をこらして、神を求めて止み給はなかつた所以は、まつたくこゝに存するのであります。

かくて到るころの神佛に詣つて、ひたすらに、まことの親神を求められたが、年ふるまで、その願ひは達せられなかつた。しかしながら、それ等は決して徒勞には終らなかつたのでありまして、それが助けとなり、縁となつて、終に、まことの親神にめぐり會はれ、安政五年七月十三日にはじめて、その御聲を確實にお聞きなされるやうになりました。その時の金光大神のお喜びは、如何ばかりでありましたらう。神さまもこれを深くお喜び遊ばされました。實に無始以來、神と氏子と、互にさがし求めてあらせられた親子は、こゝに、相ひ擁して共にお泣き遊ばされました。その、歡天喜地窮りなき消息は、彼の御手記に、『如何して、かういふ事ができたであらうかと思ひ、氏子が助かり、神が助かる事になり、思うて神佛悲しうなつた』との神傳が記されてあるこゝによつて、その一斑をうかゞひまつるこゝができるのであります。

三

かくて、ひまたび親神に、おあひなされてよりの金光大神は、全く神に没入して、その一言一動たりといへども、いやしくもせず、悉く神の命のまゝに順はれて、眼前の利と不利と、名譽と不名譽と、喜びと悲しみとは、さらに問ふ所ではあらせられなかつたのであります。そして、我が身の、此の世に生きんかぎり、我の命のかくてあらんかぎり、神さまに助けていたゞかねばならぬ。人間世の中に於ては、これだまつたく救はれ盡されたといふ時はありません。信心が、眼前眼前のこゝに對するのみのものでありますれば、今から信心が入用になつた、もう信心はすんだ、こゝに區切りがあるべきであります、人間そのものを、救うていたゞかねばならぬといふ一大事の信心に於ては我が身のあらんかぎり、その終局は來ないのであります。『生きて居る間は修行中ぢや』此方といへども、一つ間違へばお暇がでる』と仰せられて、この世の御生命のあらん限り、勇猛精進せさせ給うたのはこれが爲めでありました。世の人は、『生神さま』と稱へ奉り、神さまからも、『神からも氏子からも兩方からの恩人』とまで、おほめあそばされたお身のうへであらせられながら、身の終るまで修行に怠らせられず、その晩年頽齡におよんで後に於ても、例へば、明治八年十月十八日早旦の神傳によつて、その日から翌年一月廿八日までの、百日の修行をあそばされた如き、明

治九年四月十七日の「蚊帳をつるな、蚊がくうても、血まみれになつても大事なし」この神傳に従つて、明治十二年四月十日まで、三年三ヶ月のあひだ、これに従はれた如き、その一例でありました。

四

かくの如き御信仰であらせられたが故に、金光大神は最も御謙抑であらせられました。普通の意味でいふ謙遜は、たゞ禮儀の上にとまるのでありますが、金光大神に於ては、神によらざる自分さいふものは考へるこゝができぬ。神のみちからを外にして、何一物もして、我が力により、我がはたらきに成るものはないこの根本精神によるのでありまして、幾分にも、我が力、我がはたらき、さいふものを念頭におくべきにわたくしは、さうして謙遜であり得ませう。従つて、まことの謙抑によつて、世のまことの歡喜も感謝とがあり得るのでありまして、幾分にも我が力をたのみ、我が功をほころこころに、眞實の歡喜も感謝もあり得ないのみならず、歡喜のかはりに、しばしば怨嗟があり、感謝のかはりに、やゝもすれば不平があり易いのであります。金光大神ほど、何事にも眞實にお喜びなされたかたはありませぬ。殊にもその御歸幽にさきだつ廿日まへ、明治十

六年九月廿六日、高橋富枝師に對はせたまうて、「無學の吾に、よくもよくもこれほどの道をひらかせて下された、かと思ふに、難有うて難有うて、泣くまいと思つても、涙がこぼれる」に潜然として、感謝の涙に、みそでを霑はせ給うたさうけたまはります。靜かに、その御一代を、かへりみ給うての、絶大の謙抑も、無限の感謝も、あひ錯綜してわき出でたこの御涙は、わたくしは、如何にこれを仰ぎまつるべきでありませう。おもひ上つたおごりがましい、わたくしは、不平にみちた、うらみがましい、わたくしは、この尊き涙によつて清められねばなりませぬ。

五

金光大神は、かく神さまに對して、御謙抑であらせられたまゝもに、また最も實意可憐であらせられました。如何に實意であらせられたか、さいふこゝは、彼の十二の歳に養父母にお願ひされたおこぼの上にもよく現れて居ります。即ち「休日には、心ようお暇を下さります」こゝあるに、く、仕事をせねばならぬ日に仕事を休んでまで詣で、は、家業の怠りさしつかへになり、従つて神佛のおほしめしにも、かなはぬこゝが出来てくるかも知れぬ。また、家族のかたから、しぶくながら

ゆるされたのでは、眞の参詣にはならぬ、心のそこから機嫌よくゆるされて、心にかゝる雲もなく
 まるれるやうになりたいとの願ひに外ならぬのであります。その上、それに要する費用の如きも、
 かつて父母を煩はされるやうなことが、なかつたさうけたまはります。たゞ一度の神まゐりにも、
 いかにも實意をおつくしなされたかゞわかります。三十三の歳には、『お四國巡り』をなされたが、つ
 れの人たちは、遍路道から遠く隔つて居るお寺へは参らずに、『あの所のお大師様』なきいうて、ず
 ん／＼道を急ぐのを金光大神は大變心ないことに思はれて、御自分のみは、一々町嚙に参詣して廻
 られましたが、それでも、つれの人たちは道は急いでも、洪水で川止めになつた、なごいうて宿屋
 にごろ／＼して居たりなにかして、他別段におくれることもなく歸られたといふことでもあります。
 嘉永三年八月の母屋改築は、金光大神の最もお心を悩され、また最もお心をこめられたもの、一つ
 でありました。日柄をわらみ、方角を改められて、萬事にあやまちの無きやう、行きこゝいた川意
 をなされたことは申すまでもない。八月三日舊宅をのぞかれた時に親しく金神を祭つて『方角
 は見てもらひ、月日の誤りなきやう、こりはこひは致せども、小さき家を大きく改め、三方へこり
 ひろぐるこみなれば、さの方へ御無禮のあらんも、凡夫のここゆへ、あひ分らず、普請成就したる

上は、早々神棚をつくり、御祓、心經五十卷づ、奏けまつる』と祈誓し、やがてその通りになされ
 ました。こゝで安政二年四月の、御大患は、この普請の時の金神の障りによるこの、おまがめであ
 つたが、他は『當家においては金神さまに御無禮はありませぬ、方角を見て建てた』と辯解したが、
 金光大神に於かせられては、これ等のいひわけを、最も心外におほしめし、誠意をつくしてお詫び
 なされたことは、人みな等しく尊く仰きまつる所であります。

『信心する人は何事にも眞心になれよ』とあります。實意のこもらぬ信心は、そら祈りでありまし
 て、神さまのみ救ひは、得て望むことはできません。もこより人には賢不肖あり、能不能あり、悪
 いこ知りつ、悪いここのみできて来るのが、わたくしごもの常でありますが、一つも善いここのは
 きないながらも、さうか、なにこにも實意になりたいと一心にいのり勵むところに、いはゆる
 實意はこもつて居るのであります。神さまは、金光大神の實意をつねにお愛であそばされました、
 『此方のやうに實意町嚙神信心致して居る……』『實意町嚙神信心のうへ夫婦はさらぬ……』なきい
 ふお言葉が、しば／＼下つて居ります。たゞ神さまに對して、實意であらせられたばかりでなく、
 『何事にも』これを以て立てぬかれました。彼の明治五年制度の變革によつて、明治六年二月より、

一時廣前をひかれましたが、當時の戸長川手氏も、いろ／＼心配して、自分がふくんで居るから、内分ならば取次ぎしてもよいといふことであつた。けれども「内分では拜ませぬ、お上さまお役場へ、御心配かけてあいすみませぬ」このことに、戸長も「あんまり金光は叮嚀すぎて、ごうもならぬ」こつぶやかれましたが、金光大神は、この事件に對して、「お上へ出ても、實意を立てぬき候」こ記されてあります。實に「神に向ふ」切なる心が徑となり、「實意叮嚀」が緯となつて、金光大神御一代の文ある御生活は織り出されたものと拜するこができるのであります。

六

かくの如くにして、金光大神は、神さまにも、天地にも、つきるこもなく、ほろびることなき、絶對究竟の一大信仰を得られました。その消息を傳へて、金光大神は「天地が開ける」こも仰せられ「長生」こも仰せられ、「天地の、しんご同根なり」「天地金乃神」一心なり」こも仰せられ、「天地」こは我住家」こも仰せられ、「金光大神の道は、無常の風が時を嫌ふぞ」こも仰せられ、「我身は神徳の中にかかれてあり」こも仰せられ、「世界はわが心にあるぞ」こも仰せられ、「眞

の道」こも仰せられ、「天地日月の心」こも仰せられ、「向ふ倍力の徳」こも仰せられ、「我ながら喜んで我心をまつれ」こも仰せられましたが、その尊き境界は、到底、人間の不完全な自由なここばでは、いひあらはすこはできなかつたであります。

しかして、人のこの境界に入るさまは、決して、わたくしごもか、おかねを出して、物を買ひもさめるが如きものでなく、人の世にめさめて、「神佛に參りたい」こ、その御心を神さまに、おむけなされたその時からすでに一歩一歩に、この境ひに進ませ給うたのであります。進めば進むに従つていよいよ遠く、登ればのほるに従つていよいよ高く、汲めば汲むに従つていよいよ深いのが、この境ひにわけ入るすがたであります。このゆへに、金光大神は「生きて居る間が修行中ぢや」こ仰せられ、「信心をすれば、一年一年有難うなつて来る」こも、「日々さへ經てば世間が廣うなつて行く」こも、「天地の事は人の眼をもつて知りて知り難きものぞ恐るべし」こも仰せられました。従つて、この境界は、この天地の外にあるのではなく、別の世界に行くのでもありません。「我情我慾を放れて眞の道を知れよ」こある如く、我心を去る刹那に於て、眞の道は現前するのであります。我心ありてこそ、事にあたり、物にふれて、あるひは苦みなり、あるひは悲みこなり、あるひは過

らも生じ、罪もつくり、生死も憂ひのたねなるのであります。『天地日月の心』にもあります如く、天地には、時に大風もあり、大地震もあり、旱天もあれば大水もあり、晝夜、四時のかはりもありませんが、悠久なる天地は昔も今も寸毫の増減はありませぬ。晴れた日もあれば曇つた日もあり、満ちたる時もあれば虧ける時もありながら、日月の光は、昔も今も分釐の差別はありませぬ。病氣あり災難あり、得意あり失意あり、富貴あり貧賤あり、壯盛あり老衰あり、生あり死あるこの世の姿は、あたかも天地に凶變あり、日月に盈蝕あるが如くであります。一度、我心を去つて、天地日月の心となる時に於て、神々もに、天地ももに寸毫の増減なく、分釐の煩累も感ずる所はありません。生神は實にこの境界に入つた人をいふのであります。そして、金光大神は、實にその第一人者であらせられました。

神より人へ

七

金光大神の、いきがみとしての、實世間に於ける御風光は、これを二つの點から拜することので

きます。すなはち、個人的には、家庭の人として、社會の一員として、國民として、たふさしい御光をかがやかし給ひ、社會的には、神さまの御使として、神々氏子との、とりつきとして、すくひの道を御立てなされました。

八

その御家族に對して、いかなる道をおさりなされたかといふことについては、會て、『生神とその家族の人々』を題する、一小篇において、そのかたはしをのべたことがありますが、こゝには、重複をさけて、それにのべたことは、いはぬこと、いたしますが、たゞ金光大神が、子として、父として、夫として、たふさしい道をおつくしなされましたこと、おのづから、おもむきを異にして、家庭における道をおたてなされた點について、少しくのべさせて置きたいのであります。それは、彼の明治六年一月十五日に、御家族のかたがたに、それぞれ神號をくだされました一事であります。すなはち、内方を一子大神、お子さまたちを、正神、山神、四神、正才神、末爲神といふやうに、それぞれ神におもちひあそばされました。これは、金光大神の御餘徳によることである、すすれば、

それまでとありますが、もし、これを金光大神の御信仰をこぼして觀察する時において、そこに家庭の道を、こんにちの人の言葉でいふ、人本主義的におたてなされたことを見ることのできるのです。

わが國は、家族制度の國であるといふことは、わたくしきもの、屢々耳にすることばであります。またこの制度を、今後ますます、維持充實してゆかねばならぬといふことも聞きます。それから一の團體を家族的にこいふ議論や、國民生活を家族的にこいふやうなことをも、耳にいたします。「家族」こいふことそれ自身は、まことに、したしみある温かい意味をふくんだことばであります。が、しかしながら、従來の、いはゆる家族制度こいふものには、いろいろの缺點があり、したがつて、いろいろの弊害もすくなくなかつたやうであります。たゞへば、家長と家族のあひだからの如き、夫と妻とのあひだからの如き、家督を繼承すべきもの、心もちの如き、家にたよらうとする家族の心もちの如き、みな家族制度の弊のひそんで居る點であります。家族制度そのものは、わが國のなり立ちの上に重大な意義があることいたしましたとしても、人本主義的な精神によつて、その弊のひそむところを清めるの要があります、従來のまゝなる家族制度の如きは、かへつてわが國本をよわめ、

社會の脆弱を來すのをそれがあります。彼の漫然として家族的に、こいふやうなことは、またこれをさげねばならぬこと、おもひます。これ等の點より、金光大神の御家族にたいして、それぞれ神號の下つたことには深い意義があることおもひます。明治六年二月十二日の神傳に『ものいひでも、あなた、こなたを申してよし』とありますが、これまた右に關聯して、まことにゆかしいおことばであります。

家内の和合こいふことには、金光大神は、もつともみこころを、お注ぎあそばされましたことは「信心は家内に不和のなきが元なり」この、神訓にもあきらかであります。かくて、神のみひかりに照らされたる、その御家庭のさまは、まことにありがたいものであります。『何事も、神の理解うけたまはり、承服いたせばあんしんになり、神佛もよろこばれ、親大切、夫婦なかやうに、家内むつまじう致し候』とあるによつても、そのありがたき御家庭の御消息を、うかゞひまつることのできるではありませんか。

社會的生活にたいする、金光大神の御精神は、また『我身が大事か、人の身が大事か、人も我身も皆人』とあるごとく、人本主義的であらせられました。いかなる人も神の氏子であり、神の靈を本有して居りまして、賢愚、貧富、貴賤、いふやうな差別は、たゞ一時の姿にすぎませぬ。エツキス光線によつて、わたくしごもの、からだを照されました時に、容貌の美醜も、衣服の華麗も、ならのさはりにならぬ如く、神のみ光に照されつゝ、他に對する時に、その賢愚も、貧富も、貴賤も、それらはすべて、ならのさはりをなすものではありません。それはたゞちに、本有せる神の靈のたふささに、あひ觸れるのであります。こゝに、何人に對しても、眞實に、その人をたふさび、その人に同情し、その人を愛し、その人に親切をつくす、あたゝかい、隔てのない心が芽ぐむのであります。

他を尊重することに對しては、『人間を輕う見な、輕う見たら、おかけはなし』とおほせられました。他に誠をつくし他に同情し、他を愛し、他に親切をつくすことに對しては、『我身の苦難を知らんがら人の身の苦難を知ぬ事』と誠められ、『天が下に他人といふ事はなきものぞ』と教へられ、『人間は人を助ける事が出来るのは難有い事ではないか』と諭されました。この人を助ける事ができるの

は難有いことではないか、といふやうな心もちからは、『施し』も『慈善』も『救済』もいふやうな、おなじ人間でありながら、高いところから、低いところへ下される、貴い人から賤しい人へ恵ぐんで遺す、いふやうな意味の含くんで居ることばは決して出てくるものではありません。近く、この間の米騒動の際にも、各地の富豪の口から、さかんに、この種のことばが濫發せられたやうであります。かゝることばが出て居るかぎり、更に第二第三の米騒動が起るかも知れませぬ。この、ありがたいいふ心からなくては、他に對してほんごうのここの出来るはづはありません。更に社會の組織に對して、金光大神は『あひよ、かけよで立ち行く』との、神さまのおことばを以て、その根本義にせられました。『あひよかけよ』の世のなかにおいては、この世にすむ、すべての人、すべてのはたらきは、こゝごこく相互的でありまして、決して上下も、貴賤もいふやうな品等、差別のあることばを以て、ねうちづけられるべきではありません。従つて富の分配も、男女の地位もいふやうな、社會問題はみなこの關係から、正當にありあつかはねばなりません。およそ以上のごこくにして、金光大神は社會的生活を營まれました。このたふさき御精神は、金光大神御一個の生活としては、御一代の間において、もよりのたいした社會的效果をあらはさな

かつたでありませうが、この御精神は、彼のエーテルが物をこほし、人をこほして、宇宙にみちわたつてをる如く、人より人に、時より時に、漸次にみちわたらねば、やまぬ力がこもつてをります。金光大神によつて點ぜられた社會生活のうへの光明は、つひに世の何ものをも照破するの時がいたるでありませう。

一〇

金光大神の、國民としての御生活は、彼の『我身は我身ならず皆神と皇上の身におもひ知れよ』ごあるおこしに、その基調をもこめることができます。なにゆへに、我が身は神と皇上のものであるか。金光大神におかせられては、さる詮索をするの必要もありませんでした。また、その餘裕もありませんでした。また、その必要を認めるほぎ、よわいものでもありませんでした。それは、金光大神の心の奥底によこたはつてゐた、おのづからある一大信念であらせられました。この一大信念のこしに、もつこもすぐれたる日本國民としての、つこめをおつくしなされました。その事實については、これまで、しばしば、をりにふれてその一斑をのべておきましたから、こしには、は

ぶくこし、いたします。

一一

以上、のべてまゐりました、いろいろの御生活において、あらはれてをる所は、かれこれこしなつてをるやうであります、その歸するところは、すなはち天地につらぬき、神に徹する、あるものに存してをりました。『信心する人は何事にも真心になれよ』ごあるものすなはちこれでありまして、あるひは、まこし、も、あるひは實意叮嚀とも、これを形容するこしが出来てありませう。金光大神によつて、うち立てられた御生活は、やがて、わたくしごもの生活の理想として、歩一歩、これにちかづかせていたゞくやうに祈念せねばなりません。

一二

金光大神の、取次のみわざに、したがはせらるゝに至つた理由としては、次の四つの事項を考へるこしができます。その一は、神を得、信仰を得て、かぎりなきよろこびを、あぢはひ給ふにおよ

んで、そのよろこびは、これを他にわかたずにはをられなかつたことでもあります。「信心して、おかけを受けたら、神心になりて、人に叮嚀に話をして行くのが、眞の道を履んで行くのぞ。金光大神が教へた事を違はぬやうに、人に傳へて眞の信心をさせるのが、神への御禮ぞ。これが神になるのぞ」昔から、人もよけれ、我もよけれ、人より我が尙よけれ、云うて居るが、神信心をしても、我身の上のおかけを受けて後に人を助けてやれ」一粒萬倍云はうが、一人がおかけを受けたので、千人も萬人も、おかけを受けるやうになるから、善い手本になるやうな信心をせよ」なきよあるおこさばにあらはれて居る、おこゝろもちであります。その二は、わが信心の徳によつて、人のたすかる靈しき力を、ありがたく、たふさくおほしめされたことでありまして、「人間は、病氣、災難の時、神に助けて貰ふのであるから、人の難儀を助けるのが、難有いこ心得て信心せよ」こあるおこさばに、あらはれて居る、おこゝろもちであります。その三は、金光大神御信仰の徳が、やうやく世にあらはれるにつれて、信心をもこめ、道をもこめ、おなじよろこびのこゝろに浴したいこねがふもの、しだいに殖ねまさつたことでもあります。それは、あたかも徑なき山邊に、さきいでた梅の、その複郁たるかほりをしたうて、鳥も來啼き、人もたづねてくるが如くであつた、ことでもあります。

その消息は、彼の立教神宣に「外、家業は致し、農業へ出、人が願出、よびに來もさり願がすみ、又農へ出、又もよびに來、農業するまもなし、來た人もまち、兩方のさしつかへに相成」こあるによつても、あきらかに、うかゞひ奉られるのであります。その四は、まをすまでもなく、神さまのせつなるお頼み、すなはち、立教神宣を、かしまれたことでもあります。以上のうち、前の二は能動的原因とでもまをすべく、後の二は、所動的原因とでもまをすべきであります。一を主觀的とすれば、他は客觀的とすることができます。この兩者が相ひ應ずる所に、金光大神御自身の要求と、社會蒼生の要求と、神さまの要求とが渾一相即いたしてをりまして、こゝに御一代の、御取次のたしかなる根柢が存してをります。そして、立教神宣には、これらの、いろいろの事情が、渾然として具含して居るやうに拜せられるのであります。

一三

安政六年十月二十一日、立教の神宣を拜し給うた金光大神は、「仰せごほりに、家業やめて、御廣前お勤仕る」こあるこゝろ、この日かぎり、まつたく家業を廢し、幾春秋すみなれたその家も、

いまは神さまのおひろまへ、取次の道場として、なつふゆ通して、門をもごさず、雨戸をもたてず、道をもごめて来る人々に朝は雞鳴より、夜は三更にいたるまで、二十五年のながき年月を、一日のごまくに、御苦勞くだされました。「取次」は、彼の立關番のごまき、單なる、さりつぎの意ではなく、「神も助かり、氏子も立ち行く」べき所以の道を意味して居ります。神人合一の原理を意味して居ります。神さまの御慈悲と、氏子のおわびのりごが、いづれもその中にやきつて居ります。すなはち、氏子にたいしては、氏子の機根に應じて、神さまの慈悲、權威を示し、神さまにたいしては、氏子のめぐりを、その御一身にひきうけて、ひたすらにわび、いのつて下さいました。氏子にたいしては、慈愛にみち、權威そなはれる神さまとして現はれたまふと同時に、神さまにたいしては、もつとも憐れなる氏子であらせられました。ある時には、神さまの大なる御咎をじつご御身のためこらえて、さりけなく氏子のあやまちをお戒めくだされるともあつたであります。ある時には、やるせなき神さまの御歎きを、ごもに、氏子のために、ふかく御歎きくだされたであります。また、ある時には、氏子のために、幾日幾夜も、だにおわびくだされるごまもあつたであります。「本を執つて道を開く者は、あられぬ行もするけれも、後々の者は、さう云ふ行をせぬ

でも、容易うおかけを受けさせる」は、金光大神御一代の御本願であり、御覺悟であり、御誓約であらせられました。「あられぬ行」は、單に身をくるしめ、肉をいためる、彼の難行苦行のいひではありません、それは單に、ある種類の鍛錬に外ならぬ、こゝにはゆる「あられぬ行」は、神と氏子との間にたゞせ給うての、身を切るごまき、せつなるお心づかい、ごでもまをすべきものであります。この大なる尊き犠牲によりまして、めぐり深き、いかなる氏子も、金光大神のみ名によつて、このま、助けていたゞくごまができるやうになりました。

一四

かくして、神さまの悲願は、除々として、たちあらはれました。されば慶應三年十一月廿四日には、「取次金光大神権現のひれいをもて、神のたすかり、氏子のなんなし、安心の道ををしへ、いよいよ當年まで神の頼みはじめ（安政四年十月十三日の件）から十一ヶ年に相成候……かたじけなく、金光、神が一禮申す、以後のため」明治三年十月二十六日には、「生神金光大神當年十三年に相成。しんほういたし、神徳をもて、天地のしんご同根なり。……天地金乃神が御禮申す、此上もな

し」なさいふ神傳があり、また、ある時の神傳には、「此方金光大神あつて、天地金乃神のおかけを受けられるやうになつた。此方金光大神あつて、神は世に出たのである。神からも、氏子からも、兩方からの恩人は、此方金光大神である……」こもあつたさうけたまはります。

氏子のたすかることは、神さまのたすかり給ふことでありました。氏子のよろこびは、神さまのおんよろこびでありました。神さまは、神さまは、氏子このよろこびは、また金光大神のおんよろこびでありました。御理解に「おかけを受けて呉れれば、神も喜び、金光大神も喜び、氏子も喜びや」とあるのは、これに外ならぬ。この御理解にある「喜び」のこゝろもちを、「三つの喜び」を解してはなりません。なるほご「喜び」といふことは三つありますが、「三つ」を見ては「喜び」が別々になり、はなればなれになります。別々の「喜び」が三つよつたのではなくして、たがひに相即圓融すべきものであつて、そこに眞實無限の大歡喜があるのであります。わたくしきもの、日常のよろこびは、や、もすれば自分の一小範圍に限られたよろこびに止ります。それゆへに、よろこびを思つたこゝろが、他人には迷惑になつたり、苦痛になつたり、自分にこつても、次の瞬間には、くるしみになつて残るこゝろになる。これはおのれの「我」のわづらひにすぎませぬ。わがよろこびが、そのまゝ、神

さまのおんよろこびになり、金光大神のおんよろこびになりましてこそ、はじめて眞實にして、豎にも横にも、かぎりなきよろこびになるのであります。この眞實無限の大歡喜は、金光大神の、こりつぎによつて、はじめて現はれるものなるこゝろを、しらねばなりません。

一五

金光大神の現世におけるおこりつぎは、明治十六年十月十日をもつてをはりました。肉身をおもちなされての、おこりつぎには、かぎられたる肉身が、あらせられるだけ、それだけ、ある制約を、おうけなさるのやむなき約束があらせられました。されき、ひきたびこの肉身を脱したまうては、なにも、そのわづらひはなくなり、金光大神は、形が無うなつたら、來て呉れよ云ふ所へ行つてやる」こおほせられました如く、その取次のみわさは、生神金光大神さま、たのみまらせる氏子の心に、たち添うてあらはれて、しばらくもやむ時はありません。

神さまが、氏子をたすけてやりたいこの、無始以來の悲願の成就が、すなはち、「金光大神」にておはしまし、人間ありてより、このかたの、人のすべての祈の成就が、すなはち「金光大神」にて

おはします。この意味において、金光大神は、神さまをして、まことの神さまごあらしめまつり、人をして、まことの人たらしめ給ふ所以の、「靈しく、たふさきみちから」ごでもたへまつるよりほかはありません。

(大正七年十月)

青年時代の我が教祖

我が教祖の神の、少年及び青年時代の御事蹟に關して、事實の徴すべきものは極めて少い。教典編纂會で調査された所に就て聞くを得るものは、左の二三に過ぎない。

その一は、幼少の御時代から身體虚弱にして、屢々病辱に親まれ、別けて六歳にして天然痘に罹られ、九歳にして癩疹を患ひ、十歳にして蟲腹を病まれて非常に難澁された。

その二は、十二歳の御年に今の靈地なる川手桑次郎といふ人の養子になられたが、養家に入られるや否や、先づ養父母に對して「私は神佛に参り度う御座りますから、休日には、心よう御暇を下さりませ」願はれて、爾來、常に所在の神社佛閣に参拜するのを、またなき樂みにして居られた。そして、それ等の爲めに會て家業を疎かにされる様な事はなく、又、それに要する費用は、未だかつて養父母に仰がれた事はなく、當時の彼の地方の若い者が、小遣ひ取りに瓦を焼く家へ松枯葉を

運ぶのが常であつたので、教祖もそれをなされたが、他が四把運ぶ時に、教祖は六把を運ばれ、他が六把運ぶ間に教祖は八把を運ばれるといふ様な工合に、常に他よりも餘計に働いて、その餘計に働かれたものを貯へて、之れに宛てられたといふ。

その三は、齡十七にして、伊勢大廟に参拜され、三十三の御歳に、四國八十八ヶ所の靈場を巡拜されたが、同行の者等は、先きを急ぐ爲めに、遠くから「あの處のお大師様」なきいうて遙拜して濟ますのを、心なき事と思はれた由を家族の方に話された。

その四は、堤防普請なきの折、村の若者等は、休みの時間が来るに三々五々集つて雑談卑話に時を移すのが常であつたが、教祖は、何時も唯一人のみ、人離れして、靜かに跪り、膝を抱へて、冥想に耽けられる様であつたといふ。

その五は、休日なきには、亦、蹶を肩にして出られて、附近の道路の修繕や、雜草荆棘を除いて居られる教祖の御姿を屢々見たといふ。

その六は、養父母に御孝心深く、又養父母も之れを鐘愛し給ふ事が一通りでなく、教祖が麥飯を厭はれたので、特に米飯を炊いて、之れを奉ぜられた、といふ事であるが、かゝる事は、當時の農

家としては尋常な事ではなかつた。此の一事、如何に養父母が教祖を深く愛して居られたかを想ふ事が出来る。

その七は、教祖は十三四の兩年、庄家小野光右衛門に就いて手習ひされた事がある。

その八は、教祖は二十三の御年に、養父に永訣を告げ給うて、家督を繼がれたが、この凶事を首として、種々の不幸が、御身の上にも、御家の上にも屢々襲ひ來つた。そして、かゝる間に、教祖は漸く齡を累ね給うた。

以上は、教祖の少年期より青年期に至る間の、今日に於て知り得られた事實であるが、單に是等零碎なる事實に徴するも、教祖が幼少の御時より、如何に實意叮嚀の御心に富ませ給うたか、如何に敬虔の御念に満たせ給うたか、の一端を窺ひ奉る事が出来る。従つて是等の事實によつて、教祖が、穆々玉の如き中和なる御性質の中に、奪ふ可らざる信神の一念を籠め給ひ、確乎獨立せる御自信を持しつゝ、而も四圍の事情に順應して毫も極端に走せ給はなかつた青年時代の御様子を、明瞭に窺ひ奉る事が出来る。穆々玉の如き此の御資性、焯々燃ゆるが如き此の御信念は、兩々相待つて、茲に大靈生神金光大神は御出現遊ばされたのである。

青年時代の通弊は、何事にも極端から極端に走せ易い、こいふ事にある。例へば道徳上の意識に於ても、善に非れば悪、徳に非れば不徳、理想に非れば現實、こいふ風に、兩端のみを見るに急に於て、その間に、毫も中和の餘地あるを容さない。それであるから、自ら身を操持する場合にも、極端な理想主義、極端な禁慾主義、極端な嚴肅主義に傾倒する。此の種の徹底的態度は、青年の青年らしい點として、誠に稱讚すべき次第であるが、一朝辛棒が爲切れなくなるに、今度は急轉直下に極端な放逸主義、享樂主義、頹廢主義の遵奉者になつて了ふ事が珍しくない。固より善を善とし惡を惡とし、徳を徳とし、不徳を不徳として、その善たり、徳たる方に身を處すべきは、何人にも肝要な事であるが、併しながら極端に走るに、自他共に壞れ傷く事が出来る、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しである。場合は少しく異なるが、先年、外交問題に關聯して、某外交官の暗殺を企てた青年がある。下手人の自殺した今日、その動機の果して那邊に存したか、死人に口なしであるが、聞くが如くんば、外交上に一轉機を與へたい、こいふ様な考であつたかも知れぬ。譯もなく新聞な

きは煽てる様であるけれども、果して然りせば國家の一大損失、こいふ事に思ひ及ばなかつた、こいふ思慮の足りない事を惜むべく、憐むべきであるが、青年の極端に走せ易い結果は、往々にして此種の禍害を醸す事端になる。清濁併せ呑む、こいふ事は、或る意味に於ては誠に好ましからぬ事であるが、何事にも極端に走しる事を抑制して、四圍の事情に順應しつゝ、而も自ら信ずる所を行つて、自他共に進む、こいふ穩健であつて、そして中和を得た態度を常に持する事を念にするのが肝要である。

然しながら此の點は青年の最も難しむる所であつて、穩健な中和を得た人間だ、こいふ思つて居る者が、存外無氣力な一種の墮落に陥つて居るのがある。小學校も中學校も級長で通して来たか、大學を卒業する時には、恩賜の時計を戴いたか、いはれて世間から持離された人間が、三年啼かず五年聳ばず、最後まで竟に啼きもせず、飛びもせずして終る徒や、沈香も焚かず、屁も放らずに夢死して了ふ輩も少くない、幼い時代には、随分殊勝らしい兒で、將來は、こいふ非常に囑望されて居た者が、存外やくざ者になつて了ふ者もある。是等は、單に溫和、こいふ一方のみで、獨立、自尊、以て自信を貫く、こいふ一方が缺けて居るからである。

獨立といへば、直に物質上若くは金錢上の事のみ解するものがあるが眞の獨立といふ事は精神上に存する。精神上的の獨立といふも、或は強情、我慢を張り通すの意味に解したり、或は一種孤獨な、淋しい觀念に結付けて解するものがあるが、眞の精神的獨立は、さういふ意味ではない。即ち自己の信する所に従つて水火をも辭しない、千萬人ニ雖も吾れ往かん、さういふ意氣ある事である。同じく信する所を行ふといふにしても、強情、我慢を張り通す、さういふのは張り通さう、さする所に、依然、一種、他に妨げられて苦しく思ひ、他に囚はれ壓へられる様な觀念が伴つて居て、それ丈け他の制肘を受けつゝある譯であつて、形は似て居ても、その意義には非常な裨益がある。青年の極端に走せ易いといふ心理状態には、この種の強情、我慢の念が籠つては居ないか。青年自信のない中和は無氣力に終り易く、中和の缺けた獨立、自信といふものは極端に走せ易い。

三

宗教は、罪惡、迷妄を斷滅して理想を實現する、さういふ根本の性質から、動もすれば極端なる理想主義や、極端な禁慾主義嚴肅主義に向ひ易い。けれども是等の極端な主義は、個人に於る場合こ

等しく、國家を破壊し、社會を破壊し終には人世の眞相を滅却して了ふ、斯かる事實は古來東西を通じて屢々演じ出された。

本教の立脚地は、何れか言へば、現實に即して理想を追ひ、理想に即して現實を陶冶せんとする所謂、具體的理想主義であつて、本教の國家に對する觀念も、人生に對する觀念も、修行に對する觀念も、其他信仰上の一切の事悉く之れに胚胎して居る。この點は教祖の神誠神訓を拜すれば、一見諒解することが出来る。従つて、本教の信仰は、至つて容易であつて、而も至つて難しい。至つて難しくて、而も至つて容易である。今月今日の生活が、直に一步一步現實を陶冶し、一步一步理想を實現する、是れ本教信仰の要諦である。

此の信仰生活の因て起る所は、即ち教祖の御人格に胚胎して居るが、その素地は、教祖の青年時代の事實に存して居る。

我が教祖に於かせられては、他の教祖、宗祖の傳記に見るが如き、神の啓示によつて出生したるか、厭世か發心か、出家か遁世か、難行苦行か、成道かといふ様な、際立つた華々しい事蹟を少しも見出す事が出来ない。唯御幼少の折からの温厚にして敬虔の念の深い御資質が年時と

共に、不幸あるに従ひ、災厄あるに従つて、次第に精化し、醇化し鍛錬されて、遂に牛神金光大神の神徳に進ませられ、宇宙の大靈に冥合遊ばされたさいふに過ぎない。従つて、教祖の御一代を縦に觀たならば、唯一、至誠、敬虔の念であり、横に之れを觀たならば、何處迄が人で、何處からが神か、何處までが現實の境遇で、何處からが理想の境界か、何處迄が俗人で、何處からが神の道の宣傳者であるか、更に分明でない。而もその開發の各階段の境は、殆んき間、髪を容れない。教祖の傳記を録する事に困難な理由の一は茲に存する。本教の具體的理想主義に立脚する因由も亦茲に存する。

四

本教青年は、現在一般におごないといふ謂はれて居る、眞に中和を得た上のおごないのであるか、但しは無氣力な墮落に陥りつゝ、あるおごないのであるか。本教信仰は一口に容易いといふが、如何なる意味で容易いといふのであるか、よい加減な事をして居ても、おかけが頂けるから、さいふ様な意味であつたならば、それは眞に本教を知らぬ徒である。それからよく本教は平和圓滿主義であ

る、なごいふものがあるが、それは果して何を意味して居るのか、兎角世間に事勿れ主義での平和圓滿ではあるまいか。それでは確乎なる自信を缺いた一種の墮落である。

之は兎に角として、本教青年が無氣力でおごないのであつたならば、本教將來の爲めに誠に憂ふべきである。固より此等の風潮は單に本教青年のみでなく、一般青年社會に浸潤しつゝある弊風であらう、が、お互に本教青年は、自信力、獨立自尊の念を缺いたおごなしさでなく、亦中和の道を缺いた強情、我慢でなく、教祖の儀表により、教祖の御教へによつて、本教青年たる實質を、今月今日で、一步一步に具備しなければならぬ。是れが本教青年今日の一大事である。

教祖三十年祭を拜し奉るに際り、茲に謹みて我が教祖の青年時代の御有様を偲び奉つて、凡愚吾等の俗腸を一洗せん事を願ひ、かくは感懐を述べた次第である。

(大正二年十月)

人としての教祖

四一四

謹みて教祖御降誕の聖日を迎へ奉る

一

我が教祖の神の御誕生は文化十一年八月十六日であります。今之を新舊曆對照表によつて太陽曆にあて、見るに、恰も九月二十九日であります。陰曆で八月十六日といへば、仲秋明月の翌日であります。暮六ツ時のお生れありますから、折柄のいさよひの月が、東の山蔭を離れて、尾花や萩の葉末の露に、豊かに清らかな、その光を宿し初めて叢の蟋蟀や鈴蟲は一しきり聲を張り揚げて之を喜び迎へる頃であつたであります。

殊にその日は、産土大宮大明神の御祭禮であつたといひますから、賑はしい太鼓の音が、鎮守の森から響いて來たり、微醺を帯びた村の若い衆や、赤い帯を締めた里の小娘等の群が、稻の香のかぐはしい田圃徑を三々五々辿つて行つたりなされたのであります。かゝる鄙びて長閑に静けく、平

和の氣に充ちた夕、教祖は呱呱の聲を挙げさせ給うたのであります。

二

教祖に仰がれ、宗祖に稱へられるやうな方々の誕生には、何等か靈異な傳説が伴うて居るのが常であります。教が教祖のそれには、前に述べた如く、單に鎮守の祭日であつた、といふより外に何等取り立て、いふ程の事はなく、一農民の子としての極めて平凡な記録に過ぎずして、之を飾るべき何等の傳説も靈異もないやうであります。

この種の傳説が、他の多くの教祖宗祖に伴うて居るといふことは、即ち、それ等の方々が普通の人間に、選を異にし、實を殊にして、特に選ばれた神佛の御使であるとか、乃至は神佛そのもの、假りに人間の姿を取つて現はれた尊貴な方であるといふことの一種の説明であり證明なのであります。我が教祖の神は、普通の民家に、普通の人間の子として生れ給うて、少くも四十六のお齡までは、農民としての御生活を営まれ、絶えて他に見るやうな傳説がないのみならず、教祖御自身も、世を終らせられるまで「無學の百姓」か「無學の者」か仰せられて居られました。教祖の御誕

四一五

生に、かく傳説が着き纏うて居ないのは、また年を閲する事が少くして、傳説が伴うには、餘りに事實が明かに過ぎる爲めであるかも知れませぬが、實は教祖の神が、何等普通の人間に異りのないお方であらせられたさいふ點が、吾々に取つては、却つて此の上もなく難有く尊いのであつて、傳説か絶えて伴つて居ないのを誠に難有いことであると思ふのであります。それは色々の點から、然う思ふのであります。今試みに、その一二を述べて見ませう。

三

その一は、教祖の神の場合と、吾々の場合と、假令大小深淺の差はあるにしても、人間の生活を味ふ點に、互に共鳴を感じて、自分も亦教祖のお心持を幾分なりとも味はせて戴くことの出来るのが、何より難有いことに思はれるさいふ點であります。

教祖は御一代の間に、生命に關はるやうな大患に屢々罹られました。親御やお子様の御病氣についても、屢々お心をお碎き遊ばされました。お子様が、親としての教祖の御心に従はれないやうな場合や、乃至御家族の方々も御意見が一致しないやうな場合もあつて、それが爲めに、教祖は、

子の行先を念ふ親としてのお心遣ひや、主人として家族に對するお心遣ひも屢々遊ばされました。親子兄弟の死別に、悲嘆の御涙をお濺ぎ遊ばされたことも一再ではありませんでした。普通の場合にいふ他人の爲めに苦しめられ他人の爲めに御難儀をなされたことも屢々あらせられました。家業についても日夜に御心をお碎き遊ばされました。官憲の壓迫といふやうな味もお嘗め遊ばされました。その他あの時代、あの土地としての御生活に伴う種々の出來事にお出遭ひなされて、人間として免れることの出来ない果敢ない人間心や乃至心配や苦痛を味はれながら、而も一面に於て、神に徹する誠實によつて、日夜の斷えざる精進となり奮闘となり、そして天地を貫く力強い御辛棒なつて現はれ、かくて生神金光大神といふ、人としての極致の境界に立到らせ給うたのであります。彼の教祖四十二のお歳の御大患に、御一家は、一時全く火の消れたやうな状態であつたことを後年追懐せさせ給うて「自づこ悲しう相成候」にお嘆き遊ばされたのは抑々何を物語つて居るでありませうか。また「此方は參つて尋ねる處がなかつた」「生きて居る間は修行中ぢや」とある様な御理解は單に之を吾々を教へ給ふ上の教訓としてのみ拜するこゝが出来てありませうか、是れ寧ろ教祖御一代の偽りなき御告白ではありませんでしたか。

この教祖の人間としての御生活を想はせて戴く時には、自分の身に病の出た時、親に別れ子に別れ、妻や兄弟に別れた時、家族の爲めに氣を揉み、子供の爲めに心配難儀する時、他人の爲めに損をさせられ、他人の爲めに苦められた時、家業の上に苦心する時、衣食について不安を感じる時、その他色々の場合に出遭つた時に、かゝる場合我が教祖は、如何に思召したであらうか、如何にお心をお向け遊ばされたであらうか、と思はせて戴くと共に、吾れも亦、かくて我が教祖大心海の一滴たりとも嘗めさせて戴くことが出来るのであると思ふ時、そこに眞實の難有さを感じ、そして亦自分は自分丈けこしての辛棒もし元氣も出るのではありません。かく教祖を通して自分を觀めた場合に乃ち生きたる教祖は、生きたる教義を以て吾れに現れ給ふのであります。それと同時に、吾れを通して教祖を拜する時、彼の教祖の神誠、神訓、御理解は、その一字一句に教祖の御生活が躍動して、而も生々しき教祖の生血が通うて居ることを知り、眞に無限の尊さを感じ得る事が出来るのであります。

四

その二は、人としての我が教祖によつて吾々は人間の貴き所以を知らせて戴くことが出来るたさいふ點であります。若し我が教祖の神が、他の教祖宗祖の如く、普通の人間さかけ離れたお方であつたことならば、それが如何に生神となり、生佛なられた所が、それは當り前のことであつて、普通の人間とは何等の關係はなく、この世の人間は何時までも、このまゝで取り残されたでありませう。神佛は畢竟神佛であり、人間は畢竟人間であるといふより外はありません。假令、人間も神となり佛となることが出来るに説き聞かされても、それは遂に一片の理論として残されたかも知れませぬ。然るに我が教祖は、人として生れ人として衣食し、人として苦み、人としてこの世を終らせられました。而もそれと同時に、生神としての徳ミカミを顯現して限りなき天地の神業を翼賛させ給うたのであります。我が教祖は、人間の貴さを自ら證明し保證せられたお方でありまして、『生神は、こゝに神か生れるに云ふことで、此方がおかけの受け初めである。皆もその通りにおかけが受けられるぞ』とは、即ちこれをお示し遊ばされたものであります。人間の眞の努力は、それが一つ一つに即がてこの貴き人の徳を顯はす所以のものであることを、吾々は我が教祖によつて知らせて戴いたのであります。前掲、教祖四十二歳の御時の大患を追懐して『自づこ悲し

「相成候」に仰せられたに對して、神よりは「金光大神、其方の悲みでなし……如何して斯ういふ事が出来たであらうかと思ひ。氏子が助かり、神が助かる事になり、思つて神佛悲しうなつた」の御傳へさへあらせられた程であつて、教祖の御身に起つた一苦一難も、これ即がて生きたる神にして天地の神業にお與り遊ばされやうが爲めの、貴き事柄であつたのであります。かくて吾々は我が教祖によつて、人生の如何に貴きものであるか、我が身の如何に自重せねばならぬものであるかといふことを知らせて戴くと共に、教祖を先達とし、案内者として自他相率ゐて、神への路を辿らせて戴く難有い身の上であることを知らせて戴くやうになつたのであります。

五

その三は人としての我が教祖によつて、吾々は眞實に神の難有き思召を知らせて戴くことが出来たといふ點であります。天地の親神は、深く我が教祖を愛で給ひ、厚く我が教祖を用ひさせ給つた。その思召の深く厚くあらせられたことは、多くの神のお言葉によつて窺ひ奉られるが、中にも「此方金光大神あつて天地金乃神のおかけを受けられるやうになつた、此方金光大神あつて神は世に出

たのである。神からも氏子からも、兩方からの恩人は此方金光大神である。金光大神の言ふ事に背かぬやう、よく守つて信心せよ。まさかの折には天地金乃神云ふに及ばぬ、金光大神助けて呉れ云へば、おかけを授けてやる」にあるのは殊にその思召の切ないことを現はされたお言葉であります。これは我が教祖が、或る特別なお方であつたが故に、特にかゝる深く厚い思召を寄せられたのであるかといふにさうでなくして、實は世の有ゆる人間も、亦かゝる思召に與り得られるものだといふことを吾々は、人としての我が教祖によつて知るべきが出来るのであつて、「此方がおかけの受け初めである。皆もその通りにおかけを受けられる」金光大神が教へた事を違はぬやうに人に傳へて、眞の信心をさせるのが神への御禮ぞ、これが神になるのぞ」にある如く、現に信心して身に徳を受けて、神の取次に従ふことの出来て居る人は、既に神のこの思召を受けて居る人なのであります。かくて人間は如何なる地位身分のものも、神の無限の愛と信頼とを辱うし得るものであるといふことを、吾々は我が教祖によつて知り得られるやうになつたのであります。

六

尙この他にも彼れ是れ考ふべき點が多くあるであらうと思ひますが、兎にも角にも我が教祖が、文化の昔、世に呱呱の聲を擧げさせ給うたことが、此の人生に深い難有さ貴さを、新たに感得するここが出来るやうになつたのは、吾々に取りまして無限の慶喜であります。教祖御降誕の聖日を迎へ奉るに當りまして、吾々の感懐は更に窮る所がありません。吾々は全人世の爲めに最も喜ぶべき日として、謹みてお迎へ申したいと思ひます。尙ほ終りに、本教には、この教祖御降誕の日を未だ公けに定められて居りませぬが、これは誕辰を祝ふのは、生きて居る間の事で、死後は死んだ日を祭るやうになつて居る、我が國の風習によつたものかも知れませぬが、若し教祖の御降誕日にして記念すべき必要があるとすれば、如何なる方法でか、一般に喜びの心を共に表すやうに致した

（大正五年九月）

生神と其の家族の人々

一

信心の行者と其の家庭。凡そこの世に宗教ありてより以來、これほき痛切な問題はない。或るものは家庭を否定し、また、或るものは家庭を肯定した。之を否定するにも、種々の態度があつた。即ち、或るものは、禁慾的な態度から、生殖に關する慾望は、人間の根本の罪苦と觀、性慾的罪惡觀念を客觀化して、異性そのものを罪業深きものと觀、従つて性慾を満足せしめ罪業深き異性と相ひ交ることを戒め慎むに出でたものもあつた。或るものは、家庭を以て修行に對する一大障害とするに出でたものもあつた。或るものは、求道發願の心急なるより、之を思ひ之を顧るの遠なきに出でたものもあつた。或るものは化導救濟の業に専念して家庭を作る餘裕を得ないのに出でたものもあつた。また、或るものは、家庭を以て、化導救濟の業に妨げあるものとするに出でたものもあつた。之を肯定するにも亦種々の態度があつた。即ち、或るものは、性慾は人間本來の要求であつて、妻

を娶り、子を産み、家を作る、人間自然の営みの上に、眞實の信心を築き上げやうとするに出でたものもあつた。或るものは、性慾を充たし、罪業深重なる異性相ひ交るこゝが、固より罪惡であるにしても、悪人を以て救済の正機とする信仰の果して成就するものならば、先づ我が身に於て如實に之を體證しやうとする、犠牲的な考に出でたものもあつた、或るものは、性慾は、人間に到底避け得ざる、除き得ざるものである以上は家庭を作るをも亦避け得ざる、止むを得ざるこゝであるといふに出でたものもあつた。更に、或るものは、我が信仰、我が救済の業を、永く子孫に傳へて、子孫と共に之を擴充完成しやうといふに出でたものもあつた。以上の如く信心者の家庭に對する態度には、或は否定的なものもあり、或は肯定的なものもあり、同じく否定的なものにも、或は積極的なものもあり消極的なものもあり、同じく肯定的なものにも、或は積極的なものもあり、或は消極的なものもあつて、決して一樣ではなく、そして、いろいろの悲劇も、その中から少からず演じ出された。

金光大神は、信心者の家庭に對する態度を、積極的に肯定し給うた。抑々金光大神の所謂「眞の道」は「神誠正傳」に「眞の道にて、一種異様な道あるにはあらず」を釋してある如く、ありのまゝなる、人間自然の世界の中に、所謂、眞の道を觀、眞の道の中に、人間自然の世界を見出さんとするの、謂に外ならぬ。従つて、人間の生存慾、性慾、社會慾等の發現交渉する所、悉くこれ眞の道の現れにして、而もそのありのまゝなる自然の、眞の道にかなひて、個人の幸福繁榮、國家社會人類の幸福繁榮を致さんこゝに、これ金光大神の所期し給へる所のものである。人生に對する、金光大神の此の態度から、家庭に對する態度も、たま、自ら決定されたこゝは固よりのこゝといふべきである。されば、金光大神は、「信心は家内に不和のなきが元なり」にて、信心の社會的發動の第一歩を家庭に求め、家庭の平和圓滿を、信心の當然の結果となし給うた。更に金光大神は「眞心の道を迷はず失はず、末の末まで教へ傳へよ」一代佛を作らぬ「末々まで繁昌致す事」金光大神は子孫繁昌、家繁昌の道を教へるのぢや「信心して神の大恩を知れば、無事健康で、子孫も續き身代も出來、一年勝り一代勝りのおかけを受ける事が出来るぞ」にて子孫の繁昌を以て、神の御心とし信心の終局となし給うた。更に、神の大愛を示しては「神は我本體の大祖ぞ」我子の可愛さを知り

て、神の氏子を守り下さる事を悟れよ、子供の中に屑の子があればそれが可愛いのが親の心ぢや」
 『神も助かり、氏子も立ち行き』等がある如く、親の慈愛を以て之を説き給うたことは、如何に金光大神が、その親の慈愛を感銘し、その子の愛に徹し給うたか、を窺ひ奉るここの出来る御教であると共に、如何に家庭に於ける道義を高調せさせ給うたか、を知るここの出来るお言葉である。更に『夫婦は臍の上の箸も同然ぢや』と宣ひ、夫婦打ち連れ立つて詣るここの、此上なく喜ばせ給うたとは、また如何に夫婦の道に徹し、如何に夫婦の愛を費はせ給うたか、を窺ひ奉るここの出来る御教である。

三

以上は、金光大神のお言葉を通じて、その家庭に對する一般的态度の一端を述べたのであるが、私どもの家庭の生活に於ける事實は、決して單純なものではない。親子、夫婦、兄弟の間の、性行の相違や、意見の相違や、趣味の相違から、互に理解や同情を缺き、感情の衝突を招くやうなこどももあり、生計上の苦痛から、互に面白くない思ひをして日を送るやうなこどももあり、その他日常

の複雑錯綜した事情によつていろいろの思ひに驅られつゝ、世路を辿るのが、世の常の状である。

金光大神も、亦、その家庭に於ける、この種の事情によつて、いろいろ御心を悩ませ煩はし給うたやうである。従つて、その家庭に對して、肯定的態度を執り給ひつゝ、子として、親として、夫として、暖き御心を注がせ給ひながらも、或る時には、超然的態度を執られるこどももあり、或る時には、抱擁的態度を執られるこどももあり、また或る時には、神として、取次ぎ者としての絶対の權威を以て臨まれるこどももあつた。以下、それ等の事實について、私どもの承つて居る二三について、金光大神の家族の人々に對する實際的御態度を窺ひ奉らうと思ふ。

四

金光大神の御信心に對し、取次ぎの御業に對して、御家族の多くは、少くもその當初に於ては、充分の理解と同情とを有つて居られなかつたやうである。これは古の多くの聖たちも、屢々經驗した所であつた。『預言者は、其故土、其家の外に於て、尊まれざるこみなし』と基督も嘆じたこいふこゝである。

安政五年の末の或る日「秋中、行をせよ、朝起き、衣裳着代へ、廣前で祈念致し、濟み次第に、妻に廣前へ膳を据ゑさせ、支度（喫飯）致し、直に衣裳着代へて、洗足で農業に出よ」この神傳があつた、そこで金光大神は、野仕事に洗足のまま、に越かれやうみなされる、夫人は「大霜が降つて居るのに洗足では人が嘲笑ふ。外見が悪い、信心ばかりして、草鞋さへ作らぬ、他人が罵言はうも知れぬから……」にて、草鞋を履き給へ、とお勧め申された、それに對して金光大神は「外見が悪ければ、後から、草鞋を持つて來て呉れ」にて超然たる態度をお執りなされ、且つ「妻はおかへを知つて知らぬものであるから、人の表面を憚ふ。私は人の表面を憚はず。神の仰せ通り、何にかに萬づ背かず」を述懐せられた。

安政六年も漸く秋閑けて、今や立教の神命の下らうとするに先つて、稻の刈り獲られた後の田の面に、新たに、麥を蒔くべく、田返へす爲めに、牛を使役されるに當つて、「當年は悴（三男延次郎様）に牛を使はさしめよ、地が穿けやうと、穿けまいと、また畦が曲まうともまよ、よと思つて任せ置き、人が祈念を願ひに來ても、牛を使ひかけて、家に戻るときは出來ぬ。田の溝ならば、切りかけて居ても戻るときが出来る」といふ意味の神傳があつたので、乃ち牛の使役を三男に一任せら

れたが、夫人は兎も角も、牛の「使ひかけ」だけはしてやつて下されし頼まれるので、手を下されるに如何したものか、牛が飛び廻つて手にはぬるので、牛の口を取られても荒れて仕様がなない。「これは神様のお知らせである」と、ふと思ひつかれて、御息にお前使つて見よ、と申される、夫人は「大人の手にあはぬものを、小供の手に如何してあふものか」と申される。しかし「我が手にはあはないでも、使つて見よ樂ちや」と申されるので、延次郎様がお使ひになる、牛は乃ち靜かに動くやうになつて、金光大神は、夫人及び御息に對つて、「如何ぢや、恐れ入れよ」と申された。立教の神命を、拜せられてより後の金光大神は、今は我が住家も、神の廣前、取次ぎの聖場である。参拜の徒は、晝夜を分たぬであらう。戸締りなきすべきでない、四季を通じ、晝夜を徹して、單に障子のまゝで過されたが、御家族の方々は、さすがに、不安に思はれて、私かに門の戸を鎖されることも度々であつたらしい。そのたびに金光大神は、之を戒められたが、遂に慶應三年の十月五日の神命によつて、門の戸を開いたまゝ、敷居を潰して、再び之を鎖す、この能ぬやうにしてはれた。

立教の神命によつて、いよいよ神動せられるやうになられた當初の頃、家に蓄へられてある限り

の米麥、凡そ二十俵ばかりを、門の入口の軒下に出して了はれた。御家族の方々や近隣の人々は、その御心を推量り難ねて、盜難の虞あれば申し、屢々お止め参らせましたが、「要る者は持っても行くであらう。これが盡るまでには、道も開けて行くであらう。その上は神が如何様にもして養うて下さるであらう。』と仰せられて更に聴き容れ給はなかつた。

凡そ此等零碎な事實が物語つて居る如く、深き深き信仰歸依の念、深遠なる神のお言葉に従つて、萬事を掬て行ひ給うた金光大神の日常の御動作は、悉くこれ凡人の意料を絶し、普通人の意表に出た。従つて、金光大神と同じき信心に住するものに非ざるよりは、一々その言動を理解し首肯するこの能きなかつたのは、寧ろ當然のことであつた。彼の御家族の方々がこの言動の端々に對して或は背き、或は拒み、或は觸れる所がなかつたのも、強ち咎むべきではなかつた、従つて金光大神は、彼等に對して、多くは抱擁的な、或は超然的な態度を執られたが、しかし、教へられる所には従順に従はれたやうである。

御家族の方々が、従順に従はれたといふ、一例として、左の事實を擧げるこゝが出来、夫人三女を懷妊せられた時に、身體が非常に重くて經過が餘りに思はしくあらせられなかつた。安政四年十二月の或る日、神よりのお知らせに、「妻に考へ違ひをして居るこゝがある、妻はその子を育てまいと思つて居る。その子を育てよ。今日から身輕にしてやる」といふことであつたので、その由を夫人に、いひ聞されるに、「何分子供も多いし、今度の子は置くまいと思つて居りましたが、さういふこゝなら育てる氣になりませう」と申されて神様にお詫びなされ、翌日から身が軽くなり、布を織るこゝ、その他の仕事にも差支へなきおかけを戴かれた。この時の夫人のお言葉には、如何にも女らしい従順な、やさしいお心が、よく現はれて居ると思ふ。

その他、何か内事について、神へのお取次ぎを願はれる場合には、禮儀正しく、夫たる金光大神にお願ひなされたやうであるが、これも従順な心でなくては、出来ぬこゝである。況んや、金光大神神勤の後は、夫人は一人の手に、多くのお子様を養ひ育て給ひつゝ、農業に従事して、兎に角、後願の御眞ひあらしめ給はなかつたこゝは、決して、なみなみのこゝではあらせられなかつたであらう。その御苦勞の程は、立教の神宣にも、「家内も寡婦になつたと思つて呉れ、寡婦よりは優し。ものも言はれ、相談もなる。小供をつれて、ほつほつ、農業して居つて呉れ」とあるによつて、窺ふこゝが出来る。

されば、金光大神は、常に少からず夫人をお勞り遊ばされたやうである。その一例として、下の事實を擧げることが出来る。曾て、笠岡の齋藤又三郎師が、如何に修行しても、到底、徳、金光大神に及ぶべくもない、金光大神は是れ生れながらに生神たり、吾れは是れ生れながらに凡庸なり、寧ろ修行を斷念し、取次ぎを中廢しやうと思ひ決めて、或る冬の一日、お暇乞ひの爲めに生神の御許に詣でられたが、その日に限つて金光大神は、それからそれと、世間話に時を移して、遂に夜の八ツ時を過ぎても、お話は盡きぬ。『大分寒うなりました、炬燵にでもあたりなされよ』と自ら先つて師を御控の間に導かれたが、見れば、夫人は己に火の氣の失せた炬燵に倚りかゝられたまゝ、假寐の夢を結んで居られたので、再び三たび夫人を促して、起きて火の用意をせよと命ぜられたが、更にお答へがないので、『晝一日大勢の子供をつれて働いて草臥れて居るから、起きませぬわい、火が無うてはつまりませぬ、まあ、また、神様の處へ出ませう』と、また連れ立つて廣前に出られ、神様に供へられてある蜜柑二顆を下けて、『冷えついでに冷ませうや』と互に蜜柑を喫しつゝ、終に夜を徹せられた。齋藤師は、遂に己が心を訴へる機を失ひ、そして窺かに、金光大神も等しく人間であるけれども、耐忍の御心強きが故に、神にもなられたのである、生神に修行百倍せば、吾れ

亦如何で御跡に従ひ参らせざるべきと、深く意を決して下向したといふことであるが、夫人が假睡せられたまゝ、遂に目醒められなかつたのは齋藤師を誡め給ふ深き神慮によることではあらうが、それに對する金光大神の御辯解には、如何にも、深く夫人を勞り給ふ温き御心の程が、誠に難有く偲び奉られる次第である。

五

かく、一面に於て、金光大神は深く家族を勞り給うたが、一面、生神の權威、取次ぎ者の權威の前には、寸毫の假借される所なき、所謂、秋霜烈日の趣もあらせられた。

即ち、或る年九月の秋祭(産土神の)の前夜の事であつた、二三、親戚の客もあり、旁々、夫人はその歡待や何かに非常に忙はしかつたが、其日、金光大神は一人の信者に對つて、早朝から薄暮に至るまで、引續き、淳々として、御理解の止む時がなかつたので、臺所にお在ました夫人は、心私かに『何にも今日に限つて、あのやうに御理解なされずもよからうに、魚の料理一つも手傳つて下され、ば助かるのであるがな』と思はれつゝ、忙しく働いて居られたが、忽ち裏口の方を覺しき

方角に、たゞならぬ水音がしたので、夫人は驚き急いで出て見られるに、こは如何に、今便所に起
 たせ給うた金光大神が、便所の壺中に倒れておいでになる、手早く引き起し参らせて、御身を清め、
 衣類を背戸の川へ持つて行つて濯がれるなど、大變に混雜したが乃ち「親類が大事なか、参つて來
 る氏子が大事なか。神には考があつてして居る事を、かれこれ思ふによつて、餘計に手のかゝる事
 にもなるぞ。命を助けられたる恩を忘れたるか」この儼乎たる痛戒の神傳があつたに申すことであ
 る。

或るお子様が慶應三年、十九のお齡の九月十二日から病氣づかれて、日々重り行き廿二日の晝に
 は、殆んど九死一生の重態に陥られたので、夫人は金光大神を病床に招じて「この通りであります、
 如何致しませうか。命乞ひの御願をして下されたし」懇請せられたが、之に對して「命乞ひをす
 るにいうて、何をするのか、家の者は皆神様のもの。心得方を改めよ、大切な年一度の御祭に、死
 ぬるにいふやうな、病氣になるのも、家内中の心からで、致し方なし、死んでも大事ない。放て置
 け。私は、今日はあなた(神)への御用を致さねばならぬ」断然として夫人の願を斥け給うた時恰
 も「可愛いと思ふな、打ち殺して了へ」神よりお知らせがあつた。乃ち「御神酒をでも、舐らせ

て置き」言ひ放たれたまゝ、廣前にお出ましになつて、取次ぎに奉仕遊ばされた。しかし御病人は、
 翌日より元氣づかれて、月の廿八日には床上げをせられ、十月朔日には廣前に出で全快のお禮を致
 された。「わが子が病氣でも、可愛いと思つて、うろたへるにいけぬぞ、云ふ事を聞かぬ時に、
 ま、よと思つて放つておくやうな氣になつて信心してやれ、おかけが受けられる」この御理解は、
 私さもの拜して居る所であるが、これはまた、眞に膚に粟を生ずるばかりの、嚴格なる御態度で
 あらせられる。慶應二年九月八日明六ツ時、養母御病死の御事があつた。その旨神前に奏上せられ
 るに、「一時も祈念止めること相成らず、死人の所へ行くことならず。今日から御節句ちやから、小
 供双方節句させ、病人にして置き。」明日八つから節句もすみ、八つの葬式といふことがあるから
 に、八つから披露致し、夜に假葬り致し置き……」この神傳があつて、偏にそれに従はせ給うた、
 後年、片岡次郎四郎師の母堂危篤の際にも、神には、喪中、死穢を忌むことなければ「假令、柩輿
 を坐敷へ据ゑるやうなことがあるにいうても參詣の氏子に迷惑をかけな」この神傳によつて、廣前
 取次ぎの、一刻も廢すべからざる由を教へ給うた。これ亦、取次ぎの尊嚴の前には、何物もなきを
 示し給へる、貴き御事ごもである。

更にお子様でしたが、或る時には、無邪氣に廣前で飛び廻つて騒がれるやうなこともあつたが、さ
る時には金光大神は『こら！』と大喝されることもあらせられたといふことである。

かく御家族に對する御態度の、此上なく嚴かにましました中にも、夫とし、親とし、子としての
温き御心を注がせ給へることは、既に前に述べ奉つた如くであつて、お子様たちの中に、假令、
過失があつた場合にでも、改心された場合の如きは、その費やされた金銭等についても、『今まで費
うた金子を、まわ(貸與)して居ると思つて居れ、利は此方から、まわしてやる』なごいふ神傳に
從はれ、且つ温情以て之を慰諭せられたやうである。これ、一面に於て、慈父の、其の子の過失を
容れ、その罪を償うて、復た之を咎むるなき至情を示し給ふと共に、他面に於て、我が子の罪過を、
己が罪過として、忍苦の生活を營ませ給へる、信心の行者としての態度を示し給ひ、更にまた、他
面に於て神人の取次ぎ者として、一切の氏子の罪過を、身に負ひて、氏子を宥め、神に詫び給ふの、
生神としての態度を示し給へるものとして私どもは、無限の難有さ尊さを感ずるものである。

六

更に、金光大神の、その家族に對し給ふの御態度について、特に私どもの意をひそむべきは、御
家族の方々に、悉く神より神號を授けられた一事である。即ち明治六年一月十五日の神傳に『金光
大神社、一子大神(夫人)親夫婦、兒供金光正神(三男)同山神(四男)同四神(五男)正才神(二
女)末爲神(三女)』とまで五人神に用ひてやる。妻は神となりても常住(屢々)風引と申す。此の
上、神の言ふ通りせねば、病氣、病難、流行病氣までもあるぞ』とあつた。これ、金光大神の、そ
の家族の各自に、絶對なる神性を認め給ひて、互に相ひ重んじ、相ひ貴び給ふの御心の現れと觀奉
るこの出来る、殊にたふさい事實であると思ふのであつて、この御精神は、また或る場合の神傳
に、『兎に角、内輪機嫌よう致せ。もの言ひでも、あなた、あなたと申してよし、何事も徒口申す
な』とあつたによつても、窺ひ奉られるのであつて、此の點に於て、金光大神は、家庭の道徳を、
所謂、人本主義的に確立させ給うたものとも觀るこゝが出来るのである。金光大神のその御家族
に對し給ふの御態度の、如何に嚴肅にあらせられたか。此の如き事實を勘へ合せて、殊に思ひ半ば
に過ぎる、貴き御事さでもあつて、私どもの我が家族に對する態度についても、再思三省すべきも
のが、甚だ少くないのである。

以上の如くにして、金光大神は、神人の取次ぎ者として家庭に於ける信心の先達として、家長として慈父として、その家庭に對して、不離不即の態度を以て、之を慈み、之を誡め、之を教へ、之を覆ひ、之を治め、之を重じつゝ、終世更らせ給ふ所があらせられなかつた。かくて「信心は家内に不和のなきが元なり」といひ、「金光大神は、子孫繁昌、家繁昌の道を教へるのぢや」といひ、「一代佛を作らぬ」といふお言葉を、御親ら體證し給ひ、信心者に取つて最も痛切なる問題を解決し給ひ、以て子孫相ひ承け、相ひ紹ぎて、神人との爲めに盡させ給ふ、無邊の神徳は、誰か之を讃仰敬慕せざるものがあらう。

本教に於ける取次ぎ者の家庭の現状は、果して何の狀に在るか、取次ぎ者の、その家族に對する態度は果して何の様に出でつゝあるか、私どもは、深く自ら省る所あるべきである。

(大正七年三月)

「教祖」といふ語は適切なりや

「名は實の寶」なる諺は、實が主であつて、名は畢竟客なるが故に、實だにあれば、名は兎もあれ角もあれいふの意であるが、更に「名は體を現はす」といひ、「名證自性」といふは、名は自ら其の性を現はすものなり、この意である。前者は實を主とし、後者は名を重んじたる言葉であつて、その何れにも首肯すべき理由がないとは謂へぬ。されど、如何に實の寶なればとて、之を輕視すべき謂はれはなく、更に、名は體を現はすといふのが普通であるにしても、實ありて後に之に名けたものであるが故に、必ず不適の詮議は免れぬことである。凡そ物として名のないものはない。名の必ず伴ふものとするれば、その不適なるは改めて、その最も適當であり、安當であるべきものを選んで、所謂、名實相叶ふやうにするこゝが大切であつて、名實相叶ふに於て、名は實を明にし、實は名を貴くするのである。古より「名を正す」を以て處生の一要義としたのは、即ちこれが爲である。

「教祖」けうそといひ「宗祖」しゆそといひ「祖師」そしといふは、「祖」そ「オヤ」おやといふ語が主となつて居る。即ち一教一宗の依つて開かれたその創始者を稱する代名詞であつて、「オヤ」おやは、或る系統を主とした語であつて、甲教派は甲教祖によつて開かれ、傳へられたものであり、乙宗派は乙宗祖によつて開かれ、傳へられたものである、といふが如くである。或る系統を主として代名詞であれば、「教祖」けうそといひ「宗祖」しゆそといふは少しも不都合ではないが、その代名詞によつて現はされる所の人が、その教義の實體であり、その信仰の中核である場合を示すには、「祖」そといふは不合理であり不適當であるといふべからぬ。

本教に於て、牛神金光大神は、傳説的系統的意義からは、一教の創始者であり開設者であるが故に、之が代名詞として、「教祖」けうそと稱するは固より當然の事であるが、牛神金光大神は、單に本教の

創始者であらせられるのみならず、實に本教はこれによりて始まりしと共に、これによりて成り、これによりて終るのであつて、本教の實體は即ち牛神金光大神であらせられる、金光大神が、單に系統上の源泉のみであるとするれば、之によつて傳へられた教義を承けて傳へて行きさへすれば、それ以上に金光大神には用はない譯である。例へば、道元によつて開かれた曹洞宗は、その宗祖の宗義を承け、その宗風を傳へて行けばよい。「如來の教法をわれも信じ、人にも教へ聞かしむるばかり」なら親鸞によつて開かれた眞宗の信者は、單にその精神に違はず、その信仰を持續して行けばよいのであつて、それ以上に用はない譯であるが、獨り本教にあつては、金光大神は、かゝる地位にあらせられるのみでなくして、金光大神は實に本教の實體であつて、本教徒の信仰は、金光大神によつて、始めて成就せられ、神の救済は、金光大神によりて、始めて完成せられるのである。金光大神は「氏子ありての神、神ありての氏子」たり得る所以の原理であり、金光大神は、神をして神たらしめ奉り、人をして人たらしめる所以の中樞であることは、彼の安政六年十月廿一日の立教神宣に、「取次ぎ助けて遣つて呉れ、神も助かり、氏子も立行き、氏子あつての神、神あつての氏子……」こあるによつても窺ひ知るこゝが出来る。

本教は『實意可憐に神信心致し居る氏子が、世間になんほうも難儀して居る』とある如く、誠心以て世の神佛に祈りつゝも、尙ほ助け得られざる世の人の苦み悲みを救ひ助け給ふ、眞の神の救済を實現するの道であり、諸神諸佛の御方にも叶はずして捨て果てられた、頼りなき氏子の眞に救はるべき道であつて、神の悲願も、氏子の祈念も、金光大神によつて、始めて成就せられるのであつて、慶應三年十一月廿四日早旦の神傳に『金乃神取次金光大神現のひれいを以て、神のたすかり、氏子のなんなし。安心の道を教へ、いよく當年までと、神の頼みはじめから、十一ヶ年に相成候』とあり、御理解第四節に『此方金光大神あつて、(氏子は)天地金乃神のおかけを受けられるやうになつた。此方金光大神あつて、神は世に出たのである。神からも氏子からも、兩方からの恩人は、此方金光大神である』とは、這般の消息を宣明せられたものである。

「取次ぎ」といふことは、單に「布教」といふ本教活動の一部分に冠すべき言葉ではなくして、眞實には、本教そのもの、義であつて「取次ぎ」を他にして本教は存在し得ぬ。而もこの「取次ぎ」は、世の氏子の三人五人のものが、助けられたのみで終つたものでなく、乃至千人萬人のものが、助けられたのみで終つたものでもない。此の世に、生きとし生けるもの、中に、只一人たりとも「實意可憐

に神信心しながら難儀して居る』氏子のある限り、「取次ぎ」は、世に共に人と共に極りなく永遠に行はるゝのであつて、この「取次ぎ」は、即ち金光大神によつて成就せられるのである。斯の如くにして、本教の實體は、金光大神であり、金光大神の無限の御活動が、即ち本教である。金光大神を外にして本教は存在せず、金光大神を外にして、神も神たり得ず、人も人たり得ず、神の救済も人の祈念も、之を外にしては成立せぬのである。

四

以上の如くにして、我が生神金光大神は、一面に於て本教教義の創始者であらせられ、神の救済の發現者であらせらるゝと同時に、他の一面に於ては、神を神たらしめ奉り、人を人たらしめる取次の原理であらせられる。本教の傳統上系統上からは、「教祖」の語を以てして、何等の異論はないが、この語にては、上述せしもの、中、前者の意義は表はされ得られるとするも、金光大神の御肉體を離れての、後者の意義は一向に現はされて居ない。

名は實の賓なるが故に、單に「教祖」とさへ言へば、右兩者は何れも自ら含まれて居る。代名詞な

さは何れでもよい。かゝる詮索をするのは、抑々末節に拘泥するものであつて、要もなきことである。さいはとそれまでであるけれども、金光大神も、我が主神の神名については、當時諸種の意見もあつたが、『此方此の世にある限りはこのまゝ』と仰せられ、紛議を排して、所謂、名を正された。これには別に重大な理由があるにしても、實の賓ならば何でもよい、さういふ議論からは解し得られぬことである。

本教に、この語の用ひられ初めたのは、何時の頃からであつたであらうか。恐らく御歸幽後のことであらうが、直接御名を稱へることを避けて、世上一般の用語に倣つて、無批評にこれを採用したものと思はれるが、現在の本教徒の信仰上に、金光大神の地位と意義とが實際に明確になつて居ない。従つて本教信仰上に、忌むべき種々の弊害や、悪傾向が纏はつて居るのは、「教祖」といふ代名詞を以て、漫然として使用して居る所から、不知不識の間に、その因由をなして居ることの、意外に深きものがあるのではあるまいかとも思はれる。教祖であると同時に、教義そのものであるこの両方面を、併せ意味する代名詞が、他にあつて、所謂、名實相叶ふこととなれば、これに超したことはないが、差向き見つからぬとすれば、止むを得ないが、「教祖」の語は廢して、單に神名を奉

稱するやうにありたい。徒に末節に拘泥するものこそせずして、普く本教上下の一考を煩はしたい。

(大正六年八月)

御廣前様を迎へ奉りて

四四六

去る大正元年十一月九日には我が金光教東京教會所及び本部出張所改築落成奉告祭が執り行はれて、靈地から我が管長閣下並びに御廣前様が、御揃ひにて御上京、親しく此の祭儀を仕へさせられた事は、此の上もなく難有き事でありました。これ迄管長閣下は毎年の如くに御上京遊ばされますが、御廣前様が御廣前様として御上京遊ばされたのは今回が初めてであります、従つて當地方信徒一同の喜びは譬へんに物なき有様でありました、私共が當地に初めて御廣前様を迎へ奉りての感じは決して淺くありませんが、その一々の御舉動を拜して私共が活きたる御教を頂いた事を特に難有く思ふのであります。十一月の八日に御上京遊ばされて、早や十日には歸路に御就きになつたのであるから、決して永い間の御滞在ではない、且つその間でも泌々拜する事が出来たのは僅に數回でありました。その折々に自ら拜し、また他から聞せて頂いた事は深く腦裡に泌み込んで忘れる事は出来ません、御廣前様は九日の奉告祭には副齋主をお勤めになり、十日の教祖大祭には齋主を

お勤めになりましたが、兩日とも、祭儀を終へさせられて退座される際に、參拜信徒の方に慈眼を注がせられ、少しお頭を下けさせられて二度ばかり御會釋を下されたのは殊に際立つて拜された、心なく拜すれば、何でもない様な事であるけれども、深く思ひ奉れば、眞心厚い信徒等が、これ等御祭儀を拜する爲め、朝早くから參集して、便所へも立つ事も出来ねば、容易に身動もならぬ様な處に、苦しい事も忘れて居る其の心根を深くお汲み取り下されてのこの御會釋であると思ひまして、いひ知らぬ難有さの念に打たれました。

十日の祭儀が終了した後で、お二方お揃ひの上で參拜者には記念の盃を下されたが、その式が終へて退出になる時に神殿に進ませられて御拜をなされた、神殿の向つて左側は靈殿であつて、僅か一間半の處を二所に仕切つて一方は日露戦役に陣歿された陸海軍人諸士の英靈を鎮め奉つてあり一方は信徒の靈殿になつて居る、神殿の御拜を終られて、その儘にお退けにならずしてその二所の靈殿に進ませられて夫々叮嚀に座拜をなされて退出遊ばされた。單にかく申して了へば、何の事もない様でありますけれども、その御姿を後から拜して居りました、如何にもそこに神在すが如く、お仕へ遊ばされる有様が、到底口にも筆にも述べる事が出来ない程に尊さを感じました。古人も「神

四四七

在すが如し、神祭るこゝ神在すが如し」を申しましたが、これは神を信じ、神に仕へる上に就ての千古の格言であります。吾人は特に神前に拜をする時には、假令心は足りないにしても鬼も角も形を改めるけれども、さうでない場合、例へば神前を餘儀なく通るこゝ様な場合になるこゝ、もう神在す事を忘れて、譬へば空屋の前でも通る様な具合に、拜もなにもする事が無い時が多い、或る時には通り過ぎて、しまつたこゝ心注ぐ事もあるがそれは既に遅い、神殿に靈殿と並んで居るこゝ様な場合に靈殿の前を通つて神殿に拜禮に行く様な時には靈殿の方が疎かになり、神殿の前を通つて靈殿に拜禮に行く様な場合には、もう神殿の方が疎かになるこゝいふ風であります、これは眼に見ぬぬお方が常に在す事を絶えず念頭に置いて居ない證據であつて、斯の如くで、さうして神を尊信して居るこゝいふ事が出来ませう、人々人々の間の事でも、貴人の前を通る時は勿論、同輩の者でも假令目下の者でも、その前なごを通る時には相當の禮を盡すこゝいふ事がなくては、入しての禮に缺けるのである。畢竟神は己が眼に見えませぬが故に、うづかりする、そのうづかりするこゝいふ事が、直ぐ様「神在すが如し」をいふ事になつて居ないのであります。神は無形にして、宇宙に遍満してござるお方であるから、さうでも拜む事が出来る、無理に神殿の前の方に禮を盡すには及ばぬ、こゝ

いふ人があるかも知れぬ、成程それも一理筋であるが、既に一定の場所を定めて神拜の靈境とした以上は、そこに神が立現はれてござるこゝいふ觀念を常に深く持つて居る事が大切であります。

案外お話が傍道に外れましたが、お二方を始め本部の重役の方等は十日の夜汽車で歸途にお就きになりましたが、吾々は之を新橋に送り奉りました。時まつて愈々汽車が動き出すと、御廣前様のみは、取分け窓の外に御顔を差出されてお別の御會釋を下された、その御有様は、恰も吾々が友人にでも別れる時の如く極めて隔てのない御態度でありました。その時の様は今も尙眼底に残つて居りますが、實に恐多い次第だに、深く感じました。こゝり分けて私共の恐多く思ふ事は、——靈地迄お見送り申上げた方のお話であります——列車が、その邊まで進んだ時であつたか、進行中、お二方と同じ室に一人の老人が乗台せて居たさうでありましたが、その人が穿いて居る靴を脱がうとしたが、靴がかたかつたものを見えて却々脱けない、隨行の人もお見送申上げる人も、こちらからハハア靴がかたいたのだな、さういふ位な考へで、見凝つて居たさうであるが、その間に、御廣前様がツミ席をお離になつて、その老人の處へ行かれて親しくお手を添へて脱がせて上げられたので、見物して居た人々は、ひきく叱られたよりも深く胸にこたへた、こゝ歸つてからの談でありました、こゝ

れについて私共は、今更何にも申上げ様なく難有く恐多く感じたのでありますが、かくなされたのが、他に對して戒めの爲めか、見せしめの爲めか、こいへば決してさうではありませぬ、只年寄つた人が困つて居るのが氣の毒な、こいふ思召の外には、何等の御心もおはさぬ、ご想はれます。この外にも、彼はお話申したい事もありますが、要する所、私共が氣のつかぬ點、若くはついても爲る事が出来難いとか、怠心から爲ない様な點、其他有ゆる場合のきじめく、細かに御注意遊ばされて、時處位に應じてビシビシ壺に箝まつて、少しの過不及もおはしませぬ、古人の所謂發して節に中る、こはか、る御有様をいふのである、只難有く思ふの外はありませんでした。何事にも實意、叮嚀、親切の心を失ふな、信心するものは何事にも行届いた行爲をせよ、信心するものは心配りが大切だ、『信心する人は何事にも真心になれよ』こは私共の常々聽かせて頂いて居る御教であります。私共は誠に難有い活きた教訓を蒙つた次第であります。愚昧な私共は、實意叮嚀にせよ、心配りをせよ、行届いた信心をせよ、こいはれる、元來その心がないのであるから、無暗にこせついたり、無暗にベコくしたり、心にもない空世辭を云つた

りして、さんご物にならぬ、する事が全然浮いて了つて、重々しく、悠然として、而も苟くも疎かにしないといふ様になり難い。これをせよ、あれをせよ、斯うせよ、然うすな、こいはれては、いはれた丈の事は、ごうにか歪みなりにも出来るにしても、全體その心がないのであるから、それ以外、それ以上の事には最早融通が利かない、猿使ひの猿や、人形使ひの人形、何等變つた所がない、誠に我れながら悠然至極なものであります。

「何事にも真心」になるこいふ事は、凡そ我が心の奥底に一つの眞がなくては出来るものでない、心に一つの眞があつてこそ、時に應じ、處に應じて、それが現れて、萬事を苟くもしない所謂「何事にも真心」になれるのであります。御廣前様のはこの場合であります。私共のはさうでないが故に、根がなかつたり、融通が利かなかつたりしなければならぬ。

さて、この心の一つの眞は、他から取り入れて来るのであるか、但しは我々の本來有つて居るものであるかこいふ、決して他から持て来るものではなくして、實は我々は皆一つづつ有つて居るのである、只それが現れて居るか深く包まれて居るかの差別があるのみであります。故に我が教祖は「信心は本心の玉を研くものぞや」を教へ下された、本來無いものであつたならば研き出せは

仰せられぬ筈である。然らばこれを研くには如何にすべきか、こいへば、一面神に祈り、一面教を聴くこいふ事より外に道はない様に思はれます。

祈る、といふ事は、只神前に定まり文句を並べたり、大きな聲でよい加減な事を饒舌つたり、手を拍つたり、頭を無暗に下げたりする事の謂ひではありませんね、折に觸れ、時に臨んで、偽りなき眞實眞味の、飾りなき心をさらけ出して神に訴へ、神に求める、のをいふのである、御理解に『拜むよりは眞實で頼め』とあるのも、こゝを教へられたものと思ふのであります。斯くの如くにして祈る場合には、今迄深く潜んで居た心の眞が、雲間の月の如くに閃き出る、しかしながらこの閃は瞬間にして陰れ易い、故に我々は絶えず祈る事が大切であります、絶えず祈るに申しても、忙しい時でも、仕事のある身でも、それを廢して神前に座つて居らねばならぬこいふ譯ではありませんね。それこそ神は何處にもござるが故に、忙しく働きながら、仕事をしながらも尙祈り得る。

教を聴く、こいふ事も、只教の言葉や箇條を記憶へるの謂ひではありません。一言の御理解を聴き一條の教を頂いても、それを直に我が心の持方の上に考へ合せて見、その教の中に含まれて居る神の御心、教祖の思召を會得して悪い所を改め、善い所を勧める様にするのが、眞に教を聴くこいふ事になるのであります。或る親不孝の子息が、或日友人に切々意見された、一人しかない母親を疎末にしては罰が當る、昔は二十四孝というて、寒中に筍を求めて親を喜ばせた程の人もあるから、何んでもさういふ風に親の喜ぶ様にせよ、こいはれたので、子息も段々の御意見骨身に徹した、以後改めるこいつて、歸つた、歸つて見るに母親は感胃で臥て居たので、子息は、いきなり母親の枕許へ行つて、母様筍は食べたかないか、と訊くので、この寒いのお前筍なんかあるものか、そんなに親切に思うて呉れるなら、さうか甘酒でも一杯吞せて呉れと頼みましたが、子息は、母様あいにくだが二十四孝の中には甘酒はないよ、こいつたこいふ話がありますが、私共が教を聴くのもさうかするにこんな工合になり易いのであります。教を聴くに今一つ大切なのは教を説いて聴かせて下さる方を充分に信する、こいふ事が大切であつて、如何に難有き教も、その方を信する心がなくては、その教は實際に我が心の中に納まるものではありませんね。佛法に三歸依こいふ事がありますが、その三つの中の一は歸依僧、即ち教を説いて呉れる僧を絶對に信用する、こいふ事でありませんが、これは如何なる宗教にも亦教育上にも缺いてならぬ眞理であります。そこで、祈りて教を聞いて心を研くこいふ事を動もすれば別々に考へる人があります、心さへ

眞になれば祈らなくとも神は守つて下さる、さういふ人があるが、神は何にも心の眞の人にのみは限らない、悪人でも罪人でも守つて下さる。これは所謂へこ理窟でありまして、實際に我が心が眞ならば祈らずには居られない、眞に祈りを捧げるならば心が眞にならずには居られない筈のものでありまして、前の如き理窟をいふ人は、その人自ら嘗て眞に祈つた事も、本當に眞になつた事もない人なのであります。が、要するに心が眞になつて神徳をも得、人徳をも得るさういふ事が、本教信仰の大眼目でありまして、我が御廣前様は、この眞について、今回私共に絶大の無言の御教を下されたのであります。

お話が段々永くなりましたが、私共が當地に始めて御廣前様をお迎へ奉りまして難有く思つた餘り、つひかく思はず永くなつたのであります。却つて御廣前様に對し奉つて禮を失する様な點が少くない、さういふ事を思ひまして、誠に恐懼の至に存じます。

(大正元年十二月)

話で助かる道

—

金光大神或る時のお言葉に、「此方の道は、祈念、祈禱で助かるのではない、話で助かるのである、話を聞いて難有いご分りさへすれば、別に拜まぬでもおかけは立つのであるが、それでは氣がすまぬさういふものがあるから、神前に拜して願届してやるのである」さうあり。是れ、本教信仰の如何なる特質を有するか、話を聞くことの如何に重要なるか、金光大神御理解の如何に徹底的なるか等の諸點を明かにし給へる極めて貴きお言葉である。

このお言葉は、一見「祈り」さういふことを排斥せられたもの、如くに見えて、従つて宗教信仰は「祈り」であるさういふ意義に反して居るやうに見えるが、決してさうでない。即ち、金光大神は、話に祈念を籠めさせ給つた。祈念が話になつて現はれた。その御理解の一言一句は、人に對し、神に對し奉られての無限の祈念の流露であらせられる。私共は、金光大神の神訓乃至御理解を以て、屢

々、彼の古聖賢の金言玉條の類に思つて、悪いことは説いてない、聞いて置いても損はないといふ位に考へ易いのであるが、その因つて現はるゝに至つた源泉は、立教神宣に所謂『取次ぎ助けてやつて呉れ、神も助かり、氏子も立ち行き……』とある廣大無邊の神意に發し、之を奉じて、氏子も立ち行き、神の御心をも安め奉らしめ給はんが爲めに、現世に於ける二十五年の歲月を、尙ほ短しとし給ひ、使命をその子孫に傳へ給ひ、幽界に入り給へる今日も、神魂ながら、天翔り國翔りつゝ、人々神々のために祈らせ給ふ、金光大神の限りなき祈念の流れ出でたるもの、即ちそれである。神の無始以來の祈願も、金光大神の血と肉とより滴り出でた祈念との結晶たる、御理解を聞かせて戴いて、私共が、心に迷ひなく疑ひなく、眞に難有しき會得し承服して、之を體して心の「改り」を期するを得んか、こゝに神の祈願も金光大神の祈願も成就するのであつて、『話で助かるのである』とは、即ち此の謂ひに外ならぬ。

二

私共の祈りが、神に徹して其の感應へを得るのは、神の祈りの現れたる教を聞いて、我が心の改

まりを得て、神の祈りの成就した場合に限るのであつて、即ち私共の方から謂へば、心の改りの得られた時に神のみかけは現れるのであつて、『信心は日々の改りが第一ぢや』といひ『我心で我身を救ひ助けよ』といふは此の義である。更に之を神の方より謂へば、神の祈願の成就した時に、神のみかけは現はれるのである。それ故、私共の眞實の祈りは、私共が眞實に神の話を聞かせて戴くことであり、眞實に話を聞かせて戴くことが出来れば、神の感應へは、たちどころに現はれるのである。徹底的に祈らせて貰はうとするものは、徹底的に御理解を聞かせて貰はねばならぬ。

この間、或る信者が、此の頃、災難が打續き、氣にかゝるこゝが頻りに起る。さうか、さういふことのないやうにお願ひの祭をして貰いたいと申出た。この話を後で聞いて、私は甚だ遺憾に思ふた。固より、不幸を免れたい、と望む心持ちが間違つて居るのではないが、此の道は、話を聞いて助かる道であるものを、それを聞くこゝをしないで、祭の一つもして貰つたならば、こゝに御祈禱専門の宗旨の信者に墮したものであり、さることをそのまゝに受け容れるものがあつたならば、それは御祈禱屋に變つたものである。さるこゝを申出でるものも申出でられるものも、共に心すべきこゝであると思つた。

信仰は即ち祈る心の表現であるにしても、我心に掩はれ、我慾に充ちた祈りは、一つの「我」の主張であつて、誠の祈りといふことは出来ぬ。一切の不幸、一切の災厄は、我の存する所に伴ふのであつて、我心なく、我慾なき境界に於ては、如何なる外形上の變動も、毫も私共に煩ひするの餘地がない。如何なる無道の人も、些も私共を苦しめる間隙がない、乃ち歡喜に満ち、平和に溢れた限りなく廣き天地は、私共の眼前に展開するに至るであらう。この難有き天地の展開は、神の祈願の成就に待つてのみ、之を得るこゝが出来るのである。されば、私共は眞實に話を聞かせて戴いて、只管、神の御祈りを、成就させて貰はねばならぬ。

三

神の祈りも、私共の祈りも、相ひ通ふに至る唯一の場所は、金光大神の御手代りの、奉仕せらるゝ神の廣前より外にはない。金光大神の御手代りとして奉仕する取次者は、神の祈りも、金光大神の祈りとの流露たる「話」を、如實に傳ふべきであつて、即ち神の祈りも、金光大神の祈りも、取次者の心に宿つて、それが、その人の話になつて現れねばならぬ。生きた教といひ、聞いて助け

られる教といひ、徳の籠つた教といひ、難有い御理解といふは一にこの種の話を謂ふのであつて、然らざるものは、單に口舌の人に過ぎないのであつて、かゝる類ひは、取次者といふよりは、寧ろ神と人との間を中絶せしむる、塞塞者といふべきではないか。

そは兎に角、斯くの如くにして、金光大神の道は、廣前中心の道であつて、廣前を中心にして、神と人との道は開けるのである。單に神に拜禮を遂げやうとするのみならば、『空が神、下が神』なるが故に、道を歩みながらも便所の裡ながらも、能く之をなし得るこゝが出来るが、話は廣前に於て聞かせて貰ふより外に道はない。廣前は取次者の話を中心であるべきであつて、話が廣前の權威にならなくてはならぬ。従つて、所謂「世話係」なといふ階級のものにあつて、何異もなく用務に服すべきものも、話を聞くこゝを疎外してはならぬ筈である。用務を先にして、得て之を疎外するが故に、この種の階級にあるものにして、往々箸にも棒にもかゝり得ぬ類ひが生ずるのは、私共の常見聞する所であつて、甚だ戒むべきこゝである。かくて、話を聞くこゝは、『話を聞くだけが能ではない』ともある如く、話は到底言葉たるを免れぬ。言葉は、恰も月を示す指の如くにして、指、月に非ざるが如く、たと言葉によつて、意のある所を示されるに過ぎぬ。「難有いこゝ分る」こゝは、由

つて以て示された真意を自得することに外ならぬのであつて、即ち、取次者の心に宿る神の祈り、金光大神の祈りを、其の話を通じて、我が心に信得解了するの謂ひである。

取次者によつて話さる、御理解が、神の祈願を如實に表現體示せられ、これを承る氏が、眞實に之を信得體認するに於て、神の祈願も、金光大神の祈願も、取次者の祈願も、乃至氏子の祈願も一切成就するのであつて、爰に至つて廣前の意義も取次者の權威も亦従つて確立し、「神も喜び、金光大神も喜び、氏子も喜びぢや」といふ難有き光景を發現するのである。

四

之を要するに「此方の道は、祈念、祈禱で助かるのではない、話で助かるのである」とは、金光大神の「祈り」に「話し」の徹底的極致を宣示せられたものであつて、この「祈り」に「話し」の一致せる所に、神と金光大神との大祈願が表現されて居るのであつて、取次ぎ布教の眞義も亦ここに存して居る。本教布教取次者にして、若しこの義を辨へずして、「祈り」なき「話し」に墮せんか、それは口舌の徒に過ぎず、「話し」なき「祈り」に流れんか、それは、彼の御祈禱屋に伍するの徒に過ぎぬこと

なる。更に、私共この道を信ぜんとする者にして、「話を聞く」ことを疎外したる祈りを以て事とするに於て、それは一つの「我」の主張者に外ならずして、眞に救はれる時はなく、神と金光大神との祈願を、信念歡喜することなしに、單に話を耳にするに於て、それは一つの「聴衆」に外ならずして、亦、眞に救はれる時はない。かくて、取次者も信者も共に、神と金光大神との一大祈願に深く思ひを致すべきではないか。

(大正七年二月)

二つの道

四六二

人生には二つの道がある。即ち一は獲得せんとするものであつて、一は施行せんとするものである。一を受動的のものとするれば、他は能動的のものであり、一を消極的のものとするれば、他は積極的のものであり、一を内面的のものとするれば、他は外面的のものであり、一を自利的のものとするれば、他は利他的のものであり、一を個人的のものとするれば、他は社会的のものであり、一を求道的のものとするれば、他は宣傳的のものであり、一を信者のものとするれば、他は布教者的のものである。見るこゝが出来る。

この二大道は、凡そ如何なる階級に屬する人にも、如何なる職業に従事する人にも、この世に生を営みつゝある以上は、彼はその何れかの道を辿りつゝあるものでないものはない。例へば、人が母胎に生を享けて、嬰兒より成人に至るまで、父母の養育を受けるのは、前者の道を辿りつゝあるものであり、一人前の人間として、父母に奉仕し、妻子を撫養するは、後者の道を辿りつゝあるものといふこゝが出来る。徒弟となつて、商ひの道を見習ふのは、前者の道を辿りつゝあるものであり、已にして獨立して、一の店を張つて商業に従事するのは、後者の道を辿りつゝあるものである。醫者が醫學を修め醫術を練るは、前者の道にあるものであり、現に開業して治療に従事するのは、後者の道を辿りつゝあるものである。信仰者が、機に觸れ縁に隨うて願を發して修行するのは、前者の道を辿りつゝあるものであり、發願を成就して、『おかけを受けて居る事を話にして聞かす』のは、即ち後者の道にあるものであるが如きである。

二

以上の如く例を引いて見るに、この二つの道には時間的にも空間的にも、前後自他の區別が截然と區別するこゝが出来るやうであるが、この二つは果してさる截然たる區別があるか、如何かといふこゝは、各人の考へ方によつて、何れも論じ得られるやうであり、従つて常に議論の絶えぬ所であるが、この兩者は、固しこゝまでは自利これよりは利他、これは自利、これは利他といふが如

四六三

き截然たる區別の存するものでなくして、實は同一事が、自分に取つては、常に自利の道であり、他に取つては、常に利他的なるものであつて、時間の上からは、兩者同時であり、種類の上の區別ではなくして、見方の上の相違に過ぎぬ。例へば商家の徒弟が、自分の將來の爲めに、商ひの道を見習ふといふは、自利の道に勤むものであるが、主家の用事を辨すべき「奉公」を見るのは、即ち同一事が自利と同時に利他の道にあるものといひ得られ、醫家が醫學を研修するのは、自家他日の爲めであつて、彼れには自利の業であるけれども、一國の文化の進歩といふ上からは、同時に利他の道を行ふものといふべきであり、治療を施すは如何にも利他の道を行へるが如きも、それによつて自家の經驗を積み、仍て以て一つの學理の發見に資する所があるをすれば、それは即ち自利の業であるといふべきであるが如くである。

宗教信仰の上に於ても、一般に信者といへば、如何にも自利道にあるもの、如く思はれ、布教者といへば、如何にも利他道にあるもの、如く思はれるのであるけれども、これ亦徒に概念名目に囚はれた謬見である。假令名義の上では「信者」いふもの、中に數へられて居ても、彼れの信心振りの如何にも熱心であり、實意であることが、人をして感動せしめ、何等かの感化を他に與へる

ならば、彼れは即ち利他道を行じつゝあるものといふべきであり、況んや我が身に經驗した神の靈徳の忝さを、自ら味ふと共に、「話にして聞かせ」て、他の一人たりとも、同じ信仰の道に入らしめることが出来れば、彼れは明かに、金光大神の取次ぎの道を行ひつゝあるものといふことが出来る。更に名義の上では「教師」いふもの、中に數へられて居て、所謂御取次ぎに奉仕しながらもこれを通じて、絶えず自己の深き罪、重きめぐりの苦みを味ひ、只管に神に祈り、神に縋つて他事なき人は、取次ぎ即ち我が信心にして、利他行即ち自利行たるを得て居るものであるといふことが出来る。

三

金光大神に對し奉つての觀方も、吾等はこゝから定めさせて貰はねばならぬ。一般には彼の立教の神宣を以てその自利、利他兩方面の分水點を見て、立教神宣の下つた安政六年十月二十一日までは、金光大神は百姓片手の御信心であつて、即ち自利の地に在りましたのであるが、此の日を以て百姓から取次ぎに進まれて、利他道に入らせ給うたのであるけれども、若し利他道の上から

拜すれば、この現世に出生なされたその瞬間から——乃至少くも『私は神佛に参り度うござりますから、休日には心ようお暇を下さりませ』と養父母に願はせられたその時から、吾等の上に偉大なる御力を與へ給うて居るのであつて、即ち生れながらに利他の道を進ませ給うたものと拜するのであつて、釋迦が生れながらにして「天上天下唯我獨尊」を現し、キリストの誕生に當つて、天使が之を讚嘆したといふことも、此の點から誠にさもあるべきこと、首肯される傳説であると思ふ。更に若し自利道の上から拜すれば、現世の御姿を陰し給ふまで『無學の百姓』と仰せられ、『生きて居る間は修行中ぢや』と仰せられ、歸幽に先つて、一室にお閉ぢ籠り遊ばされて、親しく神と御物語りなされたのも、御親らの御信心の爲めであり、めぐり深く罪重き人の子の上を、御親らのめぐりし、罪として、如何なる修行をも致しますからと、神に詫び給ひ救ひを求め給うたのも、亦自利の道にあらせ給うたものと拜するここが出来るのである。

更に天地の親神は、世の凡べての物を恵み、凡べての人を慈み給ひ、此の世、彼の世の一人の氏子たりとも、その所を得ざるもの無からしめん爲めの悲願を、金光大神に寄さし給ふた。これ神の絶対の利他の御業であらせらる。而も『神も助かり』とある神宣によつて、それが同時に絶対の自利の御業であらせられるのであつて、神のこの絶対の自他二つの利道は、即ち我が金光大神によつて御成就遊ばされるのである。

四

自利の行圓滿して利他の行に移りゆくものと思ひ、個人を完成して後に他に對する道が開けるものと思ひ、利己は第一歩にして社會的行爲は第二次に來るものと思ひ、信者から教師に變るものと思ひ、信者は純自利の道にあるもの、教師は純利他にあるものと思ひ、金光大神は現世の御生涯の前半が自利の御生活で、後半が利他の御生活であると思ひ、神は純利他的實在であらせられるこの思ふが如きは何れも謬見であつて、實は自利の中自ら利他の道を伴ひ、利他の中亦自ら自利の道を伴うて居るのである。利他の伴はざる自利は罪惡であつて、自利の伴はざる利他は空虛である。

然るに、本教徒の中には「信者」にも「教師」にも、前述の如き謬見を抱いて居るものが少くない。それ故に「信心」といふことが、我利心の現れであつたり、「布教」といふことが商賣心の現れ

であつたり、或は我が信心が自ら人を感化する底の充實したものにならなかつたり、布教が犬の遠吠の如く、聲のみ大であつて中味のないものになつたりする。お互ひに深く心すべきことではないか。

(大正六年十二月)

教典の形式

—

金光教祖の教義は、他に見るを得ぬ特色を、その諸種の點に於て見出す事が出来るが、その教義の所依となつて居る教典、即ち神誡、神訓、「御理解」などの形式に於ても亦著しい特色を示して居る。

何れの宗教に於ても、その教義の所依となるべき經典の類ひは、その文辭を極めて古雅に莊重にして、その内容に相俟て神聖を保つ事に努めるのが常であつて、彼の佛教各宗に於ける經典の如き、基督教に於ける聖書の如きは、その好適例である。

佛典は我が國へは凡べて漢譯のものが傳つて居る。學問に云へば漢文を讀む事であり、文章を作るに云へば漢文を綴る事であり、公文書の如きも多く漢文を用ひた我が國の往時にあつては、漢文の佛典は、さしも難しいものとも思はれなかつたであらうし、出世間を立て前として居た佛教のし

ては、或は之でよかつたかも知れぬ。不立文字を教義とする禪家の如きすら、會會その教義を文字に表はすに當つては、最も難解な語を用ひ、その用語の上に教義の特風を現はさんとして居る。非道非俗を標榜する眞宗は、その教義を記すに、多くは平易な假字交り文を以てして居るの、流石にその用意の程が窺はれ得られるが、それすら比較的いふに止つて居て、引用の佛語などは依然として特別の講義を聞かぬ以上は一般には解し難いものである上、起草せられた當時にあつてこそ、極めて通俗的のものであつたであらうが、今日となつては、餘程古調を帯びたものとなつて居て、従つて一般には、その儘では了解し得られぬものが多くなつて居る。我が國に行はるゝ基督教の聖書の如きも、これまで希臘語や希伯來語なごから、新たに改譯を企てるものも往々にしてある様であるが、今日一般に用ひられて居る和譯のものは、努めて古雅な言葉を用ひて、その神聖を保たんとして居て頗る苦心の跡を認める事が出来るが、それだけ普通には解し難い點も少くない様である。神道各派に於ても所依の教典の存して居るものは、多くは用語の難しい文章や、和歌なごの類ひである。通俗な教義を具へて居るに謂はれて居る天理教でも、その根本教典となつて居るものは、尙ほ神樂歌と稱する數へ歌様のものであつて、地方の俗語によつて記されて居るから解釋なしには、

一般に解し易からざる點が多い。

二

然るに翻つて我が教祖によつて傳へられたる教典の形式を見るに、何れも今日我が國に用ひられて居る普通語によつて表された簡易なもの、みであつて、殊に『御理解』の如きは、全く口語を以て傳へられて居る。神誠、神訓と稱へられて居るものは教祖歸幽に先つて、教祖を通じて神より傳へられたものを、現佐藤教正の筆録されたものであると聞及んで居るが、その各條の結尾の語が、「なり」「あり」「……の事」「ぞや」といふが如く、文章體になつて居る様であるが、これは一條毎に纏つた體裁になつて居る所から、自然にかゝる語が現はれたのであつて、全體としては、殆んど口語體であるに謂つて差支ない。他の多くの神傳を拜しても、或は文章語の如く、或は口語の如く、相ひ混合して居るによつて見ても、神誠、神訓に強いてかゝる形式を拵へたものでないのを知ることが出来る。斯の如く、口語體の普通語を以て、平易簡明に現された教義の形式は、凡そ何れの宗教に於ても見出し得ない所であつて、全く本教獨特の形式であるに謂つてよい。

文章體、殊に古調を帯びたものが典雅に莊重に感ぜられ、之に反して、通俗な言葉、殊に口語體のものに、自ら卑俗な感の伴ふのは、何れの文章に於ても免れ難い所であつて、宗教教典の類は、普通の人の耳には、一寸入り兼ねる様な文章の方が、却つて重味や難有味が多い様に思はれるのが常である。口語體のものに前述の如き感が伴ふことは謂ふもの、併しながらその語の表現して居る内容の如何によつて、その趣は自ら異つて來るものであつて、場合によつては情を盡し意を達して、却つて眞味の難有さ尊さを感ずるものである。雅なものも俗なものも、裝飾的な點に於て前者は後者に勝り、實用的な點に於て後者は前者に優る。一利一害は何物にも伴ふが、宗教教典としてはその何れを取るべきであらうか。近代の文章の傾向を觀ると、眞面目な物ほゞ、一般に言辭の上に拵へたものよりも、却つて口語によつて、心情を偽らず飾らず有りの儘に流露せしめる事に努め、且つ平易實用を主として、徒らなる言葉の上の遊戯を厭うて居る。漢字廢止論や、ローマ字使用論などの盛に稱道せられるのも、その論の當否は別として、近代の傾向から胚胎した一現象に外ならぬ。かゝる傾向が若し最も進歩したものであるとすれば、本教教典の形式は最も進歩したものと謂へやう。宗教が、若し古の如く、山の奥、谷の底のものでなくして、衢のものであり、里のも

のであるべきであるとするれば、本教に於けるが如き形式によりて記されたる教典を有するものは、宗教の使命に最も適應したものと謂へやう。亦若し教典が宗教の裝飾でなくして、その精髓であり、少くとも、宗教が社會に接觸する爲めに役立つべき重要なものであるとすれば、本教の教典は最もよくその役目を果し得る形式を具へて居ると謂へやう。

本教教典は前述の如く、平易簡明であるが上に、凡べてに於て、人爲でなくして超脱の趣があり、いひ知れぬ神韻を味得する事が出来る。明治聖帝の侍講として、學徳一世に重きをなされ、晩年、本教の信仰に入つた故元田永孚氏の如き、一誦以て神ながらなるものとて畏敬し服膺した、さいふは誠に然もあるべき事である。

通俗にして、而も超脱し、卑近にして而も神韻を帯び、簡略にして而も深奥極りなく眼に文字を見ざるものも、以て直ちにその堂奥に入り得ると共に、微は益々微を穿ち、大は益々大を追ふて更に究極する所を知らざるもの、吾人は實に金光教祖によつて傳へられたる教典に於て、始めて之を見得るのである。

斯くの如き獨特の形式は、全く金光教祖そのもの、反映であつて、作つて得べきものでない。『無學の百姓』にして、而も牛神として天地の大生命に觸れつゝある金光教祖の全魂は、誠に教典の一節毎に躍動して居る。これは管に教典のみに止らずして教祖によつて現はれた祈念の形式なり、廣前（布教場）の形式なり、何れも教典のそれと同様であつて、これ亦教祖人格の流露した自然の形式である。

然るに今日の本教に行はれて居る祭典の儀式の如きは、この本教自然の形式からは遠く隔け離れたものを採用して居る。その様は恰も口語體のものを古文體に書き更へた如き形である。これ果して本教の教義から如何に見るべきであらうか。教祖は曾て慶應三年二月白川神祇伯王に神主の資格を得ん事を申請された。その際にも『金乃神廣前では、京都（神祇伯王の事か）御法通りの事は出来ませぬ』との條件を附して居られる。所謂、御法通りとあるは、いろ／＼に之を解釋し得る餘地はあるが、このお言葉の全體から察するに、白川伯王家に定まつて居る祭典作法の類を指されたものと解せられる。果して然らば本教々義に關係のない他のもの、儀式の如きは金乃神の廣前から斥けられたものである。この一事、本教現行祭典儀式の上に深く考慮すべきものが儼存して居ると思ふ。

教師の制服の如きも莊嚴であり優雅であるべき必要から我が國中世の服装を採用して居る。これまた本教自然の形式とは隔け離れて居る。通俗といふ點から謂うたならば、制服の如きは羽織袴で足りては居ないか。羽織袴では威嚴がないといふものがあるかも知れぬが、沐猴に冠といふ諺もある。服装が威嚴に關する事は大であるが、人の品位は服装以上に關係が深い。通常の禮服を纏ふて威嚴の保てぬものは、衣冠を正うしても沐猴のそれに類するを免れぬ。過ぐる明治四十年十月の教祖二十五年祭には、前日に羽織袴の人等によつて一祭事が行はれ、而も却て森嚴であつた様に記憶して居るが、これが本教の本教たる自然の姿であらうと思ふ。

形式は内容ではない、内容でなければ如何にあつてもよい、といふ事はない。内容に最も適しいものを選んで、形質相應せしめる事が大切である。形式が形式として、別に輕んずべからざる理由があるならば、本教現行の各種の形式について、注意研究するのは決して徒事ではない。而してそれ等各種の形式の標準となるべきものは、教祖の全人格の發現たる本教教典のそれでなければならぬ。

（大正五年三月）

生活の妙味

四七六

一

或る夜汽車に乗りました。折柄の時雨に、雨の滴りがスイスイ斜めに窓の硝子にかゝる、その滴り毎に電燈の光が映して或は赤に或は青に或は紫に、得も謂はれぬ美さを添へる。やがて窓の全面に點々として美しき光を宿した露が、譬へば寶玉を鑲めた如くに見えて、覺えずその美觀に打たれた事があります。私はその時に思ふた、今日まで夜汽車に乗つた事は屢々ある、而も今宵の様に雨にあつた事も度々あつた、それ等の時の雨も今宵の様に窓を打ち、今宵の様に火の光を宿し、從つて今宵の様に美しく見わたに違ひないのであらうが、この有り觸れた光景の中に、今宵は今まで曾て氣注がなかつた驚くばかりの美しさを初めて見出す事が出来た、深く喜ばしく思ふと共に、今迄の車室も、さう思ふと共に、打つて變つて自分は立派な處に在る様に思はれたのであります。この種の感じは、人によつては決して新しい事でもなく、珍しい事でもなく、彼の詩人は常にかゝ

る感じに生きて居るのであらうが、併しながら此の種の感じは、人間の生活の上に誠に大切な意義を與へるものであるといふ事をも深く思ひました。

二

キリストは『ソロモンの榮華の極の時だにも、其裝、この花の一に及ざりき』と謂つて、一本の野の百合花に神を嘆美し、古の佛者は『狗子佛性あり』と説きましたが、是等の言葉は、必ずしも難かしい議論や研究の結果として現はれたものではなく、皆天地人生に對して、それ等が如何に卑しく、如何につまらぬ様に見えるものゝ一物をも、忽せにせぬ尊い心の現れであつたでありませう。我が教祖は『人間は皆神の氏子』と説き給ひ、『誰れでも生神なる事が出来る』と示し給うて、假令愚劣に見え、下賤に見える人等も、必ずや尊き神なる事が出来るに教へ給うた。『實意、叮嚀』といひ、『何事にも信心』といふは、教祖の全御生涯を打ち覆うての御教であり、亦教祖の神の御生涯が、これ等の教の顯現でありました。所謂『實意、叮嚀』も所謂『何事にも信心』も、世間普通に考へられるが如く、單に儀禮の末や行爲の蹟についてのみの事ではなくして、我が立ち對ふ物そのも

四七七

のを忽せに思はず疎末に思はず、假染に思はぬ。こいふ尊い心持ちを重んぜよと教へられたものでありませう。「一文の錢も缺いて遺ふ心になれ」と諭し給ひ、一粒の米、一葉の反古紙も愈末にすな、と教へ給うたのも、それ等のものを惜むの情に出たものでなくして亦この尊い心持の現れに外ならぬでありませう。「女が菜園に出て、菜を抜く時に、地を拜んで抜くこいふ心になればおかげがある」との御理解も、之を與へられたる神の御恵を感謝すると共に、一片の菜の葉をも忽せにせぬ、こいふ尊き心になれとの御教でありませう。教祖は只一人の氏子の教を求めると對してでも、日を暮らし夜を明して御理解に時の移るのを覺えず、淳々として倦ませ給ふ所がなく、當時の所謂部落の一人を遇するに、猶士庶民と簡び給ふ所があらせられなかつた、こいふ事でありませう、これ亦此の尊き心持の現れであつたでありませう。

三

人は、大事業に成功し、社會の華々しき場面に立つて働く人を屢々えらいと見るのであります。固より古來大事業を成し遂げ、大に天下國家を利益した人の如きは、何れもそれ丈け偉大なる力量

を具へ、慧敏なる才畧を備へて居つたからであつて、誠に偉い人に違ひないのであります。それは動もすれば「大功は細瑾を顧みず」とか「一將功成りて萬骨枯る」と云ふ様な闊い方面や、傷ましい方面が着き纏うて居ります。好んで細瑾を顧みず、好んで萬骨枯れるのを悲まなかつた譯では固よりなく、時として事情全く止むを得ざるに出た自然の結果に外ならぬ事も多かつたでありませうが、併しながらそれ丈け偉いと思ふ心に變りはなくとも、尊いと思ふ心は差引かれざるを得ないのであります。乃木將軍は偉大なる事業を遺された、將軍が偉い人であつたと共に尊い人として一世の景仰を集めたのは、その遺された事業といふ方面よりは、寧ろ「凱歌今日幾人還」といふ様な哀音悲調の中に存して居るでありませう。

志を立つる事須らく大なるべし。こは昔も今も青年に對する教訓であつて、青年は之を信條として、常に大きくならう、大事業をしやう、目醒ましく華々しい事をしやう、こいふ事に熱中し焦慮し腐心して居るのであります。大きくならう、こいふ事は、固より何人も念させねばならぬ事であつて、志す所に半ばして終るのが世上の習ひであるから、志は成るべく廣く大きく立てるのが肝要でありませうが、只徒らに、大きい事、大きい事このみ思ひはやる結果、或は一種の誇大妄

想狂に似たものになり、或は生活難や就職難を想へねばならぬ様な事ともなるであります。今日青年の連りに想へつゝある生活難や就職難といふものは、事實あるのであつて、世の識者の夙に虞を懐いて居る社會問題ではあらうが、仔細に考へて見たならば、彼の『大きな事を』といふ考が餘程禍ひしては居ないでありますか。今日の世の中に、さう幾何も大きな事業が初めから轉がつて居るものではない。初めから大きな物を捉へやうとするが故に、世の中の無情や、身の不遇を聊たねばならぬ事にもなるのであります。先年來歐洲の戦亂が始つて、外國の輸入が著しく減つた結果として、我が國の物資は非常に不足しましたが、併しこれが爲めに工藝や理化學の實際的な研究が盛んになつて現に世界的な發明も段々出來て居る様であります。これは所謂不幸の幸であります。これ等の發明は、『大きな事』よりも、寧ろ小さな所、些細な點に注意し研究した結果に成るものが多い様であります。この種の點に思ひを潜めたならば、苦しいではあらうが、新事業、新職業は有り餘る程あつて、必ずしも生活難を他に想へなくても濟む場合が多くなりほしきでありますか。『大きい事』必ずしも『尊い事』ではないのでありますが、之に反して『尊い事』は必ず『大きな事』になり得るのであります。この『尊き事』は小さい事にて忽せにせず、細かな事にて等閑にせず、聊か

な事、つまらぬ事と思はれる様なものに對して、常に無限の意義を認め、無限の價値を見出さうと努める所に存して居るであります。

本教の青年の中にも、成るべく早く成功したい、大きい事をやりたい、さういふ様な點に苦慮して居る人はないでありますか。一教の上に立つて大きな仕事をし、世間から持て囃されて居る人等を羨ましく思ふ様な事はないでありますか。山間僻地に、三人五人の信者を相手に孜々として布教して、十年二十年變らぬ様な人を意氣地なしに見、終日神前に奉仕して、一人の信者にでも、日に夜を徹して諄々として道を説く様な人を氣の利かぬ事であるに蔑む様なことはないのでありますか。

大きな事や華々しい事にのみ目がついて、小さい所、陰れたる點を疎末にして居るのが、亦今日一般宗教界の弊害であつて今日の教界の腐敗墮落は、職としてこの種の點に原因して居ると思はれる節がないではありません。

私は、先年内務省に開かれた感化救済事業講習會といふものに出席した事があります。集つて居る人は宗教家、教育家に非ざれば、所謂感化救済の事に携つて居る人のみでありました。午餐は毎日も食堂で共に喫する事になつて居りましたが、食物を疎末にする人等の多いのには、兎にも角にも我が教祖の教を承つて居る私共としては眞に驚かすには居れなかつたのであります。また此の間或る人の話に、市内の或る教育會が、去る處で雨中屋内の園遊會を開いたが、その翌日その場所を借りる爲めに、そこへ行つて見るに、彼方にも此方にも、蕎麥や何かが、場内一面に散亂して居て、眞に足の踏み處もない始末で、後方付に非常に手間取れた、といふ事でありました。苟りにも感化救済といひ教育事業といふものに關係ある人等の集りに於てか、見る見苦しい有様が演ぜられる様な事で、眞に感化たの救済だの教育だの、尊い事業がやれるものではありませんまい。これ等は事業といふもの、技術ではない。一粒の米に、一片の菜の葉に無限の意義を認めて、之を大切にする所に、孤兒や貧兒や不良少年や、乃至一般兒童の衷に存して居る尊き或るものを啓發して、之を指導し感化し薫育し得べき資能が存して居るのであつて、然らざる所には、統計表の上や、報告書の上のみの事業しか擧つては來ないであらうと思ふのであります。右の様な爲體では假令千の講習

會が開かれ、百の教育會が催されても、その効果は逆め暗るに餘りある次第であります。

五

人は、常に大處高處に眼を放ち、事物を達觀し瞰下するの氣概がなくては、實際の社會に生活する事は出来ませぬが、それと共に常に小さき物、細やかな點、微かな所を透見し徹視し洞察して、そこに聲を聞き色を見、意義を認め價値を發見し、一事一物をも龜末にせず忽せにせず等閑にしないといふ心がけを持たねばならぬと思ひます。「大きな事」必ずしも「尊い事」ではない。されど「尊い事」には、やがて「大きな事」の影が潜んで居ります。

人生の意義も生活の妙諦も乃至勇氣も努力も持久も慰安も、より多く後者に發現する事を、明かに知りたひものであります。

(大正五年七月)

七月の教訓

四八四

七月は、既にして梅雨が残りなく霽れて、小暑大暑の候に入り、一年の最も暑きに苦む月に當つて居ります。海に山に人はこの苦みを避けやうとするのでありますが、七月は本教に取つて、誠に意義ある月であります。

時恰も安政五年七月十三日の夕、教祖は孟蘭盆會の前日の事にて、先祖精靈に廻向なされやうにて早くから神前に燈明を献けてお禮を申上げられました。料らずも『戌の年（教祖の御事）今晚は盆と思つて精靈廻向へ氣を寄せよ、燈明油少うても火は消ぬ。早や、晩から何程になるか。母妻、共にこゝへ來い、物語致してきかせる云々』と教祖口づから神のお言葉を物語り教祖のお家に關する故い事ごもを、何くれもなく御教へ遊ばされました。これが『天地の開ける音』の教祖によつて發せられる始めでありました。尙、その夜には、『戌の年さん、お前が來て呉られたで、此の家も立ち行く様になり、難有し』と川手家の祖先精靈より感謝の辭を教祖に致されました。これめ

ぐりの爲めに危機に瀕した川手家が、教祖によつて一轉機を來し、亡ぶべかりし家が教祖の神德によつて、末々繁昌の新しい基を奠められた事を示し給へるに共に、やがては亡び行くべき運命にあつた私共も、教祖の教により、教祖の神德によつて、茲に一轉機を與へられて、亦末々繁昌の道に入る事を得る様になつた嬉しき音信を傳へられたのであります。

舊曆三新曆三、候は自ら異つて居つても、月は何れも同じき此の七月は、本教の發達の上にとつても、私共の信仰の上にとつても、誠に意義深き月であります。教祖の往時を追想し奉り本教今日ある所以を思ひ、更に私共の現在の喜びを思ふにつけても、この由縁ある月を、只徒らに暑いといふて苦しむ、苦しいといふて怠つて居る事は出来ませぬ。吾々はこれをおもひ思つて一段と信念を勵むべきであつて、これによつて苦熱も亦忘れることが出来るであります。私共は謹んで七月の教訓を忝く思ひます。

（大正五年七月）

信仰の二方面

四八六

信仰を道歩く事に譬へてお話しませう。道を歩くといふ働は一つであります、しかしながら、自から二つの働に分けて考へる事が出来ます、即ちその一つは一足一足に踏み止るといふ方の働でありまして、他の一つは單に踏み止るといふのみでなくして更に一足一足前に踏出す働であります。道を歩くのに、踏み止る方の働は必要はない唯前へ前へ踏み出す方の働さへあれば宜しい様に考へられますけれども決してさうではありませぬ。彼の泥濘の處を歩く場合に足がツルツルに滑つて、早く歩かうと思へば思ふ程轉びさうになる事がありますが、これは踏み止まる方の働が失くなつた場合であります。昔し希臘の詭辯派の人は車の進むのは、轉るからではない、車が轉つては一寸も前には進まない、あれは始終地に着いて居るのだ、と申したさうであります、成る程その通りで、車自身が、クルクル轉つたならば少しも前に進むものでない、これは所謂空轉といふものである。車が前に進むについては是非とも瞬間々々に地に止まる働がなくてはならぬ、

即ち始終地に着いて居ればこそ、次第に前に進む得るのであります。さうか三申しましても、唯踏み止る方の働のみで、踏み出す方の働がなくてはなりません、泥濘を歩く場合に、下駄の齒が泥の中に喰ひ入つて動かぬ場合がある、そんな場合に無理に出やうとするに下駄を奪られて足になつて了ふ事がよくあります。踏み止る働がなくて、踏み出す働ばかりであると云つて轉ぶ事になり、踏み止る働のみ強いに下駄を取られて既足になる事になります。故に完全に道を歩く爲めにはこの兩方が交々適當に働かなくてはなりません、即ち踏み止る方の働は、道を歩く爲めの消極的の働であり、他は積極的の働であります。

此消極、積極兩方面の働は何事をするのに就いても偏廢てはならぬものであります。例へば商業をするについても、一方には損をしない様、世の中の信用を墮さぬ様といふ事を心掛けねばなりません、唯それだけでは、五年経つても十年経つても一向店は繁昌しない、損をせぬ様、信用を墮さぬ様に、心掛けると共に、一方成るべく澤山の金錢の儲かる様、一層信用の廣まる様に心掛ける事が大切であります。けれども唯儲かる様、唯信用の廣まる様に、この心掛けて居るといふ、つい道に外れた事をしたり、商賣に無理が出来たりして失敗を招く事になります、故にこの

四八七

両方の心掛を適當に働かせる事が最も必要でありまして、前者のが即ち商業上の消極的の心掛であり、後者のが即ち積極的の心掛けであります。

信心の道を歩むについても亦この兩者の働きが、さちらも備はつて居らねばなりません。

さて、我が教祖は、「眞の道に入れば第一に心の疑の雲を拂へよ」を教へ下されましたが、これは即ち、信心の道に入つたならば第一に疑を去らねばならぬこの神意であります。こゝに「疑の雲」を教へられてありますが、誠に疑いふものは雲の如きものであります、明らかな日の光でも月の影でも、空に横雲が棚引いたならば、吾々は之を仰ぐ事は出来ませぬ、晴れた日も雨の日も、日や月の光に變りはないのでありますが、間に雲があるのこないのこによつて、その光を見る事が出来たり、或は見えなかつたりする、見ゆるからきて、別に偶然に生じたのでもなければ、見ゆるからきて、別に無くなつた譯ではありませぬ、吾々の心の疑もその通りで、神様は、如何なるものでも、可愛いと思召して、そら助けて遣らう、幸福にしてやらうと、すぐ目の前に手を出して下さつてあつても、我が心に疑の横雲が、懸つて居りますと、その尊い御手も發見す事が出来ないで、色々苦しい思をしなければならぬ、落語の中に「舌三寸」をいふのがあります、或る座頭が、

知りもしないのに、武術の事について色々高言を吐くものであるから、始終最負にする武士が、それでは馬に乗つて見ろと云ひ出したので、口實を設けて歸らうとするに、中々聽かぬ、今は致方なしに馬場に引出されて馬に乗せられるや否や、馬は無暗に驅け出したので、座頭は揺り落されさうになつて、一生懸命に鞍壺に嚙りついて居たが、その間に馬場に植わつて居る柳の枝に觸つたものであるから、いきなり、その枝に攫まつた、さうするに武士が聲を掛けて、これはえらい事になつた、その木の下は千尋の谷ぢや、助けてやりたいが、何分手を出す道がない、今は是迄に思つて觀念しろと申しますと、座頭は後に残す妻や子が不憫であるといつて、オイオイ啼き出した、その間に手は痛くなつて来る、助けては呉れない今はこれ迄に覺悟して「南無阿彌陀佛」を諸共に飛んだが、足から下三寸であつたといふのであります。世の中には、神様が在す、なきといふのは昔の人間のいふ事である、靈驗があるなきといふのは迷信家のいふ事である、日常は強さうな事を申し居る割合に、病氣に罹つたり、不幸な事に遭遇ふと、直に狼狽へ迷ひ騒ぐ人が多い。神が在すといひ、在さぬといつて議論をして見た所が大地には別に寸分の増減もなく、神の靈徳には微塵の變動もない、故に我が教祖は「疑ひを離れて廣き眞の大道を開き見よ我身は神徳の中にいかされて

あり』と教へられ、また『疑ふならば疑へ、迷ふならば迷へ、いよくかなはぬならば鏡り來れ、助けてやる』とも仰せられました。吾々は己が驕慢の心を打ち捨て、これ等の神意を深く味ひ悟るべきではありませんか、然らば神の救の御手は、直ぐ我が目の當りに現れるのであります。

神の存在といふ事は、別に疑はぬ人でも、尙神の教に就ては時に疑を挟む事があります。例へば『口に眞を語りつゝ、心に眞のなき事』と我が教祖は誠め給うたが、さうも商賣をして居れば時には嘘も懸引で、吐かねばならぬ、といふ人がある、かゝる事を耳にする事は餘程多い。併しながら懸引によつて利を得るといふ事は極めて範圍の狭い事であり、且つ危険である、商人は何處迄も誠實と信用によつて利を得て行く様にしなければ、今日以後の立派な商人となる事は出来ない、即ち眞の商賣はやはり、神の教を基本として行かねばならぬものと思ひます。神の教に従つて商賣すれば、よし眼前の利は少い様に見えても必ず末々の繁昌を遂げる事が出来ます。只商賣ばかりではありませぬ、何事をする場合にも『神は嘘を吐かぬ、金光大神の教へた丈の靈驗の立つ事は神が請合つて遣る』との確かなる教を我が心に確乎と捉へて放さぬ様にしなければなりません。

其他、疑といふ事についてはいろいろお話しねばならぬ事もありますが、他日に譲る事と致しま

すが、要するに、疑を去るといふ事は信心の道を歩む第一の要件であります。

然らばこの疑を去る、といふ事のみ完全に得られたならば、それだけで宜しいかと思はれますが、決してさうでない、これは信仰上の消極的の一方面であります。即ち道を歩く上に譬へて云へば、つて轉ばない丈の要心であります、これ丈では、更に一步一歩前に進む事は出来ませぬ、必ず信仰上の積極的の方面を缺いてはなりません。世の中には『私は神の難有い事もよく承知して居ります、祈つて靈驗のある事も疑ひませぬ、何もかもよく存じて居ります』といふ人がある、それならば、その人が生々とした熱心な信心をして居るか、といふ事、さうではない。これは、疑はぬといふ消極的の信心は出来て居るが、その他の一方面が缺けて居る人なのであります。吾々はこれではならぬ。

そこで信仰の積極的の方面は何か、と申しますと、即ち日夜に歡喜、安心を得るといふ事であり、神を信じて喜び、神の御救を得て如何なる場合にも安心して我が務むべき事を着實に叮嚀に務めて行くといふ事がなくては眞の信心といふ事は出来ませぬ。

さて此歡喜、安心といふ事にも自ら消極、積極の二方面がある様に思はれます。彼のあきらめ

いふ事を世に申しますが、これは、例へば苦しい事が出来ても、それはそれ丈の運命であるから致方はない、不幸な事に遭遇しても、それは前世の約束事であるから止を得ぬ、何かの因縁であるから嘆くな、さういふので、心に思ひ切りよくあきらめて、喜び、心を安んじて行くのでありまして、或場合には、これも誠に大切な事であり、徒に嘆き、漫りに悲んで、それが爲めに一層不幸、苦難に陥るよりは優であります、併しながら如何な場合にも只あきらめよ、断念せよといふのは必ずしも好ましい事ではありません、若し何等かの道があつて、苦しい中にも、つらい中にも我が前途を開拓する事が出来るならば、その道を求めるに勝した事は有りませぬ。古の宗教には只このあきらめの一方のみを説き教へたものもありますが、之は即ち消極的の喜びと安心とを與へたものであります。前申す如く、或場合には、これも大切な事であるが、吾々としては苦しい中にも、不幸な中にも苦しいと思はず、不幸と思はず、その中に歡喜と安心とを求めつつ我一生を形作る様にご努力奮闘するといふ積極的方面が寧ろより多く人生に意義があると思ひます。我が教祖も、『我身が我自由にならぬものぞ』と教へ給ふた如く、固より人の能力には限りがあり、人の智慧には限りがあつて、一切の事、何でも自由自在に成し了せる事は出来ないでありませう、けれども我々は生

神金光大神の取次により、我が親神にお縋り申して行く事によつて、神の御力を得、神の御導のまゝに、普通の人の到底及び得ない廣く深い人生を成就する事が出来ます、人生の面白味はこゝにあり、我が道の信心の意義はこゝにある。しかしながら此積極的の歡喜、安心といふ事は、苦しいと思ひ、つらいと思ひつゝも我慢して、わざとらしく歡ばねばならぬから、さういふ風なのをいふのではない、これではやはり消極的のあきらめになる、眞の歡喜、安心とは、これが歡喜だ、これが安心だ、さういふ事を意識ぬ所に存するのであります。如何なる世の波風の中に處つても、神一心に取纏る心から、唯我を忘れて、難有うござります、日夜の我が仕事に怠る事のない様になれたならば、その中に自ら眞の歡喜も安心も之を得る事が出来るのであります。即ち我が教祖の『今月今日で一心に頼めおかけは和賀心』の教のまゝに日々を送るその中に自ら之を得る事が出来るのであります。この心持ちは或る場合には所謂あきらめに見られる時もありませうが、それは唯表れ方がよく似て居るさういふ丈で、その因て來る所の心持ちは違います。我を忘れて神一心に取纏る所には、所謂あきらめに見られる場合もあり、また眞に喜び勇んで奮進するさういふ場合もあるでありませう、が、歸する所は唯一つであります。

我が教祖の御一代は、一面から觀たならば教祖は如何にも思ひ斷りのよい、あきらめのよいお方であつたと思はれるが、更に他の一面には、『今天地の開ける音を聽いて眼を醒せ』この御言葉の如く、御力よく大天地をお動し遊ばされたお方でありました。この兩方面は教祖の別々の御心から表はれたのかさいへば決してさうではありませぬ、一切を擧げて天地の親神にお任せ遊ばされた唯一偉大なる御信仰の力によつて表れたのでありまして、之が本教信仰の積極的方面であります。

以上の如く本教信仰には二方面があるのでありまして、吾々はその何れをも偏廢してはなりませぬ、唯疑を去つた丈けでも歡喜、安心を得る事が出来なかつたならば、恰も泥濘に下駄が喰い入つて動かぬと同じであり、又全く疑の去らないのに、唯無暗に難有い空騒ぎをしたならば、それは泥濘に這つて轉ぶと同じ事でありますから、吾々は何卒、此二方面を適宜に得て、本教信仰の道を踏み過つ事のない様にして、人生の意義を、本教信仰の意義を充分に發揮する處迄到達致したいものであります。

(大正二年四月)

まごめ

珍しい御馳走を戴いた時に、マア美味かつたと思ふ。餘りに美味しいから、今一度戴いて見やうと思つて食べるに、今度は存外美味しくない。料理の仕方が違つたのだらう、材料が變つたのだらうと思ふけれども、決してさうではない。二度繰返して食べたことが、吾々をして同一物をも味が違ふやうに思はしめるのである。

芝居を觀た。餘りに面白いから、千秋樂にならぬ間に今一度觀て置きたいと思ふ。そして二度目に觀た時には、前の程興味を有たぬのが、常であるが、これでも、俳優の演り方が變つた譯ではなくして、やはり二度繰返へして觀たさいふこが、吾々をして然か感ぜしめるのである。

我が思ふ事を、筆を呵して書いて居る時には、全力を注いで居り、またよく書けたと思ひ、先人未發の意見を述べたと思ふて居るが、書き了つて讀み返して見るに、存外つまらぬこころであると、思はれ、二度三度繰返して讀むに、引裂きたく思はれ、泣きたく思はれ、如何してこんなこころを書

いたであらうかき、悔いるやうになる。人に話をするのもさうであつて、一番最初が本當のもので、それから後ののは、話は整うて来るが力がなくなる。

心に思ひ餘つて、如何かして思ひ、切めては斯うなりこもして、こ思ふ心の表れた刹那が——假令形は整はなくても、するこは下手であつても——即ち吾々の所謂まここであつて、繰返へす所に眞のまここはない。ないこ謂ひ得なければ薄らいで居る。畢竟は薪の念々に燃ゆるが如きさまをまここいふ。燃わて居る時が火は一番熱度が高い。炭火になつては夫れ程の力はない。次第に灰が多くなつて、終には火はなくなつて了ふ。「日々に改り」「念々に改る」「これが即ちまここであつて、此の如き生活を名けて眞の道といふ。

(大正六年七月)

二つ心の心配

昔から人間は心配の器であるこ申して居りますが、誠にその通りであります。人間以外の木や草や、禽や獸には心配いふものがある様には思はれません。心配があるこいふのが人間の特色でありまして、凡そ心配のないこいふ人は、馬鹿でなかつたならば聖者でありませう。

所謂心配いふものには二通りあります、その一つはその原因が外から来るものでありまして、他はその原因が我れ自身の心の作用の中に存するものであります。外から来る心配事申しますれば、例へば大風が吹くこか、霖雨が降り續いて洪水が出るこか、地震があるこか、早魃があるこか、いふ様な天災地變を始めこして、或は火事があるこか、疫病が流行するこか世の中が不景氣であるこか、いふ様な社會の出來事や、他人の爲めに傷けられるこか、苦められるこか、信用を害されるこか乃至は他人の爲めに苦心するこいふ様な人事上の出來事によつて、彼れ是れ心を苦めるのを申すのでありまして、内に起る心配事こは己が心の持ち方方の悪い爲め、心の用ひ方の足りなかつた爲

め、若くは心の怠りや油断から、或は疾しく思はれたり、苦しく思はれたり、不安の念に襲はれたりする場合は申すのでありまして、我が教祖の教に「要心せよ我心の鬼が我身をせめるぞ」とあるのが即ちそれでありまして。

この二通りの心配は何れも私共に取つて苦痛であります、人間の努力は、多く此等の心配を取除かうが爲めに費されつゝあるのですが、考へて見ますのに、外から来る心配の方は、成る程苦しい事も多くあるに違ひないが、何れか申しますと一時的のものが多く、外から来る方は、さう一生を通じて絶えず我が身を襲ひ来るといふ事もありますまい、時に困る事がある代りには、また時に愉快な事もあります、假令一生を通じて、さる苦みが襲ひ来ることも、人間の眞の價値には些の變動もない許りでなく、寧ろ吾々は之れによりて吾々の力量を増し、心を鍛練して眞の價値を磨く事が出来る、我が教祖が「やれ痛やさいふ心で難有今靈驗をいふ心になれよ」と教へられたのは即ちこれでありまして。

けれども内より起る心配は、元來、我が心の過ち、我が心の足りない所から起つたのでありまして容易に忘れようとして忘れる事は出来ません、且つ我が心の持ち方を直さなかつたならば心を責めて鬼は益々殖えるばかりでありますし、またこの苦しきは寢ても覺めて我が心を責めに責め抜いて更に慰める所はありません、その上この苦みが多ければ多くなる程人間そのものの價値といふものが耗つて行くのであります。

然るに世の中の人には兎角に外から起る心配事には深く心を注いで、何にかして之を免れたい之を避けたいと思ふのでありますが、内より起る心配には、さほご深く注意致しません、またよし起つて來ても努めて平氣を装ひたがるものでありますが、これは抑々内外輕重を轉倒して居るものではないか、誠に心すべき事でありまして。

之を世の信心する人に觀まして、神に祈る場合に何れに重きを置かか申しますと、所謂息災延命、家内安全、武運長久といふ方面が多くありまして、心の苦み、心の痛手の癒える様にいふ事は、それ程深く祈るものがない様に見えますが、斯の如きは、眞の信心といふ上から見て如何なものでありませう、吾人の眞の祈り、眞の願ひとしては、寧ろ外より來る苦痛は成るべく多からしめ給へ、内より起る苦は之を去らしめ給へ申すべきではありませんまいか、かくして内外より起る心配を次々に取除いて参りまして、遂には吾人の成し得る限りの人生の向上發達を計る事が、吾人の

信仰の第一義であり、そして神が人の心に心配ある様になさしめ給うた意義もここに存するに信ずるのでありまして、木や草や禽や獸に優つて居る點もまた此點に存するのであります。

吾人にとつて心配事のあるほき苦しい不幸な事はありませんが、かく觀じて來まするに、此不幸は寧ろ神の恩寵ではありませんまいか、人間眞の幸福一切の基礎ではありませんまいか。

(大正二年六月)

信仰的生活の特色

平常よりも非常の時

信仰の生活が、普通の人の生活と異なる點は平生にもあり非常な時にもある、我が教祖が「今月今日で一心に頼めおかけは和賀心にあり」を教へられ、「信心する人は何事にも眞心になれよ」を教へられ、「まめなごも、信心の油断をすな」を教へられ、また「何を喰ふにも飲むにも難有頂く心を忘れなよ」なき、教へ下された點は信仰の生活の平生の場合でも、普通の人の生活と異なるべきを教へ給うた一二の例であるが、しかし平生は信仰のない人でも、少しく物の道理を辨へて居る人には、或る點まで信仰の生活に變らぬ様なやり方をする人が少くない。従つて信仰生活の特色といふものは、平生何事も無い時には、割合に現れ難いものであるが、一旦何か事の起つた、即ち非常の場合になるに、その特色が最も明瞭に現はれるものである。固より信仰して居る人であるからこいうても、苦しい時や悲しい時には、いひ知れぬ涙も湧いて出るが、しかし、その中にも前途に對する希

望もあり、喜悅もあり、勇氣もある。普通の人には諦め兼ねる、不平で堪らぬ、さういふ様な場合に、思ひ切りよく諦める事も出来、別に不足もいはずに黙つて居る事が出来る。此點は普通の生活、信仰生活の最も著しく異なる所である。即ち我が教祖が「やれ痛やさいふ心で、難有今靈驗をさいふ心になれよ」を教へられたのは、この信仰的生活の特色を最もよく現はし、最もよく説かれた神訓である。

出来ぬ相談

併し、此神訓は一寸考へるに、教祖は吾々に對して出来ぬ事を求め、所謂出来ぬ相談をしてござるのではあるまいか、と思はれる。何故かさういふに、悲しい事に出遭うて悲しいと思ひ、つらい事に出會うてつらいと思ひ、苦しい事に出遭うて苦しいと思ふのは、これは人間の人間たる所以であつて、こんな時に、少しもつらいとも悲しいとも苦しいとも思はぬものがあつたならば、それは人間としては寧ろ缺けて居る處があるか狂人かでなくてはならぬ、と考へられる。先般、東京朝日新聞にこんな記事があつた。それは「珍無類の自殺」さういふ標題であつたが、静岡縣の何處さか

の者で、十九歳になる青年が、家計困難な所から狂氣して、終に村内の或る神社の境内で縊死を遂げた、所がその死に方が所謂珍無類である、如何かさういふ頭に稻穂を二本載せて、口に菜の葉を啣へて、それから左の足に灯籠を一個ぶら下けて死んで居た。その遺書が面白い、——というては氣の毒であるが「景氣が悪い世の中にて米が高くて咽喉に入れられぬ、菜つ葉位のものだ、持病の逆で苦勞するよりも足許の明るい中に」さうあつたさういふのである。まるで判じ物の様で、悲劇の記事ではあるけれども思はず吹き出した。人の死程痛切なものはないが、彼れは殆ど戯れの如くに心得て死んで了つたのである。斯んな事は普通では出来ない、思へば涙の出る可哀な話であるが、餘程離業である。先づこんな具合に、氣でも狂つて居なくては、痛いさういふ時に難有いなさういふ心にはなれるものでない、さういふ様に思はれるのが普通であるが、しかし此神訓は信仰的生活の難有い點、妙味のある點をお示し下されてあるのであるから、共に充分味ふべきである。

外か内か

さて世上萬般の事物の美しいさか醜いさか、綺麗なさか汚いさか、楽しいさか苦しいさか、喜ば

しいか悲しいか、難儀なにか愉快なにかいふ様な事は、我が目前に現はれて来る事柄さか、出遭はす場合さか、即ち我が心以外のものにその區別がある様に思はれるものである、例へばこれこれの場合には悲しいさか、喜ばしいさか、これくの事柄は美しいさか醜いさかいふ相場が、ちやんま外物に最初から定まつて居る様に思はれるが、實際考へて見るに中々さうでない、或人は櫻の花の陽気な風情を見てさへ、母の死を思ひ出して泣いた、さいふ事である、吾々が汚いと思ふ下肥も百姓衆は手で握んで撒く、その手で煙草も喫んだり食器も持つ、別に汚いとも思つて居ない様である。旅行をしても、面白い旅は遠くても近く思はれ疲れも出ぬが、厭な處へ行くのは近くても遠く思はれ、また疲れも實際に里数よりは多く覺ゆる、これが事實である。

奉公人根性

世間によく奉公人根性さいふ事をいふが、主人に召使はれて居ても心の据ゑ所が悪い、主人の命する事は、何んでも彼でも難い事や、無理な事ばかりださいふ様に考へてぶつくさ云つたり、主人が眼を光らせて居るに、一生懸命に働き振りをするけれども、主人の眼が一寸でも離れる

直様自分勝手な事をする、これが奉公人根性さいふものである。それから學生根性さいふものがあるが、先生が教へる事が、無暗に多いさか、休みが少いさか、何日でも時間通りに教場へ出て来るさかいつて不平をいふ、偶然に思はぬ休みの時間でもあるさ、さも鬼の首でも取つた様に喜ぶ、こんなのが學生根性さいふのである。これ等は極くよくない事であるが、全體心の据ゑ所が間違つて居るからで、一旦思ひ正して見るに、主人が難しい事を命するの、辛い事をさせるのも自分の將來の爲めである。獨立した時の眞の力量ある人間にして遣うこの考へである、他の爲めではない、自分自身の爲めであるさ考へれば、難かしい事ならば難しい事程一番うまく遣つて見やうさいふ心の働みが出て働けるものである。學校で先生から學科を、授かるのもその通りで自分の爲めだと思へば、一時間の休みでも惜しい、時間内には一事でも多く學びたいさいふ心になれる。

間髪を容れず

こんな工合に我が心の持方によつては、同一事柄に當り、同一場合に處しても、全然で別物になつて了ふ、これが世上實際の事實である、少しの心の据ゑ所、思ひ方によつて、斯く別世界に移る

の思がするのであつて、その心の据ゑ所、思ひ方の相違は實に間髪を容れない程微妙なものである。我が教祖が「やれ痛やこいふ心で難有今靈驗をこいふ心になれよ」と諭し給ふのも、信仰生活上の、この微妙な點を示し給うたものである。

吾々が心から鍊り出す

斯くの如く世上の事物は、それ自身固から相場が定まつて居るものではない、買手によつては如何様にも變るものであつて、ごんごあてにならぬ。普通の人の生活は、どちらか三謂へば、外の物それ自身に夫々ちやんご相場が定まつて居る様に思ひ易いのであるが、信仰の生活をするものは、神の教により、神の御意に従ひ、我が心の開けかた、悟り得る程度に應じて、一應その相場を吟味して、それでこれならば間違ひないに信じた所で、相場を定めて買取る様にするのであつて、吾々が常に教を聴き、御理解を承り、神の御前に拜禮するのも、皆この相場を一應吟味する丈の眼識を高める爲めである。教祖が「信心は話を聞くだけが能でない、吾心からも鍊り出すがよい」と御理解下されたるは、この事ではあるまいか。

例へば病氣に罹つた場合にも、普通の人は病氣には、苦しいさか、心配さか、行先如何しやう、さかいふ様な相場が、既に定まつて居るものと思つて、その儘買つて歸つて苦んだり、心配したり、取越苦勞をするのであるが、信仰の生活をするものは、その相場で、卒かには買ひ取らぬ、教祖の御教によつて、兼ねてから眼鏡を高くして居るから、その程度に應じて、或る人はめぐりを除つて下される爲めさかいふ相場をつけ、或人は、お氣注けの爲めさか或人はこれによつて世の中の難有味を知らせて下されるさか、或人は修行さか、相場をつけて難有いと思ふ事が出来、また或は教祖が、片岡次郎四郎先生月參の砌、甚しい腹痛に罹つて、或は這ひ或は仆れつ、漸くにして靈地に參拜された時に「神信心をしてお告を得て參詣して居るのに此腹痛は何事ぞと思ふぢやらうけれさか、吾が家に居て、此程痛かつたら家内中心配するけれさか、旅で痛むのは、其身一人の難儀で濟まうが、これも神の御蔭ぞ」と教へ給うた如くに心に悟らして貰ふ事が出来て、難有し、苦しき中にも勇氣を起し先を樂み待つ事も出来る。

心が神に向ふ

以上は只病氣に罹つた一つの場合であるけれども、世の中の大事、小事、幸、不幸、其他如何なる事に出遇うても、神の教により、神の御意に従つて我が心を常に神に向けて居れば、以前は低い所にしか眼がつかなくかつたものが、次第に一段一段高い處に眼がついて、以前心配した事も、苦しんだ事も、悲んだ事も、後には同じ場合にあつても、そんな心持は消へ去つて、眞に喜ぶ事が出来るであらう。これが信仰生活の特色であり難有味であると思ふ。

然るに吾々は動もすれば、神に向ふ心が外れて、病氣の方に向いたり、不幸な出来事に向いたり、つらい事、悲しい事にのみ向いて了うから、信心して居りながら、何故こんな事になるのであらうといふ様な、不平や愚痴や我身を果敢なみ叩つ様な事にもなる。こんな心持に對して教祖は「これ程信心するのに、さうしてかういふ事が出来るであらうかと思へば、信心はもう止つて居る」を宣告遊ばされた、それは神に心が向はずして、外の方にのみ向いて了ふからである。

信仰生活の進路は只一筋

かゝる嘆聲の出る場合も、一度心の向け處を移して見るに、謂ふに謂ふ事の出来ない生氣が心に

躍動する、かくの如くにして、吾々は如何なる困難にも、如何なる不幸にも、如何なる誘惑にも打ち勝ちつゝ、只一筋に我が天壽の限り、神の氏子としての業務に勵んで、他を顧みず、更に究極する所を知らない、これが即ち教祖の求め給ふ信仰的生活であつて、亦吾々の日夜に現實に力めつゝある信仰的生活である。

(大正二年十二月)

水と波

木の根、岩の蔭から湧いて出た水が、涇なり、小川なり、大川になつて、最終に海に入る有様は、宛ら人の一生に譬ふべきであります。水の流る、様を見るに、或は岩に激して玉に散り、或は漚へて淵なり、或は瀧なり、或は瀬なり、千態萬様殆んど窮まる所を知らません。かくの如く、水は時により、場合によつて、種々の波を立て、様々の流れ方になります。しかしながら、水の流れその物は、地から湧き出でた初から、海に注ぐまで、脈々として絶える事はありません。單にその流れ方、波の立ち様のみを見て居るに、その時その場合につれて色々に變つて、應接に違がないのでありますが、一度水の流れその物に心を注いで見ますと、終始一貫で、少しも變る所はありません。

之を人の生活の上に見ましても、吾々は生れて死に至るまで種々様々の境遇を経る、之を一日に見、之れを一月に見、之を一年に見、之を一生に見る、或時には嬉しい事に出遭ふ事もあり、或時

には悲しい目に遭ふ事もあり、或時には幸福を得て喜ぶ事もあり、或時には不幸に泣く事もあり、順境に處する事もあり、逆境に處する事もあり、親に別れる事もあり、子に先立たれる事もあり、夫を亡ひ妻を喪ふ事もあり、兄弟互に離散の悲境に出遭ふ事もあります。これ等嬉しい事や悲しい事が互に相連続して、一日なり、一月なり、一年なり一生なるのでありますが、然しながら、是等連続した出来事そのものが我が一生であるかといへば決してさうでない、これ等は恰も水の上に取り伏して居る、波の如きものであります。波が水の流れそのものでないが如く、浮き伏し繁き世の中の出来事の底に、脈々として絶わぬ吾々の生命が流れて居ります、この生命は吾々が生れてから、死するに至るまで、流れ流れて殆んど盡きる事はありません。

人の務めの大切な事は、その日その日に起つて来る嬉しい悲しいいろいろの出来に應接して、その處その處の處置をつけて行く事も固より大切であります。單にそれのみに囚はれずして、それ等出来事の底に流る、我が生命に絶えず力を與へ、之を強くし、之を豊にし、而も之を絶えず引き延ばして、假令我が身體の壽命は盡きることも無限に力あり、働きあらしめる様に務める事が、最も肝要でありまして、只表面の波にのみ心を奪はれて、その底に流る、水の存する事を知らないで

はなりませぬ。

吾等の日夜の仰信は何が爲めに吾々に取つて大切なのであるか。或る人は日々に起り来る出来事に對して、その時その時の神の御恵を蒙つて、成るべく無事平穩に世の中を通り抜けて行くべき爲に信心は大切であるを考へて居る。斯かる場合に助けて頂くといふ事も固より信心の目的の重要な一であつて人生に喜悲交々對つて、我れを惱ます事のある限り、是等の事も大切であります。只此の點のみで信心の能事終れり考へて居たのでは、眞に正鵠を得た人といふ事は出来ない。世俗には或はさる事を能事として居る信心の道があるかも知らぬが、我が教祖生神金光大神の道は、決してさる淺薄な事を教へ給ふのではない。既に四神様も「目前目前のおかけでは末の安心が出来ない」を戒め給うた如く、吾々の信仰の大願は目前目前の事よりも、我が生命の確立、永生といふ點に存する。

私共が少年時代に、よく親から用事を吩咐けられて使にやらされて途中彼れ是れ道草を喰つた爲め、向ふの家へ辿り着いた時には、全く用件を忘れて、全體何を爲に來たのかといふ事に分らぬ様な事で叱られたのを覚えて居りますが、吾々の信心の上にも、得て斯かる事が出来る。吾々は吾が

教祖によつて一生涯の行き着く先きの用件を命ぜられたのであるが、その途中に浮き伏しする種々の出来事の爲めに道草のみ多く喰つて、行き着いた先で、何しにこゝ迄來たのか分らぬといふ様な事では信心する効はない。道草を喰ふの日に暮らす事を信心し心得て居るが故に、聊かな事に出遭つても、直に「信心して居ても、こんな事になる」といふ様な嘆聲を發し、大切な信心に疑を發し、迷ひを生じて、終には之を壞り損つてしまふのであります。

私の知つて居る或る婦人の信者は曾つてその夫を卒かに亡うた、相當な生活はして居られる方でありましたが、子供は多く居られる、而も杖も柱も頼むべき夫に別れたのであります、大抵な人であれば、前の様な嘆聲を發すると共に信心を中廢したのでありませう、然るに彼の婦人は決してさうでない、或る時私に對して、涙ながらに次の如くに物語られました、「私はお廣前の先生から、まめなにも信心の油断をすなよと兼々御懇切に御教導を賜はり、御訓誡を頂いて居りましたが、今度の出来事によつて、先生が何故平生から斯の如き御教を下されてあつたかを知る事が出来、且つ常々の先生の御教によりて、眞に私の信仰力の試験をする時が參りました、此上は夫の遺志を継ぎ、十分には行かなくても、他人に後指をさゝれない丈けに子供等を育て、且つは亡き夫に安心

して頂き、且つは先生の日頃の深い御恩に對して御禮を申し上げたいと決心して居ります」とあつた。その後着々その言葉を實行されて今日に至つて居られる。私は彼の御婦人が、その信仰力によつて、夫の急病を救うて、そして無事なるを得られたといふよりも、信仰力それ自身の上から考へて、それ以上に貴い或るものが存して居るに信するのでありまして、信仰の大切な點はこゝにあります。彼れは信仰の力によつて、或は一時絶えるかとも思はれたる生命の力を、一旦のその出來事によつて、以前より、より強く、より豊かに、より廣くされたことを誠に喜ばしく思ふのであります。

また此の間或る信者の方でその最愛の娘を喪はれた方がある、その時非常な苦痛を覺はられた様でありました、併しながら、その方の信仰の力は、よく元氣を恢復し、且つ信仰上の危機を脱せられた、而して「私は此度の事に出遭うて、私は我が道の信仰は命の有らん限り捨てる事を得ぬ、死して後始めて止めるべき貴い道である事を悟りました」と言うて居られるのであります、誠に美しい心ではありませんか。

吾々の心情から謂うたならば、希くは一生を無事に過したい何時も面白く可笑しく暮らしたい。けれども斯の如きは、この世の中の有様がこれを容さない、天地の状態が之れを許さない。若し水に心があるとしたならば、岩もなく、淵もなく、瀬もなく、風もなく、平穩に流りたいと希ふでありませう、けれどもこれは自然の地勢が之れを許さぬと同じ事であります。固より事あるに従つて神に救ひを求めて平穩に日々を暮らしたいと願ふのは悪い事でもなく、また『金光大神の道は無常の風が時を嫌ふぞ』とも教へられてあり、また實際にこの事實は吾々の自らも経験し、他からも見聞する事である。更に我が教祖が、この御理解を下されたのは、一は彼の佛家が、徒らに厭世の思想を鼓吹し、遁世の風を助長せしめるのを戒め給ふたのもあらうと思はれるのでありまして、天地の心より觀ますれば、人が無常を觀する場合も決して無常でなくして、却つて神の御心の儘に行はれて居る事となり、若しくは神の廣大なる御恵も思ふ事さへもある、神の御心に從ひ、天地の道理に従つて我が道を求め、我が生命を強くし深くし廣くし豊かにし、かくて安心の境に入るのが我が教祖の教の宗旨であります。之れを悟り得ずして、眼前の事に迷ひ、一時の事に疑ひ、我が恩愛の私情に囚はれて貴き信仰に動搖を生じ、破滅を來さしめるが如きは、眞を得たる人といふ事は出来ません。我が道の信仰は『信心に連が要れば死ぬるにも連が要らうが』と御理解下されてある程、

わが生命そのものに痛切であり、必要であるものであります。夫が亡くなつたから、子女がなくなつたから、親がなくなつたから、財寶を失つたから、災難に遭つたから、不幸に遭つたから、若くは我が肉體の命を失つたからして、彼れ是れ動搖する様では眞に信仰して居るものといふ事は出来な
い、「死際にもお願せよ」三教へられる程痛切な信仰である。然るにかゝる出来事の爲めに信心がふ
らつく様なものは、それは夫の爲め、妻の爲め、親の爲め、子の爲め、財寶のため、災難の爲めにす
る信仰で、我が眞の生命の爲め、連の要らぬ信仰でなく、連の要る、死ぬるにも連が要るといふ底
の信仰であります。正鵠を得たものではありません。

今茲に年のはじめに當りまして、先づ吾々の心に浮ぶのは、今年一年の間、果して吾々は如何な
る處を通り、如何なる境遇に出遭ふであらうかといふ事であり、今日迄お互に色々の場合を通
つて来た如く、恐らく今年一年もそれと同様に色々の場合を通らねばならぬ事でありませう。しか
しながら、一年といへば、これから程遠く思はれ、一生といへば更に程遠い感があり、自ら不安に
堪へない様な心も起るのであります。一年といふも今日一日の外はない、今日一日の信心の成就
は馳がて今年一年の信心も我が一生の信心も成就し得る事になる。「日に日に生きるが信心なり」

あるが如く、日々の出来事に、徒らに心を奪はれ、信心を囚はれて、日々道草を喰ふ事のみに日を
暮す事のない様にして、神の御心、神の教を心に體して、迷はず疑はず、今日一日の信心を成就し
一日の神の御徳に我が眞生命を養うて、之れを無窮に傳へるべきを日々の念願としなければなりま
せぬ。

記し終れる時、偶々、會てその母を失ひたる甥より、更にその父を亡ひたるを報じ來りぬ。彼れ
未だ信を得ずして迷へり、希くはこの悲運に會ひて新に神の道を得て父母の亡靈を安んぜよ、と
祈る事切なり。風なく寒月すまじき一月十日の夜。
(大正三年一月)

心にうつるもの

五一八

氣力と徳力

ある教會所の先生が、ある時に「わたくしも以前は元氣もありましたから、相應におかけもいたしましたが、このごろのやうに、からだが変わるくて、元氣がなくなつては、もうだめであります」
と述懐されたことがありました。それにたいして、わたくしは、氣力の、つよい、よわいの差によつて、いたゞけたり、いたゞけなかつたりするものは、果して眞實のものであるか、さうか。いはゆる元氣のあるなしによつて、廣前が、さかんであつたり、おころへたりするといふのは、はたして眞實の布教といへるか、さうか。からだの、つよい、よわい、によつて信心ができたり、できなかつたりするといふのは、はたして眞實の信心といへるか、さうか。わたくしごも我執といふものは、元氣であればあるだけ、からだは、たつしやであればあるだけ、それだけつよく、はたらくのが常であります。これに反して、元氣がおころへたり、からだに、やまひでもある場合には、そ

れだけ、よわくなるのが常であります。「あの人も、をしをひろつたせい、か、我がをれた」といはいはれ、「なんぼ我慢つよい人でも、やまひには勝てぬ」といはれるのが、わたくしごも常であります。からだは、おころへるにつれて、我が、しだいにされるのであるか、されなくても、その力を、たくましくするの餘地がないのか、とにかく我執は、元氣の強弱に正比例するものが、おほくの場合であります。したがつて、わたくしは、自分自身にも、病氣であるときのほうが心に、なにもなくおちつきが得られるやうにおもはれて、くるしいなかに、ありがたさを、おほえるのが常であり、ひこの病氣の場合にも、たつしやなときの、その人よりも、よけいに、たふとい光がさしてをるのを感じるのが常であります。そして、このころもちは、なくなられた人にたいする場合に、もつともつよく感じます。「眞に神さまになられた」とたふごの念をさめるときに、できぬのが常であります。なんごいつても、わたくしごも凡夫は、いきてをるあひだは、あくはこれぬ。死のきよめによつて、はじめて一切のあくもぬけて、ほんごうに、きよいものになれるのであるといふ感じが、わたくしあたまをさるときはありませぬ。それなれば、わたくしは、死をねがふかといふご、さうでなく、死を讚美しつゝ、しかも死にたくないであります。

五一九

元氣のさかななきは、廣前が、さかんであつた、こいはれた述懐は、それは、取次ぎするかたの、我の力によつて、いはゆる、「さかなな」、こいふ一時の現象があらはれたのでありませう。「さかなな」こいふこゝばにも、いろいろのいみがあつて、決して一樣ではありませぬ。眞實の徳の力によつて、廣前のひれいがあらはれる場合には、たゞへ取次ぎの先生は病氣でねてをられても、よほよほの老人でも、すこしも關係はない。ないばかりでなく、さうであれば、あるほゞ、一層ひれいは、いちじるしくあらはれるべきでありませう。賃を取つてする仕事は、若い時には頼んでも呉れるが、年を取つては頼んで呉れぬ。信心は、年が寄る程、位がつくものぢや。信心をすれば、一年一年難有うなつて来る」こゝある御理解は、この點をしめされたおこゝばであるやうにおもはれます。

以上のやうな感じから、みぎの述懐をされた教會長にたいして、わたくしは、K先生やM先生のことを、例にしておはなしをしたこゝがありました。

神社と「お廣前」

「先生はをられなくても、神さまはござる」こいふやうな半可通なこゝをいふ人が、さこの廣前にも、一人や二人はあるものであります。これはお廣前のお取次ぎする人自身の、おこたりを、いひわけする文句になつたり、お取次ぎする人を、排斥する場合の口實になつたりするこゝばであります。が、これほゞ、おほきなまちがひはありません。

『神の廣前は世界中である』こゝあるこゝほり、神さまは、世界のすみすみまで、みちみちておはしますのでありますから、『先生はをられなくても、神さまはござる』こいふのは、決してまちがひではありませんが、しかしながら、先生がをられずして、たゞ神さまのみおはしますのは、それは神社でありまして、さやうなかんがへをもつた先生の奉仕されてあるお廣前や、さやうな、かんがへをもつた信者のまるつて来るお廣前は、かたちはお廣前であつても、決して、わが道のまこゝのお廣前こいふこゝはできません。お廣前が、神社や佛堂のやうなものになるか、もしくは、ほんごうのお廣前になるかこいふさかひめは、そこに金光大神の、てがはりたる、お取次ぎの人が、をられるか、をられぬか、こいふ一事によつて、わかれるのであります。このてんにおいて、わが道の、かづおほくのお廣前の、いく割が神社になり、いく割が眞のお廣前になつてをるでありませうか。

『神さまはいふから』といふことが、先生その人の眞實の謙遜にで、ある場合は、これも、ごよりべつのごいふでありまして、金光大神も『わざわざ遠方まで、かうしてまゐつて來られなくても、神さまは、さきにもござるから』と参拜の徒に、つねに、おほせられたごいふごいふであります。この、へりくだつたおことばのなかには、神さまのおはしますところ、氏子のをるところに、金光大神のお取次ぎが、つねにゆきわたつてをるところを、意味してをるのであります。なかなかありがたいおことばを、いはねばなりません。

わたくしは、取次ぎ金光大神をぬきにした、神さまそのものが、さういふおかたであるか、わかりませぬ。これは、わたくしのいたづらな、へりくだりの心や、てらふ心からいふのではありませぬ。ほんごうに、神そのものは、わたくしにはわかりませぬ。わかつてをりませぬ。また、あはて知りたごも、見たいごもおもひませぬ。たゞ金光大神が、神さまは、かやうかやうなお方である、これこれのお方であるご、をしへてくださったごを、そのごほりであるご、信じてうたがふ心さへなければ、それ以上、それ以外のごは、なにもいりようはないごおもうてをります。事實、金光大神は『此方がおかけを受けて居るごを、話にして聞かせるのぞ』とおほせられたごご、みづ

から體驗なされたのでありますから、金光大神を信じたてまつるごよりほかに、わたくしにおいては、なにもものもないのであります。この、わたくしの信念から、わが道のお廣前は、神社であつてはならぬといふのであり、お廣前の神社化を、ふかく心にいましめるのであります。

い ひ わ け

わたくしの心は、つねに、わたくしにむかつて、いひわけをすな、すなほであれ、ごあるひはさゝやき、あるひはごなります。しかし、わたくしの剛情なごころもちは、たえず、いひわけをしたがつたり、ものに反抗しやうごいたしてをります。

よほごまへに、道正さんから拜借してをりました「大愚良寛」を、このあひだ汽車のなかで、よみかけましたが、そのなかに、良寛が、備中玉島の圓通寺の國仙和尚の會下に、ひたすら修行してをられたごころが、しるされてあるそが中に、左のごほりの一挿話がありました。

又或時、或村落に、晝盜忍び入りたるに、村吏は必ず彼の乞食坊主の所爲ならんご、之れを捕へて訊問すれごも、何等の答をなさず、村吏は必定彼ならんご想像に任せ、土坑を掘りて彼を生埋

になさんす、その時一豪農彼を憐み、彼れ何等の答をなさざりしは凡人にあらず、近頃聞く所によれば圓通寺に一雲水ありて、頗ぶる凡俗の姿をなして而かも内心は悟道に通じ、此の地方に來ることもあり云ふ、若し彼れに非ずや告ぐる所あり、仍て再び尋問せしところ、果して彼にして且曰く一旦疑を受けたる上は、何程辯解するも、そは申譯に過ぎず、是れも前世の罪業の然らしむる所と諦め、如何なる罪苦を受くも苦しからず、之れ敢て彼是に申譯をなさざる所以なり。是に於て村吏つひに己が非を謝して放免したりきといふ。

わたくしは、おほむす襟をたゞしました。

(大正八年七月)

「人の悪い事」

我が教祖は、御理解第七十七節に於て、「人の悪い事をよう言ふものがある、そこに若し居つたら、成る丈け逃げよ。蔭で人を助けよ」と宣うて、徒らに人を譏謗罵詈するこのの、甚だ僻事なるをお誡め下された。

人の陰口をきき、人を悪し様に罵ることは、我が教祖の常に最も厳しくお誡め遊ばされたもの、一であつて、或る時も、教祖の御前に集つて居た人々の中に、心なく他宗の事を、口汚く罵り合つて居るのをお聞きなされて、「釋迦でも孔子でも、皆天地金乃神の氏子ぞ。よう考へて見よ、親が子供を持つて居て、一人は僧侶になる、一人は醫者になる、一人は神職になつて居る、それを醫者はいけぬ、神職はいけぬ、僧侶はいけぬ、こいはれて親が喜ぶか。他人の事を悪く云ふは、此方の氣感に叶はぬぞ」とお誡め遊ばされたといふことである。如何に難有い御理解のある時でも、そこに

居合はす人の中で、只一人でも、他人の事を悪し様に云ひ、悪し様に思ふものがあるに、その御理解が、はたし止んで、教祖はさり氣ない體にて脇の方をお向きなされたといふことである。されば我が教祖の教訓中には、人のこの點をお誠め遊ばされたものは甚だ多い。前掲の御理解を首めして、『我信する神ばかり尊て餘の神を侮る事なかれ』『我身が大事か人の身が大事か、人も我身も皆人』『天地金乃神は宗旨嫌をせぬ』といふが如き、數々の御教を下されてある。

二

他のことを悪し様にいふのには、種々の場合があるが、その場合を今少くも五通りに考へることが出来る。

即ち、その一は我々の習癖から、その二は何か爲めにする所から、その三は誤解から、その四は立場を異にする所から、その五は我々の無自覺から、この五通りである。

三

私共には、他を悪し様に言ひ囃し、陰口をきくことに何となく興味を感じるやうな習癖を有つて居る。我が損にも得にもならぬ、縁も因由もない他人のことにでも、つい人の尻馬に乗つたり合槌を打つて、面白がつて喜ぶのであります。人による口をきけば、他の悪いことしかいへぬやうな人もある。人の悪いことを言ふに事を缺いて、自家の嫁の陰口や、姑の非行を、近處隣りに觸れ廻つて、わざと家庭の秘事を世間へ廣告するやうなことがある。それで悪いことは思はずして、却つて心持が晴々したといふ位に考へるやうな不心得なことをさへある。

次には何か自分に利害關係があつて、爲めにしやうとする所から、些細なことにでも、それを捉へ擧げて、聲を大きくして、その人の世間の信用を失はせたり、立場を危くさせたり、仲違ひをさせたり、強迫して利慾を貪つたり、或は實際には無いことを捏造して、その人の名譽を毀損したり、世間の疑惑を起させたり、勢力を殺いだりするやうなことがあるが、これ等は最も憎むべきことである。

次には、何かの誤解から來るこことがある。世の中に、この誤解はさ悲むべきことはない。始めは互に信じて居たものが、一旦の誤解によつて、互に相反目し、互に相敵視し、互に相傷け相損ひ合

ふやうな悲惨事が、世にはいくらもある。昔し、ある人が我が子を寺に小僧に遣はしたが、或る時この子が生家へ逃げ歸つて、和尚が餘りにひきいこみを言ふから、もう再び山へは登らぬ親に告げた所から、親はその理由を尋ねた。子供のいふには、この間も和尚さんの頭を剃つて居た所が、大變に叱られて、もう頭は剃らせぬといはれた。それからこの間も雪隠へ入つた所が、また以後は雪隠へ入るなと云つて叱られた。それから臺所で味噌をすつて居るに、また味噌をするなと云つて叱られたといふものであるから、親も、それは誠に理不盡な話ぢや、一つ和尚さんに談判しやうと腹を立てながら、寺へ行つて詰つて見るに、和尚の曰ふには、いやそれは大變な間違ひである。何時も頭をよく剃るのに、此間は居睡をして、これ御覽の通り、私の頭を疵だらけにし居つた、それ故もう剃らせぬと云つたことである。雪隠の件も、この間は奥の客用の便所へ入つたから、そこへは入るなと厳しく戒めたことであり、味噌も客に出す分を摺つて居るから、それは摺るなと戒めたまでだ、と辯明されて、親は却つて恐縮して下山したといふ話がある。世の中にはこれに類する誤解から、他を徒らに罵るやうな場合が少くない。

四

次には立脚地を異にする所から、吾々には随分他を惡し様に思うたり、口にしたたりすることがある。或は主義の相違といひ或は利害が相反して居るといひ、或は時代を異にして居るといひ、或は事情を別にして居るといふやうなことから、善いことも悪く見えたり、悪いことも善く見たり、醜いものが美しく思へたり、美しいものが醜く思へたり、何でもないことが意味あり氣に感ぜられたりするものである。同じ物でも側面から見ると、正面から見るとでは形が違ふものゝやうに思へる。彼の天龍川は我が國に於ける急流の一に數へられて、中流は危石急湍相迫つて天下觀の奇勝とされて居るが、東海道線の鐵橋の架つて居る下流を見ても、諏訪湖からの落口の邊を見ても何等變哲もない俗の俗たるものである。上流や下流を見て、天龍川はつまらぬと云つても人は承知するものでない。徳川家康は古今の英雄であつたが、或る人は東照神君と云つて稱へるし或る人は狸爺であると云つて貶す。之を貶すものは陽に秀頼に力を添ゆるやうに見せ掛けて、陰にその勢力を殺ぐ事に力めて僅かな事をいひ立て、赤子の腕を捻り上げるやうなことをして天下を押領した。陽に皇室を尊重し、之を守護し奉るに云つて、二條城を築いたり、所司代を置いたりしたが、實は京都を監視して、己が勢力を擅にしたと論ずるし、之を稱へるものは、秀吉死後の豊臣氏は

強弩の末であつて、到底天下を統一するの力はなかつた。家康が之に代るやうになつたのも且つは自然の數であり、且つは家康の聲望によつたので、更に言議を挿むの餘地はない。更に皇室に對し奉つての態度の如きも應仁の亂以來、式微を極め給うた皇室を、あれまでに守護し奉り、扶翼し奉つたのは決して容易の事でない、況んや文教を盛んにするの基を開いて、漸次明治維新の素地を作るやうにしたのは、没すべからざる彼の功績であるといふであらう。立場を異にして他を觀る時には、之に類するものが少くない。従つて人を惡し様に思ふやうなこのある場合には、充分にその時と地と位とを考察する必要がある。

五

次には、自分に自覺する所がないが故に、他を惡くいふ、これが吾々には最も多いのである。假令その人に罪惡があり、缺點があつても、之を罵り貶めるのは、自分は善いといふことを豫の勘定に入れて居るからであります。身に罪惡を犯して、國法に問はれ、獄裡に呻吟して居るものを見ては、吾々は躊躇することなしに、彼は惡人であり、罪人であるに罵る。成程、惡人であり、罪人で

あるに相違ない。而も汝に彼を惡人と呼び罪人を罵り得る資格ありや、ミ反問された時に、果して吾々は猶豫なしに「然り」ミ答へ得るや否や。彼等「罪人」は身に罪を犯して、亦た身に裸拽の痛苦を受けて居る。既に報いられて居るのであつて、寧ろその罪は軽い。然るに吾々は如何、身には彼等のやうな罪を犯して居ないかも知れぬが「人を殺す云ふが心で殺すのが重い罪ぢや」ミ教祖の誠め給へる如く、心に殺人罪を犯しては居ないか、心に強盜を働いては居ないか、心に姦通罪を犯しては居ないか、心に名譽損傷の罪を犯しては居ないか、心に詐欺の罪を犯しては居ないか。而も尙彼等を惡人と呼び罪人を罵る資格があるであらうか。心に罪を犯しながら、免れて咎なしと思つて居るだけ、それだけ吾々の罪は彼等に比べて、重く且つ大きい。口の先きで謝まつて置けばそれで宜しいと思ふだけ、それだけ圖々しい、太い罪人である。

吾々は世に生れてから以來、餘りに相對の觀念に慣されて、常に自分はわらいが、彼はわらくない。自分は富んで居るが、彼は貧乏である。自分は貴いが、彼は賤しい。自分は賢いが、彼は愚かである。自分は美しいが、彼は醜い。自分は善いが、彼は悪い。ミいふやうな、極めて浮いた標準によつて出來上つて居る觀念に囚はれて、始終中輕薄な生活を營んで居る。吾々に他を惡し様に思

ひ、悪し様に罵るやうな善くない點があるのは、一にこの浮薄な生活が生み出すのである。

六

以上の如く、吾々が「人の悪い事をよう云ふ」には種々の場合があるが、その中に於て特に吾々の心せねばならぬのは後の三つの場合であると思ふ。

誤解は、多くは互ひの意志の疏通を缺く所から来る。互ひに顔を合せて心の裡を語り合つて見れば、大抵な誤解は氷釋するものである。我が佐藤先生の最近に詠まれた歌に

打ちよりにて語り語れば自から誠の通ふ道のたふさる

とあります。これは私の聞き覚えであるから、言葉に誤りがあるかも知れぬが、意味は正にこの通りであつて、誠に貴い教である。

互ひの間に誤解のある場合に、その中に介在つて、双方の心持ちを近着けしめ、相融會せしめやうとする、第三者を要めるこゝがあるが、その中に立つ人の如何によつては、誠に都合の好いこゝもあるが、また却つて誤解に誤解を累ねしめるやうな結果に導かれるこゝもある。「打ちよりにて語り」

こゝが何よりも肝要である。

立脚地を異にする場合にも、吾々は、假りにその地を代へ、その時を代へ、その位を代へて考へて見るこゝが大切であつて、然かすれば、その事の理非善悪は自ら明かになつて、徒らに罵り譏るこゝもなく、誠に止むを得ぬこゝであつたであらう、さういふ同情の念も起る。理解は即ちこの場合の謂である。杜甫は彼の齊の管仲と鮑叔の互に相理解し相許し得たこゝを稱へて「君不見管鮑貧時交」を歌つて居る。管仲が未だ貧乏であつた時に鮑叔と共に商ひをして居たが、いつも鮑叔を誤間かして自分ばかり利益を占めた、鮑叔は彼は貧乏であるから、その筈のこゝだといつて腹も立てずに親密に交つて居た。また或時には管仲が人々を喧嘩をして負けて歸つて来たので、人々はその意氣地のないのを嘲つたが、鮑叔一人のみは、彼には老母がある故、わざと負けたのである。誠に尤ものこゝであるといつて少しも怪まなかつた。されば鮑叔の死んだ時、管仲は「我を生みし者は父母、我を知りたる者は鮑子」といつて嘆じたといふこゝである。管鮑の交を、後の朋友の道の標本の如くにいひ嘯すのは、誠に故あるこゝである。前述徳川家康に對する兩様の批評の如きでも、東照神君を稱へるにも理由のあるこゝであり、狸爺を罵るにも、その理由がない譯ではないが、要

は、彼の時代に、彼の地位に立つて見て果して如何か、さういふその人の心持になつて見るこゝが肝要であつて、そこに必ず理解し得る道のあるこゝを思ふ。

無自覺なる罵言は、吾々の更に最も憤むべきこゝであつて、吾々は如何なる場合に於ても、打對ふ人よりは自分は一段劣つて居るものであるさういふ心得を以て、人に對して行きたい。他よりもえらく見られたい、他より善いものに思はれたい、他よりも賢く思はれたい、と思ふ俗念が絶えぬ所から、人の悪事を見ては罵り卑しむ、之を侮り之を輕んずる。而も我が心は何んもなく不安であり、空虚であり、不満足である。人を傷け自分を損うて、自他共に何等の得る所がない。我が教祖は人間は身代が出来たり、先生云はれるやうになるこゝ、頭を下ける事を忘れる。神信心して、身に徳がつく程屈んで通れ」と教へ下されてあるが、これはたゞ普通に所謂謙遜さういふこゝについてのこゝだけではあるまいと思ふ、深く自分の内省自察に基く眞實の謙遜の道を教へ給うたものと思ふ。我が教祖は、御身に危害を加へやうとし、名譽を毀損しやうとするものある毎に、彼等を咎め謝め給ふよりも、必ず先づ御親らに立反つて、「私が不徳故であります」にて神に詫言ひ給うたこゝ承はりますが、吾々はこの種のお話を承つても、教祖は誠に大度量なお方で、如何なる者をもよく包容ら

れたのである、さだけに解し易いのであるが教祖の御心事は、それ以上に、打ち對うものよりも、御自身を一段劣つたもの、罪深きものこの御自覺があらせられたが故に、對手をお責め遊ばすよりも、先づ御親らを御責め遊ばされたのであります。それ故教祖の神にあつては、かゝる堪へ難き場合にも、些の怒もなく懼れもなく、屈辱も感ぜられず、不安も覺わられず、只神に詫言ひ給ふこゝによつて、感謝と安心と悦びと満足とを感ぜられ、これによつて他も救はれ、親らも徳に進み給うたのであつて、誠に貴い極みである。

かゝる眞實なる謙遜の地に住して居るこゝ、他の惡は、我れの一層深い罪の自覺によつて、之を認めるの眼を失つて、單だ人の善きこゝのみを認めるこゝが出来るやうになる。この貴い心に住して居れば、他を惡し様にいひたがる自分の習癖も自ら亡くなるであらうし、況んや我が利を計る爲めに、他を譏誣中傷するやうな僻事も消えてしまふであらう。

七

他の悪い事を云ふな、この我が教祖の御誠は、以上の如く色々の點に於て、難有い御教へである。さうか之を實際の上を守らせて戴いて、眞實の生活を營ませて貰ひたい。

(大正六年五月)

信仰の事務化、商賣化、交際化

五三六

信仰は、之を與へんとするものに取つても、また、之を求めんとするものに取つても、日に日に生き、念々に燃ゆる精氣がなくてはならぬ。譬へば、薪の盛んに燃ゆつゝある時に於て、その火力最も強く、燃殻となり、死灰となるに従つて、火力は漸次衰微、そして體がて消ゆ失せて了ふが如く、神の手代りとして、取次ぎの御業に參與するものが、一念、助けさせて戴きたいと、念々に祈りて止む所なきに於て、その生命は存續し、活躍するのである。氏子として、信仰を得んとするものに於ても、また、一念、助けて戴きたいと、念々に祈り求めて止る所を知らぬ所に、その生命は始めて持續せられるのである。

信仰の火の、漸次死灰に導かれやうとする過程に於て、私どもは、その事務化、商賣化、交際化の三つの状態を考察して、共に、信仰の道にあるもの、戒めとしてゆきたいと思ふ。

二

所謂、事務とは、一定の法則により、一定の規範により、一定の手續きによつて、いろいろの複雑した事件を處理して行くの謂ひであつて、幾多の事件が、一定の要件を具備して居るものは、定められたる手續により、定められたる規則によつて、容易に取扱はれ、處理せられるのであつて、更に凝滞し猶豫し遲疑する所はない。所謂、商賣とは、己が物質上の或る利得の打算を基本として、有無を交換し、社會の需要を充し、他の缺乏に供給するの或る営みを謂ふのであつて、始めから自分の利得を打算して居り、物質上の利益を度外に置き、或は期せずして、自然に得られる利益は、別に之を拒まぬけれども、始めから、これを目的として居るのでない、こいふやうな行爲は、こゝにいふ商賣でない。所謂、交際は、即ち、つきあひであつて、何事をなすにも、他人を目標にし、他人を標準にして、決して獨自の考量に出ないこゝを意味して居る。假令、利のあるこゝでも、損のゆくこゝでも、又、自ら喜んでするにしても厭々ながらするにしても、一に、他人の上を考量し、他人に相ひ應じて行動するこゝが私どもの交際である。

即ち、事務は、常に一定の規則、一定の要件といふものを豫想して居り、商賣は、常に己が物質上の利益といふものを豫想して居り、交際は、常に他人といふことを豫想して居る。私はここに解釋するのである。

三

以上の解釋から、信仰上のいろいろの事實を、私共は彼是批判することが出来る。信仰上の一切の事實は、もともと人間の信仰心、止むに止まれぬ要求に發現したものに外ならぬのであるが、それが次第に概念を形作り、或る形式を取り、或る行動を取り、或る教義や信仰箇條を形作つて来る。そこには、勢ひ、一定の規則や、手續のやうなものが作られることになる。懺悔をすれば罪が容される。念佛を稱へれば、極樂往生が出来る。聖地を踏めば、神の靈徳に浴することが出来る。食事をするには禮拜をする必要を要する。曰く、斯くすれば、斯くなる。曰く、斯くするには、斯くすることを要する。曰く何、曰く何、いろいろな事實や形式が、實際に存在して居る。これ等は何れも鬱勃たる信仰心、磅礴たる欣求の心の現れでないものはないのであるが、それが布教者

しても、恰も行政官の如く、一定の要件に適つて居るものは救はれる。事もなく定めて了ひ、信仰者も一定の要件を具備して居るが故に、自分は救はれるの資格がある。こいふやうな心もちになる時に於て、それ等は信仰を以て、一の事務化して了つたものである。金光大神、迷信打破の御叫びは、この信仰の事務化を警醒させ給うたに外ならぬ。斯くて發現した本教は、所謂、門前の虎は追つたが、今日までの形式を形作つて来た本教は、新たに自ら後門の狼を生んでは居ないであらうか。教會所は、神の廣前であるこいひ、教師は神の前立金光大神の手代り、氏子の取次であるこいふ。更に氏子は一心に神に頼めばよい。信仰に形の上の修行は要らぬ真心一つで救はれる、こいひ做すこいが、そのまゝ後門の狼になつて居りはせぬか。これ私どもの深く考慮し反省し慎戒すべき點である。

昔、基督の教會では贖罪券を發賣した。基督教改革の運動は、これを憤慨したのが導火線になつた。南無阿彌陀佛の名號を賣り、神符守札を賣ることは今日も神社佛堂に營まれて居る。また、それを求め購うて置けば、罪は容され、淨土へは參られ、病氣災難は救はれると信ずる。これ等は何れも信仰を商賣化したものである。「寄進勸化をさせて、氏子を痛めては神は喜ばぬぞ」お供

物ごおかけは附物ではないぞ』世には神を賣つて食ふ者が多いが、此方は錢金では拜まぬ、神を商法にしてはならぬぞ』なき、金光大神は戒め給うたが、本教の布教者にして、前述の如き露骨な方法を執るものはないにしても、我が衣食の資を得やうがために、教會を開かうとし、生活の保障を得て、その務めに怠るやうな心もちを有たぬものが、果して幾人あるであらうか。また一時の苦みを逃れ、眼前の利得を本として信心の皮を被つて居るものが、さればさであらうか。此の如きは、また以て本教の信仰を商賣化するものと謂つてよい。

更に、金光大神は、『信者に不同の扱ひをすな。物を餘計に持つて来るミ、それを大切にすなやうな事ではならぬ。信心の篤いのが眞の信者ぢや』人に誘われて、仕様事なしの信心は附焼及の信心ぢや。附焼及の信心は、取れ易いぞ。さうぞ其身から打込んで、眞の信心をせよ』と且つ誠め且つ諭し給うたが、前の御理解は、信仰を以て交際化せんとする教師を戒め給うたものであり、後の御理解は、信仰を以て交際化せんとする信者を諭し給うたものである。これ等の御理解によつて暗示されて居るやうな態度が、現在の本教の教師といはれ、信者といはれるものに、無いといふことが出来るであらうか。

教師と信者とは、互に『仲善うす』るこそが大切であるが、教師は信者の顔によつて、顔色を變へたり、聲を異にしたり、頭を下げる角度が違ひはせぬか。信者も、先生に叱られるから、褒められるから、先生があつたやうにまで言はれるからといふので、道の御用に立たうとする心もちに差等が生じたり、表面の行動を異にするやうなことはないか。若し、さる事實があるミすれば、これまた信仰を交際化するものといふべきである。

四

私どもの信仰は、月を経るまゝに、年を累ねるまゝに、潑刺たる當初の生氣が、その外形が整ひ、教養を會得し、概念が定つて来る程度に應じて、漸次に衰減し萎靡し、終には枯渴し易い。金光大神は、之に對して、常に私どもに、信仰の注射を行ひ、外殻を除き、激勵し、鞭撻し給ふのであつて、『日に日に生きるが信心なり』『信心は日々改り第一ぢや』『今日今日で一心に頼めおかけは和賀心にあり』とあるのが、即ちこれである。

金光大神は、天地の道の悠遠にして無窮なるを『天地の事は人の眼を以て知りて知り難きものぞ』

「宜うたが、それと同時に、人間の道も悠遠にして無窮である。従つて金光大神の達徳を以てして、なほ『生きて居る間は修行中ぢや』と仰せられて、人のこの無限の道を求めて須臾も止み給はなかつた。この道を求めることは、私にも自身に取つての一大事であつて、他に對する交際でもなく、一時の利益を得るが如き、淺薄なものでもなく、また念々に燃ゆる祈りであり、願ひであらねばならぬ。かくてこそ念々に其の信心は實現され行くのであつて、道の取次の聖職に任ずるものは、この私共の眞要求に着目し、更に一層眞實の道を前に舉示してこれを導き、常に眞實の道を求めて止まぬ、またそれを求めしめるやうに導いて下さるべきである。かくてこそ信心は日に日に生き行くのである。

(大正七年四月)

静と動

誠に陳腐な譬喩であるが、世の中は水の流れの様なものである、忽ち湛へて淵となり、忽ち流れて瀬となるのが水の流れの常であるが、世の中の有様も、亦斯の如く、或る時は静かであるかと思ふに、或る時は騒しい。動靜定めなきが世態の常である。

誰とても静かな世を好んで、騒しい世を厭はぬものはない、これが人情である。併し老人は一般に靜的な世の中を希ひ、青年は一般に動的な世の中を欲する傾がある。東洋人は概して前者の傾向があるが、西洋人は概して後者の傾向がある。老子が「隣國相望み、雞狗の聲相聞ゆるも、民老死に至る迄相往來せざらしめん」といつたは、前者の代表であり、ヘラクライトスが「矛盾争鬪は一切の父なり」といつたは、後者の代表であらう。

靜なのを欲するこいふも事情により、騒しいのを厭ふこいふも場合による。平安朝時代は靜かであつた。江戸時代も靜かであつた。けれども前者は全體が事勿れ主義で包まれ、臭い物に蓋がされ

てあつた、後者にも亦そんな傾向は無論あつたが、何處かに健全な分子がチラ／＼して居たやうである。さればこそ前者は鎌倉以後の暗黒時代を胚胎し、後者は明治の文明時代を胚胎した。源平時代は騒しかつた、幕末時代も騒しかつた。けれども前者は不健全な分子に充ちて居た。反之、後者は健全な分子に充ちて居た。さればこそ前者は鎌倉以後の暗黒時代を胚胎し、後者は明治の文明時代を胚胎した。吾々は不健全にして静なのは好まぬ。騒がしくても寧ろ健全なのを尙ぶ。

本教は平和圓滿主義である、なぞ云つて、誇りとして居る様であるが、寧ろ世間に事勿れ主義ではなからうか、平和圓滿を尙ぶのは誠に結構であるが、事勿れ、事勿れで、臭い物に蓋をしたがる傾きはないか、若し然らば一種の墮落である。騒しいのは好まぬが、誠の籠つた騒ぎ方は是非もあつて欲しい。さもなくては本教は平和の墮落を來す。此點に於て本教青年は一大覺醒を必要とする。聊か時事に感ずる所があつて此言を爲す。諒之。

(大正二年二月)

電車の中にて

或る日、S町に赴くために、M停留場から電車に乗つた。電車は、かなりこんで居た。やつこのこで入口のミところを這入るミ、隣りに二重廻しを着た 五十格好の、餘り人相の立派でないのが乗つて居た、吊革を捉へて、隣りに立つたばかりの私にも、この人はいやにぎくしやくした人間だ、ミいふ豫感を得た。次の停留場を動き出すときに、電車が、ごんミ一揺れ揺れたので、立つて居る乗客の身體は何れも一寸さよめいた。さうするミ、隣りの二重廻しの横斜めに對ひ向つて、立つて居た、これも五十の坂を少し登つて居る様に思はれる、印纏天を着た男が、

「そんなに押さない」

ミ二重廻しに詰つた。二重廻しの男は、

「電車が揺れたのだから仕方がない。衝つたら御免なさい」

ミ一應は辯解したが、印纏天が、

「いやにぶつかつて来るぢやないか」

ご抗議を申込んだので、二重廻しの男も黙つては居ない。

「いやにぶつかつたつて、電車が揺れたのだから、仕方がないよ。だから謝つて居るぢやないか。一體お前さんは、私の乗つた時から氣に喰はねえ人なんだ。いやに私の顔をじろじろ睨めてばかり居るぢやないか。」

ご電車に乗り込んだ、そもその時のここからを、捲したて、逆襲した。

「冗談いひなさんな、みんな同じ賃金を拂つて、乗つてる電車だ、誰が乗つたからつたつて、厭な顔をする譯がねえぢやねわか。二重廻しを着て居たつて、纏天着のものは、押してもかまわぬごいふ法があるか。」

ご防禦したが、

「だから謝つてるぢやないか」

と二重廻しは、ごごまでも、かさにかゝる。

「印纏天を着てつたつてな、お前さんたちに馬鹿にされてたまるものか。馬鹿にするない。」

ご、これも負けては居らぬ。

やがて次の乗換場所に来て、電車が留つたので、この喧嘩は、未解決のままで、何にか、棄寮詞を残して印纏天が先づ降りて行つた。二重廻しも、續いて膨つ面を車外へ運んだ。

隣りで、聞くごもなしに聞いて居た私の耳には、「だから、謝つて居るではないか」ご辯解した言葉が残つて居た。そして、おもしろい人等だといふ感じが残つて居た。そして、「だから謝つて居るではないか」ごいふ言葉は、それが眞實の謝罪にはなつて居らぬ。口の上では謝つて居ても、心の眞底から、悪いごごをした、すまぬごごをした、ごいふ心のないのを裏書きして居るのだ、ご思うた。

「だから、謝つて居るではないか」ごいふごころもちは、「謝罪」を以つて、自分の罪過に對する、豫定の行動、若しくは約束ごと、若しくは定つた儀式だ。従つて「謝罪」をしてしまへば、「謝罪」が當然である如く、それに對して「宥す」のが當然だ、ごいふやうな、いろいろの形式的な考が籠つて居る。

これに類する誤つた考は、「謝罪」ごいふごごばかりでなくして、自分は「善行」をしたご思ふ場合、自分は「犠牲」的な行動を執つて居るご思ふ場合、自分のした行爲は「誠意」であると思ふ場合、なごが即ちそれである。

善いことをして居る、誠意を以て盡して居る、まことに手を下して、或る行爲に取
りかゝる場合にのみ、思ひ得る心もちであつて、所謂、最善の道を執る態度であるが、既に
後から、それを省みた時に、尙ほ、自分は「善行」をした、「誠意」を行つたと思ふのは、大きな誤
りである。曾子が「吾れ日に三たび吾身を省みる」。人の爲めにはかつて、忠ならざるかと言つて居
る心もちを、吾々は考へ、そして學ぶべきではないか。既に行つた後から省みては、最善の道を執
つて行つたことも、善ではなかつた、誠意ではなかつた。少くも不充分であつた足りなかつた。
ミ自ら責める所に、人の眞實があるのではないか。

自分は「犠牲」的な行爲をして居る、他の犠牲になつて居るに意識して居るのは、眞實の犠牲的
態度ではない。それは他の奴隸になり了つて居るものである。他のことも、これを自分のこと、し
て、つらいこともつらいと思はず、苦しいことも苦しいと思はずして、心をつくす。これが即ち眞
實の「犠牲」的行爲である。總じて、善い事をした、と思ふ所に善はなく、誠を盡した、と思ふ所
に誠はなく、犠牲になつて居る、と思ふ所に犠牲的な貴い何物もない。なき思つて居る間に、電車
は、いつかS町に着いて居た。

(大正七年四月)

神と攝理と祈念

起り易き疑問

明治天皇陛下に崩御されました事は、内外共に恐懼痛嘆措かざる所であつて、御發病以來、一
日も速に御平癒あらせられる様に、我が信ずる神佛に誓請を籠めつゝあつた國民は、一度崩御ミ
承つて且つ嘆き且つ悲んで、世に神も佛も坐さぬか浩嘆した、かく嘆きの叫を放つた國民の多
くは、落膽之餘、思はず知らず口を突いて出た言葉に過ぎないと思ふ、一時の嘆聲ミしたならば必
ずしも深く咎むるに足りない、しかし乍ら一時の嘆聲にせよ、かゝる言葉が出るのは、それだけ信
念の薄弱であり、信仰的修養の不足である事を證する譯である、況んや事實ミ信念の矛盾の解決に
苦んだ遁辭であつたり、氣休めの爲めの口實であつたならば、これはお互に考へても見、また間違
つて居る點を正す事が大切である。この種の疑は抑々今回の凶變に際してのみではない、日頃から
神の愛さぬ事を、自分の望みの通りの事は何でも叶へて下さる、まゝいふ事にのみ了解して居る人

に取つては、我が生活の上に、時に、不幸に遭ひ逆境に立ち、病氣に苦みつ、而も我が願ふ通にならぬ場合——少くも己が豫期に反する事がある場合には、餘程信仰の確かな見られる人でも動もすれば、この種の疑問は起り易い。

疑問を其の儘に捨て置くな

この度の大凶變に遭遇して、右の如き疑問が諸方に起つた、こいふ事をひごく氣にして、これが爲めに一宗一教の信仰に動搖が起りはせぬかこ心配する人があるが、これは餘程心配性の人に見ゆる、吾々は此に反して寧ろ樂觀的である、何故なれば信心の向上しつゝある人に取つては一大試験であるし、向上の見込なき者に對しては、肩をはねる節であるし、教へて導き進み得る人に對しては教導上好個の機會であると思ふからである。神も佛もない奇麗に見切を付け了ふ人に對しては今更にも言はなくてよい、只心中に疑ひ迷つて解決に苦んで居る人に對して望むのは、その起つた疑問をその儘に差置かずに、宜しく疑網を斷絶して如何にか前途の活路を拓く可きである、かくてこそ『悪い事をいうて待つなよ先を樂しめ』の神訓の如く、世事一切が修行の手段となり、社

會各般の事相が我が理想に達すべき階梯と見て、そこに奮闘の英氣を養つて、我が行先に望をかけた歡喜躍進すべき眞の本教徒といふ事が出来るではないか、以下神、攝理、祈念の三つに就いて平生信する所を述べて本教徒諸君の吐正を仰ぎ、共々に這般の道を辿りたいと思ふ、これをお話するについては色々實例等を擧げたいけれども、今はその暇を持たぬから、只愚見の梗概のみを述べる事とする、若しこれが多少とも諸君の参考にもなる様な事があらば、それは望外の幸である。

吾等の神

世間の人が、神も佛もない、こいふが、その神は果して如何なるお方であるか、各信する所を異にして居るから一言にいふ事は出来ないが、時に存在する様に思はれたり、時に無い様に思はれる様では、その觀念は確かであらうとも思はれぬ。吾等の信する神は如何なる方であらせられるか、これについて我が教祖は『神は我本體の大祖ぞ信心は親に孝行するもおなじ事、我子の可愛さを知りて神の氏子を守りくださる事を悟れよ』と教へ給ふた如く、神は我等の親神で在らせられる、吾等はその親神の恵によつて生れ、恵によつて活き、恵の中に死する。吾等は神の氏子である。この

神は我が親、我は神の子、これが本教信仰の根本義である、親にして我が子の可愛くないものはない、これは身の貧富、貴賤、學無學に拘はらぬ、親は如何なる境遇にあつても、我が子に幸あれど祈らぬものはない、如何なる身分にあつても、我が子の行末を思はぬものはない、また子供が如何に親不幸であつても、親の思を思ひこしなくても、尙憎いと思ふものはない、これが親心の難有さである、親こそ在す天地の神が吾々を愛で慈しみ下さる御心も、この親心から推し度つて、その宏大無邊な事を悟るべきである。神が果して親心を以て吾々を恵んで下さる以上は、決して吾々の行末凶き様には遊ばさるぬ、吾々は假令一時は苦しく、悲しく、不幸であると思はれぬ様な事に遭遇つても、神の御心に變らせ給ふ所がないならば、吾々は怨まず、嘆かず、悲まず、屈託せずして、宜しく『先を樂み』安んじて己が務むべき事に怠る事のない様にしなければならぬ、これが神に對する吾々氏子の誠である。一時の我が思ひに任せぬから、我が願が成就しないからとて、直ぐ様神に怨をかけたり、在すと思つた神が無い様に思はれたりするのは、神を道具扱ひにするものか、或は神を商賣人扱ひにするものか、或は深く神を親に信賴む事の出来ない人でなければならぬ。若し親に信じつ、然う思ふ人ならば、極めて水臭い親子の間柄といはねばならぬ。無始以來、無窮に亘つ

て死せざる天地の神、我が生みの親も嘗ならぬ天地の神に縋る吾々は、世の常の人の考へて居る様な薄弱な觀念を有つて居つてはならぬ事と思ふ。

神の攝理とは何ぞ

私は本教徒の所謂みかけこいふ言葉を攝理といふ文字で現はしたい、所謂靈驗といふ文字には一種の狭い意義が着き纏うて居る様に思はれる、しかし文字は假物で靈驗でも攝理でも、何れでも宜しい、只神が吾等を行末かけて愛し給ふ御心より現はれる靈能、こいふ事を意味させる爲めに暫くこの文字を使ひたいと思ふに過ぎない、この文字にも一種の臭味があるこいふならば實は何方でもよいのである。

世間に普通靈驗として了解して居る所は、多くは吾等の病を癒されたとか、見えぬ眼が見える様になつたとか、立たぬ腰が立つたとか、不幸が轉じて幸福になつたとか、厄難を免れたとか、いふ、單に一時的な、形體の上にある、こいふ見ゆる、我が一時の願望が成就したとかいふ様な所に止つて居る様である、是の如き場合も、確かに神の攝理の現れであるには相違ない、本教徒の多くの所謂

みかけこいふのも、大抵はかういふ意味の様に思はれるが、しかし吾々が今日迄貧少な見聞ではあるが、目にし耳にした靈驗談の中には普通の場合、餘程色合の變つた事もある、一時は自分の思ひ通り、望み通りにならないといつて、神を怨み、我が身を託ち、來し方、行末を考へて悶え悲んで見たが、さて後々になつて考へて見るに、彼れも神の攝理であつた、此も神の御恵であつたと思ひ當る様な事に出遭つた例が甚だ少くない。

我が思ふ様に、我が願ひ通りにして頂きたいと思ふのは人の情である、病を苦しいと嘆き、瀕死の人を助けたいと思ひ、災難を免れたいと思ふのは人の心のまことである、しかしながらそれ等の思ひの中には、單に我が淺基な小智慧で考へ、狭い了見から觀た點もあらう、天地の道理に副はぬ様な事柄もあらう、神の大愛より現はれた事柄に氣注かぬ點もあるであらう。然るに只一途に我が思ひを貫かうと思ひ、貫かぬ場合には嫌味を言つたり、やけを起したり、暴れ出して見たり泣き叫んで見たりといふ様では、親の眞の意を覺り得ぬだ、ツ子撰ぶ所はない、眞に親心を汲み、親の思を會得して親の心に任せるこいふ、親思ひの子の沙汰は見えない。我が思ふ様にして下される中にも、我が思ふ様にして下されぬ中にも眞に我が爲めを思つて下される親の情が籠つて居るを考

へて、何時もお慕ひ申すのが眞に親孝行な子供の行爲である。「小袖會我」の謡曲に五郎時致が母の勸當を嘆いて「打たれても親の杖、なつかしければ去りやらす」とあるは孝子の眞情である。我が教祖が「信心は親に孝行するも同じ事」と訓へられたのは、是處の事であるを信する。

之を要するに神の攝理の眞意義は末々の繁昌といふ一事に約する事が出来る。我が願ひ通にして下される場合も、更に我が願ひ通にして下されぬ場合にも、神は常に吾々の末々の繁昌の爲めに御心をおかけ下されてある、こいふ事が即ち神の攝理の眞意義であるを信する。これを主觀的に、無形的に觀たならば生死を超越した吾々の永生であるし、客觀的に有形的に見たならば、我が子孫、我が着手した事業の繁昌である。金光四神様は「眼前の靈驗では末々の安心は得られぬ」と御理解下された。「日増り、月増り、年増り、代増りの靈驗」といふ事も屢々聞かせて頂くお言葉である、神訓にも「眞心の道を迷はず失はず末の末まで教へ傳へよ」とも「いたたくは神徳を積つて長生をせよ」とも「悪い事をいうて待つなよ先を樂しめ」とも教へられた。更に明治六年八月十九日の神傳の中には

今般天地の神より生神金光大神を差向け、願ふ氏子におかけを授け、理解申して聞かせ、末々まで

この一節を拜するに承る。この有形にも無形にも未々の繁昌を遂げさせて下さる、これが即ち眞の神の靈驗であつて、私はこれを神の攝理の意義を考へるのである。

吾等の祈念は如何あるべき

以上神を攝理に就いて大略お話しした所によつて、吾々は神に如何なる心を以て祈るべきか、こいふ事は自ら明白であらうと思ふのであるが、要は、善惡共にその結果、成行きは神の御心に任せ、我が小さな智慧や、一時の都合の爲めに是非かくかくして下され、むりやりに思ひを貫かうこいふ考を捨て去り、吾が後々の凶しき様には逆ばさらぬ神の大愛の御手に縋り、吾が來し方行末をも見徹し給ふ神の大智の御胸に飛込んで、一切の我情我慾を持たぬこいふ所に吾等の祈念の要義は存する。

勿論、苦しい時に助けて下され願ひ、つらい、悲しい時に慰めを求め、人の死を見て救ふて下され祈るのは、前にも申した如く人の自然に發する至情であるが、一面に於て、如上の心掛けを

忘れてはならぬ事と思ふ。これは、各自互に實際の工夫を要する事と思ふ。教祖が片岡次郎四郎師に下された御理解にも、

凡て神の徳を十分に受けやうと思へば儘よこいふ心を出さねば御蔭は受られん、儘よこは何んなら、死だら儘よのこごぞ

こは這箇の工夫を示し給ふたものではないか。

結

論

以上三つの事項に就て私の信する所の大略をお話して來たが神に對する觀念が充分確であれば、攝理の意義も、祈念の心持ちも自ら了解し得られる事であるし、攝理の意義が明ならば亦神に對する觀念も確になり、祈る心も自ら了解し得られる。また祈る心に間違がなければ、神に對する觀念も攝理の意義も亦自ら明白になるであらう。神は親なり、吾は神の氏子なりこの觀念は返す返すも本教信仰の根本義である。

讀者諸君は、先帝陛下御發病を承つて、その御平癒の程を我が親神に祈られた事と信する、申

すも長き事ながら吾々の祈を神は聞き給はざりしが爲めに陛下は崩御坐したのであらうか、國民一同の願ひを神も佛も聞き給はなかつたのであるか、決してさうでない。成る程吾々の願つた所に反して陛下は崩御坐したが、吾々が陛下を神に仰ぎ、親と慕ひ奉つて誠意を捧げて神に祈つた、その吾々の誠は神も必ずや享け給うて、假令陛下は猝かに崩御遊ばされても、天地の在らん限り尊き神さまして、我が國家を守り賜ふであらう、また、新に立ち給ふた今上陛下は聖壽萬々歳にわたらせ給ひ、皇室は愈々御榮え遊ばされ、國家は益々發展進歩するであらう、これ即ち吾々の祈念に對する親神の下し賜ふ靈驗ではないか。吾々は今回の大凶變に際してのみならず、朝夕、皇室の御繁榮に國家の前途を誠意を捧げて怠らず祈念し奉るべきである、それと共に我が日夜の生活の上に種々の喜びや悲みに遭遇ふ様な場合にも、信仰の根本義を辨へて、俄に疑ひ迷ふ事なく行先を樂んで、我が理想に向つて邁進すべく、この際特に信念を固む可きではないか。

(大正元年九月)

月朧ろなる夜に

私はこの間、或る教會所で、最近に夫を失はれた一婦人に、お目にかゝつて、お悔みを述べました時に、その婦人の靜かに物語られたのは、夫は亡くなるに先ちまして、私に對つて、自分等は故郷を出て、この東京に来て、これ云ふ事もなし得なかつたが、さる代りに、百萬圓の財産にも代へるここの出来ぬ、貴い信心の道に入ることが出来たのは、何よりも難有いことであつて、上京の本懐これに過ぎぬ、自分は今死ぬるにも、何の悔ゆる所もない、お前もさうか何時までも、この信心を失つてくれるなと申し聞かせまして、安らかに呼吸を引取るまで、神の御名を唱へつゝ、難有い有難いこと云ひ暮しました、この事でありました。

何といふ健氣な雄々しい堅固な御信心であります。此の御夫婦が、故山を辭せられるに當つては、必ずや一生に一事を成し遂げて、所謂、故郷に錦を飾ろうと決心の躋を固めての御上京であつたであります。而も一人のお子もなく、甚だ失禮なる申し分ではありますが、さしたる事をも成し

送けられず、未ださしたる財をも積まるゝこゝが出来なかつたこゝは、凡俗の心からは誠に不幸なこゝであつて、その上中途にして、異郷に不歸の客なられたこゝは、眞に堪え得られぬ痛恨事である。而も唯一信心を得て、之を現當二世の無上の光榮とし、無上の至寶とし、無上の幸福として、歡喜勇躍の中に、此の世を去られたこゝを思ふて、私は偉大なる教訓を受け、深甚なる感慨に打たれたのであります。

人は明日を計るこゝの出来ぬ身の上であります。今、私の身の上に、死の一大事が迫つたこゝして、私には、それだけの感激と感謝とはあり得ないのであります。身はこれ名前の上だけでも、信心の道に入り、教師の席を辱めて居るものであります。その煩に堪へられぬやうな、卑陋にして下劣極まる妄念雜慾に支配されて居ります。何といふ淺ましい身の上であらうかと思ひ、この眞面目なる教祖の教子の、貴き臨終の告白に對して、心の底より慚愧の情に堪へぬ次第であります。信は『飛び込む』の謂であります。『飛び込む』こゝが出来てこそ信心は得られる、汚い心は持ちながら、醜い形は有しながら、只一途に神の教、神の大愛の懷ろに飛び込み得てこそ救はれるのであります。妄念雜慾に絆されて、飛び込まんとして飛び込み得ず、而も「信心して居る」が故

に、彼の所謂「悪人」のなす如く、徹底的にその慾を飽滿せしめるこゝを怖れて居ります。何といふ意氣地のない偽善なやぐざ者であります。

そして、かくいふこゝが、既に眞實本氣でいふて居るのでなくして、申して居るこゝが心の中で遊んで居るのであります。私は右述べたお方に對して、甚だ愧かしく思ひ、甚だ羨ましく思ひ、そしてその氣高い死に、神によつて得られた永生に對して、滿腔の敬意を表するものであります。

(大正六年四月)

三つの悩み

五六二

一
人の身に心配の絶えぬいふことは、既にこの世に生れて来た時からの約束であつて、そこに人生の悩みもあり、また人生の貴さも存して居るのであります。この絶えざる人の悩みの中に於て、健康に對する不安、心生活に對する不安、生計に對する不安、これ人生に於ける三つの大なる悩みであります。

二

「明日あり」思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものは「古人も詠んで居りますが、人は常に不知不識の間に、自分には明日がある、明後日がある、乃至十年二十年五十年があると思つて居ります。これは一面から考へて見るに吾々の生活上に意義のあることであつて、物事に徐ろに計劃を立

て、落着いて着手し、成り行きを楽しんで待つことの出来るのは、皆この思ひがあるからであります。が、他面から考へて見るに、人間の不眞面目になり、疎懶になり、懈怠が出来、油断が起るのも、またこれが爲めであります。明日ありと思ふ思はぬは、人の勝手であります。が、實際に我が身の上を考へたならば、眞に明日が如何なるか、更に知ることは出来ませぬ。先頃の新聞にも入營すべき壯丁を載せた臨時列車が、青森に向ふ途中に於て列車の衝突によつて、夥しき死傷者を出すやうな悲惨事があつたといふことでもあります。出發つものは、國家の干城となつて、君國に報い奉らうといふことを楽しみにし、見送るものも無事にお國の爲めに盡せよと祝し合つたてでありませう。何人か、數時間の後に、斯かる惨事が起ると思つたてでありませう。その或る死者の父は、「せめて兵士になつてから死なせたかつた、」と悲痛の涙を絞つたといふことでもあります。誠にお氣の毒に堪へぬ次第であります。これは東北地方の出來事であるが、明日をも知らぬ身の上であるといふことには、吾々も異りはありませぬ。

かく明日をも知らぬ人の身でありながら、吾々には親あり子あり、妻あり夫あり、國家あり社會があつて、皆それづくに對して輕るからぬ務めを有つて居ります。我が身は明日をも知らぬ身であ

るが、これ等の務めには明日までいふ限りはない、永遠の關係であります。病気で身體が動かねば致方はない、死に行くものは是非もない、さうして済まされる事のみであれば、さして心を痛めることもありませんが、済まさうにも済まされぬ、諦めやうにも諦められぬ事が少くない。國家、社會に對する務めは暫く別しても、直接我が一家の事は如何するか。幼き兒を残して、老いたる親に先づて、頼りなき妻を後にして、煩ひ多き夫を置いて、死に行くにも死に行くことは出来ぬ。この一大事に遭うては、只だ助けて下されと祈るより外はありません。

三

明日をもしらぬ身でありながら、漠然と明日もあるだらう、と考へて居るに同じく、我が心に懐き、我が身に行ふことについての善惡の判断も、亦常に漠然と考へて居るのが吾々の現状であります。漠然ながらも善惡の判断がつけば、まだしも善いのでありますが、屢々悪いことをして何とも思はずに過したり或は善惡を顛倒して、それを楽しんで居ることが少くありません。

會て或る大賊が、巧みに警察の目を免れて居たが、遂に運盡きて捕縛せられた時に「やれ〜これで安心した〜」とつくづく述懐したといふことではありますが、彼は何時かは来るべき刑罰を懼れて、片時でも不安の念を禁じ得なかつたのでありませうが、吾々の、人目には見ぬ心に犯し、人知れず身に犯した罪は、人は咎めず、法は罰せずとも、聽ては「我心の鬼」に責められる時が來、重きめぐりに身を亡し家を滅す時が來るでありませう。尊き神の教に醒めた我が心の良能は、恰も今まで暗かつた室内を鋭い光線で照すが如く、隅々まで微塵も遺さず照破するであります。我が教祖は「人を殺すといふが、心で殺すのが重い罪ぢや」と誠め給うた。身に刃を帯び、手に銃を携へて殺人の大罪を犯すよりも、無形の心に無形に人を殺すのが一層重い罪であること御教へ下されました。積極的に、人に盡す誠意の足りない、といふことはまだしも、消極的に吾々は日々幾何の人を無形に殺しつゝ、あるであります。神の教に一度醒めた人の心の悩みは、眞に堪へ難きものがあります。漠然して居た昔の状が幸福か、醒た後の悩みが不幸か。結核菌は、一秒一分毎に身體を腐蝕しつゝあつても吾々には氣注かぬのが常であります。支那人は阿片を禁ぜられて以來、之に代ふるにモルヒネを注射して樂みつゝあるといふことあります。氣の注いた時には既に死んで居るのであります。神の教に醒めた人の目には、我が思ふこと、我が爲すこと、悉くが悩みの種であり不安

の基であり、片時の間も安らかな思ひはありません。恐ろしき我が身の行末を思はゞ、假令神より罰を與てるぞと仰せられても、それを畏れて逡巡うて居ることは出来ませぬ。取り殺すぞと責められても、それを怖れて逃げ隠れして居ることは出来ませぬ。假令、如何ならうとも、神の御前に、單にお容し下されとお縋り申しお詫び申すより外はありません。

四

「四百四病の中で貧の病に優る苦みはない」昔からいうて居るが如く、生計の上の不安ほご切ないものはありません。封建の世の中、家族制度の正しく行はれた世の中では、生計に對する確かな保障がありました。自由競争の世の今日、別けても文明の過度期にある現代には、生活難を懸へる聲が層一層烈しくなりつゝ、あります。如何に生計が困難であつても食べるもの、穿るもの、住む家がない以上は、生きて行くことが出来ぬとすれば、吾々は如何にかして生計の道を計らねばなりません。不義にして富み且つ貴きは誠に浮雲の如きものである。昔の人も申しました、不義の富は固より忌むべきであります。併しながら、生計に差支へない丈の富みは必ず得なければなりません。

ぬ。心さへ清ければ人の厄介になつてもよい、さういふ人がよくありますが、普通の場合に於て、人の懐を當てにして衣食しやうとするのは、輕ろからぬ罪惡であります。過しい身體を有つた乞食が路傍に路行く人々に憐みを乞うて居るのを見るほご不快なことはありません。路傍に出て立つことが出来、憐みを乞ひ得るだけに言ふことが出来るほごならば、人間何をしてもし一身を支へるに事欠くことはいけません。曾て本誌にも紹介致しましたが、岡山縣都窪郡中庄村の某少年は、曩に奇禍に罹つて兩手と片足を失つた、而も便所に入つて身を屈めることが出来ないのみで、其の他は人として出来ないさういふことは、何一つとしてなく、學校の成績の如きも人並以上であり、更に感すべきは、夫を失つた貧しい母に對して、將來立派なる人になつて、御心を安め參らせませぬ、健氣にも慰めるさういふことでもあります。この不幸なる少年の上を思つたならば苟りにも手足あるものとして、何をか爲して出来ないことがありません。既に働き得るだけの力を與へられ、善く働いたならば働いただけのものを得ることが出来るやうには神がして下されてあります。但だ吾々には、この世の状として、遇不遇があり身に不時の病氣、災難さういふやうなことも起る。これは或る場合我が力で如何にもすることは出来ませぬ。これまた差支なきやう神に祈るの外はありません。

これ等健康に對する不安、心生活に對する不安、生計に對する不安は、何れも人生に免れ難い約束事であつて、吾々は兎ても角でも神に縋り神に祈るより外に道はありませぬ。そして神はよくこの祈を受け給ふのであります。

「無常の風は時を嫌はぬ云ふが、金光大神の道は無常の風が時を嫌ふぞ」とあるは、第一の悩みに對する神の保障であり、「子供の中に屑の子があれば、それが可愛いのが親の心ちや。無信心者ほご神は可愛い。信心しておかけを受けて呉れよ」とあるは第二の悩みに對する神の保障であり、「天地の間に棲む人間は神の氏子。身上に痛み病氣あつては、家業出来難し、身上安全を願ひ、家業出精、五穀成就、牛馬に至る迄、氏子、身上の事何なりとも實意を以て願へ」とあるは第三の悩みに對する神の保障であらせられます。かくてこの三つの悩みを安め得しめ給うて、人の世に幸あらせ給ふのが神の御心であり、我が教祖の神、出世の御本懐であらせられます。

「神の氣感に適うた氏子が少い。身代人間健康が揃うて三代續いたら、家柄人筋になつて、

これが神の氣感に適うたのぢや。神の氣感に適はぬミ、身代もあり力もあるが、壯健にない。壯健で賢うても、身代をみたく（空くす）こゝろがあり、又大切な者が死んで、身代を残して子孫を斷絶して了ふ。神のおかけを知らぬから、互違になつて来る。信心して神の大神恩を知れば、無事健康で、子孫も續き身代も出来、一年勝り代勝りのおかけを受ける事が出来るぞ」とある御理解を、吾々は深く味ふべきであります。

（大正五年十二月）

豊かなる心

五七〇

昔からある諺に「人を見たならば泥棒と思へ」と謂つて居りますが、これは恐らく都會生活を營む人の心事を、いひ表はしたものでありませう。利を争ふに拘盜の如き鋭い心を持ち、人を見るに刑事捜査の如き鋭い心を持つて、生存競争場裡に馳驅して居る人の心の中が、この短い言葉によつて痛切に讀まれるではありませぬか。そして自ら人の心の、いひ知れぬ淋しさ恐しさ苦しさを感じずには居られないではありませんか。かゝる生活は昔は單に都會の地に住む人にも限られて居た様であるが、今日では都鄙も鄙も、推しなべて斯かる心持の中に生活するを餘儀なくされる様になつたかに見えるのは、誠に嘆すべき事でありませう。

追々暑くなつて来て、蟻が盛んに活動する季節になりましたが、彼の勤勉なる小さなものが、夏の日盛りに、地の上に木の幹に、蟻道を作つて、やがて來るべき冬の貯への爲めにきて、孜孜し

て働く敏捷な動作の中に、彼等の何れか二匹が途中に相ひ會する度に、必ず觸角を相ひ觸れて、何か挨拶でもする様にして行き過ぎる様を、少しく彼等の動作に注意する人は、氣づかれるでありませう。蟻を研究した人の話によるに、これは彼等が互に「お腹は空つては居ないか、若し空つて居れば、自分の持ち合せの糧を分けて進ぜやうか」と他の安否を問ひ、互に慈み助ける作用であるといふ事でありませう。彼等には固より高尚な心理作用がある譯ではなく、單に本能的に然かするのみならず、吾々は、小さな蟲けらに侮る事の出来ない程、やさしい豊かな心を持つて居る事は、眞に讚嘆の外はありませぬ。之を彼の「人を見たならば泥棒と思へ」といふ諺に比べて、果して如何なる感があるでありませう。

文明の度の進むにつれ、生活の度の上るにつれて、外面の生活は漸次に華やかになり豊富になり行くが、内面の生活は之に反して漸次に狭くなり、淋しくなり、苦しくなり、慘めになり、陰險になつて、人生幾多の悲劇が、この中に演じ出されるのであります。文明の進歩し行く一の過程として、斯かる世の中の様も、或は止むを得ぬ所であるかも知れぬが、さりながら人の心のみは、さうか何時も暖か味のある潤ひのある、隔てのない豊かな心持ちを以て自他互の幸福を増進致したいも

のであります。

二

五七二

我が教祖の神の御一生を通じて、吾々の最も親はしく尊く懐かしく思ふ所のものは、教祖の御生活が、如何にも廣い深い優しい豊かな御心によつて開展されて居るさいふ一事でありまして、この豊かな御心持ちは、御家族に對し隣人に對し、悪人に對し社會に對し、牛馬に對し草木に對して時に應じ物に觸るゝに従つて流れ出て、美しい優しい薫りを放つたのであります。

教祖は嘉永三年八月御年三十七歳にして母屋を改築されましたが、この年七月十六日に、その飼牛が病を得て卒かに斃れた。時恰も教祖は玉島へ、改築用材の買出しに行つて、久々井さいふ地まで歸つて來られると、乃ちその凶報に接せられました。その時教祖は、使の人に「歸つても、牛を見るのがいぢらしい」と仰せられて、後始末を他の人に頼んで置かれ、我が家へは立ち寄り給はず大谷を素通にして、その足で直ぐに益坂村へ用材の買出しに赴かれました。之が普通であるならば、同じ惜むにしても、澤山な資金を掛けた牛が斃れて大變な損をした、惜しい事をした、忽ち生業に

差支へる困つた、と云ふ心が先立つのであるが「歸つても牛を見るのがいぢらしい」とのお言葉は、如何に優しいお心根でありませう。

齋藤又三郎師曾て徳教祖に如かざるを慨するの餘、遂に布教を斷念して、お暇乞ひの爲めに教祖の御許に參じた時、教祖は四方山のお話を徹して、終にお暇乞ひを申上げる機を失し、且つ教祖の御辛棒強き御態度に敬服して、その儘退出されたさいふ事であるが、折節冬の夜寒に、炬燵にでもあたりませう、とて相伴うて奥のお居間に通られたが、夫人は晝の疲れで、火の氣の既に失せた炬燵に倚らせ給うた儘、假寝の夢に入つて居られましたので、教祖は夫人を二三度促して火の用意を命じ給うたけれども、更にお答のなきまゝに、「あれも多くの子供をつれて、一日の仕事に疲れ居るから、起きないのも無理はありません。火が無うては詰りませぬ」とてまた相伴うて廣前へ出られたと申す事であります。御家族に對する教祖のお優しいお心持ちは、之によつてその全班を窺ひ奉る事が出来るではありませんか。かゝる場合に處する普通の人は、必ずや揺り起すか叱言の一つもいふのが常であるのに、教祖の神に於かせられては、中々にさる淺ましいお心根は、毫も見出す事が出来ませぬ。

五七三

教祖は、その御名を傷け、その御命を損ひ奉らうと悪企くむ者の爲めにも、尙ほ「私に御無禮がある故であります、あの者に代つて、私が如何なる修行をも仕りますから、さうぞあの者を咎め給はずして、速に眞人間にして下さい」御身を以て神に祈らせ給ふのが常であらせられた、ご申す事でもあります。何ごいふ尊い御心でありませう。「天地金乃神は宗旨嫌をせぬ。信心は心を狭う持つてはならぬ、心を廣う持つて居れ。世界を廣う考へて居れ。世界はわが心にあるぞ」(九)ご仰せられ「信心する者は、木の切株に腰を下して休んでも、立つ時には禮を云ふ心持になれよ」(三一)ご仰せられたお言葉の裏には、如何に優しきお心が流れて居るでありませうか。

三

吾々は常に、自分と他人、氣の合ふ人、合はぬ人、悪人、善人、目上、目下、戸主、家族、主人、召使、先生、信者、富人、貧人、いふ様な相対的な考に慣れ、隔て心に忤れ、我執に囚はれ我情我慾を恣にするのでありますが、これが抑々人の心を「人を見たならば泥棒と思へ」いふ様な、さもしい心に導くのであつて、自分に然るさもしき心がありますから、他も従つて亦自分を同様に

見る様に至るのでありまして、吾々の一切の不幸は、悉くこゝに基して居るのであります。

教祖は「氏が神と仲善うする信心ぞ。神を怖れるやうにするご信心にならぬ、神に近寄るやうにせよ」(二三)ご御理解下されてあるが、常に他に物に隔てを置くに慣れた人の淺ましい心は、亦神に對しても、隔て心、癖み根性が働いて、眞に此の御理解の如き素直な心持ちで神に仕へ奉る事が出来ないのは、誠に悲しく傷ましい事の極みであります。

人の人たる所以は、「我れ」いふ自意識が人に存して居る點でありまして、他の動植物には之れがありません。人間一切の活動は、皆この意識の上に築き上げられるのであります。吾々凡愚は年を経、経験を積み行くまゝに漸次に狭く狭くなつて、之れあるが爲めに、却つて蟻にだも如かない様な惨めなものになつて了ふのであります。教祖の神に於かせられては、之に反對に年経るまゝに、経験を積ませ給ふまゝに、次第に廣く深く強くなせられて、自他不二、物心一如の一大妙境に参入遊ばされたのであります。蟻にだも如かぬ我が心も、生神金光大神の豊かなる大心海も、その根本に彼是相違はない筈であります。

四

豊かな心には、犬猫も我が友であり、道の邊の一本の草も、吾れに無限の慰めを與へて呉れるものであります。文明が皮相に走つて、人の心の奥底は茫々たる荒野を徘徊ふが如く、兀々たる焼山に登るが如くなる有様は、誠に吾々の堪へ得ぬ所であります。この間にあつて、我が教祖の御跡を辿り奉るものは、彼の豊かに優さしき御一生を心から仰ぎ慕ひ奉つて、茫々たる荒野に愛しみの花咲き、兀々たる焼山に靈の泉の湧き出づる様に致したいものであります。

(大正五年六月)

「手續き」の論

「手續き」といふことは、本教全般の上に重大なる位置を占めて居る。重大なる位置にあるだけ、それだけ各種の事情が纏つて居るやうである。従つてこれが意識を明確ならしめることは、本教、少くとも本教の現在に取つて決して徒事ではない。これを明確ならしめるには、各方面から考へて見なくてはならぬことであるが、これは喧嘩の間に出来ることでない。この一篇はその一斑を窺ふに過ぎぬ。實際の事實には成るべく觸れぬ積りである。

一、「手續き」の意義

「手續き」といふ語は決して本教獨特のものではないが、本教に於ては獨特の意義があるやうである。この語は教祖の用ひられた語であるか如何か疑はしい。今日まで公になつて居る神誠、神訓、御理解等には會て見當らぬ語である。従つて本教徒の凡べての人に通ずる語か如何かも私はよく知らぬ。

自分の知つて居る範圍に於て、用ひられつゝあるこの語の意義には、少くとも三様の意味がある

やうである。

その一は「立教神宣」に『取次ぎ助けてやつて呉れ』とある「取次ぎ」と同意義に用ひられて居るものであつて、神の前立ちになつて居るもの、取次ぎによつて、こいふ場合と同じに、手續きによつて、こいふのである。これがこの語の本来の意味であらうが、「手續き」といふ語は「取次ぎ」の語に比べて幾分お役所めいた、若くは何か煩瑣な手数を要するこでも願ふやうな一種の重も苦しい、場合によつては厭はしい感じの伴つて居る語である。單に「取次ぎ」といふ意味ならば、この種の語は寧ろ廢した方がよいやうに思はれる言葉である。「取次ぎ」といふ方が意義が明瞭であつて不快な感じが伴つて居ない。

その二は師弟の關係を現はすに用ひられて居る。これは第一の意義から轉じて來たものであつて、甲は乙の手續きである、こいへば、甲なる人は乙なる人の弟子であり、門人である。乙なる人は甲なる人の師家である、こいふこを意味するやうになつて居る。

その三は師弟關係の系統をいひ現はすに用ひられて居る。即ち師々弟々相連續した一團の人を一口に「手續き」といふこになつて居る。これまた第一第二の意義が轉じて來て居るものと思はれ

るが、「手續き」といふ語からは、この意味を現はす言葉としての方が、寧ろよく當て筈つて居る。或はこの意味が此の語の本来のものであつて、第二第一は寧ろこれから轉じて行つたのではあるまいか、こいふやうにさへ思はれる。以上の三つの中で、私のこゝに考へて見たいと思ふのは、その第二及び第三の意義の現はして居る事實についてである。

二、教義上より見たる「手續き」

前にも述べた如く、「手續き」といふこは、本教に於て重要な地位にある。何故に重要な位置を占めて居るかこいへば、この語の第一の意味の現はして居る「取次ぎ」といふこが、本教教義の根本であるからである。

「取次ぎ助けてやつて呉れ」この立教神宣は、この簡單なる一語の中に、實に神の意志も、氏子の情態も、教祖の使命も總べてを籠めさせられたものであつて、神の意志は「取次ぎ」によつて氏子に傳はり、氏子の願は亦「取次ぎ」によつて神に達せられる。若し教祖が本教そのものであれば、「取次ぎ」そのものが本教であるこいふこが出来る。教祖の手代りたる各地の布教者は、即ちこ

の「取次ぎ」の延長であつて、教祖が本教そのものであれば、それと同時に、その延長たり、手代りたる各地布教者の「取次ぎ」が本教そのものである。「取次ぎ」を願ふ教祖が人に對して最も權威あるお方であれば、それと同時に各地の布教者も亦最も權威ある地位にある。本教に於て取次ぎ者に重大なる權威があり、その人自ら重き責任があるのは、この本教の教義から流れ出る自然の結果である。手續きの師を敬ひ、手續きの弟子を愛する、こいふことは、世の常の、束脩を出して弟子入りした弟子、月謝を取つて教へる師こいふやうな普通のものでなくして、師はこれ我が祈りを神に取次ぎ給ふ救主であり、弟はこれ死生を委せて救ひを求めん弟子である。本教に於て師弟の關係を現はす、この「手續き」こいふものが、重要な地位にあるこいふことは、本教々義の上からは當然のこことである。従つて師の師、弟の弟、相連続した一條の鐵鎖の如き系統が流れるこいふここと、この意味に於て、亦當然のここといへばならぬ。従つて今日の本教の狀況を見るに、何れかこいへばこの一條の鐵鎖であるべきものに、處々弛みが來つ、ありはしないか、若しあるとすれば「手續き」本來の意義からは、本教々義の弛みであり、師弟の道義の弛みであつて、眞に嘆くべきこことであると思ふ。而して、若しその弛む原因にして、「手續き」なる意義を履き違へた點に存して

居るとすれば、その誤りを訂し、その弊を除かねばならぬ。これ單に師弟の間の爲めに止らずして、實は本教々義振肅の爲めである。

三、教制上より見たる「手續き」

前章に於て述べた如く、手續きは、自然の勢として一條の鐵鎖となる。この點から本教の體制を觀察するに、教祖が一つの締め括りになつて、本教は幾筋かの鐵鎖が分派した形になりその幾筋かの鐵鎖の各條が、更にまたその各節々に於て幾筋つゝかの鐵鎖を派出するの形になつて現はれる。これが本教の元始的、自然的狀態である。事實獨立以前までは體制として本教はこの形に發達した。即ち本部（教祖）の下に分所があり、分所の下に支所あり説教所あり講社事務所あり組あり、こいふやうなこことになつて居た。（天理教は現在もこの體制にあつて、大教會所——分教會所——支教會所——宣教所こいふやうなこことになつて居るやうである。）その様は恰も我が國家に於ける元始狀態たる氏族制度に髣髴たるものがある。即ち天皇の下に齋部氏あり中臣氏あり物部氏あり大伴氏あり蘇我氏ありこいふやうな風で、天皇はこれ大氏であり大家であつて、各氏族は分家であり支家で

あつて、氏の長者は氏人を率ゐて天皇に隸屬して、各部の事を司る、こいつたやうな様である。獨立以前の本教もその通りで、上に教祖あり、その下に大先生あり、大先生の下に中先生あり、中先生の下に小先生があつて、本部に事があれば小先生は中先生に到つて率ゐられ、中先生は更に大先生に到つて率ゐられ、かくて幾連かの鐵鎖が、本部へ集るこいふこゝになつて居た。大は教祖の大祭から、小は隨時のお禮參拜に至るまで、所謂この手續きによつたのである。

これが何等の故障なしに行けば、國家の上にしても、一教の體制にしても、さして差支へはない筈であるが、そこが何分缺點の多い人間のするこゝであるが故に年経るまゝに、その弊に堪へぬやうになる。例へば我が國家の上について見ても、氏族制度の行き詰りは蘇我氏の專横こいふこゝであつた。彼れは臣下として畏るべき弑逆をも敢てした。そのこゝに至る徑路には大體に於て二つあつた、一は各氏族の軋轢こいふこと、一は權勢の野心である。彼の佛教なきもこの軋轢の道具に使はれた形であつて、難波の堀江に投げられ給うた善光寺の佛様こそよい面の皮であらせられたこゝいつてもよい。先般、黒板博士が『東亞之光』誌上に聖德太子の憲法十七條について論ぜられて居られる中に、太子は佛教を利用して、當時のこの狀勢を統一されやうと遊ばされたやうである、こ

いふ意味の推斷が下されてあつたかに思ふが、太子は太子の御立場から、蘇我氏や何かはまたその立場から、佛教はいろ／＼に利用されたが終に兎も角も一時蘇我氏の勝利に歸して、他の氏族は屏息した。一氏族の勝利こいふこゝは、やがてそれが權勢の野心を満足せしめるこゝになるのであつて、事實蘇我氏は天下の政權を私視し、壟斷し己が住宅を以て王宮にさへ擬するに至つた。こゝに於て我が國勢は全く行詰りの有様こなつた。この行詰りを回轉したものは中大兄皇子であらせられ中臣鎌足であり、そして大化の改新であつた。大化の改新は、從來の自然的發達によつた氏族制度を更めて、全く郡縣の制度の形を取つた。實に大化の改新はその結末する所が如何であつたか、は暫く別として、我が國史上に特筆大書すべき、一新回轉であつた。

讀者はこの大化改新以前の我が國情と、獨立以前の本教の狀勢とを比較して、そこに——事柄は固より異なるかも知れぬが——幾多の類似點、共通點を見出さぬであらうか。獨立以前の本教の體制は全く行き詰つて居たこ申しよ。その委曲の事情は、いはぬが花であつて、その餘弊は今尙存して、教政の運用に妙を缺く所がある。

前述鐵鎖的體制には右の弊の外、更に一般宗教信仰こいふもの、當然の行き方と相容れぬ所があ

る。それは何かといへば、各鐵鎖に繋がつて居る各部分にはそれごとく、絶對性があるといふことであつて、大先生も取次ぎであり、教祖の手代りであれば中先生も然り、小先生も然りである。これは單に「取次ぎ」のいふ絶對權威の上からであつて、師弟といふ上のことではない、師弟といふ上から見れば、固より一條の鐵鎖に繋がつて居て差支へはない。ないばかりでなく、然かあるべきが道の當然であるが師弟といふ上でなしに、「取次ぎ」のいふ上から見れば、各部分が皆絶對權威といふものでビク／＼動いて居る。

「取次ぎ」の聖場は廣前（教會所）である。廣前はこれ神の廣前であり、教祖取次ぎの神ながらに行はる、聖場である。この上に於て上に大きな顔する師もなく、下に頭を屈する弟もない、布教者はこれ等しく神の前立、教祖の一の弟子乃至手代りであり、そして其仕ふる教會所は、これ等しく神の廣前、教祖の道場である。鐵の鎖りにはこの關係を見落して居た「手續き」のいふことによつて別れる大先生中先生小先生のけぢめを、絶對であるべき「取次ぎ」の上、廣前の上の階級たらしめやうとした。國家制度の上からの氏族制は、それでも大した差支へはなかつた。これまでも、人間といふ上からいへば夫々絶對であつて、今日の立憲政體は、この哲學的根據の上に立つて居る。

信するのであつて、従つて今日までのものとしては最も進んだ形であらうが、宗教上の氏族制度はその根本に於て矛盾がある。

以上述べた弊害、矛盾が、本教教制上から見た「手續き」の當然影の淡い理由であつて、本教の獨立といふことは、單に對外的な關係ばかりでなくして、實は對内的な、謂はゞ本教の大化改新であつた。私は信するのであつて、本教の獨立は對外的な言葉である。之を一度對内的にいへば信仰上の氏族制度を更めて郡縣制度——支部制度にした、といふべきである。

よく本教者、殊に先輩の方から聞くことであるが、獨立以後になつて、本教の活氣が薄らいで来た、といはれるが、これは制度の改新そのものが悪い爲めではなく、その外に原因がある。即ちこの改新と共に、本來の意味に於ての「手續き」の鐵鎖が弛んで来た爲めである。（これは先にも一言したし、後に尙ほ章を更めて論じたいと思ふ）の、一は各地方支部長そのもの、問題が、その重なるものである。これは餘談に亘る嫌があるが、後にいふ機會もなく、恰度よい機會であるから一言したと思ふが、獨立以前には前述の如く、徳望もあり、權威もある方が、各鐵鎖の先きについて居り、本教の氏の長者として、その氏人を睨んで居たから、餘程その睨みが利いて居たので他の弊

害は兎も角もして、各鐵鎮一條づゝの纏りは割合によくついて居たかに思はれる。獨立以前を謳歌する方はこの一面を見ていつて居るのであるが、今日の支部長なる人は——かく申しては甚だ缺禮であり、僭越であるが——大半は本教内の二流三流の方々に、以前の氏の長者であつた人は、その人のやることを後の方から見張つて居る形がある。二流三流の支部長に腕の利かぬのは誠に尤も、の事いはいはねばならぬ。支部長は以前の氏の長者に匹敵する程に腕が利いて、部内を事務的にも信仰的にも纏めて行かねばならぬ地位にありながら、今日では大部分が事務を統一するのが、手一杯であるといふ状態である。これならば少しく手先の器用な人であれば立派に務まつて行く。恰も今日の國家に於ける地方長官が良二千石でなくして、地方事務の取締りといふ格であるが故に、従つて地方の成績が擧らぬ一般である。これが先づ上から見下した本教の獨立以前に比べて、活氣の乏しい大原因の一つである。(無論この外にも大原因はあるが、こゝに述べる限りでない。)

これを要するに、本教の教制上から見た「手續き」は人間の持つて生れた根本の缺點で、「手續き」をいふことの意義の明瞭を缺いたこの爲めに、遂に本教獨立と共に、その存在を認められなくなつたのである。

四、「手續き」は私的道德的對個人關係

前來述べた如く、所謂「手續き」の關係は、本教教義よりする必然の結果であつて、「取次ぎ」をいふことが本教の中心點であり、之を重んずることが亦、本教信仰の中心點である。すれば、彼の「手續き」を重んずることも亦本教徒の忘れてはならぬ所である。但だ、これは「手續き」の師、「手續き」の弟といふ何處までも私的な個人的な關係であるべきであつて、教會所といひ、教祖の「手代り」をいふ公的地位を侵犯し、公的權威を無視することは絶対に容すことは出来ぬ。よく人が無意識的に「手續きの教會所」をいふことがある。謂ふ所の教會所の意義が、單に「我が弟子の住つて居る家」をいふ程の意味であれば、固より深く咎める程のこともないが、一般の意味に於て教會所をいへば、神の廣前であり、「教祖の手代り」の存する聖場であり、「取次ぎ」の行はるゝ道場である。この意義を辨へつゝ、尙ほ「自分の手續きの教會所」をいふやうな考を懷いて居るのは、私的關係を以て公的關係を無視し侵犯し冒瀆する背教義的、没信仰的妄想でなければならぬ。引き合ひに出して誠に相濟まぬことであるが、この意義を明にする爲めに、少しく事實に觸れて話して

見たいと思ふ。往年大阪で或る會が組織せられた、その主旨が或る先生の手續き教會所の間に云々
 さいふごころでつた。その時に私は本誌上に於て如上の見地から、簡單にその妄を論じたが、それが
 餘りに簡單であつて、意義が徹底しなかつたものを見て、その後、單に「手續き」のさいふごころは、
 本教の教義の上からも重んずべきことではないか。なきさいふ辯明らしいと言はれてあつたが、
 此の如きは全く見當違ひの事であつて、少しも辯明にはなつて居ない、「手續き」そのものは、本教
 として重んずべきは、私も知つて居、り有ゆる本教徒と共に現在の本教に之を重んずるの風が薄き
 つ、あるごころを遺憾に思つて居る。只私の非難する點は「手續きの教會所」なき、不用意なごころを
 言つて、公的關係と私的關係とを相混同し相侵犯するを虞れた所にあるのである。更に或る先生
 は或る地方——それは一二手續き以外のものもあるが大部分は其手續きのもに布教して居る——
 の布教者を集めて、今日までは自分が此の地方を制度して來たが……さいふ趣の語のある信書を使
 を以て披露された事がある。そこでその使の方は右手續き以外のものに對しては、後で別にそれ
 ついて辯明して居られたのを見たごころがあるが、その真意の存する所は暫く別として、見苦しくも
 また不徹底、不謹慎な言葉であると思つた。これまた前例と同様の誤謬に陥つて居るものと思ふが、

惟ふにこの種の誤つた見解を懐抱して居るものが、今日の本教には少からぬごころ、思ふ。今日本教
 が「手續き」を以て本教の教制を侵さんとし、また教制を以て「手續き」を軽くせんとし、相率
 て本教の活氣を減殺しつゝあるごころは、眞に憂ふべきごころであつて、以上一二の例の如く「手續き」
 を重んじやうごころが、却つて本教の元氣を殺ぐ根本になりつゝある點を詳かに考察して、今に
 してその弊を剪除して、教制を肅振し「手續き」の關係を濃厚ならしめ、相待つて本教の元氣を振
 興するごころに努めねばならぬ。

只夫れ「手續き」は私的個人的關係である。「手續き」の弟子にして、自分の徳は、是れ我が物に
 非ずして、一に我が「手續き」の師の賜であり餘徳である。自分の祈る所は我が不徳を以て祈るに
 非ずして、「手續き」の師の御名により御徳によつて祈るのである、信ずるのは、その人の自由で
 あつて、そこに謙遜の禮あり、無我の徳あり、我が師に信頼する美點は、眞に稱讚せざるものが
 あるであらう。「手續き」の師にしても亦斯の如く、我が「手續き」の弟子を我が子として親愛し教
 導し誘啓し、我れを忘れてその面倒を見て至らざるなきは、師としての美徳であり、後進を思ふ心
 の切なるは、眞に感激措かざるものがあるであらう。これあるが爲めに、弟子にして、自ら奉仕す

る「取次ぎ」の御業を自覺せず、教會所を以て師その人の私有物かに考へて我が務むべきことを忽せに、自らを自卑するが如きは非常なる誤りである。又師にしても弟子の奉仕する教會所を我が教會所の出店か支店かに考へ、弟子その人を番頭か召使ひかに考へて之を左右せんとするこも亦非常な誤りである。謂はねばならぬ。

五、師道より見たる「手續き」

前章に述べた如く「手續き」の師として、その弟子を見ること、猶ほ我が子の如くして、教導誘掖、親切懇篤至らざるなきは師弟てふ私的關係に於て誠に缺くべからざることであるが、これが一步を超ゆると、この私的關係が公的關係を侵蝕することとなる。この點について私は特に教祖の神の弟子を導き給ふ用意の深く且つ懇ろなるを難有く思ふものである。左に謹みてその一例を示さん。彼の御理解第四節に示されたる神言は、我が近藤先生の會て參拜された時に神傳のあつたものであるかに聞いて居るが、彼の神言に示された如く、神より教祖を稱へて「神からも氏子からも、兩方からの恩人は此方金光大神である。金光大神の言ふ事に背かぬやう、よく守つて信心せよ。まさ

かの折には天地金乃神云ふに及ばぬ、金光大神助けて呉れ、云へばおかけを授けてやる」此ある。優渥なる神傳があつた際に、教祖は結界のお机の前にお退になつた後に、先生に對はせられて「神様は、あゝ仰せられるけれど、私は百姓で何もわからぬ、天地金乃神云うて、神様の御袖に縋りなされよ」此只管に謙抑以て私なき教祖の御眞情を露はさせ給うた。彼の親鸞は、弟子一人ももたずして、「如來の教法を十方衆生に説き聞かしむるときは、たと如來の御代官を申しつるばかりなり。更に親鸞めづらしき法をも弘めず。如來の教法をわれも信じ、人にも教へ聞かしむるばかりなり。そのほかは何を教へて弟子いはいはん」と言うて居るの似通へる誠にゆかしき御事さまであつて、神よりは「天地金乃神云ふに及ばぬ、金光大神助けて呉れ、云へばおかけを授けてやる」此仰せられ、教祖は「私は百姓で何もわからぬ、天地金乃神云うて、神様の御袖にお縋りなされよ」此仰せられる。氏子の爲めに、日夜わかず、御身を以て神に祈らせ給ひつゝ、而もその御胸中一釐一毫の私をも挿み給はぬ、これ我が教祖の御一代を通じての御眞面目であらせられた。師としては、神の御前には、師もなく、また弟子もなく、只一つの神あるのみ、こいふ心境に住しつゝ、而もその弟子に對して懇切至らざるなき慈愛を垂れるのを以て、至れる師道にすべきである。それ

故に「手續き」なる語は第三者に於て、及び弟子より師に對する時に於てのみ存して、師より弟子に對する時には存在しない、といふ程のものでありたい。然るにこれが屢々相顛倒するこゝがある。師として弟子に對する心情は之を毫も施すこゝなくして、單に「手續きの師」といふこゝを以て威嚇するやうなのはその一つである。これ豈に戒めて慎むべきこゝではなからうか。

六、弟道より見たる「手續き」

前段に於て述べた如く「手續き」なる語は、師より弟子に對した時には見出すこゝが出来ずして只だ弟子の使用する辭書に於てのみ見出し得る程のものであつて欲しい。「手續き」なるものゝ本體は弟道の中にのみ之を充分に認めるこゝが出来るのである。

弟の師に對する道については、神誠正傳は下の如くに教へて居る。即ちその第三條に於て、「又斯道の信者は、道を了解り次第に教へ導かれたる幼稚の時を忘れて、教祖よりも先生よりも、我尊し我かしこしと思ひ、さばかり廣き道を踏み外して、起き立たん術を知らざる者あり、能々謹むべきこゝなり」といふ。是れ單なる弟道についての教へであるが、所謂「手續き」といふ上からの弟道は、

そのみでは足りない、師は道を我に教へし人なるに共に、我を神に導き給ふ救主である。普通の弟道を以てのみにしては「手續き」の弟子の道は完うされるものでない。「手續き」の師を、師も先生も、教祖も神も心得、之に信頼し之に奉仕して、その足らざるを恐るゝの至誠を盡してこそ、始めて本教に於ける弟道を謬らざるを期し得るのである。而もこの至情は純信仰の上に立たねばならぬ。然るに動もすれば、純信仰の上からは何等の信頼もなく景仰もなく感激もなくして、普通の人間的にその機嫌を取り、その意を迎へその發の塵を拂うて到らざるなく、幫間然たり三太夫乎たる陋態醜狀を盡して、師も得々たり弟も怡々たる有様を呈し、而も師をしてその非を遂げしめ、弟をしてその道を誤らしめるやうな奇觀を致すこゝがあり易い。師にして若し非あらばこれ即ち弟子の罪であり、弟にして若し誤あらばこれ即ち師家の罪である。これ豈に慨くべきこゝではあるまいか。本教の今日まで、この種の弊害は擧げて數ふるに勝へない程である。

本教の先生は一般に傲慢であるの評がある。その如何なる點を指摘して斯かる評をなすかは明かでないが、惟ふに師として、取次者としての態度が、教祖の神の所謂「私は何も知らぬ土を掘る百姓であります。天地金乃神といふて、神様の御袖にお縋りなされ」といふやうに、自らの徳を師

に譲り、教祖に歸し神に歸して、自ら持するこゝ宛ら忘れたるが如く、而も自然なる心の徳の閃きが、よく人をして威服せしめ、よく弟をして徳化せしめるの本教の信仰的謙讓の美點に缺けて居るのを指摘したものであるまいか。

更に本教の先生は一般に卑屈であるこの評がある。これまたその如何なる點を指摘したのか不明であるが、惟ふに弟をして純信仰の立場から師に信頼し敬服することを外にして、一にその意に迎合しその情に阿附して及ばざるを憂ふるが如き尾籠な態度を指摘したものであるまいか。師は弟子に對して、懇切に之を教導し、親切に之を世話して、家父の愛兒を見るが如く、到らざるなき至情を盡しつゝ、而も「手續き」の師たり親たるこゝを遺れたるかの如く、弟は師に對して之を敬信し尊重し畏服して、孝子の父母に仕ふるが如く、到らざるなき至誠を致して、師を措いて我なく、「手續き」の親を措いて我が何物もなきが如く、我を虚しうして之に奉仕し、師々弟々相推し相承けて、敢へて素る所がなかつたならば、本教の信仰は茲にその本來の光明を發して餘す所がなく、師弟の道義は茲にその本然の意義を顯して遺す所がなく、教内の空氣を振肅せしめ緊張せしむるに至るであらう。

七、手續きと黨派根性

余は前來、本教に於ける「手續き」の意義、及び之に對する誤れる觀念等について略叙し、從つて如何なる點に於て之が本教存立の上にならざる有意義であるかも、之を明かにしたと思ふが、以下之に伴ふ弊害の著しきものについて、今暫らく述べて見たいと思ふ。その弊害の最も著しきものは、彼の所謂黨派根性の助長といふことである。

蓋し團結といふことは、社會的動物と謂はれる人間の、特有にして、而も最も根本的な性向であつて、自然に對して人間が團結したことが、抑々人類今日の文明を開拓した根本作用である。かく自然に對して團結した人類の上に、更に人種により、民族により、宗教により、互に相團結してそれれく特殊の集團を組織した。これ等の集團の上に、更に特殊の關係を結んで國家を組織した。その國家の上にも、更に地理的の關係から行政上の關係から、地方的の團結を作り、社會的の關係からは、或は貴族や平民の團結も出來、經濟上の關係から、資本主乃至地主や勞働者乃至小作人の團結も出來、政治上の意見の相違から政黨も起り、更に血族の關係から家庭といふやうな小團結も出

來、これ等が相錯綜し、相關繫し、相纏綿して、以て今日の複雑な社會現象を形作りつゝあるのであるが、これ等各團結、各團體、各黨派は、互に他に對して無關心で過ぎ行くことが出来るかといふに、決してさうでなくして、そこには亦人間の根本的傾向である所の競争心といふものが、必ずその相互の間に作用して来る。神が人間に競争心を賦與したことは、不思議にして而も極めて意義あることであつて、之によつて神の創造的事業は、最も迅速に最も完全に、最も都合よく最も便利に成し遂げられるやうになるのであるが、この競争心が最も劇烈に、最も慘酷に、最も露骨に現はれるものが、彼の戦闘の状態であり、最も陰險に、最も狡猾に、最も惡辣に現はれるものが、彼の所謂黨派根性である。所謂、競争の状態に於て神の創造的事業は最も敏活に最も圓滿に進捗するのであるが、戦闘の状態に於ては、それが餘りに露骨であり劇烈である爲めに、一時に長足の進捗を見ることもあれば、或は時として却つて創造を破壊に導くやうなこともある。而して彼の黨派的根性の働く時には、破壊でもなく創造でもなく、單に攪亂の状態に導かれて相互に不健全にして病的な状態に陥つて了ふ。他に對して、如何に自らを優等ならしめんかに、心を盡し力を致すが、競争の状態であり、他と自らの優劣を端的に決せんとするのが戦闘の状態であり、自らに對して如何に他を劣らしめんかに、腐心し策略するのが黨派的根性である。競争の状態に於て、他に優越するものは、常に最もよく神の創造的精神を把握し發揮し得るものに限るのであつて、競争なき所に進歩なしといふ格言は、競争なき所には、如上の、最もよく神の創造的精神を發見し把握する鋭敏な働きを現はし得ないが故である。

さて本教に於ても「手續き」の關係から、師々弟々相承接相繼いで、信仰上道德上の鐵鎖が幾條か出来るといふことの自然の結果であることは、之を前に述べた。この幾條かの鐵鎖的團結は、人間の性向に本有して居る、根本的傾向から、その相互の間に、精神的にも物質的にも、そこに相競争しやうとする運動が起るのは、自然の結果である。前述の如く單に真正なる競争の状態に止つて居れば、これは本教發達の上に誠に慶ぶべきことであるが、單にその状態に止りにくいのが人間の弱點であつて如何にして他に優らんか、に苦心するよりは、寧ろ如何にして他の勢力を挫がんか、如何にして他に鼻を明かせんか、如何にして他を出し抜かんか、如何にして他を屏息せしめんか、といふやうな、誠に忌むべき黨派根性が働き出すのが常であつて、同じ教内であつて見れば、まさかに劇烈な戦闘は挑まないにしても、また露骨に他を傷げやうとしないにしても、それだけ彼の猫の唾

み合ひのやうに、陰險に辛辣な手段が執られるやうなことが、今日までの教内に無かつたであらうか。それだけ本教の教勢を攪亂して、その發達を妨げるやうなことが、今日までの教内に無かつたであらうか。

眞正なる競争は、本教内に於ても最も望まじきことであつて、今日の本教には、寧ろこの點に不足する所があり缺くる所がある。偶々競争的精神を發揮して居る見れば、それは眞の競争ではなくて例の猫の唾み合ひをして居るのである。眞の競争は今日の本教に於ても望まじきことであつて、その精神とする所は、如何にして本教を天下に弘通せしめんか、そして如何なる點が、この精神に對して現在の自分に缺くる所があるか、さういふ反省的、發奮的な美はしい點にあるべきであつて、かくてこそ其の競争に於て優越者たり得るのである。常にこの大處に着眼するものは、單に當の競争の相手たるもののみを見ずして、本教全體に着目し、教祖の神意に着目し、神の御心に着目し更に本教に對立する、或は佛教なり、基督教なり、他の神道各派なり、乃至その他の精神的團體の上に着目する所があるべきである。かくて競争心は一層擴大される次第であつて、この大なる競争心を有するものが、それだけ教内に於ても優秀者となる譯である。

教祖は、常に他を惡し様にいふことを深く戒め給ふた。「人の惡い事をよう言ふものがある。そこに若し居つたら、成る丈逃げよ。蔭で人を助けよ」(七七)「人を殺すに云ふが心で殺すのが重い罪ぢや」(七五)「御理解下され、更に天地金乃神は宗旨嫌をせぬ」(九)「釋迦でも孔子でも、皆天地金乃神の氏子ぞ」『我信する神ばかり、尊て餘の神を侮る事なかれ』とあるが如きは、何れも一面より窺へば、人間の黨派的根情を戒め給ふたものである。個人と個人との間、團體と團體との間、一教と一教との間、一國と一國との間、皆他を傷け他を損うて、そして自らの存在を完ふしようとするの卑むべく、惡むべきを戒め給うたのがこれ等のお言葉である。

大正五年十月廿二日發行の「金光教徒」に「九州より」と題する洞海生といふ人の通信が載せられてあつた。それを抄録して見るに

これまで九州は、前部長時代に於ては、桂先生手續きの教會のみ團體を組織して本部大祭に參拜の例となり居りしが、今般九州一圓總て協同提携の實を擧ぐる第一歩として、先日評議員會を開き、滿場一致を以て、二三の問題を可決せり……従來、下關系の教會と、桂系の教會との間には、兎角對立的氣風ありしものを、御神慮により、眞に一致の時期到來し、今回團體組織改

善についても、佐賀、佐世保、熊本各教會長も、卒先して賛同せしほぎにて、時を期せずして會せし感あり、思ふにこれより第十二教區の教勢は、更に一新して充實發展し、共に其の力を得べけん。嬉しさの餘り近況右御報申上候。

さあつた。これを見て私も如何なに嬉しかつたであらう。この報道にあるが如き忌まはしき弊風が九州地方にあつたか否かの事實は少しも知る所がない、併し無かつたともいへぬ。本教の現在の傾向としては、寧ろ有り得べきこと、思ふ。また洞海生三名乗る人が如何なる位置に在る人も更に知る所がない。従つて私は全く第三者の立場から、この報道を見て、事は團體參拜といふ小事に過ぎぬけれども、九州に於ける兩系統（果してか、る系統があるか否かの事實は別として、只報道されたまゝによりかくいふ）が、全本教の上に漸く着眼し、教祖神意の上に大きく着眼することから、かゝる、美はしき新氣運を打開されたことは、本教の爲め最も嬉しき次第である。只私の尙そこに疑ひして存すべきは、團體參拜といふことは、經濟に關係した事である。右の通信中に「二三の問題」にあるのは如何の種類の問題か知れぬが、單に經濟上からの親みのみならば、一時的親密に相談し計畫して實行するのは、何れの地方にもあるかに聞く。しかしこれは金銭上の利

益が主になつて居るのであつて、若し果して然らば、それだけ心のさもしさも見る譯である。洞海君は經濟問題が主であつても、兎に角協同提携の氣運が作られたのは誠に喜ばしい、言はれるのか、如何かは尙不明瞭であるが、若しさうであれば、不充分ではあるが、經濟上の問題からでも漸次その美風が馴致されれば誠に結構なことであると思ふ。（これは前に述べた如く、單に私の疑問を述べたに過ぎぬ。）

以上、叙述が甚だ蕪雜に流れて、理路が誠に不徹底に陥つたが、要するに、今は教祖の大精神を眞向に捧けて、天下に宣布するの秋であつて、斷じて内輪の小ぜり合ひに日を暮すべき際ではない。本教は今や上下一新の機運に際會して居る。一切の情實、一切の行き懸りを忘れて、教祖立教の精神に懸つて、道に新に立つべきであつて、個人、各自に念々之を忘れなかつたならば各「手續き」の鐵鎖も益々固く、而も全本教を一團として、相融和し相親睦して、以て優に天下の一大勢力として、教祖の精神を宣傳することが出来るであらう。

八、大道坦々

教祖教へ給はく「信心は容易いものぢやが、皆氏子からむつかしうする。……其日々々のおかけを受けて行けば立行かうが、容易う信心をするがよいぞ」云。又「信心は日々の改りが第一ぢや。……日々嬉しう暮せば、家内に不和はない」云。何事も容易く、解決され、如何なる紛糾錯綜した事件も、すらいゝ結着する所に信心の眞が存する。睦じくなし得るのも、ぎごちない思ひをして暮し、そして内に力弱く、外に侮を強くするものも、皆我が心の我情より發り、我慾より起る。「其日々々のおかけを受け「日々嬉しう暮せば」萬事は快刀亂麻を斷つが如く然りである。

吾々の生活には行き掛りもあり、情實もあらう、これ凡意俗情の常である。殊に親の代に、これの行き掛りがあつた、祖父の代にしかじかの紛糾があつた。それ故子たり孫たるものは、その行き掛り、その紛糾を紹述し發展せしむべし、なき考へる場合もあるが、これは更に大凡意大俗情の然らしめる所であつて、親のめぐりや、祖父のめぐりに足を掛けて、その地獄の苦艱を一層増さしめるものであつて、不幸この上もない見當違ひを謂はねばならぬ。一度「其日々のおかけを受け」「日々嬉しう暮せば」、行き詰つて居る本教の現状を擺脫して、眞に煦々たる春光を滿身に浴びつゝ、坦々たる大道を歩むを得。而も教内に「不和はない」筈である。かくてこそ力を内に充實し、

侮を外に防いで一教の權威を顯揚するこゝが出来るのである。今は正に然かするの時ではないか。

九、結 論

余が「手続き」論は、冗漫に流れるのを懼れつゝ、言はんを欲する所の概略を述べて、茲に之を結ぶこゝにする。

本教に於いて「手続き」云いふこゝが重要な意義を存して居るのは、教祖の教義から流れ出た當然の結果であつて、今日までも之を重んじて來たが、更に將來に雖も、之が意義を闡明にし、之が貫徹を期せねばならぬ、これ本教の教義の根本を樹立せしめる所以である。

然るに人動もすれば、「手続き」云いふこゝに一種不快の念の伴ふを厭はしく思ふのは、その意義を解する上に誤謬があつたからである。即ち一面には、「手続き」なるものを、本教の制度の上に持來して、之によつて宗教上の氏族制度を樹立しやうとした點にあるのであつて、これは信仰そのもの、本来の意義と矛盾撞着を來すこゝになるのであつて、本教獨立以前の狀態は、かくて全く行詰りの様であつた。この局面を轉回したものが即ち本教獨立であつて、この事業は對外的にのみでな

く、對内的にも大なる意義があつた。更に他面には「手續き」は全く對個人的信仰的、道德的、師弟の上の關係であつて、前述の如く之を益々尊重せねばならぬのに、前述の信仰上の氏族制度の反動、各種の情弊の纏綿ミがあつたからである。

されば、その不快の念を去り、眞實の意義を發揮して、大に本教將來の充實を期すべきは、目下の急務である。信するのであつて、此の點深く本教上下の注意を切望して止まぬ次第である。

(大正六年二月)

立教神宣

安政六年十月二十一日降下

金子大明神、この幣をさきさかひに、肥灰さしどめるから、そのふんに承知してくれ。外家業は致し、農業へ出、人が願出、よびに來、もどり、願がすみ、又農へ出、又もよびに來、農業するまもなし。來た人もまち、兩方のさしつかへに相成。なんと家業やめてくれぬか。

其方、四十二歳の年には、病氣で醫師も手をはなし、心配いたし、神佛に願ひ御かけで全快いたし、其時しんだとおもうて、慾を置いて天地金乃神を助けてくれ、家内もごけになつたとおもうてくれ、ごけよりまし、もの云はれ、相談もなり、兒供つれてぼどく、農業しをつてくれ。

此方のやうに實意叮嚀、神信心いたしをる氏子が、世間になんぼうも、なん儀な氏子あり、取次助けてやつてくれ。神もたすかり、氏子も立ゆき、氏子あつての神、神あつての氏子。繁昌いたし、末々おやにかゝり子にかゝり、あひよかけよで立ゆく。

立教神宣につきての二二

六〇六

神宣の正文

『立教神宣』といふことは、自他にもよく口にすることばであります。その正文として、より信すべき正文といふものが、いまだ公にされてゐないのは、さうしたことばでせうか。わたくしは、これを以て、本教の出發點であることばにやがて本教そのもの、やきされてゐるものとして、これを重要視するのでありますが、先輩のなかには、ひそしく出發點であることばには異論はなくても、歴史的にみて、教義のうへからも教制のうへからも、むしろ原始的のものとして、發達しつゝある今日の本教からは、いまだこれをもちだす要もあるまい、といふくらいに觀てゐるものもないではありません。この種の觀かたによれば、この神宣の正文がさうであらうが、すこぶる意味の乏しいことばになるやうであります。本教そのもの、姿がやきされてゐるにおもふ、わたくしは、さういふことばは、よりて信すべき正文が、いまだ公にされてゐないこと

いふことは、ものだらぬといふよりも、むしろ本教の中心を逸してゐるものではあるまいか、といふくらゐに考へるのであります。

立教神宣として、比較的本教にひろく傳へられてゐるものは、かの碧瑠璃園氏の『金光教祖』にのせられてあるものであります。あれは、當時の本部當局から示されたものであらうから、もごより大體においてまちがひのあらうはづはありません。しかしながら、わたくしは、この拜した教祖の『御手記』——寫本ではありますが——に、しるされてゐるものに比して、ことばに多少の相違があるやうであります。その相違点といふものは、意味の全くの相違ではなくして、これを示す場合に潤色する意味において訂正したもの、如くにみるのであります。たゞへば冒頭に「肥灰さしこめるから、その分に承知してくれ」とあるものを、命令語である「承知せよ」といふことばに訂正してある、これは神の「威嚴」を示さうとする官僚的な考へによるものか解せられるのであります。

それから、その次の方に「農業する間もなし、來た人もまち……」とあるものを「參詣に來た人もまち」と訂正してあります。これは「來た」といふことばの内容を示して解釋的になしたもので、やうに考へられますか、これは、かのかざりけのない素朴な神宣に蛇足をくはへたばかりでなく、さ

ながら神社佛閣にまゐるやうな感じをあたへるとであつて、事實教祖は、まだ百姓なされながらのお取次であつて、参詣なごいふ形式ばつたことばの、あてはまらぬ状態に、おありなされた時代のことをのべられてあるのであるから、むしろ不適當な訂正であるとおもふのであります。

その次に『神佛に願ひ、おかけで全快致し』とあるのが、『神佛に願ひをかけ全快し』となつてをります。これは原文が假名やあて字で記されてあるところからの讀みかたの相違でありまして、わたくしも前には、そういふやうに拜してゐましたが、よくみてゐる内に『おかけで全快致し』といふのが適當のやうに思はれるやうになりました。「願ひをかけ」いふことは、ちよつと俗語では用いないことばであります。それからその次の方に『愆を放いて天地金乃神を助けてくれ』といふ勿體ないおことばがあるのを『愆を放れて神の道を立て、呉れ』と訂正されてゐます。大體の意義にはまちがひないにしても、わざ／＼『神の道を立て、呉れ』と訂正する氣が知れぬやうにおもひます。あるひは『助けてくれ』といふやうな、なさけないやうなことを嫌つたものかも知れませぬが、このことばにこそ、神の救濟の必然な道理、神の悲願がやきつてゐるのでありまして、これは俗にいふ、『ひいきのひきだほし』の尤なるものでありませう。この間違ひは、後段の『神、助かり氏

子も立ち行き』とあるにいたつて、くりかへされてゐます。即ち『神の道も立ち氏子も立行く』となつてゐます。

まづ、そんなものでありまして、『金光教祖』に採用されてゐるので、無論大體は、わかるのであります。が、ことばに多少の相違がある、といふことは承知しておかねばならぬことであるのみならず、ことばでは『多少』であるが、意味のうへからは、かなり、逕庭が存してゐるものだといふことを知らねばならぬ、とおもひます。

由來、わたくしごもは、教祖の神の、ありのままのおすがたをありのまま、に拜したのであります。が、一部には、それをおそれる、したがつて憚るやうな空氣が、よほ濃いやうであります。ありのままなる教祖のかはりに、皮肉にいへば、まつりあけたそれを示さうとするものでありまして、それは人としての教祖のかはりに、神としての教祖の方面のみを拜しやうとする態度であります。前述の訂正も、この態度から來るものでありまして、教祖觀の態度の相違がしからしめるのであるとおもひます。人としての方面、神としての方面、あひ錯綜したところに眞の教祖はあらはれたまふのでありまして、この兩態度は、互にあひたすくべきものであると考へます。

三つの願ひ

立教神宣の前段には、神の願ひ、人(人間)の願ひ、教祖御自身の願ひの三つが、あらはれてゐるやうに拜せられます。

こゝに前段は「金子大明神」の幣を切さかひに」から「兒ごもつれてほごく」農業しをつてくれ」までを、さすのでありまして、「外家は致し、農業へ出、人が願出、よびに來もぎり、願がすみ又農へ出、又も呼ひに來、農業する間もなし、來た人も待ち」にあるのは、如何にも世路の艱苦にたへかねて、切に救ひをもこめやうとする「人」の願ひ、なんじかして神のみすくひにあづからせてあげたい、なんじかして、たすけさせてもらひたい心をおつくしくださいされる教祖の、やむにやまれぬおこころもちが、まごに目にみへるやうに拜されるではありませぬか。これに對して「其の方四十二歳の年には病氣で醫師も手を放し、心配致し神佛に願ひ、おかけで全快致し、其時死んだと思つて、怨を置いて天地金乃神を助けてくれ」もある、わが親神さまの、氏子をたすけずにはおかれぬ、こいふ切なる悲願があらはれてゐるのでありまして、この三つの願ひに、もよほされて

教祖の神は、後半生をなげだして、お取次の道におたちなされたもの三拜されるのであります。

いまさらめかしく、動機論をするでもありませんが、大抵な場合、この三つの要求のまごに、事を成すこいふこはまれであります、自分自身にいろけはあつても、先はさほごに思やせぬ、こいふ場合があつたり、社會的には強い要求があつても、自分に氣がなかつたり、社會的にも自分も充分の要求があつても、天地に貫いた正しいものでなく、いはゆる人多ければ天に勝つが、天定つて後にそれがぶちこはされて、あごかたもなくなるやうな類であつたりする場合がおほいのであります、教祖の御立教は、神に人自らこの、やむにやまれぬ三つの願ひの一つに燃えた處にあらはれてゐるのでありまして、天地を貫き、萬人を通じて、擴充せらるべき大道の根據を示されたものが、すなはち立教神宣の前段であるこ信じます。

立教神宣に現はれ給へる親神

わが親神の御消息は、教祖の神のこまばを盡し、方便を極めて、これを氏子につたへてやりたいこ御苦勞くだされてあるのでありまして、教祖のみをしへは、そのほかには、いでぬのであります。

したがつて、わが親神の、いかなるおかたであらせられるか、さいふこころについては、種々のおこばがあらはれてをりますが、今その代表的なものを拜してみまするこ、

イ、天地金乃神は昔からある神ぞ(御理解第七節)

ロ、神は我本體の大祖ぞ(神訓)

ハ、神に會はうご思へば庭の口を外に出て見よ空が神下が神(御理解第十二節)

ニ、心で殺すのは神が覺て居るぞ(御理解第七十五節)

なごをあけるこごができます。

以上は、そのあらはれかたに、みな、それ／＼の特色が存してゐるやうにおもはれるのでありまして、『イ』は、なに／＼なく、かの超越神教的なおこばであつて、神さまは、なんだか人間世界のほかに超越して、しづかに、人間世界を支配しておいでなされるおかたである、さいふやうなおもむきのあるおこばであります。『ロ』はすなはち『本體』なさいふむつかしいおこばがあつて、なに／＼なく哲學的な、みをしへであります。それらに對して『ハ』は自然神、もしくは萬有神教的なおこばであつて、天地間事々物々そのまゝが神さまであらせられる、さいふやうに解釋され得るおこ

こばであります。更に『ニ』にいたつては、いかにも律法的な神さまのごこく拜せられるおこばであつて、人間のする、よい事わるい事、一切を神は靜かに冷やかに御照覽あそばされつゝ、賞罰を人に科せられやうさせられるやうな、氣味の悪いお言葉であります。

以上は、それ／＼特色のあるおこばであります。しかし根本において異つた思想が混在してゐるのではなく、その時により、その人に應じての、あらはれかたの相違にすぎないのは、前述したごほりでありませんが、たゞ、わが親神の、いかなるおかたであらせられるか、さいふこころの、中心點を示されたのは、この立教神宣に現はれてゐるおこばでありまして、すなはち

一、天地金乃神を助けてくれ

二、氏子あつての神、神あつての氏子

三、神も助かり

等のおこばにあらはれ給ふ親神さまであります。これほぎ強い表現は他の御神訓にも、御理解にも、現に公になつてゐるものには見いだすこごはできません。

『氏子あつての神、神あつての氏子』さいふこごが、神人との間からであつて、氏子なくして神

なく、神なくして氏子なく、神に神独自の世界いふものがあらせられず、神を外にして人間の世界も存在しない、神の内容をなすものは人であり、人の内容をなすものは神である。したがって、神人とはその運命をともにし、人の缺陷は神の缺陷であらせられ、人の破壊は神の破壊であらせられる。人のメグリは神のメグリであらせられ、人の神を呼ぶのは、やがて神の人を呼び給ふのである。わが子の苦しむのは親のメグリにより、子のメグリは親の苦しみなるが如く、人の苦しみは神の御メグリに痛感させ給ふところであり、人のメグリは神の堪へたまはぬ御苦しみなるのである。氏子を救済し給はんとする悲願は、やがて神そのものであらせられる。神の悲願の偶然であらせられずして、神其ものからあらはれる必然であるのであります。氏子の一人にても、救はれないものがあれば、それはやがて、それだけ神の缺陷をしめすのでありまして、金光大神に對し給うての切なる御頼もこれにより、金光大神不斷の御苦勞も、又これによるのであります。氏子のすべてをおすくひ下されて、はじめて神は神たらせられるのであり、神はじめて神たらせ給うて、人の世ははじめて完成されるのであります。したがって神の救済が神に必然である如く、人の「神にむかふ」心も、また必然であるべきであつて、神に向ふべくして向ひぬざる人を、なほさらに捨てお

き給はぬのが親神の悲情であらせられます。氏子が氏子たるによつて、神も神たらせられ、人神も、こもによるこびあふこもが出来るやうになつて、はじめて金光大神も金光大神たせられるこもができるのであります。およそ、これらの消息をつたへ給うてあるのが「繁昌いたし、末々親にかゝり子にかゝり、あひよかけよで立ち行く」この神宣結末のおこもばであります。

以上わたくしは、神のメグリといひ、神の缺陷といふやうな「全智全能的」な、キリスト教的な傳統的神の觀念からは奇矯なこもばを用ひ、したがつて、本教徒のおほくの方々から、あやしまれるやうな、いひかたを、あへてしましたが、立教神宣にあらはれ給ふ、わが親神を、わたくしは、以上のこもくに信敬したてまつるのでありまして、「神の進化」いふやうなこもも、以上の點においてわたくしには、うなづかれるのであります。

かくのこもくにして、本教獨特の信仰は、立教神宣によつてあらはれたのでありまして、神宣の後段は主としてこれを闡明されたものこ存じます。

神の御用——生活態度

教祖は、立教神宣を拜し給ふや『仰せごほり家業やめてお廣前お勤め仕る』とおうけなされて、不安多き生計の道を断きつて、安政六年十月廿一日をさかひに、一新生活にいられました。生計の道を断つて、お取次に立たれた姿は、かの佛徒のいたしました捨身乞食のそれと似かよつたものでありますが、しかしながらその根本のおもむきは、非常に異つたものであります。それは『食べるものがなくなつたならば、神さまが、なんじかして養つてくださるであらう。若、やしなつてくださらねば、自分の御用が御用として、つしまつてゐないのだから、餓死をこけるまでである』といふ意味のおこしばがあつたのによつても、うかゞはれることであつて、眞に神の御用をつこめれば生活の保障には、神さまが、おたちくだされる、いふこゝに歸するのであります。生活の保障を自分の業の上、自分のはたらきの上におくのは、いかなることからでも、それは廣い意味での營業であり、わが生活を度外において、たゞ神の悲願を達成したてまつるために心身を勞する人は、その仕事、いかなる種類のものであつても、そのまゝ、神の御用となるのであつて、やがて神さまは、その生きてゆく上に、さしつかへのないだけのものを、お恵みくださるのであります。物をひさく人も、車をひく人も神の悲願を成就したてまつらんごのみ願ひながら、その仕事にあたる

こゝに、それは神の御用とおうけくだされて、その生活は、やがて神さまから保障してくだされる。こゝに安心の地をさだめて、ひたすら各自のわざにいそむのが、本教徒のゆき方であつて、『怒を放いて天地金乃神を助けてくれ』とおほせられたのは、この意義であり、その範を示したまうたのが、教祖の神であらせられるのではないでせうか。かく考へてみて、いはゆるお取次に仕へまつてゐるもの必ずしも神の御用に立つてゐるもののみでなく、いはゆる信者の方必ずしも營利をいかなんでゐるもののみでもないとおもひ、したがつて、わたくし自身に、きびしく反省の念をうながされるのであります。

(大正十三年十月)

編輯後記

○始めに、この書を公刊せしめたまふた神々の御恵を拜謝いたします。

○本書出版の理由は「はしがき」にしろされたまほりですから、かされて申しあげません。たゞ和泉先生のあまりに謙遜な御言葉に、恐縮するのほかはないのであります。

○本書は大正元年九月から同十三年十月にわたつて、金光教青年會雜誌に掲載された先生の文章五十九篇を輯録したものであります。

○本書は先生の不拔の信念と稀れに見る名文をもつて、金光大神の教を如實に闡明されてあります。本書を心讀することによつて、吾々は多くの教訓と深き反省を興へられることをよるこぶのであります。

○本書は前篇を教壇とし、新しい年代から古い年代にさかのぼつて逆に排列しました。「剛健の精神と信念の確立」のみは最後に加へておきました。

○後篇には論説と感想を集めました。順序は不同であります。

○本書の表紙及び背文字は先生の眞筆です。表紙の分は編者の乞に任せて書き與へられたもの、背文字は先生の書翰の中から、編者が勝手にぬき出したものであります、これはおわびをいたします。

○装幀、校正、その他本書出版に關する一切の責任は編者にあります。

○編者は編者の不行届によつて、先生の金玉の文章をけがした點の、少なくないであらうことをおそれるものであります。

○終りに、本書の出版を許され、且つ懇切なる序文並びに和歌を賜はつた和泉先生及び轉載を快諾せられた金光教育青年會本部、同幹事長片島先生に謹みて感謝の意を表する次第であります。

大正十五年七月下旬

編者しるす

大正十五年九月一日第一版發行
 昭和十一年九月十五日第二版印刷
 昭和十一年九月二十日第二版發行

定價金貳圓五十錢

著者 和泉乙三
 大阪市北區紅梅町四番地

發行編輯者 森田留吉
 大阪市東區船越町二丁目三〇番地

印刷者 山上貞一
 大阪市東區船越町二丁目三〇番地

印刷所 中央堂印刷所
 電話東三四四番

發行所 大阪市北區紅梅町
 金光教天滿教會所出版部
 電話堀川(55)四二七番
 振替口座大阪七七八七〇番

終

